
鰐虎大戦2002 ~ in先陣岬町の巻！ ~

怪昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鰐虎大戦2002 ～in先陣岬町の巻！～

【Nコード】

N8939V

【作者名】

怪昴

【あらすじ】

泣く子も黙る関東最大のレディース「アスタロト 猗朱他露斗」の元総長「人喰い鰐」こと相田鰐子。自称夢見る乙女な彼女は大学で知り合った一つ年上の先輩にして、極限のお人好しなバカ、「バカツトラ」こと小西勝虎となぜだか恋人関係に。なんだかんだで三年間付き合った二人は、勝虎の卒業と共に結婚を決めるのだが、バカの一声により二人の新婚生活の場はド田舎町の先陣岬町へ。

そして始まった二人の新生活に襲いかかる(?)のは珍妙奇天烈な変人達。二人の幸せな結婚生活を守るため、鰐子は愛と拳骨の

力でそれらに立ち向かっていく！

説教系恋愛ヤンキーバトルバカ小説。なんじゃそら。

同作品は「ノベリスト・jp」サイトにも載せました。はいだからっ！

プロローグ 人喰い鰐とバカツトラ

わたしの名前は相田鰐子っていう。

ふざけんな。

何が鰐だボケ。本当にもうわたしの両親はどうかしている。いったい何が悲しくて自分の一人娘の名前に鰐なんて動物の名前をつけたのか。あの鰐だよ？ 細長くて爬虫類でゴツくてギザギザしてる、肉食で凶暴で噛むカートンとかあるらしい、怪獣みたいな生き物。アリゲーター。クロコダイル。もうまるで少しも可愛くない。いや可愛いとか可愛くないとかそういう問題ですらない。普通は人の名前に鰐なんて使わない。特に女の子の名前になんて絶対使わない。頭が少しでもまともならば。

でもうちの馬鹿親どもは使ったのだ。名づけたのだ。自分達の大事な娘に「鰐子」と命名したのだ。そうしてわたしは鰐子鰐子と幼い頃から言い聞かされてきた。

マジふざけんな。

あんまり両親が自然に鰐子だなんて呼ぶから不覚にもわたしは小学校に上がるくらいまでは自分の名前がそんな奇妙奇天烈なものだと気づかなかった。名乗るとだいたい子供でも大人でも妙な名前だね、オホホーとか変わってるね、ウフフーみたいな感じでなぜか優しい笑みを浮かべて言っってはきたけど、幼くてまだ阿呆だった私は何がどのように変わっているかということまでは、まるでわかっっていなかった。

そんなわたしが自らの名前がどれほどに珍妙であるかを思い知ったのは、小学校二年生の頃、自分の名前を漢字で書いてみようという内容の、国語の授業の時だった。わたしは難しい字だなーと思いなから「鰐子」と書いた。そしたら先生が、じゃ次は自分の名前の意味を調べてみましょうねと言った。それで先生に、「鰐」ってどういう意味ですかと訊いたら先生は困った顔をして、本棚から絵本を

一冊取り出すと、ええとね、鰐ってこの鰐なのと言って絵本のとあるページをわたしに示してきた。

そのページは悪いワニがウサギに噛み付いている場面だった。

わたしのその時胸に走った衝撃と絶望をいつたいどんな言葉で表現できよう。

わたしはウサギが好きだった。て言うか哺乳類の動物はだいたい好きだった。犬とか、猫とか、あと一番好きなのはハムスター。小さくて丸くてふわふわしてて、あんなに可愛い動物は他にいないと思う、いやマジで。なにせそのころ書いた作文に将来の夢はハムスターがいいと書いていたぐらいだ。うん、まあ意味はわかんないけど、とにかくそれくらい好きだったということだ。

反対に爬虫類は大嫌いだった。蛇にトカゲ、あと爬虫類ではなくて両生類だけど蛙とかも駄目。ぎよろりとした目。体毛のないぬめぬめとした皮膚。感情の読めない不気味な動き。何もかも嫌いだった。恐怖の対象だった。その中でも特に、牙なんて生やして凶悪な面をした鰐なんてもう一つも褒めるべき所のない、わたしにとって悪魔のような生き物だった。

自分はその鰐。おぞましい真実を知らされた瞬間、当時七歳の可憐な少女　って自分で言うのもなんだけど　のハートに大きな傷が刻まれたのだった。

横でその一幕を見ていた隣の席の少年が、呆然自失するわたしを前に、盛大に笑い声を上げた。

「なんだよー、相田。鰐ってやっぱり鰐なのかよー。うわーこえーな。肉食だぜー。あははは」

ちよつと駄目でしょ人の名前を笑っちゃと先生が少年をたしなめたがもう遅かった。

わたしはキレた。

で、ぶん殴った。

わたしが人生で初めて人を殴った瞬間だった。

若干七歳にして人生の不条理を味あわされたわたし。そんなわた

しがある後どうなったかと言うと、まあひどくシンプルな話なわけ。

つまりところ、わたしはグレたのだった。

男の勲章 唄：嶋大輔 作詞：作曲：Johnny

つっぱることが男のたった一つの勲章だって

この胸に信じて生きてきた

泣きたくなるような(法律的な問題で以下略)

。 。
そんな生き方が、わたしのティーンエイジ。
いやっかわたし女だし。

今思い返すとあの時代のわたしは非常に恥ずかしい。忘れたい過去。いわゆる黒歴史というやつだ。

毎日毎日喧嘩ばかりしてた、女の子なのに。
適当にム力つく奴ぶん殴ってたらいつの間にか舎弟がたくさんいる
ようになっていた、女の子なのに。

気がついたら関東にその名を轟かす一大レディース『アスタロト 狩朱他露斗』
の総長に祭り上げられていた、女の子なのに。いやレディースだから女の子でいいんだけど。……よくないけど。

そうしてついたあだ名が恐怖の「人喰い鰐」。関東のキラーク
ロック」。

警察の少年課に最重要危険人物としてマークされ、ヤのつく組織
の人事部(?)の方々から熱烈スカウトを受ける。それがわたしだ
った。

。 。
って、だからぶざけんな。

本当はわたしはそんな人間じゃないのだ。喧嘩とかだつて別にしたくして居るわけじゃない。バイクとかだつて別に好きじゃない。まあなんとなく乗ってるうちに無免許でも運転できるようにはなつたけど、それだつて別に周りが乗つてたのに合わせてわたしも乗つてただけだ。夜の集会とか寝不足になるから嫌だ。不良扱いされるとご近所のかわいい子供達と仲良くなれないから哀しい。おう姉御あいつら生意気だかたヤキいれちまいますようぜみたいな連中とじゃ乙女チックな恋バナの一つもできなくてつまらない。つてかそれ以前に恋ができない。

結果、わたしはある日唐突に、不良なんて自分には向いていないと気づいたのである。本当のわたしは休日にはハムスターと戯れ、可愛いぬいぐるみに囲まれながら、ファンタジーなデイズニー映画に胸をときめかす、そういう女の子なのだ。と、思う。

多分。

きっと。

いや絶対！

そんなわけで明くる日には族からの脱退決定。目薬さして涙々の“卒業式”。引きとめるバカにはさよならの代わりにグーパーンチ。折りしも時は十八歳、高校三年生の春だった。真つ当な女の子への回帰を目指すわたしは、とりあえず大学進学を考え、猛勉強を始めた。そしてめでたくわたしは私立流聖学園大学への現役合格を決めたのだつた。

そこでわたしは運命的な出会いを果たす。

そいつの名前は小西勝虎。

わたしより年も学年も一つ上の二年生で、会つたのは入学最初の時期の、もう名前も忘れたとあるサークルの新入生歓迎会。第一印象は最悪だった。

勝虎はわたしが自己紹介すると、

「え、何？ 鰐？ 鰐つてあれ？ 細長くて爬虫類でござつてギザギザしてる、肉食で凶暴で噛む力一トンとかあるらしい、怪獣みた

いな生き物の？ あはは、おもしろー。珍しい名前だね」

そのバカ面の笑顔はいつかのわたしが初めて殴った同級生を思いおこさせて、わたしはよっぽどカチンときてぶん殴ってやるうかと思っただけど、

「じゃ、俺と相性いいかもね。よろしく」

とにこやかに言う勝虎の姿にわたしはなんだか拍子抜けしてしま
う。

「なんでですか？」

わたしが訊くと、

「え、だって俺の名前勝虎って言うんだもん。小西勝虎。俺も君と一緒に猛獣の名前が入ってるの。猛獣どうし仲良くしようぜ。ガオ
ーって」

わたしは笑った。愛想笑いとは本気笑いが七対三くらいで。

意味わかんなかった。だって「だって」になつてないし。猛獣ど
うし仲良くするって言う理屈もちんぷんかんぷんだし、何よりガオ
ーってなんだ。子供か。鰐はガオーなんて鳴かない。

こいつバカだ。

バカツトラ。

でもわたしは勝虎と付き合うようになる。

なんでだろう。自分でもよくわからない。わたしは勝虎の何が好
きで付き合っているんだろう？ 容姿は普通だし、性格はすでに述
べたようにバカ。お金？ まあちよつと実家は裕福らしいけど、別
に大金持ちって程でもない。エッチ？ うーん、それも普通。みん
な普通。パワプロのパロメータで言えばオールC。むしろバカなこ
とを勘定すれば平均以下。けどわたしは勝虎のことを嫌いじゃない。
別れたいとかは思わない。一緒にいると心地よい。その辺わけわか
んないけど、理解不能ではない。人の好いた惚れたの関係って結構
そういうこと、あるんじゃないかと思う。人は場合によっては言葉
にできない理由を持って誰かを好きになることだってあるのだ。

わたしは勝虎のことがなんとなく好きで、なんとなく付き合っ

いて、なんとなくそんな境遇に満足してる。それで充分だった。

で、そんなダラダラした関係をその後三年間続けていたら、わたし達は結婚することになった。

九月十一日。なんでもない日。お昼に二人でぶらりと寄ったマツクの禁煙席。それまで今年の日本シリーズについてなんともなしに話していたら、急に話題を変えて勝虎が言い出してきた。

「鰐子、結婚しよう」

わたしは固まった。

あははは。

ふざけんな、ボケ。

何考えてんだアホ、カス。もうマジふざけんな。死ね。どうして今なんだよ。わけわかんないし。結婚だよ？ プロポーズだよ？

女の子だったら誰だってロマンティックなシチュエーションを期待するとこじゃん。わたしの誕生日とかクリスマスとかそういう特別な日にどっかのいいレストランで夜景を眺めながらさっと結婚指輪を差し出してとかさ。いやベタベタだけど、そんなの本当にやられたら逆に引くけど、とにかくそんな感じの特別な夜とかがいいじゃん。それをなんだっつーの。平日、お昼時、マツク、指輪すらなし。プロポーズまで持っていく会話の溜めもなし。明日暇だから映画観に行かない？ いや別に何か観たいものがあるわけじゃないけど的な軽さで結婚を切り出すって本当にもう心の底からふざけんな。死ね。くたばれ。ゴミ。クズ。最悪だ。最ッ悪！ もうやだ！ マジ殴りたい！ 殺したい！ 死ね！ 死ね死ね死ね死ね！ 死ねバカツトラ！

「うん。よろしくお願いします」

でもわたしは笑顔でそう言う。

内心はらわた煮えくり返ってぶちぎれてるところは微塵も見せない。いっぱしに嬉し涙風に瞳を潤ませても見せる。

「マジで！？ うわホントに！？ やった！ やったやった！ やったー！ 良かった！ うわもう緊張したー。断られたらと思うと

恐くつて。まあいいや。とにかく良かった！ 鱈子、これからも改めてよろしく！ 俺絶対に幸せにするから！ 一生一緒に過ごすかな！」

勝虎は子供みたいにはしゃいで嬉しそうにする。

わたしは「うん、うん」と笑顔で応える。

真昼間のマツクで。

死ぬ。

恥ずかしいと思ったらありやしない。お昼時だからお客も多い。そのみんなが大声を上げる勝虎、と言うかわたし達を見ている。絶対にバカツプルだと思われる。バカは勝虎だけなのに。バカツプルじゃなくてバカツトラなのに。

いやわたしもバカなのかな？ こんなバカの求婚を受け入れちゃうなんて。何が幸せにするだアホ。既にわたしは死ぬほど恥ずかしくて不幸せだ。死ぬ。死んで地獄やらやり直せ。いや、やり直さなくていい。灰になれ。復活の呪文失敗。二度とこの世に戻ってくるな。

そう思いながらもやっぱりわたしは勝虎と婚約してしまう。勝虎はわたしより一つ学年が上なので今年大学を卒業する。わたしは本来なら四年生になるわけだけど、結婚を理由に中退することを決める。寿中退？ いやそんな言葉ないか。とにかくわたしは専業主婦としてこれからの人生を生きていくことにする。

三月、わたし達はまだ籍は入れていなかった。籍を入れるのは勝虎の仕事が始まってそれがある程度落ち着いたらという話になっていた。だからわたしはまだ名前が相田鱈子のままだ。で、籍を入れたら小西鱈子ということになる。うーん、なんか耳に馴染まない。夫婦別姓にしようかな。

実はこの籍を入れるのを遅らすというのはわたしのどうせならジューンブライドにしたいという考えも多分に混じっている。わたしがそれを勝虎に伝えると、あいつは意外そうに、

「へえー、鱈子、そういうの気にするんだ。なんかキャラじゃない

よなー」

なんて言うからまた頭にきて殴りそうになるも、やっぱり踏みとどまる。

勝虎もいまいちわかっていないのかもしれないが、わたしは本当は夢見る乙女なのだ。プロポーズがひどかったのだからせめて、それぐらい期待してもバチは当たらないはずではないか。

そんな感じで不満はあったものの、と言うか実際不満だらけだったのだけでも、そこはわたしが我慢に我慢を重ねて、その結果もうすぐめでたくそれなりに多分幸せなゴールインが待っているはずだった。

ところが四月、勝虎がいまだかつてない最大級のバカを実行する。

はじめに聞かされた時、わたしは怒りを通り越してもう呆れるしかなかった。実際そのバカっぷりはもう常軌を逸していて、一瞬わたしは本気で婚約破棄を考えた。

だけど結局わたしはそのバカすらもぐっと唾を飲み込んで我慢した。キング・オブ・バカ、バカツトラについていくと決めた。なんだろう？ どうしてだろう？ やっぱりわたしはそれほどに勝虎のことが好きなんだろうか？ 一緒にいたいんだろうか？

うーん、わからん。

ただ一つ言えるのは、わたしは勝虎についていくと決めたということだ。これはもう一つの信念みたいなものだと思う。だから曲げない。けどまあそれにしたってたまに文句の一つくらいは言ってもいいような気がする。だけどわたしはそれも言わない。死ぬほどムカついているも、勝虎のアホ面を見ると殴るのはよしとこうという気分になってくる。殴ってこれ以上勝虎がバカになったらどうしようとか心配しちゃってるのかもしれない。いややっぱりそれもわからない。人の気持ちは複雑怪奇だ。

まっ、何はともあれこの物語はそんな勝虎のバカから、勝虎がN県の端っこのクソ田舎町、先陣岬町に長期ローンで一軒家を買い込み、そこにわたし達が二人が引越すことから始まるのです。

第一話 ねこ大王

トンネルを抜けるとそこはクソがつくような田舎だった。

軽トラの助手席から眼下に広がる田園風景を見た瞬間思わずわたしは「うげー」とか口走りそうになる。けど横の運転席の勝虎が「おおー」なんて感嘆の声を上げて明らかにこの風景に感動している感じだったのですんでのところでは我慢。

荷台にあまり量の多くない引越しの荷物を積んだ軽トラは、くねくねと曲がる山道を下りながら、先陣岬町を囲む三つの山の内の一つ、久禮山を下っていく。開いた窓の向こうからは、都会では嗅ぐことのできない緑の香りが漂ってきていた。

天気も上々、気候も暖かく新生活の船出の雰囲気としてはそう悪いものではない。肝心の場所がこんなド田舎でさえなければ、ではあるが。

見渡す限り、三階以上の高さのある建物一つ見当たらない。コンビニがあるかどうかすら疑わしい。この様子だと下手すれば日用品一つを買うのにさえ隣町まで遠征する必要があるそうで、早くもわたしはこの先の生活で予想される日々の不便に憂鬱な気分になられていた。そんなわたしの気持ちを知ってか知らずか 知らないに決まってるか、バカだし 勝虎は対照的にご機嫌な様子で、鼻歌交じりにハンドルを繰っていた。

勝虎がそんな町の風景を見ながら言う。

「いいねー。期待通りだ。俺、昔っから憧れてたんだよねー。田舎暮らし」

「そうなんだ。良かったね」

ああ殴りたい。でも勝虎は運転中なので自重。

「トトロとか昔超好きだったんだよ、俺。初恋の相手はサツキでしたって言うくらいさ」

「あはは。勝虎らしいね」

ならサツキと結婚してる。

「空気もおいしい気がするしな」

「気がするだけだボケ。」

「やっぱ来て正解だったなー」

「外れだよ。大外れ。」

「鰐子もそう思うだろ」

「……うん。思う」

わたしは笑顔で言う。

死ねばいいのに、バカツトラ。

車は山道を下りきって先陣岬町内となる三方を山で囲まれた盆地へと到達する。民家がちらほらと見え始めたあたりにバス亭が視界に入る。通り過ぎざま、ふと思いついたように勝虎が口を開く。

「鰐子ってたしか免許持ってなかったよな」

「え、うん。ないよ」

運転は出来るけど。

「じゃあそのバス亭の場所、覚えときな。あそこが隣町に出る最短の交通機関らしいから」

「ふうん。……他は？」

「え、他？」

「だってほら、勝虎、ここ周りが全部山に囲まれてるじゃない？そしたら町の外まで徒歩とかで出るのは、まあ不可能じゃないけどほぼ無理でしょう？ 勝虎もそういう意味でこのバスのこと言ったんだと思うけど、まさか村の外まで行く手段があれだけあってわけじゃないでしょ。それじゃあ不便だしさ」

もしそれだけとか言ったら殺す。

「うん、まあ。西の方に私鉄が一本走ってるらしい。先陣岬駅。でもそこから電車に乗ると、そのバスからでも行ける隣の柏木市側に行く場合、下車駅が市の商店街からは距離のある句林駅って場所に下りることになるんだって。で、そこから商店の方へ向かうには、もう一本バスを乗り継がなきゃならない。だから結果的にこっちの

バスを使った方が早いんだって」

「ええと、じゃあ反対側は？」

「反対側って？」

「うん、句林駅側つてのが上りか下りか知らないけど、その反対側」

「あ、それなら素直に電車に乗った方が早いって」

「……それだけ？」

「何が？」

「町の外に出る方法」

「うん、公的な交通機関ではね」

はい死亡フラグ立ったよ。殺す殺すマジ殺す。ふざけんな、島流しかつーの。京の都に雷落とすぞ。こんな町の出入りにすら一苦労するような場所になんぞ住めるかアホ。

本当はもう今すぐにも殺してやりたいけどまだぐつと拳を握って堪える。どうせなら結婚してからにしよう。保険金かけてから殺す。一億円くらい。けどこんなバカ殺してその引き換えに刑務所暮らしとかになったら割りに合わないか。やっぱりやめといてやろうと思う。バカで良かったね。

車がちよつとした商店街、と言えなくもないような通りに入る。通りの左右には八百屋とか文房具屋、古ぼけた喫茶店などが立ち並んでいる。先陣岬町のメインストリートというところだろうか。しかしお昼時だと言うのに人影はまばらだった。窓の外の流れゆく風景に会わせてわたしの浮かない気分が加速していく。ギューン。

と、視界の先に見慣れた赤と緑の看板が伸びていることに気づく。瞬間、わたしは心の底から歓喜した。セブンイレブンだ！ この時のわたしの気持ちをなんと表現しよう。まさしく砂漠にオアシスを見つけたような気分だ。知れたことではあるが今時のコンビニはなんでも売っている。食料品に日用品、果てはちよつとした化粧品までなんでもござれだ。こんな昭和の香り漂うじじ臭い陸の孤島でも、コンビニ一つあればなんとか文明的な生活を送れるかもしれない。セブンイレブン・ジャパン万歳！ 鈴木敏文（セブンイレブン・ジ

ヤパン代表取締役会長）万歳！

……っ！かコンビニ二つあっただけでわたしは何をそんなに喜んでるんだらう？

そう思うと急激に空しくなってきたわたしは鬱々した気分がぶり返してくる。

とは言えないよりはマシだ。一応チェックしておくべきか。

「ねえ、勝虎」

「何？」

「そのコンビニ、ちょっと寄ってごうよ」

「え、なんで。家、もうすぐだよ、多分だけ」

「えーと、ほら、もうお昼でしょう。わたしお腹すいちゃった」

「そう？　じゃあその辺のお店寄ってく？」

「え、いや。いいよ、それは。あんまお腹すいてないし」

この辺の視界に入る小汚い飲食店など、いったい何を食わされるわかったものじゃない。

「へ？　お腹すいたんじゃないの？」

「え、あー、いやー、だからお腹すいてるけどそこまではすいてないみたい。なはは」

「じゃ、家ついてから食べてもいいんじゃない？」

「それはそうだけどさ、ほら、家ついたら荷物下ろしたりしなきゃならないじゃない？　手早く何か食べられる物買っておこうよ。おにぎりとか」

「あー、なるほどー。じゃあそうしようか」

そう言っつて勝虎はセブンイレブンの駐車場に車を入れていく。バカで良かった。

コンビニは二階がそのまま住居になっているようだった。窓から見える店員の姿も中年の夫婦らしい男女の姿だ。おそらく元は何か自営業のお店をやっつていて、その経営が立ち行かなくなりセブンイレブんに店舗をフランチャイズしたのだから。

車から降りてわたしと勝虎は店内へと入る。

するとレジに入っていた紙が薄くなり始めた感じの中年男性店員がはい、いらつしゃいませーとコンビニあるまじき(?)威勢のよい声で挨拶をしてきた。そのまま続けて、

「おや、見ない顔だねー」

と、気軽に言ってくる。それを見て品だしをしていたらしいもう一人のおばちゃんの店員(奥さん?)も、作業の手を止めて、

「あら、ほんと。どちら様?」

同じく気軽に話しかけてくる。

何このノリ?

「あ、はい。自分達は今日この町に引越してきた者です。よろしくお願いします」

「今日? ここにねー。へえ、そりゃご苦労様だねー。東京の人?」

「はい、そうです」

「夫婦さん?」

「はい、まだ婚約ですけど」

「あらまー。嬉しいわねー。若い人がこの町に来てくれるなんてねー。最近出て行く人ばかりだったからねー」

これはおばちゃん。

「はい、よろしくお願いします」

「そんなかしこまらなくてもいいよ。私らはね、金井言います。金井武男。で、こっちが女房の静。金井の家内だわな。だはは」

つまらん。

「それで、私達とあとバイト君二人でこのお店やってます。そちらさんは?」

「あ、はい。僕は小西勝虎って言います。それで彼女が……」

「相田鰐子です」

わたしはせいぜい愛想よく言う。コンビニはこれから利用することも多いだろう。せいぜい第一印象は良くしておこうと思う。

それにしてもわたしはこの自己紹介の時がいつも憂鬱な気分になるのだ。鰐子なんて名前絶対いろいろつまれるに決まってるか

ら。まあそういう奴がいたら勝虎がいない時にしこたま殴って人をバカにするのは良くないことだと教育してやるのが常なのだけど。ジジイババアだろうがそこは容赦しない。

ところが、

「ふうん、勝虎君に鱧子さんね。覚えたからね。これからよろしくね」

と金井の反応はあっさりとしたものだった。

あれ？ どういうこと？ 珍しい名前だねの一つも返ってこない。いやまるでこれじゃバカにされるのを期待してるみたいけど、あんまり自然にまるでありきたりな名前を聞いた時のような反応をされるものだから逆に拍子抜けしてしまう。

「あれ、そういやお二人さん苗字違うね。夫婦別姓？」

「お父さん、違いますって。さっきまだ婚約中だって勝虎君が言っていたでしょう」

「あ、そうか。なるほど。いつ籍は入れるの？」

「はあ、今年の六月くらいを考えてます」

「じゅーんぶらいどね。いいわー」

「勝虎」

と囁くように呼びかけながら勝虎の服の袖を引く。

「何？」

とつとつ、用を、済ませて、出ようよ。と、口パク。

伝われ、わたしのテレパスィー、みたいな。

正直わたしはこの下町情緒溢れる的な馴れ馴れしい感じがあまり心地よくなかった。こっちが話す気のないことまでいろいろ詮索しないでほしい。コンビニは必要なことだけをそれ以上でもそれ以下でもなく提供してくればそれで充分だ。なんて言うべきか、わたしはちよつと都会のドライな人間感覚に慣れすぎているのかもしれない。

勝虎は金井夫婦に視線を戻すと、

「おにぎり今あるのあれだけですか？」

と物凄く自然な様子で訊く。

やった。テレパシー伝わった。勝虎はいつもこんな感じで言葉にしないでわたし意思をうまく汲み取ってくれることが多い。その辺はこのバカの数少ない長所の一つだと思う。

「そうね。今はこれだけ」

「あ、そうですか。鰐子、何いる？」

「えーと、じゃあ梅」

棚のおにぎりを見て言う。

「梅ね。じゃ、俺はこれとこれ、と」

勝虎はツナと明太子を選び、それを梅と一緒に手に取る。

「飲み物は？」

「車の中に水筒があるからいいでしょ。お茶入ったやつ」

「俺コーヒー買っていい？」

「いいよ」

「じゃあこれをお願いします」

「はいはい、えーと……四六八円ね」

支払いを手早く済ませると、ありがとうねとかまた来てねとか言う金井夫婦に勝虎はニコニコと愛想よくしながらそれじゃあと話をうまく切り上げる。それで私達はコンビニを出た。

「はあー、ありがとうね、勝虎」

わたしは開口一番そう言った。

「いいって。気にすんなよ。それにしても鰐子もちよつと神経質だなー」

「うん、自分でもそう思うけど、ああいう感じ少しわたし苦手で…」

「うーん、まあわからないでもないけどさ、確かにコンビニのトイレと違って結構汚いところは汚かったりするものだしね」

「は？」

「何言ってるの？」

「え、だってトイレ行きたくなっただんじゃないの？ それで早く家

に行こうってそういう合図でしょ？」

さすがウルトラバカ。肝心のところがわかってねー。

でもまあお店から出られたから良しとするか。いや、よくないか。本当に必要な時に以心伝心できないと困るかも？

けどいいや。バカにしては及第点。つーかマジ必要な時に勘違いするようなら殺すし。

とにかく私は笑って言った。

「そつ。トイレトイレ。早く行こう」

そつか、じゃあ急ごうかと勝虎もバカらしくわたしの言葉を真に受けて笑って言う。そして二人してまた軽トラの運転席と助手席に収まる。

そのままエンジンをかけて駐車場から出ようとした時だった。

ふと道路の向こうからとぼとぼと一人で歩いてくる小学生五、六年生くらいに見える女の子の姿がわたし達の視界に入った。

それがだからなんだと言われればそれまでなのだが、その時はわたしも勝虎も思わずその女の子に注意を引かれてしまっていた。それは勝虎が足をアクセルにかけたまま固まったことから明らかだった。

なぜなら女の子は泣いていたからである。しかも大口を開けて、天を仰いで。

そりゃ気にもなるさ。今時の小学生高学年の女の子はもつと大人っぽいぞ。あんなアホ面さらして泣き喚く子なんてなかないない。「あの子、どうしたんだろう」

つぶやき、さつと勝虎はこちらが制止する暇もなく再び車を降りて女の子の方へ向かってしまう。はい出たよ。バカのお節介発動。仕方がないからわたしもその後を追う。面倒くさいなあ、もう。

「君、どうかしたの？」

と、勝虎。

女の子は泣きながら勝虎の方を向いた。

客観的に見て女の子は可愛い子だと思った。うん、そつ。可愛い

という表現が適切だろう。都会の女の子のような洗練された様子はなかったが、逆に毒気のない、素朴な愛らしさがあった。美人ではないが、美少女ではあると思う。

ま、それも大口開けて鼻水垂らしてなきゃの話だけだね。

「あつう……」

少女は鼻水をすすると手足をばたつかせて言った。

「あつう、おおつあ、おおん、うあああ、あうあう、あうあああ
あ」

何語？

「ほらほら落ち着いて。深呼吸深呼吸」

「あつう、しんこきゆうしんこきゆう……」

「いやそうじゃなくて深呼吸してって意味だよ」

こういう時でも勝虎は嫌な顔一つせず根気よくにこにこしてる。

この忍耐はちよつと尊敬に値する。でもないかな？ ただバカなだけ？ 「お人好し」と書いてバカツトラと読む。

「すーはーすーはー」

「いやすーはーとか言わなくていいから、ゆっくり息を吸って吐く、
ね？」

こくこくと首を縦に振ると女の子はやつとゆっくりと深呼吸を始めた。するとようやく少し落ち着きを取り戻してきたようで、まだ鼻水を垂らしながらも、次第に涙の方は止まってきたようだった。

「よし、いいぞ。で、いったい何があったの？」

「あつう、お兄さん達は？」

「え？」

「知らない人は警戒しますです、うつつ」

「あ、そうだね。俺らは」

「あたしは先陣岬千恵だよ、よろしく。あつう」

「え、結局君から名乗るの!？」

さすがの勝虎もつつこんだ。つーかなんだこの自由すぎる子は？
しかもかなりアホっぽい。

……先陣岬？ この町の名前と同じだ。何か関係があるのだろうか。

「えーと、で、どうしたのかな、いったい？ 何があったの？」

「あうづ、じ、じいちゃんが……」

「うん、おじいさんが？」

「じいちゃんが……」

「うん」

「じいちゃんが顔を落としちゃってえ……」

顔！？

「早くじいちゃんの顔を見つけないと大変なことになっちゃうんだよ。このままじゃじいちゃんの妖力がなくなって大いなる封印が解かれてしまうんだよ」

妖力！？ つーか封印！？

「お願い、じいちゃんの顔を探すのでつだつてえ！」

ええっ！？

で、先陣岬千恵なる少女はまた泣き出す。

わけわからん。

顔？ 顔ってなんだ？ 顔ってそもそも落とすものだったけ？ つか妖力って何よ？ 封印って何の話？ うわー駄目だ。この子ちよつと痛い子かも。いや痛い子だ。

さすがの勝虎もこの返事は予想していなかったようで困り顔で固まっている。微妙にちらちらとこちらに視線を送っているのは「どうしようか？」のアイコンタクトだろう。知るか。自分で関わったんだから自分でなんとかしろ。と言いたいところだけど、このまま勝虎を放り出してわたしだけ家に向かうわけにもいかない。このわけわかめちゃんな状況をわたしもなんとか頭を捻って解決に導かねばならない。

とかかつこよく考えても見るけどそりゃ無理だよ。だつて意味わかんないもん。顔探すってどうやって？ どこを？ 何より顔落ちてるってどんな状況になつてるのかも想像できない。顔の皮が落ち

てるってことだろうか。それとも首ごとゴロン？

うん、あれだ。

どうなってるにしろ真面目に考え出すとかなり凄惨な大事件じゃね？

余計わからなくなってくる。つまりわたし達は引越し初日から金田一少年ばりに恐ろしい顔なし殺人に遭遇したということだろうか。困った。どうしよう。わたしには名を賭けられるようなじっちゃんなどいない。

うーん、しかしあれなのだ。千恵のアホな泣きっ面を見ている限りではどうも問題がそんなに深刻なことであるようにとても思えないのだ。（妖力とか言ってるしさ）

「おーい、千恵ちゃんー」

とそこで背後から声がかけられる。振り向くと、声の主はコンビ二店主の金井だった。何かを手にしながらか走りでこちらに駆けてくる。

「あううー、金井のおっちゃんー」

「いやー、千恵ちゃん泣いてるからもしかしてと思ってね。これ探してるんじゃないかな」

言いながら金井は手に持っていたそれを千恵に差し出した。

気になってわたしと勝虎も視線を送る。

それは天狗のお面だった。

……？

もちろん天狗とはあの天狗である。鼻が長くて顔の赤いあれだ。

お面は木造の高級そうな代物だった。髭などは生えておらず、眉は吊りあがっており怒りを表現しているらしいが、目が無駄に大きい辺りにどこか愛嬌があってそれほど威圧的ではない。しかしよくよく観察すれば、皺の一つ一つまで細かく掘り込まれており、素人目にもお面が職人芸の域に達している一品だということがわかった。

けどまあ、で？ という感じで固まるしかない。だってやっぱり意味わかんないし。

ところがである。いやまさかなーと思っていると、わたしの予想に反して千恵の表情がみるみる明るくなっていくのであった。

そしてとうとう、

「あーーーーー！」

と大声を上げながら千恵は金井の手からひつたくるようにして天狗の面を取り、叫んだ。

「あつた！ あつた！ じいちゃんの顔あつたー！ ありがとう！

金井のおっちゃん！」

「いやよかったねー。千恵ちゃん」

「え、いや、顔ってそれのこと？」

わたしは混乱して言う。

「そっだよ！」

と満面の笑みで千恵。

どうしよう。これはつつこむべきところなんだろうか。この小学生の少女は今つつこみが入るのを待っているんだろうか。わたしは腕を組んで本気で迷う。

そんなわたしを尻目に勝虎はにっこりと笑いながらうんうんと首を縦に振り、

「なんだかよくわからないけど解決したんだね、良かった良かった」と嘯いている。現実逃避？ いやこのバカのことだからマジで言ってるんだと思うけど。

とにかくわけがわからなかった。展開が予想の斜め上を行きすぎだ。もしかして夢でも見てるのかしらと、淡い期待を胸に手の甲をつねってみるも、わざわざ言うまでもない結果に終わる。

しかしこの程度のことは、実はまだウォーミングアップでしかなかったのだとわたしは後々に思い知ることになるのだった。この先陣岬町は、意味不明と珍妙奇天烈に満ち満ちた他にないような奇想天外な町だったのである。

そしてその奇々怪々の第一弾がまさに今、わたし達の目と鼻先に出現していた。

「おーい、千恵ちゃん」

とふいに先ほど金井が発したものとまったく同じ台詞がどこからか聞こえてきた。

わたしは声の出所を探して周囲を見回してみる。しかし今度は一見してそれとわかるような人物は見当たらなかった。

「じいちゃん？ どこにいるのー？ 顔あつたよー」

千恵が言う。

つまり声の主は問題の天狗の面を落とすという千恵のじいちゃんであるらしかった。そう思うと確かに声はしわがれていて年齢を感じさせるものだった。

「こつちこつち」

また聞こえる。しかしやはり姿はない。

「どこー？」

「こつちじゃって」

「どこー？」

「あれじゃないかな？」

言って勝虎が千恵が先ほど歩いてきた方向を指差す。見ると、指さした道路の脇に一本の木が聳え立っており、その脇からにゅっと腕が伸びてきてこちらに手招きをしていた。

千恵はそれを見るとやはりあつ、と叫びそちらに勢いよく駆け寄っていった。そして天狗の面を隠れているじいちゃん（？）へと手渡した。

じいちゃん（？）はそれを受け取ると、少し間を置いて 面を顔にはめたのだろう。ぬつとわたし達の前にその姿を晒した。

「いやー、金井さん助かりましたわー。わしはこれがないとよう外も歩けんのですしー。ちなみにこれ、どこにあつたんですかいな」

わたしは、おそらく流石に勝虎も、啞然として言葉を失っていた。「お店の中に落ちとりましたよ。この前来た時に落としたんじゃないかな」

「あ、ほうですか。いやなんにしる見つかってよかったですわ。だ

「ははは」

白い山伏装束に身を包み、

足には一本歯の高下駄を履き、

背中に大きな二枚の羽が生え(？)、

腰に大きなうちわ(葉団扇?)を下げ、

顔には今千恵が渡した鼻の長い面をつけている。

天狗だ。間違いなく天狗だ。

いや本当は天狗じゃないのはわかってるけど、とにかく天狗だ。

「気をつけてな。あんま顔をほいほい落とさんようにせんと。その度に千恵ちゃん泣かすの不憫ですから」

「ああはい、ほうですな」。気をつけますわ。千恵ちゃんすまんの」

「じいちゃん気をつけんとな」

「けらけらと笑う千恵。」

置いてけぼりなわたしと勝虎。

「ところで金井さん、この方達は？」

「ん、ああ、この人達は今日からこの町に引越すことになったご夫婦さんです。えーと、勝虎君と鰐子さんだね、確か」

「鰐？ あの鰐？ うひゃひゃひゃ！ お姉ちゃん変な名前！」

金井の時とは異なりわかりやすくム力つく反応を見せる千恵。当然力チンとはくるけど勝虎が傍にるので拳を振り上げるのは我慢する。後で覚えとけよ小娘。

すると天狗がわたしの代わりにというわけではないが、千恵の頭をバチンと思いつき叩いたのだった。

「こら！ 千恵ちゃん！ 人様の名前を笑っちゃあかんやろが！ 人の名前つちゅーのはな、その人の幸せを願って一所懸命に親御さんが考えてつけるもんなんやで！」

天狗が天狗のくせに意外とまともを言った。見た目はどう見てもだが中身は常識人なのだろうか？

「ほら千恵ちゃん。お姉さん謝りいな。ごめんなさいゆつてな」

「うづうー、ごめんなさいお姉ちゃん」

千恵はまた泣き出しそうになりながら案外素直に頭を下げてる。それでわたしもまあ許してやらんでもないかなという気になる。まだ子供だし、引越し初日に波風立てるのもどうかと思うし。

「いやほんますんませんな。この子にはわしからよう言っときますわ」

「いえ、そんなお気になさらないでください」

笑顔でわたしは言った。

「ほうですか。ありがとうございます。それより、お二人は今日ここに引越してきた言うのは本当ですかいな？」

「あ、はい。これからよろしくお願ひします」

勝虎が微妙に戸惑いながら応えた。

「ほうですかほうですか。いや嬉しいですわ。若い人が新しく来てくれるんはほんま嬉しいことです。過疎化いうんですかいな、この辺も例外じゃないけいせいさんばあさんばっかになってきて若い子は皆都会に出て行ってしまっしよ。あんた方みたいに若い子らは大歓迎ですわ」

「はい、恐縮です。ありがとうございます」

「そんなかしこまらんでくださいな。ねえ勝虎君にアリゲー子さん殺す。」

前言撤回。何がアリゲー子だ。ふざけんな！ 百パーセント聞き間違いじゃねえだろ？ 絶対わざとだし！ やっぱこの天狗全然まともじゃねー！

「いや、彼女の名前は鰐子ですよ」

で、おもくそ真面目に訂正する勝虎。やっぱりこいつもバカだ。婚約者がバカにされてるんだぞ？ もつと腹を立てるよ！ キレるよ！ てめえがそんなんだからわたしが無駄に毎日ストレス溜めてんだよアホ！

「あ、ほうですか？ こりやすんません。何しろ年を取ると耳が遠くなりましたな」

「いえいえ。お気になさらず。誰だって聞き間違いはありますから」
にこやかに談話するバカと　　を尻目にわたしはブチ切れ寸
前で引きつった笑みを浮かべている。残りの二人、千恵と金井はわ
たしの発する憤怒のオーラを察してなのか、ぎよっとしてこちらを
見ながら固まっていた。背後でぎゃあぎゃああと野鳥達が鳴きながら
飛び去っていく。

「そ、それじゃ私はこれで……」

そんなわけで金井のおっさんは逃げるように、て言うか店の中に
逃げていった。

「じ、じいちゃん……」

千恵は涙目で天狗の袖を引く。

「あ、そういえば、まだわし名乗ってませんでしたな。いやはやこ
りやお恥ずかしい」

「いえいえおかまいなく」

でも、バカと　　はめっちゃ鈍感で何も気づいてない。

「わし、こういうものです。以後よろしく願いますわ」

言って天狗は懐から二枚の名刺を取り出しわたし達に差し出して
きた。

……名刺？

いや名刺自体は何もおかしくないんだけど、天狗が名刺つてなに
よ。新手のギャグ？　わたしも勝虎も？マークを頭上に浮かべる感
じでそれを受け取り、見ると？マークは消えるどころかますます大
きくなっていった。そこには一言だけポツと、こう書かれていた
のだ。

『天狗』

……何これ？

「えーと、天狗、さん？」

勝虎が混乱したように訊く。

「はい天狗です」

「お名前は……？」

「はい天狗です」

「ご職業は……？」

「はい天狗です」

「えーと、人間ですよね」

「いいえ？ 天狗です」

「あの、一応確認しときますけど……」

わたしはおずおずと口を挟む。

「ネタですよ？」

「何がですかいの？ わし、チョー天狗なだけじゃけえが」

あはは。なーる。

そりや金井夫婦が鰐子っていうちよつと変わった名前程度で驚かないわけだ。

あははははははは。

っーか帰りたい。

もうやだ。何この人達？ 勝虎のバカとかそういう次元じゃないじゃん。真正だよ。真正の　　だ。何が悲しくて引つ越し初日から天狗コスプレのおやじと顔を突き合わせなきゃいけないわけ？ てかあれだ。ここに住むってことはこいつらと同じ町の住人になるってことだ。このアホ共とご近所さんになるかもしれないということだ。

ふざけんな。マジふざけんな。なんなんだよこの町は？ しょっぱなから天狗、あとこの千恵って女の子も微妙に変。金井夫婦はまあまともな内に入るんだらうけど、この町に入ってから会った人はまだその四人だけで、ここまでの奇人変人率が実に五十パーセント、二人に一人が頭のおかしいような奴だ。

もし町全体での比率も二分の一だったらどうしよう。想像しただけで恐ろしい。身の毛もよだつとはこのことだ。

「ほいで、お二人さん、お住まいはどこになるんですかいの？」

人の気も知らない天狗は呑気に言う。

「はあ。住所は、えーと須加谷四 八 三つてなってます」

「なんと！」

「え、知ってるんですか？」

「いや知りませんけど」

なんなんだ。

「じいちゃん」

「おや千恵ちゃんどうしたん？」

「そこうちの隣じゃないの？」

「え」

「え？」

「えー！？」

と、わたし達三人の大人は全員同じタイミングで声を上げた。しかし三人が三人微妙に驚きの質の違いか、イントネーションが異なる。

最初の「え」は勝虎で純粋な驚き。

二つ目の「え？」が天狗できよとんとした間抜けな調子。

三つ目の「え！？」がわたしで、もし千恵の言うことが本当ならこんな奴らとお隣さんになるということで、うわそれ最悪マジやめてという悲痛な叫びである。

千恵が首をかしげながら続ける。

「じいちゃん知らんの？ うちの住所、須加谷四 八 二だよ」

「なんと！ そりゃ知らなかったわ！ 千恵ちゃんは物知りじやの

ー

「えー、えへへ。そうかなー」

アホ。自分の家の住所を知らないのも、そんな当たり前のことを知ってるくらいで褒められて喜んでるのも両方バカだよ。

とか考えてたら、ん？ って感じであることに思い至る。

「『うち』ってことは二人は一緒に住んでるってことですか？」

わたしは訊いてみる。すると勝虎も同調したように言った。

「あー、なるほど。てことは天狗さんも先陣岬さんってことですか？」

「そうそうそこ重要。勝虎にしてはいいところに気付く。すると天狗は、」

「や、それは違うんですわな。確かに千恵ちゃんとは一緒に住んどりますが、先陣岬性なのは千恵ちゃんだけでわしは違うんですわ。わし、天狗ですけえな」

とか言いくさりやがるからまたごまかしたのかと思ったならそうじゃなかった。

天狗はぼんと千恵の頭に手を置くと、ちよつと神妙そうにこう続けたのだ。

「千恵ちゃんはですな、捨て子だったんですわ。町の外れにある富周枳神社つちゆうとこに毛布にくるまれて捨てられておったのをわしと神主の東条ゆう男が見つけましての。置き手紙も何もなく、名前ももちろん捨てた両親もわからん。それで話し合った結果わしが育てることにしたんですわ。ほいで名前をわしがつけたんです。名字はこの町の名前からとって先陣岬。名前には、これからこの子が出会う人、ほいでこの子自身にたくさん幸せを、千の恵みを与えらる子という意味を込めて、千恵としたんですわ」

「そう、だったんですか……」

勝虎が罰が悪そうにつぶやいた。

ちよつと場がしんみりと静まった。わたしも考えなしに下手なことを訊いてしまったと少し反省する。同時に人は見た目で判断してはいけないとも。

この天狗、いろんな意味であれだが根は悪い奴じゃないのかも知れない。千恵もまた、ただの阿呆な少女というわけでもないのだ、きつと。つらい過去があつても明るく振舞って乗り越えている、そういう強い子なのだ。

とわたしが感傷にひたっていたら、

「アハハハハハハハハハ！」

なぜか当の千恵が大爆笑。

えー。

「じいちゃん変なのー！ 真面目っぽいこと言ってる！ 天狗なのに！ アハハ！ 変すぎー！」

しかも真理をついている。

「ダハハハハハ。そうじゃのー。わし、なんか真面目っぽいこと言ってもうたのー。天狗なのに。ダハハハ」

天狗まで笑いだす。もう知らん。

やっぱりこいつらアホでいいや。

「ぐすん……」

「え。勝虎なんで泣きだしてんの！？」

「いや、なんか千恵ちゃん偉いなあ、って。本当はきつと泣きたいだろうに、強くあろうと笑顔でいるんだ」

「えーと、そうかなあ？」

ただのバカなんじゃね。つーかお前がな、バカツトラ。

「千恵ちゃん」

涙をぬぐって勝虎が千恵の前にかがむ。そして笑顔で言った。

「これからは俺達と家が隣らしいから、仲良くしていこうね。何かあつたら俺達が力になるよ。俺達のことを本当のお父さんとお母さんだと思つてさ。な、鰐子？」

え？ こつちに振るの？

「えーと、うん。そう、いつでも頼つてね」

てか誰がお母さんじゃボケ。わたしはまだ二十一だつっの。

「うん！」

「いやあ。なんか嬉しいことになってきましたなー。それじゃー早速親睦を深める意味を込めてお二人さんの新居まで案内いたしますわ」

「え、いいんですか？ いやあ悪いですよ」

「いやいやお構いなく」

気づけ、勝虎。こいつは道案内と称して体よく家までわたしらの

車で送り届けてもらおうとしてるだけだぞ。

「あ、でも乗れるかなあ？ 車、乗車席部分は二人乗りだし」

「そりゃ大丈夫ですわ。幸い千恵ちゃんはお柄ですし、詰めれば乗れるでしょう。私は荷台にでも乗らせていただきますわ」

おい天狗。勝手に決めるな。て言うかお前が荷台に乗るんじゃない道案内にならないだろうが。やっぱり案内する気ゼロじゃねーか。

「じゃあそれで行きましょうか」

でもやっぱり勝虎はそれを了解しちゃうんだよなあ。これだからバカは嫌だ。

「ほいじゃ出発しましょか。千恵ちゃん、うちの隣でええんやろ？」

「うん。そうだよ」

「だったら……あ！」

突然天狗が何かを思い出したように大声をあげた。わたしも勝虎も突然のことにぎよっとする。

「どうかしたんですか？」

「よう考えてみたら、うちの隣言うたら、あれ『ねこハウス』やないじゃろか？」

は？

「あー！ そういえばそうだね！」

千恵も大きく頷く。

「あのー……『ねこハウス』ってなんですか？」

「そりゃ『ねこハウス』はねこ大王の領地ですわ」

あー。またわけわかんねー展開になる感じ。

もうみんな死ねばいいのに。

「そのねこ大王ってのはなんですか？」

「そりゃねこの大王ですわ」

「はあ？」

「わしてつきりあの家ねこ大王のもんだと思ってましたわ。そりゃもちろん法律的にとか、ちゃんとそういう意味じゃけえ。しかしのー、そこに勝虎君達が住むってことはあの家ねこ大王のもんじゃ

なかったってことですね。こりゃーよう言うてなんとか出ていってもらわないけませんな」

「えーと、それってつまりどういうことですか？」

勝虎が頭を掻きながら訊いた。

「大丈夫ですわ。任してください。前々からねこ大王には近所のもんも手を焼かされとったんですわ。いい機会ですから、ここでわしがガツーンと言ってやります。町内会長の意地を見せたりしますわ」

ははは。質問の答えになってねーし。もうなんでもいいや。とりあえず成り行きに身を任せてみよう。

と言うかこの天狗、町内会長だったんだ。そんな町内会やだな。いやマジで。

2

『ねこ大王』というのは先陣岬町の須加谷に住むとある男の通称なんだそう。その男の名前は樹林信二。年齢は四十六歳（推定）。家族はおらず一人暮らしで職業は無職、に見えるらしいけれど本当のところは誰も知らない。それと言うのも樹林はほとんど人前に姿を現すことがなく一日の大半を自宅の中で過ごしていて、誰も彼が働いている姿を見たことがないからだった。しかし実際として樹林は、お金の困っている様子は微塵もなく、何かしらの方法で稼ぎは得ていると皆認識しており、特にそこを問題にするものはいなかった。

その樹林がねこ大王と呼ばれる所以についてだが、それはそのあだ名（？）から容易に想像できるように彼が無類の猫好きで、自宅に数えきれないほどのたくさんの猫を飼っているためらしい。樹林がいったい何匹の猫を飼っているのか、その数を正確に把握している人間は町にはいない。何しろ、大げさに言えば、町のすべての猫が一度は樹林に餌をもらっているのではないかと思われた程だったし、たいていの猫が飼い主の家の外と中を自由に行き来することを

考えれば、もはやいつたいどこまでが樹林の飼い猫と呼べるのか、誰にもはっきりと判断できなかったからである。樹林の家を出入りする猫はそれほど多く、少なくとも四、五十匹以上はいるように見えるのだと言う。それらの猫達にペットシヨップなどで買ってきた者はなく、そのすべてが付近で拾ってきた野良猫らしかった。そのため種類で言えば、猫はほとんどが雑種だった。

ここまでならば、樹林はどこにでもいるただの（？）人一倍猫が好きなだけの男である。しかし実際にただそれだけの話になっていないのは、ひとえに樹林の猫の扱いに関して問題が発生しているからであった。先に結論を述べてしまえば、その問題とは要するにここ数年あまりにその数が多すぎるためか、猫の世話が樹林の手に余ってきていることにあった。

そもそも何が問題なのかと云ってしまえば、猫が増えることそれ自体が問題なのだ。樹林は、飼っている猫に去勢や避妊の手術を受けさせることがなく、その上で多くの猫達が樹林の家を寢床にしているため、発情期にでもなればいたる所で交尾ざんまい乱交パーティ、その結果、当然毎年多くの猫が産まれてくる。そしてそれはやがて樹林一人の手には負えなくなるわけで、増えすぎた猫の、匂いや鳴き声などが町ではちよつとした問題になっているのだった。

このままでは樹林、町内の住人、そして猫にとっても都合がよろしくないというところで、これ以上猫が増えないように、樹林に猫達へ避妊や去勢の手術を受けさせることや、しつけの徹底などを促すよう町役場や一応町内会長であるらしい天狗が話をしに行くことは今までも幾度かあったらしい。しかし話し合いはこれまでうまくいったことがなかった。それには、樹林自身が非常に頑固であったこともあるのだが、それ以上に今は亡き樹林の父、樹林録太郎の存在が大きかった。

五年前に七十歳の　今どきの基準で言えば　若さで亡くなった録太郎は、「悩みがあれば録太郎の所に行け」という標語が町中に知れ渡っていた程の大変な人格者であり、あらゆる人に頼られる、

町の有力者であったという。仕事や恋愛、人間関係などあらゆる分野のどんな相談にも丁寧に乗ってくれ、かつ的確なアドバイスを送った録太郎はある意味町長以上に町のリーダーであり、中心人物だった。実際突然の心不全で亡くなるまで録太郎は町内会長だった。(でもそんな人の後釜が天狗ってどうよ?)

樹林信二は、そういう人の息子であったわけだから、誰もが生前の録太郎の恩義を受けており、まあちよつと考えれば見当違いもはなはだしくはあるが、樹林にお前ら恩を仇で返すのか、と言われると、もうそれ以上強くは言えないというのが実情だった。また老人達は、その多くが樹林の録太郎と共に暮らしていた少年時代を知っており、それがとても素直な少年であったため、彼が根は悪い奴じゃないという幻想を持っていて、いつかはこの問題もなんとか解決するだろうと、根拠もなしに盲信しているのだそうだった。

とまあ千恵から聞いたねこ大王の話をまとめるとこういうことになるわけだけど、わたしの言い方でちよちよいつとまとめさせてもらうならこうなる。

お前ら全員馬鹿じゃねーの？ 樹林の方は言うまでもなく馬鹿。周りの人間も馬鹿。ぐだぐだ理屈こねる前に行動しろ。

千恵が話を続けた。

「それでねー、あんまり猫が増えちゃうものだから、ねこ大王のうちだけでは猫が収まらなくなっちゃって、それで近所の空き家にねこを住まわせるようになったの。それがねこハウス」

「えー、それがうちもってこと?」

流石の勝虎も嫌そうに言う。

「うん、そうだねー」

「うーん」

最悪。じゃああれだろうか。わたし達の新居は、まあ新築ではないのは知っているけれど、それはさておき、猫の小便の匂いと、爪ときの傷にまみれているかもしれないと、そういうことだろうか。考えるだけで憂鬱。つーか殺す。その樹林何某だとか、もし家がボ

口ポロだったら殺してやるから覚悟しとけ。

そんな間にも軽トラは着々と新居に近づいているらしかった。須加谷というのは、町の中心からちよつと北に外れて、また山の斜面に入るような位置にあるらしい。左右に民家がぼつぼつと点在する緩い坂道を、車は登る。車には助手席にわたしと千恵が詰めて座っている格好だった。千恵はさつきから窓の外を嬉しそうに眺めながらねこ大王について私達に説明していた。

「でもさ、千恵ちゃん」

左にハンドルを切りながら勝虎が不思議そうに声を上げた。

「その樹林の信二さんの方がさ、猫の世話をすっかりとしないの、生前録太郎さんは何も言わなかったの？ いい人だったんでしょう、録太郎さん」

「あ、違つもの」

「違つ？」

「うん、あのねー。ねこ大王はね、五年前まで東京の方に出ていったんだって。そしたら樹林のじいちゃんが死んじゃったから、こつちに帰ってきてじいちゃんのうちに住むようになったの。で、ねこ大王がねこ大王になったのはそれからなの」

「なるほど。ふーん」

「それに樹林のじいちゃんも猫好きだったから。ねこ大王程じゃないけどさ。だから、それでねこ大王言うんだって。お前ら猫を否定するのは俺の親父を否定することだぞ、って」

「え、それでみんな納得しちゃうの？」

わたしはちよつと驚く。

「納得、ていうか恩があるのは本当だから、それでうーん、ってなつちやうんだって」

わたしにはその感覚がよくわからない。

「鰐子は猫好きだったよなー、たしか」

「え、うーんまあ見るのは可愛いから。でも飼うのはちよつと……世話が大変そうだし、猫だと勝手にどこか行っちゃいそつで」

あとハムスター食いそうだし、猫。

「そうだよなー。猫、見るのと飼うのじゃやっぱ大違いだよなー。しかもそれがいっぱいいるんじゃない。なんとかして猫にはどいてもらわないと……」

「そうだね」

居座ってるのが人間ならば手っ取り早く全員ぶっ飛ばしてしまえば楽なんだろうけど相手が猫ではそうはいかない。まあ面倒臭くないなら樹林ってやつをボコせば全部丸く収まる気がしないでもないが。

「でもあたしはねこ大王好きだよ」

「そうなの？」

「うん。ねこ大王基本的には優しいもん。大人達はルール守らないしすぐ怒るしみたいと言っただけで悪い奴だー、って言う人多いけど、確かに猫に関してはみんなに迷惑かけてるけどそれ以外はいい人。子供には人気。お菓子くれるし、自由に猫と遊ばせてくれるし、あと優しいだけじゃなくて、子供達の中で悪いことしてる子を見かけたりしたら他の大人が見て見ぬふりしてもねこ大王はちゃんと注意するの。本当だよ」

「えー、そうなのかあ。ちょっと複雑だなー、そういうの。むしろこういう場合もつとこう、本格的に悪いぞーって人の方がこっちも話しやすいんだけどな」

「まあとにかく直接会って話してみるしかないんじゃない？」

樹林がいい奴か悪い奴かなんてわたしはどうでもいい。肝心なのはわたしにとって敵か味方のどちらであるかということだ。

「じゃあまずねこ大王のうちに先に行く？　ねこ大王の家もあたしんちの近くだよ」

「いや、とりあえずはうちの現状を見てからにしよう。もしかしたらそんな大事にするような状況ではないかもしれないし、何より引っ越し初日から近所の人としこりを作るのも嫌だしね」

勝虎が珍しくそんなまともなことを言っただけで車は斜面を登っていく。

道路から斜めに差し込む形で舗装されていない道が左方向に伸びていて、ここを登った先が私と勝虎の新居になっているらしくった。勝虎はハンドルを切ってそこに軽トラをいれるが、この坂道が結構きつい。荷物も多いのでちゃんと登ることができのかわたしは割とマジで不安になる。

しかしその辺文明の利器はわたしが思うほどやわではなく、車はきつい坂道もなんのそので一気に登りきった。

そうするとそこにわたし達の新しい城があつた。それはまさしくトト口の家を連想させる木造りの大きな平屋だった。建物の正面に大きな両開きの扉があり、向かって右方向に家が伸びている。左方向にも伸びているが、バランスとして右の方が長い。屋根は今も青色に彩色されているが、遠目に見ても所々ペンキがはがれかけていた。これは建物全面の白い壁も同様である。しかしそれらの汚れに汚らしいという印象はわたしは受けなかった。むしろノスタルジックな感想を抱いたくらいだ。見渡すと家の前の広場になった庭には、右端の方に古ぼけたブランコが一つ設置してあつた。以前にここに住んでいた人にはきつと子供がいたのだろう。うまく直してやれば、将来わたしと勝虎の間に子供が出来た時に遊ばせてやれるかもしれない。

白状すれば、その瞬間わたしはちよつとだけこの家のお洒落に古くなった雰囲気を感じたと思つてしまった。しかしすぐにここに住むのだということに考えが回って、でも住むのはねーなどと内心前言を撤回した。

「ほら見て。猫ちゃん」

言つて笑いながら千恵が窓の外を指さした。それで気付くが、確かに家の周りには何匹かの猫がうろついていた。ひいーふうーみいーと数えてみると、見える範囲では合計四匹の猫がいた。まだら模

様のものと茶色いもの後は白猫と黒猫だ。それらが家の玄関あたりでたむろして、家の前の広場の適当な所に車を駐車しようとしているわたし達の姿をじっと見つめていた。

車が停車すると、早速千恵が飛び降りるようにして下車して、「にゃー！」と叫びながら猫に駆け寄っていく。当然猫達はびっくりしたように身を震わせてさっと千恵から逃げていく。それで千恵は「うえー!?」とまたよくわからない声を上げる。アホ娘。

わたしと勝虎も続いて車から降りた、その時だった。玄関の扉がおもむろに開き、中からまた別の猫を連れだつて小太りの中年男がのんびりと歩み出てきた。わたしはその男の姿にすぐに当てをつける。直観だが、きつとあの冴えない男が『ねこ大王』とか千恵達が言っていた樹林信二に違いない。そう思っていると、扉の開閉音に顔を上げた千恵が男を見て「あー、ねこ大王こんにちは！」と声を上げるからわたしは自分の直感が正しかったことを知る。

「やあ、千恵ちゃんか。元気？」

と樹林は見た目に違わずのんびりと言う。

「ねえ、勝虎」

「ん、何？」

「なんであの人家の中から出てくるわけ？ 鍵、勝虎が持つてるんでしょ？」

「え、そうか。なんでだろう」

「もう。これじゃ不法侵入じゃない」

「その通り！」

応えたのは勝虎ではなかった。上方からのふいの大声にわたしはぎよっと身を竦ませる。見上げると、いったいどうやって登ったのか、荷台の上に天狗が腰に手を当てる偉そうにふんぞり返っていた。てかなぜあんな所に？ バカだから？ バカと煙は高い所が好き。声は向こうにも届いたのか、樹林と千恵もびっくりした様子でこちらを見ていた。

樹林が戸惑うように言った。

「天狗のじいさん？ それにあの人達は？」

「ねこ大王！」

それに応える形でまた天狗が大声を上げる。うるさい。

「今日は大事な話があつて来た！ なんの話かはわかつてるね！

今までずつと結論を延ばし延ばしにしちよつたわけだけえ、今日こ

そはそうはいかん！ きつちり決着つけさせてもらうけえ、覚悟し

んさい！ トウツ！」

トウツ？

と思うが当然天狗は飛び降りたりしないで恐る恐るゆつくりと荷台に腰かけ、足を延ばし、慎重に荷台から降りていった。

そして言う。

「どっこらせ」

思いつきりつつこんでやりたいけど我慢我慢。

つかつかと天狗が樹林に歩み寄っていく。すると樹林は露骨に嫌

そうな顔をした。

「話？ 話つて言うとおれかいじいさん？ ぼくの猫達はどつにか

しようつていう」

「ほうじゃ。他に何がある？」

「だったら結論なんてとうに出てるじゃないか。ぼくは猫達をどつ

にかする気なんて絶対はないよ」

「しかし数が増えすぎとる」

「数が増えることの何が悪いの？ オス猫とメス猫がいて、両者が

知り合えば交尾して子供が産まれる。これは自然の摂理じゃないか。

何がおかしいのさ？」

「ほうじゃな。それは自然の摂理や。しかしな、問題はそこじゃな

いんやで。猫が増えたことで困る人がおるつちゅうことなんじゃ」

「困る？ 困るつて誰が？」

「そりゃ町の人じゃ」

「だから、その町の人つて誰さ？ どう困るつていうのさ？」

「近所のもんじゃ」

「近所つて誰さ？」

「ぎょーさんおるわ。まずわしじゃろ。千恵ちゃんじゃろ」

「え、あたし困つてないよ」

「こりゃ千恵ちゃんしーっ、しーっ！」

アホ娘。

「えー、おほん。まあ気をとりなおしてな。田中さんとこに、岩倉さん、山下さん、堤さん、高坂さん、みんな言つとるわ。猫は匂いがきつい。夜中にニャーニャー鳴く、それに車運転してる時ぴょーんと飛び出して危ない言うとするしの。夏場に窓開けとくとひよいと入り込んで食いもんねだつてくるしのー」

「それだけ？」

「は？ 何がじゃ？」

「だから、文句言つてる人達。それだけ？ ふん。わかつてないなあじいさんは。猫達はさ、みんな別におかしなことはしてないじゃないか。みんな猫にとつて普通なことをしてるだけだ。それをさ、そんな少数の人達がちよつと騒いだくらいでやめろつて言いがかりをつけてくるわけ？ それつてないだろう。そんなことを言うなら人間達の方こそ自分達をどうにかすべきだ。考えてもみなよ。この後ろの山に住む動物達からすれば、人間こそこれ以上ないほどに迷惑な動物じゃないか。しかし人間はそんな他の動物にとつての迷惑な行動を本当に最近に、その動物を絶滅させてしまふんじゃないかという段階にくるまでまったく問題視していなかった。なぜかつて？ それが人間にとつての普通のことだからだ。ああ違うよ。勘違いしないでほしい。ぼくは別に環境問題について語りたいわけじゃない。つまりさ、動物がその本来持つ性質に従つて行動することをどうして他の動物から見ても悪だと決めつけることができようかつてことなんだよ」

「ねこ大王。そりゃ問題のすりかえやわ。お前さん言いたいことはわかるがの、わし天狗だしの。問題なんかは現実に迷惑被つてる人おることじゃけえ。お前さんが言うてるのは結局理屈やろ？ 理屈は

な、理屈だけじゃ駄目なんやで。まず他の人を納得させうる実践が伴わにゃあ、そりやただの屁理屈なってしまうんや。わしは知ってる。お前さんはほんまは悪い奴じゃないけえ、しかしの、このまんまじゃそのうちみんながお前さんのことも嫌いになつてまう。ほうなつたら、録太郎さんも浮かばれんで」

「ふん！」

軽蔑するようにひと際大きく樹林が声を上げた。

「やっぱりそうくるのか。何かあればすぐに父の話か！ わかつてないのはあんたの方だ。あんたらは父の名前を都合よく説得のための道具にしているだけだ！ 猫を愛していたのは父も同じだ。もし父が生きていたら必ずや父はぼくの、いや猫の味方をしてくれるはずだ」

「ああ、わかった。じゃあ事実関係だけ話そうかの。なあねこ大王。現実問題として猫の数が増えすぎとるのは事実じゃろ？」

「だからねあんた」

「いや待て。ほうやない。猫が増えすぎとると、ねこ大王、あんたの方でももう世話の手が回らんようになってるんやないか？ ほうやろ？ しつかり管理が行き届いていれば、猫達が迷惑やーって周りの人も文句を言うこともないわけじゃからの」

「だからあんたらはわかってないって言うんだよ！ 猫の管理だった？ そこが既に間違ってるんだよ。猫は人に管理されるような生き方をするべきじゃない。自然の摂理に従って、その上で幸せになるべきなんだ」

「そりやちやうやろ、ねこ大王。ごつちやにしたら駄目じゃろ。わしらが問題にしとるのは猫の行動に関してじゃのうて、ねこ大王の行いなんや。そりやもちろん猫は気ままに、お前さんの言う“自然の摂理”に従って生きるわな。そりや当然じゃけえ、もしその行動が人様に迷惑をかけて、お前さんがそれを見ている立場にあるなら、見て見ぬふりはあかんやろつちゆうことや。それだけやで。それぐらいちよいと手を出したところで自然の摂理に反するとまではいか

んやろ」

「ああわかった、わかったよ！」

樹林がイライラとした様子で大声を上げる。それに周りの猫達がちよつと驚いたように顔をあげる。

でも実はその後ろでわたしはかなりムカついている。

「じいさんらの言い分はわかるよ。別に間違っているとも思わないけどさ、問題はその先なんだよ。あんたら猫達が増えすぎましたで、その解決策として何を考えてるんだい？　じいさんは今はそんなことを言ってるけど、魂胆はわかってるんだぞ。役場の連中と同じだろ？　最終的には猫達を保健所へ連れていこうって話に持つていこうとしているんだろ？　わかってるんだぞぼくは。それこそが最大の問題なんだよ！　人間のおごりなんだ！　さつきぼくは言うたろう？　おのおのの動物の普通の行動は他の動物の立場からで善悪を決められるべきじゃないと。だが保健所に関しては違う！　あそこで行われるような動物達の殺処分はれっきとした虐殺だ！　人間が住みかを求めて山を切り開くことも、食料として大量の動物を狩りすることも、それらは昔から人間が行ってきた普通の行動だよ。だがあれは違う。食べるためでもなんでもなく、ただ人間様のご立派な“文化的な理由”で多くの猫や犬などを殺戮する。そんなこと許されるものか！　そんなおごり、ぼくは断じて認めないぞ。どんな話し合いだってゴールがそこにある以上受け入れられるものか！　最近はまだでさえシザーハンザーみたいな危ない奴もいるんだ。いつ猫達にも危険が及ぶかもしれない。その上公的にまで猫達を傷つけられてたまるか！」

シザーハンザー？　なんかまたわけのわからん名前が出てきたぞ。てゆうか駄目だなこいつは。もう真面目に話し合いにならない感じがプンプンする。

「うん、ほうやな。確かにほうかもしれん。しかしな、今日ばっかりはそれではいおしまいというわけにはいかんのや。なんとかかわかってもらわなあかん。この人達がおるからの」

言いながら、天狗はわたし達を指し示す。やっと話に加われるっぽい。

「ああ、さつきからいるけどあんた達いったいなんなの？」
興奮冷めやらぬといった様子で樹林が言い、勝虎が応えた。

「あ、どうもはじめまして。俺は小西勝虎と言います。彼女が相田鰐子。えーと、俺ら、今日からここに引っ越すことになりました」

「ここ？　ここってどこ？」

「え、ここです」

「ここ？」

勝虎が家を指さし、樹林が背後を振り返る。向き直ると言った。

「そりゃ無理だ」

ブチ。

「ここはねこハウスだ。ぼくの家に住みきれない、またぼくの家を好まない猫達の安息の地だ。人間なんかの住みかじゃない。第一ここは父の持ってた土地のはずだ」

「え、でも俺ちゃんと不動産屋から買ったんですけど……」

「ん？　そうなの？　じゃあぼくが東京出てる間に売ったのかな。

まあいい。その辺のことは権利所の類を探せばわかるだろう。けど無理なものは無理だ。もうここには猫達が住んでるんだ。今更出ていけとは言えないだろう。ほらあれだ。既成事実というやつだ。

そこは人間だって同じだろう」

ブチブチ。

「しかしのねこ大王。人間の世界なら法律があるじゃろが。それには従わんといかんじゃろ」

「ふん。見え見えだよじいさん。つまりあんたはこの人達の引っ越しにかこつけてうまく猫をこの家から追い出し、その勢いでそのまますべての猫を処分しようと考えてるんだろう？　そうはいくか。

あんた達二人も気付きなよ。利用されてるんだあんた達は。この腹黒い天狗にね」

「ぬぬう」

「いやでも俺たちはちゃんと正式な手続きでこの家を買ったわけ
……」

「わかったよ。わかった。あんた達の気持もわかる。いくらだ？」
「へ？」

「この家の値段だよ。こう見えてもね、ぼく結構お金持ちなの。猫
以外特に趣味もないからけっこう財産あってね。父の遺産、それに
東京で稼いだ分もさ。ぼくがもっといい物件見つけて、差額分を払
ってあげるよ。いい提案だろう。って言うかあんた達にはメリット
しかない。ほら、言ってみなよ。どんな家がいい？ とにかくこの
家は駄目なんだ」

「え、いや……」

いきなりスケールのでかい話をされて戸惑うバカツトラ。死ぬ、
役立たず。

「そういう問題じゃないじゃろねごだいお」

「あーもう！ うるさいうるさいうるさい！ とにかくぼくと猫の
やることに関わらないでくれ！ ぼくは何より猫が大事なんだ！

猫の幸せを考えてるんだ！ 人間がどうなろうと知ったことか！」

ブチイ。

もう馬鹿共には付き合ってらんねえや。

「勝虎」

小声でわたしは言い、袖を引いて勝虎を車の横まで引っ張ってい
く。

「え、え、何？ 鱧子」

「ここはわたしに任せてさ、ご近所の人に挨拶回りに行つてきなよ。
荷台の手前の方に洗剤積んでるからさ、それ持って」

「え、でも……」

「大丈夫大丈夫。こういうのってさ、意外と男が威圧的にやるより
女の子が頼むほうがうまくいくもんだよ」

「うん、でも……」

「この家がいいんでしょ、勝虎。田舎暮らし、憧れてたんでしょ？」

「え、うん。それはそうだけど……」

「じゃあ任せて。大丈夫、あの樹林さん？ 別に暴力とかはふるわなそうじゃない。それにいざとなったら天狗さんもいるしさ」

「うーん……本当に大丈夫？」

「だから大丈夫だって。ほら、もう二時過ぎてるでしょう？ 話もまだ続きそうだし、それが終わってから家の中を掃除して、荷物下ろしてつてなったら絶対日が落ちちゃうでしょ？ だったら今の明るいうちに先に挨拶回り済ませてきなよ」

「うーん……わかった。じゃあ任せていいかな？」

「うん、任せて」

「絶対に危ないことはしないでくれよ」

「うん。行ってらっしゃい」

勝虎はそれで名残惜しそうにしながらも荷台から洗剤を取り出し、坂道を下っていく。わたしは完全に勝虎が視界から消えるのを待つ。

「あれ？ 鰐子さん、勝虎君どこ行くんじゃない？」

背後から天狗の声が聞こえた。ちょうどそのタイミングで勝虎は見えなくなった。

さて、と。

わたしは眼鏡を外す。それを胸ポケットに落とし込む。

振り返るとずんずんと無言で樹林の目の前へと歩を進めていく。

「鰐子さん？」

天狗が言うが無視。

「お姉ちゃん？」

千恵が言うがやっぱりそれも無視。

わたしはねこ大王の前に立ち塞がった。

周囲の木々が息を止めたように静まり、猫達が自らの主人を不思議そうに見上げる。

「何、あんたいつたい」

樹林が口を開いたその瞬間、

上半身を左方向にねじり、体にエネルギーのためを作る。そして

そのまま逆回転をかけて放出、拳を樹林の右のわき腹、肝臓部分へと打ち込んだ。

ズンッ！

というような鈍い感触が拳に伝わる。

「フンッ」

と樹林の口から声のような空気が抜けるような音が漏れ出た。

そのまま樹林は両膝をついてその場にうずくまる。脂汗をにじませながら、絞り出すように声を上げた。

「……な、にを……」

「つるせえ！」

わたしの一喝でまた殴られるとでも思ったのか「ひいつ」と樹林が小さく悲鳴を上げる。あるいはそれはボディ打ちの苦痛から漏れる音だったのかもしれないが。

「いいか、このポケ野郎？ テメーに発言に機会は与えられてねえんだよ。これからテメーはわたしの言うことをアホみてえな面したまま黙って聞いている。わかったか？ あ？」

「わ、わかりまし……」

「誰がしゃべっていいつつたんだよポケ！」

蹴る。

「ふべふっ！？」

「あ、あのー鰐子さん？」

「テメーもだよ 天狗！」

「は、はい！？ すんません！」

「いいかポケ？ テメーが口を開いていいのはわたしが許可を与えた時だけだ。その時以外はしゃべんな。黙っとけ。わかったかカス。それでその足りねー脳味噌をせいぜいよく使ってわたしの言うことを理解する努力をしろ。いいか？ ああ？」

さっきの反省からか樹林はコクコクと声は出さずに首だけを縦に振る。よしよし、いい子だ。従順な豚野郎だ。

「樹林テメーな、さっきから黙って聞いてりゃ猫の幸せ猫の幸せと

たいそんなことのたまつてやがるけどよ、テメーの言うその猫の幸せつーのはいったいななんだ？ そりゃ本当に『猫の』幸せなのか？ ちげーだろ？ テメーのはよ、『猫の』幸せなんかじゃねーんだよ。全部な、所詮『テメーの』幸せだろうが。はっ、いつちよ前になんか言いたそうだな？ おおかた何を根拠にってところか？ いいかボケ林、んなもんはな、テメーがさつきから偉そうにほざいてる御託だとか、これまでのテメーの態度なんか見りや猿でもわかんだよ。猫が好き？ ああそうさ。テメー確かに猫が好きなんだろうよ。けどそのテメーの好きつーのは結局のところガキが動物園の動物見る時に能天気吐く可愛いだとか好きだと、かそういう次元の低い好きとどう違うってんだ？ そうだろ？ 違うか？ 違わねーよな？ だから自分の飼い猫に去勢や避妊の手術一つ受けさせねえ。トイレのしつけもろくにしねえ、あげく餌の管理まで不十分。何一つ世話らしい世話はしねえ。それでぼくの猫？ 笑わせんなカス。テメーはよ、その辺の野良猫見てそれを可愛い可愛いと頭なでて満足してる行きずりの人間にすぎねえんだよ。わかるかボケ林、“飼う”つーのはそういうことじゃねえんだよ。動物見て可愛いねーだったら、猿でも出来んだ。ただそれだけじゃ駄目なんだよ。可愛い、好きだけじゃ動物は飼えねえの。わかるか？ 生き物ってのはぬいぐるみじゃねえんだ。腹も空かせば糞もする。何かにムカつきゃ機嫌悪くなるし、周りと衝突して問題を起こすかもしれない。生き物つーのはそういうものだが。それを“飼う”つーのはまず初めにそれを全部了解するってこと。おもちゃじゃねーんだから、買って遊んで飽きたらポイじゃ済まねえんだよ。その意味わかるか？ その足りねえ頭でよく考えろや。答えは簡単だ。そいつはつまり責任を持つってことだ。そいつが起こしたすべてのこと、喜ばしいことも許されないようなことも含めて、そいつの代わりに責任をすべて肩代わりすることなんだよ。そこまでやって初めて何かを“飼う”ってことになるんだ。じゃあいったいテメーの何が問題なのか、わかってきたか？ わかるよな？ これでわ

結局どっちでもいいんだよ。例え猫共が幸せだろうが、不幸のどん底だろうが、それはこっちの言い分とは関係ねえんだ。それをテーマはこっちゃんにして話すから話がこじれて面倒くさくなるんだ。こっちが言ってるのはよ、つまるところ、実際としてテーマがどう思っているかには一切関係なく、周りからしたらテーマは猫共の飼い主として見られているわけだから、その当たり前の責任を果たせて、そういう、それだけのことなんだよ。さあこれ以上簡単にはならねえぞ。わかったか!？」

「わ、わかったよ……」

樹林の一言に後ろで天狗がおおつと声を上げる。わたしもまた説得がうまくいったと思い、気分がよくなる。

え？ 暴力を振るうのは説得とは呼ばない？

そんなもん知らん。

「よし。だったらとつとこの猫共を連れてだな」

「ち、違うよ。わかったつて言うのはつまり、あんだ達の言いたいことはわかったという意味だよ」

「ああん？」

「あつ、い、いや、だからさ、あんだ達はこう言いたいわけだろ？ ぼくは世間的に見れば、この猫達の飼い主であることは疑いのないことなんだから、飼い主として最低限社会が求める要求を行え、と」

「わかってるじゃねえか、ボケ林。ならさつさとそうしろや」

「ち、違うんだよ。そうじゃないんだ。あんだらの言い分はわかるさ。だけどさ、その守るべき社会の要求するのはつまり人間の社会の要求なわけだろ？ 猫のじゃないんだ。それは人間の都合ではない。従えば、多くの猫を不幸にする。ぼくはそれが耐えられない。蹴る。」

「っほふはっ!？」

「だからわかってねえつつつてんだよテーマはよ! いったい今まで何聞いてたアホ! いいか? もう一度だけ言っつてやる。テーマ」

は周りの人間から猫の飼い主だと見られている。これがどういう意味かっつのは、要するにそれはテメーが周り、つまり人間の社会に属しているってことだろうが！ テメーは人間で、人間の社会の住人なんだよ。テメー飯はどうやって食ってる？ どのかの店で食材買って自分で料理するなり飯屋で食ってたんだろ？ その金はどうやって稼いでる？ 仕事してだろ？ それらはすべてテメーの大っ嫌いな人間の社会の一部なんだ。テメーはしっかり人間の社会の恩恵を受けて生きてんだよ。なのにだ、テメーはそういう社会のいいところだけ吸って嫌なところには唾を吐きかけようとしてる。それがどれだけ身勝手なことかわかるか？ 当たり前のことをしろつてのはつまりそういうことだ。んなもんガキでもわかることだろうが。それが嫌なら山奥にでも引きこもれ。んでもって大好きな猫共と一緒にのたれ死ね。わかつたか！」

「いや、でも、ぼくは……」

ここまで言ってもまだ樹林はぐずっている。よほどの脳なしか。頑固者なのか。

「わかつた。わかつたよ。それでもテメーは嫌だつて言うんだろ？ 猫の幸せがどうのこうのつてぐずつてよ。だつたらはつきり言うてやるよ。この猫共は幸せじゃない。それも、テメーのせいだな」
「い、言うに事欠いて何を！ 言っただろ！ ぼくは猫達の気持ちかわかるんだ！ 本当だ！ これは一種の超能力なんだ！」
「だから？」

「え？」

「だから、なんだよ？ はいはいわかりましたよ。猫共は言ってるんだろ？ 今は幸せです、つて。でもな、さつきも同じこと言ったけどよ、んなことはどっちでもいいんだつてのは、この場合にも通じるんだ。ここで言う“幸せ”つーのは猫がどう感じてるかじゃないんだからな」

「何わけのわからないことを……。猫自身が自分を幸せだと言ってるんだ！ 他にどんな幸せがある！？？」

「猫は何匹いる？」

「は？」

「何匹いるんだよ、猫？」

「そ、そりゃ、全部で……五三匹だ」

「ふうん。五三ね。おいボケ林。テメー自分の猫には一匹も避妊や去勢してないんだよな？」

「し、してない。そんなもの、人間のおごりだ」

「ようし、じゃあちよつとした算数のお勉強だ。いいか、仮にだぞ。テメーが五年前ここに一匹の猫を連れてやってきたとする。それが行きずりの一匹の猫と交尾して子供が産まれる。ちなみに猫つてのは年間何匹の猫を平均産むか知ってるか？ 答えは五、六匹だそう。さて、ではここで産まれた猫は仮に六匹だとする。その半分の三匹がメス猫でした。一年目の終了時、これで猫の数は合計七匹です。二年目同じ要領でメス猫がそれぞれ六匹の猫を産み、内半分の三匹がメス猫と仮定して合計二十四？ いや待て。ここでは当然最初の六匹を産んだ猫もまた子供を産んでもおかしくないから二十六匹です。この要領で計算していくと、三年目には一一六匹、四年目には四七六匹。五年目の今は……一九一六匹になりました。しかし実際は、五三匹。さて、残りの一八六三匹はいつどこに消えたのでしょうか？」

「……そ、そんなのただの空論じゃないか」

「ああそうだ。もちろんこんな数字は単純計算で正しくは絶対こんな数字にはなるわけがない。けど、言えるのは、五年間好き勝手に猫共にヤラせ放題にしていたら、たったの五三匹であるはずはないってことだ。必ずどこか多くの猫達が命を落としている。それは猫の幸せ？ 死ぬことが幸せか？」

わたしはちよつとしゃべり疲れてきた。少し落ち着け、わたし。

「ああ……で、でも、それは、……摂理だ。自然の……」

「違う。それを摂理だと切り捨ててしまうことは、結局猫達はただの野良猫だと言うことと同じじゃないか。猫達が野良猫で死ぬこと

もまた自然の摂理だとしたら、たとえばここでわたし達が無理やり力づくで追い出すのも、保健所の人間に連れていかれて処理されるのも、弱者は強者に抗えないという“自然の摂理”ってことになるでしょ。違う?」

「それは……」

「あんたは猫達を守りたいわけでしょう? けどそれは“自然の摂理”ではないわよね。それはあんたの猫達を庇護したいという、あんたの意思でしょう? なのにあんたは自分が守りきれなかった時や、自分の目につかないことについては“自然の摂理”と言って逃げる。これって卑怯者よ」

「でも猫達は、幸せだと……」

「あー、だからもうわかんないかなー。猫達がどう思うかは関係ないんだって。いい? 猫には当然今したような話はわかりっこないそりゃ猫にしたら幸せでしょうよ。毎日好きな相手とヤツてうまいもん食つてさ。けどそれが客観的に見て不幸を招くことに猫自身は気付けない。たとえば食べ物にしたって、人間の食べ物を猫の与えればそりゃ猫にとってはご馳走だろうけど、そうした人間の食事が猫にとっては塩分が高すぎてひいては後の病気の種になりかねないことを猫は知らない。いい? これは人間にも言えることだけど、主観的な幸せが客観的な幸せと同じであるとは限らないのよ。そしてその子が出来る限りの客観的な幸せを得られるように導くことが、その子を庇護する立場にある者の責務なの。それは人間でも猫でも同じ。さあもう一度聞くよボケ林。それは猫の幸せ? それもまた、『自然の摂理』という言葉を使えば丸く収められるんでしょうけど、あんたはそれは嫌なんでしょう? どこか自分の知らないところで猫が死ぬのは知らんぷり。だけど目の届く範囲では猫が死んだり苦しんだりするのは嫌。そういう浅ーい猫好きなんだからさ、所詮あんたは」

「でも、いや、違う……違うんだよ! ぼくが猫を好きなこの気持ちには本物なんだ」

「何が本物だっつーの。これも人間と一緒に話だけど、独りよがり
に愛情を注ぐのは好きって言わねーの。本当に相手のことを好きと
いうのなら、自分の満足より先に相手のことを知り、相手のことを
想い、相手のために自らを犠牲にして行動するの。それが『好き』
ってことなのよ」

わたしは言いながらちよつと自分の耳に痛い。

わたしはどうなのだろうか？ わたしはどれだけ勝虎のことを知
っていて、勝虎のことを想っていて、勝虎のために自らを犠牲にし
ることができるのだろうか。

そう思うけど、今はとりあえず忘れる。目の前のことに集中する。
この問題はそのうち答えが出るだろう。……多分。

「ポケ林。あんたどれだけ猫のことを知ってるのさ？ どういう習
性を持つ生き物で、どんな食べ物を与えるべきで、どういうしつけ
をすべきなのか。ちゃんとわかってんの？ そういう基本的なこと
すら知らずに気持ちがわかるとかほざいて好き好き言ってるだけじ
ゃ、口ばっかしのガキと思われても仕方ないんじゃないの」

「ああ。ああ、そうさ。あんたの言うことはきつと正しいんだと思
う。だけどこれだけはわかってほしいんだ。これぐらいは反論させ
てほしい。ぼくは猫が好きなんだ。確かに知識としての勉強不足は
あるかもしれない。思慮が足りないところだつてあるんだろう。で
も好きなのは本当なんだ。それを知識として不十分だからそれは好
きということではないと、他人の尺度で決めてほしくだけはないん
だ。さつきあんた例え話で言つたらう？ 『動物園で動物を見て子
供が口にする次元の低い好き』ってさ。それは確かに次元が低いの
かもしれない。だけど、それだつて『好き』の一つであることは変
わりないだろう？ 好きであるなら知ってるはずだつていうのは、
一つの客観的な期待でしかないじゃないか。だから、その期待を裏
切られたからつて感情そのものを否定してしまうというのは、少し
穿っているというか、それこそ一人よがりなんじゃないだろうか。
例えば音楽だ。人は曲名も、作曲者も演奏者も何一つ情報を知るこ

となく音楽そのものだけを聴くことによってその曲を好きになることができる。感動することが出来る。その感動すらも、『知らない』という理由から否定されてしまうのかい？ 違うだろう？ 心と頭は別のものなんだ。ぼくの猫好きもそうなんだ。ぼくはある日突然猫の気持ちが変わるようになった。猫達にも、言葉はなくとも感情や、考えるところがあることを知り、またぼくの考えも伝えることが出来るようになったら、それまでどこにでもいるただの動物だった猫が、なんとも言えない愛おしく、素晴らしい存在に思えてきたんだ。動物と人間の間には優劣なんてない。すべての生き物は等しく価値を持つ宝石のように輝かしいものに見えてきた。そしてらね、どうしたことかなぜかそう思ったはずなのに、命は等価値だという真理のようなものに気付いたはずなのに、猫に比べて人間という生き物がひどく下劣な存在に思えてきたんだ。だってそうだろう？

猫達は、誰も人間を自分達より格下の生き物なんて見ていない。しかし人間ときたらどうだ。ほとんどの奴が内心、いやおおっぴらに猫は人間より格下だと思ってるやがる。猫に対してだけじゃない。人間って奴はいつのまにか自分達が地球の支配者だと勘違いしているような馬鹿ばかりだ。そうじゃない。あくまで人間もどこまでいっても動物なんだ。食べ物を食べ、水を飲み空気を吸わなきゃ生きていけないんだ。人間と地球の関係は共生なんだよ。そしてそれは動物と他の動物間でも変わらない。けどほとんど多くの馬鹿共はそんな当たり前なのに気付いていない。そういう世界の有様にぼくは猫の気持ちが変わるという能力を身につけることによって気付いてしまった。……そしてそれに気付いた人間は、ぼくの周りではぼくしかいなかったんだ。だったらぼくが黙っているわけにはいかないじゃないか。ぼくだけでも抵抗してやるしかないじゃないか。……ぼくの言ってること、わかるかな？」

樹林は訴えかけるようにわたしを見上げた。自分もまた、“本気”であるんだということをわかってくれるようにと懇願するようにこの男も真剣なのだ。ただその真剣の矛先が、どっかずれた所に

向いてしまっているだけで。わたしは、なんとなくそれに気付く。千恵が、いい人だと言ったことにも少しだけ納得する。わたしは応えた。

「それが苦し紛れのかっこつけでないのなら」

「そうか。ありがとう」

樹林は言った。

「ぼくはどうすればいいのかな……」

「とりあえず、五三匹だっけ？ その数を一人で育てようってのが無理なのよ」

「だけど、処分だけは」

「バーカ。飼えない」殺すみたいな発想が短絡的なだよ。てかこの天狗のコスプレじじは、一言も処分なんて言っていないじゃない。ちよつと被害妄想入ってるのよあんたは。もちろん殺処分は実際に行われていているわけだけど、それは役所にしたって最後の手段であることに変わりないはずよ。だから、まず飼い主募集とかあんたが自主的に始めて猫の里親探すのが先でしょうが」

「飼い主募集……？」

「そうよ。近所を回ってみるとか、チラシを作って貼るとか、サイトをつくってのせるとか、いくらでも方法はあるでしょう。時間はかかってもいい。まずは行動を起こさないよ。そうやってへこんでいるだけじゃ、本当に猫の未来は保健所しかなくなるわよ」

「そうか。でも……手放すしかないのかなあ」

「だから、一人で全部の面倒を見られるなら何も問題はないし、誰も文句は言わないんだって。だけど現実にはそれは不可能。つか実際に来てないんだから、可能なことをするしかないでしょう」

「そうか」

猫が鳴いた。

樹林と一緒にうちから出てきた猫だった。地べたにうずくまる樹林に寄り添っていく。するとまるでそれが合図であったかのように

他の四匹の猫も鳴き出して、樹林の周り囲むのだった。

「みんな……」

不思議な光景だった。まるで猫達が落ち込んだ様子の樹林を慰めているかのようだった。

「ありがとう」

樹林が言う。まさか本当に猫達の意思の疎通を行っているというのだろうか。んなアホな。

しかし次の瞬間だった。樹林が何かを決意したように腹をさすりながら立ち上がると、家の開いている窓から、屋根の上から、周りの林から、合計十匹以上の猫がぞろぞろと現れ始めたのだった。

「これからみんなと話し合ってきます」

樹林が言った。

「確かに今のまま意地を張っていたら、結果的に猫達を苦しめる結果になりかねませんし……。それに猫達の中には、絶対にここを離れられないような子達もいますんで。天狗のじいさん」

「ほ？」

樹林はすつと背筋を伸ばす天狗に向けて深くお辞儀をした。その様子はさつきまで大きな子供みたいにアホな駄々をこねていた姿とはまるで別人のようだった。

「今まで迷惑をかけました。猫の問題、なんとか解決するように努力してみます」

「おお！ そりゃ本当かいな！ いやはやそいつは良かったわ。うんうん」

「それと、相田鰐子……さん？」

「何よ？」

「パンチ、効きましたよ」

樹林はわき腹をさすって言った。

「わかつてくれたならそれでいいよ」

「もちろん物理的な意味ですけど」

「うおい！？」

「でも本当に効いたのはその後の言葉です。……ありがとうございます
ました。とりあえず、この家から猫には出ていってもらいました」
「え、ほんとに?」

わたしはぎよつとして周りを見渡す。確かに今さっき辺りから多
くの猫が出てきてそれが今は樹林の周りに集まっではいるが。

「言っただでしょう。ぼくはねこ意思の疎通が出来るんです。やつ
ぱり信じてませぬね」

「え、いや、それはー。あはは」

マジで? いやまさか本当にそんなことあるわけないしうーんと
か考えていると、樹林が小太り中年のくせにさわやかな笑顔を浮か
べ、言った。

「これからはご近所さんになるんですね。初日からちよつとなんで
したが……どうかこれからもよろしくお願いします。それじゃ」

そして樹林はわたしの返事を待たず、少し寂しそうにとほとほと
坂道へと歩みを進めていった。その後をまるで示し合わせたかのよ
うに猫達が行列を作って追っていく。千恵が無意味に「にゃ〜」と
叫びを上げる。

多くの猫を無言で従えているかのようなその様は、まさしく「ね
こ大王」という渾名がふさわしい。わたしはその瞬間そんなことを
思った。

と、いうことにしといてやるか。

「ボケ林」

わたしは叫んだ。

樹林が振り返る。

「わたしも猫好きなんだ。一段落ついたらさ、一匹、引き取りに行
っていいかな」

わたしが言い、樹林が応える。

「喜んで」

こうして、

樹林信二　ねこ大王はその日、わたしの前から退場していった。

「で」

「あ？」

「鰐子さんはいったい何者なんですかいな？」

樹林が去ると、若干ビビりごしに天狗が訪ねてきた。

「はあ？ 何者ってどういう意味よ？ わたしはわたしだけど？」

「あ、いや、つまりですなー」

妙に天狗はオドオドして、わたしはなんかそれを見てムカついてくる。

「テメーだから何を言いた」

と、そこでわたしはやつと自分がスイッチ入れたままだったことに気付く。いかん。テンションを元に戻さねば。円満なご近所関係を築くというのも、主婦の仕事の一つのはずだ。多分。

よし、スイッチ切るぞ。切るぞ。

えい。パチ（心象風景）。で、現実には外していた眼鏡をかけなおす。

よし、これで大丈夫なはずだ。

「あ、えーと、すみません。なんか偉そうな口聞いてしまって、て言うか失礼なこと言ってしまったって、すみませんでした」

わたしはぺこぺこ必死に天狗に頭を下げる。天狗に頭に下げつつというシチュエーションに微妙に腹が立ってきてまたブチ切れそうになるけど、がんばって我慢。

「いやいや頭上げてくださいな。わし、そういうことは別に構わんですわ。しかしですな、それはさておき鰐子さんの変わりようには驚きましたわ。えーと、どっちが素なんですかいの？」

「鰐子ねーちゃんチョー恐かったー」

なぜか千恵はケラケラと笑う。

「はあ、どっちが素と言われてましても」

どっちもわたし。人間の人格は複雑で、性格なんて簡単な言葉で表現することはできない。

「あ、もしかしてパターンの眼鏡脱着で人格が変わる二重人格とかですかいの？」

「ああ？」

「ひよ、すみません！」

「あ、ああ！ す、すみませんこっちこそ」

やべえやべえ。まだ調子がまいち戻ってない。キレたのも久々だしなー。

「それは関係ないですよ。ただ眼鏡かけたままだと、ケンカになった時にレンズが割れて危ないというだけで」

「ケンカ？」

「あ」

しまった。墓穴掘った。

「あー、えつとじゃあ白状しますけど、わたし自分で言うのもなんですけど、昔ちよっだけ荒れてる時期があつてですね。まあそれで少なからず殴り合いのケンカとかも経験があるというか……。昔ですよ？ 昔の話ですよ！ 今はこの通り平平凡凡なかよわい女性なわけで」

「あ、なーるほど。スケバン言うやつですかー」

「あはは。今どきスケバンなんて言いませんよ。それにどっちかって言うとわたしはレディースみたいなの」

「レディース？」

げ。またやつちまった。

「じいちゃん、れでいーすって何ー？」

「そりやまあ、……千恵ちゃんにはちよつと早いかのー」

「いやそのレディースって言ってもそんな大したことないですよ！ わたしが頭張ってた族なんて所詮ちつちゃんもんで」

「頭張ってた？」

ああー！ わたしの馬鹿！

「だ、だからその、いやでも、わたしのとこなんて本当に小さなおでしたよ。本当にもう地元だけ、狭い地域での少数グループで。」

あははは」

嘘は言っていない。わたしが率いてた族「アスタロト 猗朱墮露斗」はわずか十名強の少数精鋭でわたしの地元である関東全域という日本国土的に狭い地域しか掌握してない族だった。ああ、「鰐さんが辞めさえしなければ、全国だって取れますよ！」とわたしが引退を告げた時訴えかけた当時ナンバー2の莉子は今頃どうしているだろう。いつまでもウジウジと女々しく付きまといてくるもんだから二度と追ってこれないように両足の骨を叩き折ってやってけど、もうその傷は完治しているだろうか。懐かしいなあ。わたしの人生の汚点な青春。

「ま、こうな話はもうええですな」

と、わたしがちょっと過去を懐かしがっていると、唐突に天狗がそう言った。わたしはその一言でぎょつとして現実に引き戻され、同時にとりあえず危機が去ったと安堵する一方、どこか腑に落ちない気分になった。なんとなくだが、わたしはこの天狗にもっと嗜好きの、軽い人物であるような印象を受けていたのだ。それ故、天狗がこうもあっさりとして、しかも中途半端なところでわたしの過去への詮索をひっこめるとは思っていなかった。

「誰にだって秘密にしたいこと、ほんでもって秘密になつとった方がええことつちゅーののーつや二つありますからな」

どこか物憂げに天狗がそんなことを言う。お面つけてるから本当のところはわかんないけど。

「ちなみにそのこと、勝虎君は知ってるんですかいな？」

「勝虎にバラしたら殺します」

「千恵ちゃん、今お姉ちゃんから聞いたことは絶対に人に話しちゃあかんで」

「れでいーすも？」

「ほづや。れでいーすもじゃ。わし、命惜しいわ」

「理解してもらえて何よりです」

わたしは笑顔で言う。

「ほんじゃ、まー、どうしますかいの。勝虎君どこ言つとるか、知

らんが、戻ってくるまでの間荷物卸しときますか？ わし、手伝いますけん」

「え、うーん」

わたしは少し考える。それで言う。

「ううん。いいです。勝虎が戻ってきてから、二人で始めます」

「ほうですか？ でもええんですかいの？ 時間、遅うなつてしましますけん」

「いいんです」

わたしは見上げる。

古ぼけた家。木の匂いが臭そうな家。その上に猫の匂いまでついてそうな家。めちやめちや利便性にかけてそうな家。夏は暑く、冬は寒そうな家。大地震がきたら一発で潰れてしまいそうな家。最悪の家。最低の家。でも、

「わたしと勝虎の新居ですから」

これから二人で、忘れられない素敵な思い出を一つ一つ詰めていくための家。

「だから最初は、勝虎と一緒に、二人でその扉を開きたいんです」
いつかきつと、最高の家へと変わる家。

と、

「わかったー！」

わたしの感傷を無残に千恵のアホ声が袈裟斬りな感じにする。

「わかつたつて、何がわかつたんじや千恵ちゃん？」

「だからー、つまりお姉ちゃんは、勝虎兄ちゃんに『猫を被ってる』つてことでしょー？ ねこ大王だけに。にゃはははははは」

「あ、なーるほど。千恵ちゃんうまいのー。だははははは」

「あははははははは」

うまくねえよ。

第二話 ぬらりひょんガール(前編)

1

いきなりだけど前回の補足から。

あの後ねこ大王こと樹林信二はわたしに言われたことをじっくりと考えたんだか猫達と相談でもしたんだか、まあ知らないけど、とにかく心を入れ替えて猫の里親探しに精を出し始めた。自分の足を使つてやチラシ配りなどはもちろん、何気に凄かったのはネットを使った里親探しだった。と言うのも、樹林の謎に包まれていた(?)職業の正体とは、その筋では有名なフリーのCGデザイナーであり、元々彼はパソコンには強い人間であつたらしい。樹林はすぐさまネットに猫の飼い主募集のサイトを立ち上げると、それだけにとどまらずその活動の手を急速に広め、あつと言う間に猫の飼い主を募集する人間と、猫を飼いたい人間が集う一大コミュニティをネット上に作り上げてしまった。そんなわけでここ一カ月弱の間にも樹林の元に猫を飼いたいという要望のメールが大量に送られてきた。樹林はそのメールすべてにしっかりと目を通し、これはと思う人には、日本全国津々浦々例えそれがどこであろうと直接会いに行つて、その上で安心して猫を任せられると判断した者にのみ猫を預けていった。

その結果として、四月の下旬に入る頃には、当初四三匹いた樹林の猫は九匹にまで減つていた。その九匹は、樹林曰く先祖代々の土地で生きてきた猫であり、住みなれた土地を離れることなど出来ないという樹林に訴えかけていた九匹なのだそうだ(ほんとかよ)。とにかくそんなわけで、樹林の猫の里親探しはひとまずは一段落つくこととなった。しかし樹林はそれ以降も本職の傍ら、全国の恵まれない猫達を救済するという目的のボランティア活動を展開し続けていく。やがて樹林は、日本全国の迷える猫を救済する、猫達の救い

の神として、世界中の愛猫家達から尊敬の念を集める『真・ねこ大王』となるのだが、それはまた別の話である。……その話を語るところは永遠にないけどさ。

それはさておき、わたしと勝虎も、その過程で樹林から二匹の猫を譲り受けることになった。最初一匹だけもらいうけるつもりだったのが二匹になったのは、早い話わたしが気に入った、以前家の前にもいた白猫に、同じくあの日あの場所にいた黒猫がひどくなついでいて、一匹だけを連れていこうとしてもこでも動かなかつたらだ。樹林によると二匹は姉妹の猫で、白猫の方が姉、黒猫が妹であるらしかった。そんなわけで、さてこれはどうしたもんかと唸っているところ、勝虎がじゃあ二匹ともうちで飼おうよと能天気なことを言ったので、結果わたし達はこの姉妹猫を二匹そろって譲り受けることとなる。ふざけやがってバカツトラ。誰が世話することになると思ってたっつーの。

さて、二匹の名前だがこれはそれぞれ白い方が「タイガー」、黒い方が「クロコ」という名前になった。名付け親は勝虎。言うまでもなくひどいセンスだ。黒猫がクロコなのは黒いから？　そうわたしは訊くと、

「え、違うよ。『クロコ』は『クロコダイル』の略、つまり鰐子。ちなみに『タイガー』は俺ね」

あー、なるほど。

アホか！

わたしにケンカ売ってるのしか思えん。いつか反省させてやる、バカツトラめ。

何はともあれ時間が経つのは早いもので、あのしつちやかめつちやかな引つ越し初日からもう一カ月が経過しようとしていた。当初、不便で仕方なくて最悪だと思われた田舎暮らしも、実際初めてみれば案外快適なもので　もなくなてやつぱり毎日が不便で仕方なくて最悪だったため日に日にわたしの中で勝虎への殺意が高まってきたのだけれど、とりあえず今はまだ勝虎は亡きものにしつつ、自分

は犯人として疑われすらしないう完全犯罪計画が浮かばないので実行は自重しておく。そう思うけど、毎晩仕事で疲れているはずなのに、無駄に元気で優しく、バカみたいな勝虎の姿を見て、まあ、殺すのはさすがに勘弁してやるかとわたしは思う。

これって幸せってことなのかしらん？

わたしが「ねこ大王」に続く新たな刺客、「ぬらりひよんガール」に出会ったのは、そんな他人から見れば幸せ絶頂っぽい日々を送る同棲だか事実婚だかの生活一ヶ月目あたりの昼間のことだった。こういう事態に直面した時、“当たり前”ってことはいつだってんなことなんだろうというのは常々考える。でもいくら考えても結局わたしの答えはいつも同じで、“当たり前”ってというのは当たり前常に身の回りにあることではなく、当たり前前にそれはしなきゃいけないってことなのだ。

いや、てか何か言葉の意味を説明するのにその言葉自体を説明の中で使っちゃ駄目じゃん。わたしもバカだね、まったく。

2

わたしの大学時代の友人に桜木奈津美という女の子がいる。彼女の境遇はちよっとわたしと似ていて　と言っても奈津美も元レディースだったとか似ているのはそっちじゃなくて　奈津美は大学二年生の時に当時付き合っていた男と結婚して大学を辞めて専業主婦として現在生活しているという、そういう点での話である。異なる点は奈津美の場合、結婚が出来ちゃった婚であったということ。そのため奈津美は一昨年十一月に元気な男児を出産して、今は一時の母だった。

ある月曜日の朝、なんの脈絡もなくその奈津美からわたしに電話がかかってくる。奈津美と話すのは彼女が大学を辞める時以来だったから実におよそ二年ぶりだ。で、内容はというと、一言で言えば家庭の悩み。いったいどこで情報を仕入れたのか、奈津美は今の自

分の境遇に最も近い友人はわたしであろうと当てをつけて迷惑極まらないことにわたしに相談、つーか愚痴るために電話したらしかった。

奈津美は何やらかなり思いつめたような様子で、子供が何を考えているかがわからない夫は全然育児に協力してくれないそもそもある人は本当にわたしを愛しているんだろうか子供がもうかわいいと思えないなどなどはつきり言ってグチグチとウザい話を一方的に聞かせてきた。わたしはそれをあくびしながら「ああ」とか「うん」とか「そうだねー」とか適当極まりない相槌を打ちながら右から左に聞き流していたのだけれど、そのうち奈津美が、

「もういや」

「死にたい」

「死ぬ」

「決めた。子供を殺して私も死ぬ」

とか流石に聞き流せないことを言い出し始めたので、おいおいちよつと待てよという感じでわたしも見て見ぬふりができなくなる。

それで、仕方がないからわたしは奈津美の家まで行って真面目に話を聞いてやることにする。これで奈津美が死んだら、なんかわたしのせいみたいじゃん。

で、行って帰って夕方。

わたしは先陣岬町行きの方があるバス亭に向かって句林駅前のアーケード街をぼんやりと歩きながら今日の顛末を思い返していた。

わたしが奈津美の住むアパートについて中を覗いた時、奈津美はどこか虚ろな目をしてベビーベッドの横に座り、枕を寝ている赤ちゃんの顔の前に掲げながらぼうつとしていた。

うわやべーってわたしは思いつさに奈津美をはたき倒す。それでもってそのあとはまた奈津美のうじうじ喋りが二時間くらい続いて、で、とうとうわたしはキレた。

「そんなに死にてえんだったらわたしがテメーらまとめてブチ殺してやるよ！　まずはこの小便臭えクソガキからだ！」

わたしはそんなことを口走っていたっぽい。

自分で思い出してみてドン引きですわこれ。

鬼畜だ鬼畜。何気に自分がこんな一言を発したことが一番ショックだ。

しかしまあ当然と言えば当然だけど、わたしは結局奈津美達を殺すことはなかった。ブチ切れモードのわたしが赤ちゃんの首を（マジで）絞めようと手を伸ばした瞬間、泣きながらその前に立ち塞がったのは他でもない奈津美だったのだ。さっきまでこの子を殺してわたしも死ぬとか叫んでいた女が、その時はたとえ自分が殺されても子供は守ると言った様子で、鬼気迫る表情をしてわたしの前に両手を広げて立っていたのだ。

こりゃ勝てないなーと思った。

仲間が病院送りにされた報復に一人で 組に乗り込んだ時も、関東最大の族の総長とタイマン張った時もわたしは自分が負けるなんて頭にそんな考えがよぎりすらなかったのに、目の前にいるどこにでもいる女にわたしは勝てないと本気で思ったのだ。

もちろん物理的には奈津美と赤ちゃんを殺すことなんてわけない。片手一本でくるりんぱ。けど問題はその後で、万が一今二人を殺したら、わたしは残りの人生一生後悔の念と罪の意識を抱えて生きるであろうことが目に見えたのだ。一応誤解なきよう断っておくが、わたしはこれまでの人生で、人を殺すことだけはなんとかうまく避けてこられた。けれど、ケンカの際は毎回相手を殺すつもりでやってたし、仮に殺してもそれはそれで構わないというぐらいの気概を持ってやっていった。だからさういう、きつと後悔するだろうなんて思ったのは初めてで、そうわたしに思わせた時点でこの勝負は奈津美の勝ちだったのだ。わたしは負けたのだ、ただの平凡な若い母親に。

ついでにわたしは悟った。

奈津美は別に本気で赤ちゃんや自分を殺したいなんて思ってたのだから。奈津美は本気で子供も夫も愛していたけれど、疲れがた

たつてその自分の感情にちよつと自信が持てなくなっていただけなのだ。だから彼女は、誰かに自分の気持ちがあるものと、認めてほしかった。それで自信を取り戻したくて。だから泣いていたのも、子供を殺すと言つたのも結局は逆説的な意味での彼女なりのアピールであり、奈津美がここで口にするのは、真の意味はすべて言葉通りの意味の逆だったわけだ。「子供が可愛くない」は「子供が可愛くて仕方がない」であり、「夫や子供を愛せない」は「夫や子供を愛している」であり、「子供を殺したい」は「子供を護りたい」で、そして「死にたい」は「生きたい」なのだ。わたしがここですべきことは、奈津美の言葉一つ一つに、嘘っぱちでもなんでもいいから、優しく「そんなことないよ」と言つてあげることだったのだ。

それでわたしはその後しばらくそれを実践してみる。
するとわたしの考えは正しかったようで、そんなこんなで事はすぐさまぐるつとまゝるく収まつていく。

わたしはちよつと奈津美が羨ましくなる。学生時代のわたしが奈津美に持っていた印象はちやらくて頭の悪そうなバカ女だった。それが好きな人を見つけて、その人との間に子供を授かっただけで、あんなに強い女になった。変わった。あんなバカ女でも子供のためを命を懸けた。母親は子供のためなら強く優しくなれるのだろうか？

わたしも子供が出来たらちよつと変わるのかな？
考えるけど、考えてたらそんなこといくら考えてもこの場では答えは出ないのだという本題とは関係ないことに気付く。もし子供が産まれることでわたしが変わるとしたら、子供が産まれたその時には既にわたしは今のわたしとは違うわたしになっているわけで、そのため今ここでわたしが疑問に思ったことを子供のいるわたしが疑問に思うとは限らないのだ。そうであるなら今ここでいくらわたしがあれこれ考えたところで、それは未来に反映されず結局意味がない。

じゃあ考えるのなんてやめちゃおうか、とも思うのだけど、やっ

ぱりわたしは考える。考えようと思って考えることと、無意識のうち
ちに考えだしてしまう問題というのは、本質的に違うもので、わた
しにとって奈津美の件を発端に浮かびだした疑問はつまるところ後
者だったからだ。だからわたしは考える。

「ねえ、どう？ 奢るからさ」

すると、柄にもなく哲学モードだったわたしの耳に、ふとそんな
間抜け声が飛び込んできた。

ちらと声に反応して横を見やると、潰れたのか閉店したのか、シ
ヤッターの下りたお店の前にパンツ丸見えで一人の少女が体育座り
をしてケータイをいじっており、その周りに三人のヒップホップな
フアッションをした男が群がっていた。

「君一人っしょ？ 俺らも暇だからさ。カラオケとかどーよ？」

男の一人が言うが、少女は無視する。

「おい、つれねーな。シカトっすかー？」

別の男がしゃがみ込み、無理やり少女の顔を覗きこむようにして
続いたが、少女はやはり平然と無視してケータイを操作していた。
案外肝が座っていると思う。

しかしそこでまあわたしには関係ないかと思ひ至る。ぼんやりし
ていたところに不意打ち気味に、夕暮れ時の喧噪の中、男達の声が
聞こえて立ち止まってしまったが、別に特別わたしの興味を引くよ
うな会話でもない。どこにでもある、バカな男がバカな女をナンパ
しているという、それだけのことだ。

そう思い歩みを再開した。が

「もしもーし。聞いてんのー？」

「いいよ」

「あ？」

「だから、いいよ。付き合っただけ、カラオケ」

「マジで？ やったね。そんじやさ」

「そのかわりさ。お金ちょうだい」

「は？ 金なら奢るよ」

「そうじゃなくてさ。それプラスちょうだい。一人一万でいいよ」「は？」

「そうしたらカラオケだけじゃなくてもっと楽しいことまでさせてあげる」

わたしは足を止める。振り返る。

三人の男は耳を疑うようにそれぞれの顔を見合わせていた。

少女は薄い笑顔を浮かべたままその三つの間抜け面を値踏みするかのように見上げていた。こうして見ると、少女はずいぶん整った顔立ちをして器量がよかった。一言で言えば、美少女だった。

「それ、マジで言ってる？」

「大マジ」

「もっと安くなんねーの？」

一人が冗談めかして言った。すると、

「手持ちがなければ五千円でもいいよ」

少女は平然とそう応えた。

男達の顔色がにわかにな変わった。

わたしは わたしはそれを見てなんとなく一つため息を吐く。

面倒臭そうだ。わたしには関係ない。合意の上ならなんだったいいじゃん。

とつさに浮かんだそれらの考えはすべて正しい。

でも見てしまったのだ。その時点で、わたしにもこの後三人の男達と少女の間で起こり得る出来ごとにくらかの責任が発生することになる。そうである以上、面倒臭くても黙って見過ごすことは出来ない。

「おーし、いいぜ」

「ほんと？」

「おう、そんじゃ」

「ねえ、あなた達」

ぼんと中心にいる帽子の男の肩をたたく。それで三人が振り返ると、わたしは笑顔で言った。

「おもしろそうな話してるね」

三人の男、それと少女はそろってきよとんとした表情を浮かべた。
「遊ぶならわたしと遊ばない？」

「はあ？」

「わたしならただでいいよ」

「……はあ？」

その時の男達の顔はなかなかに見ものだった。聞かれたくないことを聞かれたというちょっとした後ろめたさと、これからの展開に対する期待の入り混じったなんとも言えない表情。

要するにバカ面。

ふふふ。どうだ。わたしだって普段あんまり派手めな格好をしな
いからぱっとしないかもしれないけど、自分で言うのもなんだが顔
もスタイルもなかなかの美人さんなのだぞ。……まあ年齢的に美少
女ではないかもしれないけどさ。

わたしは作戦を続ける。

「実はー、わたしこう見えて人妻なの」

「え、ひ、人妻」

向かって左、ボウズの男の食いつきがやたらいい。そういう趣味
なのかしらん？ まあ嘘はついてない。いや嘘かな。どっちでもい
いか。

「そう。でも最近旦那が仕事が忙しくて相手してくれなくてー」

これは本当。

「たまつちやってるの」

これは嘘。

「だからただでいいわよ」

上目づかい眼鏡っ子胸キュンアターック！

男達の様子が明らかに変わった。ボウズの男に関してはゴクリと
生唾まで飲んでる。

いやー、大成功。四年前人生初の合コン用に開発した必殺技がまさ
かこんなところで役立つとは（結局その合コンでは正面に座った男

があまりに馴れ馴れしい、つーか下心見え見えなことにはわたしがキ
して暴れてこの必殺技を使うことはなかったのだけれど。

「よ、よーしそれじゃ行こうか」

「ほんとに？ やったー」

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

と、立ちあがったのは少女だった。

「私はどうなるのよ!？」

「え、キミー？ だってさ、キミはお金取るんでしょ？」

「それとも君もただにしてくれるの？」

向かって右側、金髪の男が下卑た笑みを薄く浮かべながら言う。

その瞬間少女がかすかながら、軽蔑するような視線を男達とわた
しに向けた ように思えた。

「まあまあ」

わたしは男と少女の間に割り込む。そして少女に近づき、その耳
元に小声でささやいた。

「くだらねー火遊びしてねーで、とつとママのところに帰んな」

少女の眉が訝しげに吊りあがる。わたしは少女から顔を離すと、

につこりと笑顔を浮かべ、こう念を押した。

「ね？」

少女は何も言葉を返さなかった。ただこちらの真意を図りかねる
といった様子で疑問の表情を浮かべていた。でもそれでいい。この
まま少女と三バカを切り離せばそれで作戦は成功だ。

「それじゃ、行きましょ」

「おーし、そうすつか」

「ごめんね、彼女」

金髪の男が少女に言う。彼女は応えない。

「まずどこから行く？」

「カラオケ行くつもりだったんでしょ？ まずはそうしましょ？」

「んじゃカラオケ行こうか？」

わたしはバカの知能レベルに合わせてアホな女を演じながら、男

共を引き連れて歩み出す。
ちらと後ろを確認すると、わたしが目を離したわずかな間に、少女の姿はシャッターの前から消えていた。イリユージョン？

3

「じゃ、わたし帰るから」
「……は？」

しばらくバカ共とカラオケ店を探すふりをしながら、その辺を歩き、ちようど人通りが少ない裏道に入ったところでわたしは告げた。
「何それ？ どういう意味？」

「あれ？ あんた達日本語わかんない？ そのままの意味よ。まあ仕方ないか。あんたら頭悪そうだしね。せいぜい勉強しなね。そんなじゃ」

「いやいや、ちょっと待てよ」
「あん？」

「なんだよそれ。どーいうこったよ。ふざけてんのか？」

「ふざける？ 違うわよ。ただ嘘ついただけ」

「嘘お？」

「そ。嘘。そりゃそうでしょ。いったいどこの世界の女があんたらみたいな頭も素行も性格もこの先の人生の展望もみんな悪そうな社会の屑とやりたいと思う？ マジ勘弁してよ。バカが移ったらどうしてくれんのよ。少し考えりゃ猿でもわかるでしょ、そんなの。あ、そうか。あんたら脳味噌猿以下っぽいもんね。そんなじゃ気付けなくても仕方ないか。ごめんね、じゃあちゃんと説明してあげる。さっきわたしはあんたらに嘘ついたの。わかった？ わかったわよね。そんなじゃあね」

言ってわたしはさっさとアホ面に背を向けてその場から立ち去ろうとする。すると、

「おい、待てよこのアマア！」

罵声と共にわたしの肩が後ろからがしりと掴まれた。それで内心わたしはため息をつく。

今日はもう奈津美との一件でいろいろ疲れてるのになあ。でもまあ首を突っ込んだのはわたしの方だし、しょうがないと言えばしょうがないか。

月に代わってお仕置きよ。ヤバイ。年齢ばれる。

わたしを振り向かせるために肩を掴んだ手がぐつと背後に引かれたのがわかった。けれどそれで振り返られてやる義理はない。その代わり右手をぐるりと伸ばし、左肩を掴む男の手を逆に掴み返した。

「痛っ!？」

男が息を飲むのが伝わってくる。

そのまま渾身の力で握りながら、ゆっくりと男達の方へと身体ごと振り返った。

「いった、痛い痛いいたたたたたたたたっ!？」

「汚え、手で、触れんじゃねえよクソガキ。テメーみたいなゴミに触れられてゴミの臭いがついたらどうしてくれんだ? あ?」

「痛い痛えええええあああああああ! 折れる! 折れ、折れる!」

「お、おい」

「近づくな!」

びくりと二人の男が身を震わせた。

「近づくとこいつの腕へし折るぞ。んなこと無理だと思っか? 試してみるか? ちなみにわたしの握力百キロあるからな」

あれ? 百二十キロくらいあったっけ? 一番最近に計ったのが三年前の健康診断だからよく覚えてないや。

二人の男、金髪とボウズはわたしの言葉の真偽を図りかねるかのように顔を見合わせた。しかしその答えは、わたしに腕を掴まれている帽子の男の泣き叫ぶ様を見て、すぐに出たようだった。

「お、お前いつたいなんなんだ?」

金髪の男が言う。

「別に。どこにでもいる通りすがりの若奥様だよ。あ、ちなみに人妻なのは本当な。まあどうでもいいけど」

「やべえって！ マジ折れる折れる！ 痛いいた」
「うるせえ」

のでギヤーギヤー騒ぎながら腕を掴まれてしゃがみ込む男の顔面に膝を突きさす。

ゴツツというような鈍い音と膝頭の感触と共に男の頭が力を失ってがっくりと地面に落ちる。完全に意識が飛んだようだった。わたしはポイとゴミを捨てるように、掴んでいた男の右腕を放り投げる。地面に伏した男の口からは、今のひざ蹴りで口内を切ったのだろう、鮮血がだらだらと流れ出ていた。

「さて、と。これで静かになったな。テメーらはこれからどうしてやるうか」

「ちよ、ちよつと待てよ！」

金髪が顔面蒼白にして叫んだ。それでわたしは気付く。こいつらあれか。見た目と態度だけやんちゃっぽくしてその実ケン力はおるか他人を殴ったこと一つさえない、なんちゃってヤンキー。個人的な感情になるけどわたしはそういう奴が一番嫌いだ。そのせいでわたしはなんだか余計ムカムカしてくる。

「オレ達がいったい何したってんだよ！？」

「わかんねーのか？ じゃあ教えてやるよ。テメーらのやるうとしてたことはな、買春つっー犯罪なんだよ。知らなかったか？ 覚えときな。わたしはただ善良な一市民として目の前で起こりそうだった犯罪を未然に防いでやったただけだ。わかったか？ わかったらとつこのカス引っ張ってわたしの前から消える。んでもってちゃんと学校通って宿題やって歯磨け。おらどうしたゴミ共。さっさと消えろつっつてんだろ。さもねーと」
「ひいっ！？」

ボウズがマヌケな悲鳴と共にいの一番に逃げ去っていく。それを見ておい待てよ、と叫びながら、金髪が慌ててのびたまま帽子の男

をかついで追いかけていった。と言いか逃げていった。まったくやだね。あーいう見かけ倒しは。いわゆる草食系男子ってやつかな（違う）。

とにかくわたしは一応面倒が解決（？）したことに安堵して小さく息をついた。今日はもう疲れた。奈津美のことといい今といい、なかなかハードな一日だったと思う。さつさと帰って寝たい。夕飯作りとかも面倒臭い。そうだ、風邪をひいたことにしよう。そうすれば今日はもう家事をしなくて済む。勝虎はどうせバカだからおもしろいぐらいに騙されてくれるに違いない。それどころかわたしのことをいたわって、たまってる洗濯物を片づけて、掃除とかまでして、おかゆとか作ってくれるかもしれない。あー、名案だ。旦那がバカだと助かるね。

でもこういうのは考えるだけに留めておこうと思う。わたしは帰ったらちゃんとたまった家事を自分で片付けることにする。洗濯して、掃除して、おかゆ　じゃなくて普通の夕飯を作る。嫌でも面倒でもする。それは仮病を使うのが悪いとか後ろめたいというわけではなくて、ただ選択としてどちらの方が総合的に良いかを判断した時、やっぱりわたしは自分に課せられた仕事はしっかり自分で片付けた方が良くと思うからだ。

わたしは勝虎にあまり心配はかけたくないのだ。

帰ろうと考え振り返りかけた時だった。唐突におざなりな拍手が耳をついてきた。聞こえるのは背後から。だからそのまま振り返るするといつどこから現れたのか、そこにあつたのは先の少女の姿だった。少女はどことなく寂しげなその目を細めて、わたしを見つめていた。

「すごいね、おばさん。何者？」

「誰がおばさんだったの。わたしはまだ二十一だよ」

「あつそ。でも私から見たらおばさんだよ。私、十六歳です」
少女は笑う。いったい何が可笑しいのやら。

と、思ったら急にころりと表情を変えて少女は怒ったようにして

見せた。

「おばさん、どうしてくれるのよ」

「はあ？ 何が？」

「私の収入ふいにしてくれちゃってさ。私今十五円しかお金ないの。マジだよ。せつかく今ので三万円だか一万五千円だか、まあどっちでもいいけど手に入ると思ったのにさ。それだけあればしばらくは生活出来たのに。私、もう丸一日飲まず食わずだよ。あーお腹空いたー、喉乾いたー」

「家に帰ればいいじゃない」

「出来ればそうしてる。出来ないからそうしないの。それくらい察してよね、おばさん」

このガキまたおばさん言いやがって。

まあそれはさておき、要するにこの子は家出少女ということではないのだから。どうにしろ、まだ十六歳の少女があまり危ない火遊びをしているのを黙って見過ごすのも目覚めが悪い。

「家に帰りな」

わたしはまた同じことを言う。

「だから、出来ないんだって」

「家がないの？」

「あるけど」

「ご両親は？」

「母親だけ」

「じゃ、お母さんが心配してるよ。帰んな」

「……世の中には子供を心配しない親もいるんだよ」

ほんの少しだけ、少女の様子が変わったように見えた。

悲しそうで、泣きだしそうな、消え入りそうな瞳。でもそれはすぐに元に戻る。

「ねえ、おばさん。どうしてくれるの。私飢え死にしちゃうー」

その瞬間わたしの脳裏に浮かんだのは泣きじゃくりながらベビーベッドを後ろにしてわたしに立ち塞がる奈津美の姿だった。

『世の中には子供を心配しない親もいるんだよ』

あんな姿を見た後だというのに、その言葉の真偽がわたしにはわからない。いや、見たからこそわからないのか？ あれは奈津美が母親だったからああいう行動を取ったのだろうか。それとも母親云々ではなくあれは奈津美個人の行動としての価値を持つものなんだろうか。どっちだろう。世界中の母親はあまねく今日の奈津美のように勇敢な行動を取るか。

わからない。わたし自身が母親でもないし、もちろん世界中の母親を知ってるわけでもない。

わたしは財布を取り出すと、そこから一万円札を取り出し、それを少女に突き付けた。

「え、マジ？　くれんの？」

「条件つき。もう二度とさっきみたいなアホなことはしないこと。わかった」

「うん。わかったわかった」

即答。チヨー嘘くさい。

「ありがとう。お姉さん大好きー」

とそのまま笑顔で少女は受け取る。文字通り現金な小娘だ。

「その一万円を使い切るまでの間、じっくり自分の身の振り方を考えることね」

それで考えた後、ちゃんと自分の家に帰りなさい。

わたしはそう続けたかったが、それは言えなかった。わたしは少女の事情を何も知らないのだ。あまり無責任なことは言えない。多分だけだ。

「じゃあね」

わたしは立ち去ろうとする。とにかく疲れた。早く帰りたい。

「あ、待って」

「何よ？」

「まだ答えてもらってない。お姉さん何者？」

「通りすがりの若奥様」

思いつきり適当に答えてわたしはさつさとその場を後にする。角を曲がる際、なんの気なしに振り返ってみると、先と同じように少女の姿は消えてなくなっていた。またもイリユージョン。なんだろうか。少し不思議な気分になる。キツネにつままれた気分というやつか。そういえばわたしの方が少女の素性について何も聞いていなかったことに気付く。

まあいいだろう。どうせもう会うこともないはずだ。

それにしてもわたしもずいぶん甘くなったものだ、いろんな意味で。“現役時代”の私だったらムカつくバカ男も生意気な小娘もまとめて半殺しにしてたろうに。まったく大甘だ。栗金団くらい甘いあ、栗金団食べたくなってきたな。ちよっと帰りに駅地下を覗いてみよう。栗金団売ってるかな？

4

今年のゴールデンウィークは三日の金曜日から六日月曜日までの四連休だ。けれどもその四連休というのはカレンダーの日付として四日間赤い数字が連なっているという意味でしかなくて、当然ながら一般の会社の勤め人でその四連休が実際に四連休となっている人は少ない。勝虎もそのご多分にもれず、四日間まるまる休みということとはなかったのだが、嬉しいことに勝虎の場合金曜日こそ休めなかったものの、六日月曜が休みで晴れて土曜からの三連休をもらった形となった。

普通ならそれでじゃあ旅行にでも行くとかいう話になってもいいのだが、わたし達の場合バカの勝虎が買った家のローンの返済があるのであまり贅沢なこととは出来ない。そうして勝虎はこの土日のんびりとわたしと一緒に家で過ごしていたのだけれど、せっかくのゴールデンウィークなのにどこにも外出しないのはもったいないと勝虎が言い出したことで、それじゃ近場でもいいからどこか行くとかときて、結果としてわたし達は月曜日、柏木市まで映画を見に

行くことになった。

別にわたしは見たい映画は特になかったのです。そこは勝虎に任せる。そしたら勝虎は三日に公開になったばかりのサム・ライミの「スパイダーマン」をチョイスする。恋人と二人で見る映画としてはどうなの？ って感じではあるが、ある意味勝虎らしいと言えらしいので文句は言わない。むしろここで勝虎がロマンティックな恋愛物とかを見ようと言い出したらその方が引く。

映画の内容はまあ無難と言えば無難な感じだった。トビー・マグワイア演じるスパイダーマンが飛んで跳ねて闘って、ブツサイクでビッチなヒロインM・Jとのロマンスもある、可も不可もないありきたりなエンターテイメント映画。しかしそんな映画の中で、わたしが一つだけひどく印象に残った個所があった。スパイダーマンことピーター・パーカーの育ての親、ベンおじさんの台詞で映画のキヤッチコピーにもなっている言葉。

「おおいなる力にはおおいなる責任が伴う」
その通りだと思う。いや「その通り」ではないか。少し違う。何も責任がともなうのはおおいなる力だけじゃない。あらゆる行動には責任がついてまわる。わたし達はそれを自覚し、自分の取る行動を真剣に日々選択していかなければならない。それが大人になるということだろう。「スパイダーマン」は単なる娯楽作に過ぎないのかもしれないけれど、無理やりに何かテーマ性を持たせるならそういうことではないだろうか。この映画はそういう当たり前のことをスパイダーマンという誇張されたわかりやすいフィルターを通してことよって観客に訴えかけているのかもしれない。

とか考えてみたけどそんなことはないのかな。まあ本当のところはサム・ライミ監督に聞いてみなきゃわからないけどさ。

とりあえずわたしはそれなりに映画に満足して勝虎と一緒に映画館を出る。すると既に陽は傾きかけていて（出発が遅かったのだ）、このままどこか食べに行こうという話になる。

それでわたし達その足で近くのデパートのレストラン街に向かっ

た。

で、そこを歩いていたらちょっと目を離したすきに勝虎がいなくなつた。

子供かよ！

あーもうどういうこつたよ！？ 今年二十三になる大の男が迷子つて何事ですか？ アホですか？ バカですか？ はいそうでしたねあいつはバカでしたねバカツトラでしたね！ わたしもうどうしようもなく悲しくなってくる。情けなくなってくる。まだ子供もいないのに子守をしてる気分になる。わたしは辺りのお店を一件一件周りながら勝虎の姿を探す。ケータイにかけてみてもバカは出ない。もう仕方がないから本気で迷子センターにでも行ってみようかと考えた時だった。背中から「鰐子ー」という間の抜けまくりのよく知る声が聞こえてきた。

慌てて振り返る。するとまるで何事もなかったように勝虎がにこやかにやってくるではないか。この野郎マジ殺すぞとか思いながらもわたしは満面の作り笑顔（日本語変？）と共に勝虎を迎えようとした。

だがわたしは勝虎にひよこひよこことついて歩く人影を見た瞬間思わずその笑みを引つ込めていた。

「げ」

「あ」

「いやー、鰐子、見つかつてよかったー。いったいどこ行ってたんだよ？」

そりゃこつちの台詞だ！ いやでもとりあえずそんなことより

「え、あー、うん。ごめん。それより勝虎、その子は……」

「あ、この子？」

勝虎は気軽な様子でその少女の肩を叩いた。

「彼女さ、さつきそこでガラの悪い男達に絡まれてたんだ。それでちよつと見捨ててはおけなくてね」

「へえ、そう。そうなの、ふーん」

わたしはじつと、その少女を半眼で見つめる。しかし少女はまるでまずいところを見られたといった様子でわたしと目を合わせようとしなかった。

もうおわかりだろうが、その少女とは先日バカ男共に売春をもちかけていたあの少女だった。

男達に絡まれてた？ 多分違うね。逆だ。こいつが男達に絡んでたんだ。こいつ、全然反省してないくさい。

続けて勝虎が言った言葉にわたしは耳を疑った。

「それでさ、彼女今夜泊まる場所がないって言うからうち泊めてあげようと思うんだけどいいかな」

「……は？」

「駄目かな？」

「いや駄目というか……」

バカですか？

「なんかさ、彼女三日前に親と大喧嘩したとかで、家に帰りづらなんだって。俺も似たような経験があるからその気持ちわかってさ。

だから一日くらい駄目かな？」

「……ふーん。三日前ねえ」

じと目で少女を見つめる。で、少女は目を逸らしたままわたしの方を見ようとしない。そのまま勝虎の袖を引っ張って少女は言った。

「あのー、勝虎さん」

「うん、何？」

「やっぱり泊めてもらうのは悪いから私帰ります」

「え、いいよ。大丈夫だって。なあ鱈子？」

思いつきり勝虎は懇願するようにわたしに視線を送る。このお人良しめ。内心ふざけんなどという思いでいっぱいだけど、わたしはここでどうしても嫌とは言えず、

「うん、そうだね。一日くらいなら」

と笑顔で応えてしまう。

もー、バカツトラのアホ！

しかし本当にムカつくことになるのはこれからだった。わたしのそうした反応を見て、少女の目がキュピーンと妖しく光るのをわたしは見逃さなかった。

次の瞬間、

「本当に！？ わーい！ ありがとう！ 勝虎さん大好き！」

嬌声を上げながら少女が勝虎に抱きつき、あまつさえほっぺにキスマでしくさりやがった。

「わ、ちょ、ちょっと」

と小学生みたいなりアクションを取る勝虎。

少女は抱きついて離れないままわたしにだけわかるような得意げな流し目を送ってきた。

こ……この小娘。わたしが勝虎の前だと本性隠してるのを瞬時に見抜きやがった。やはりこういう勘は女の方が鋭い。

わたしは笑みを引きつらせて、必死に青筋が浮かぶのをこらえるしかなかった。

「か……勝虎。一応公衆の面前だからね。女の子に抱きついたりなんかしっちゃ駄目だよ」

「え、いや、違っつてこれは！ ご、ごめんアカネちゃん。悪いけど離して！」

「ご、ごめんなさい！」

慌てて少女（アカネちゃん？）が勝虎から飛び退く。

「あの、ごめんなさい。勝虎さん。アカネそんなつもりじゃなかったんです。ただ嬉しいと自分を抑えられなくて……。アカネのせいでお姉さんに変な風に思われちゃったみたいで……。本当にごめんなさい！」

そして目を潤ませて涙ながらに言葉を紡いだ。

「っかテメーそれ絶対泣きまねだろ。」

「ただどアホのバカツトラはそんな明らかな泣きまねにもころりと騙される。」

「わっ、違っつて大丈夫だって。俺も鰐子もそんなこと全然気にし

てないから！ だから泣かないで！」

「でも奥さんはきつとアカネのことなんて泊めたくないって思ってるだろうから。やっぱりアカネ帰ります……」

「そーだそーだ。帰れ淫売小娘。」

「大丈夫だよ！ 鱈子、別に気にしてないよな」

「うん。全然気にしてないよ」

わたしは精神エネルギーをフルに使って笑顔を崩さないようにして応える。ヤバい。絶対血圧急上昇してる。血管切れる。

「……本当に？」

「本当だって」

「お姉さんも？」

「本当だよな？ 鱈子」

「……うん。ほんとうだよ」

駄目だ。怒りすぎて気絶しそう。

「嬉しい！」

再び少女が大声で叫び、そして勝虎に抱きついた。今のこともあって今度は勝虎も無下にはアカネをつき離せない。

それがわたしの怒りのボルテージを上げるわけだけど。ついかもう駄目だ。死ぬ。もしわたしがアナログ体温計だったらもうガラス割れてる。水銀故に破裂！（意味不明）。

「本当に嬉しい！ 私他人にこんなに優しくしてもらったこと初めて！ ありがとう勝虎さん！ ありがとうお姉さん！」

あー、駄目だー。マジで目眩がしてきたー。目の前が白んでいくー。吐くわー。吐血するわー。もう勝虎の顔もアカネの表情もよくわからないぴょーん。

「あ、そういえばまだお姉さんには名乗ってなかったね。私柴崎茜っていいです。一晩だけけどよろしくお願いしまーす」

ボタン、という音と共に視界が真っ暗になる。それが自分が倒れた音だと知るのはおよそ一時間後、デパートの救護室で目覚めた後だった。

「起きろメスガキ」

深夜一時。わたしは勝虎との寝室をこっそり抜け出すと、隣の座敷部屋に向かいそこで寝ている少女に告げる。

「起きてるよ」

少女 茜は天井を見上げたままぼんやりと返事した。

「まともな布団で寝るのなんて久しぶりだから逆に眠れない」

そしてのんびりと身体を起こす。茜には寝巻としてわたしが学生時代によく着ていた黒のスウェットを貸してやっている。

「で、なんの用、おばさん？」

「だから誰がおばさんだっつーの」

「そんなこと言ったら私だってメスガキじゃない。て言うかそっちの方がひどくない？」

「うるせーよ。お前なんてメスガキで充分」

「はいはい。てか呼び名なんてどーでもいい。……『茜』っていう自分の名前もあんま好きじゃないしね。それよりおばさん調子は大丈夫？」

「誰のせいだと思ってんのよ、ったく。人間怒りすぎると貧血になるんだね。初めて知った」

「あはは」

茜は屈託なく笑う。その笑顔だけ見るととても売春やらかすような不良少女には見えないのだが。

「で、なんの用？」

ころりと表情が変わって今度は眠そうにあくびをしながら茜は言った。この少女は頻繁にその表情をころころと変える。

わたしは応えた。

「なんの用もクソもないわよ。あんたいったいどういっつもりなのよ？」

「どういつつもりって？」

「そのまんまの意味よ。うちに泊まるうだなんてあんた何考えてんの？」

「それは違うよ。だって私勝虎さんのフィアンセがおばさんだなんて知らなかったんだもん。知ってたら泊まらせてなんて言わないよ」「ってことはやっぱり泊まるのはあんたから言い出したんだね」

「え、あ、うーん。まあそう。勝虎さん人良さそうだったから泊めてくれるかなと思って。そしたら一発OK。あの人本当にお人良しなんだねー」

また茜は笑う。

「それとも私気に入られちゃったのかなー。あはは」

「アホ。勝虎は真正のお人好しなだけ。調子に乗るなよメスガキ」
「調子に乗ってなんかいませーん」

「じゃあなんでうちに泊まるのよ。わたしがいるってわかったのに」
「別に。深い意味とかないよ。ただ単純においしいご飯とあったかい寢床が欲しかっただけ。あ、勝虎さんって料理もうまいんだね。おいしかったよー、勝虎さんの作った肉野菜炒め。私料理出来る男の人ってかっこいいと思うなー」

今日の夕飯は勝虎が作った。いつもなら普通にわたしがつくるのだが、夕方にデパートで倒れたわたしを勝虎が過剰に心配して、台所に立たせてくれなかったのだ。

「んなことはどうでもいいの。わたしが聞きたいのはあんたが何企んでるかってことよ」

「企んでるなんて人聞き悪いなあ。私は本当に泊まりたかっただけ」
「一応先に行っておいてやるけど、あのバカは真面目だけが天が与えた唯一の取りえみたいな男だからね。売春はもちろんわたしという婚約者がいる以上絶対にあんたみたいな小娘の誘いに応じることはないと思いな」

「私、援交なんてしないよ。それに今日は本当に絡まれてたんだって。で、それを勝虎さんが助けてくれたの。て言っかこの前だって

声かけてきたのは向こうの方だよ。おばさんだつて見てたでしょ？
「アホ。適当ぬかすな。『一人ごせんえーん』とか言つてたじゃない」

「私そんな頭悪そうな喋り方してませんー。それにさ、あの時にしたつて言葉通りヤラせる気なんてなかつたもん」

「はん。じゃああの時言つてた楽しいことつて何さ？ スマートボールとか？」

「何？ すまーとぼーるつて？」

「え、い、いや、なんでもないわよ。忘れて」

あれ？ 最近の若い子はスマートボール知らないの？ てかわたしだつて二十一歳のピチピチ乙女なんだけど……。うわ、なんかわたし本当におばさんみたいない気分になつてきた。

「と、とにかくさ、わたしがあの時止めなかつたらあんたどうするつもりだつたの？」

「私お酒強いんだ」

「は？ まだあんた未成年でしょうが」

「意外と固いこと気にするんだね。そういうおばさんだつて二十歳になるまでお酒飲んだことないなんてことはないでしょ？」

「まあ、わたしは小六の時に酒も煙草もやつてたけどさ」

「え、それは引く。早すぎだよ」

「あ、でも煙草はもうとつくにやめてるわよ。中三の時に」

「いやだからそれおかしいつて。普通中三くらいで煙草初めて悪ガキとか呼ばれるのに」

「っさいわね。て言うかわたしのは今はどうでもいいの。あんなの話でしょうが。えーと、そうだ。結局酒が強いからなんなのよ。まさか楽しいことつて酒盛り？」

「違う違う。まあ飲みには持つてくんだけど、その後つぶしちゃうの」

「……あー、なるほどね」

わたしは茜の言わんとしたことを理解する。要するに、茜は男共

を酒で酔わしてつぶれさせて、その後財布の中身でもくすねようという魂胆だったのだろうか。

「でもそれだって犯罪でしょうが。つーかうまくいくもんなの？ そんなの」

「結構成功してるよ。だからわたし食べていけてるんだもん」

「あ、そう。でもそんなこと、一度も失敗しないですつと成功し続けられると思ってるの？ 世の中そんな甘いもんじゃないよ」

「わかってるよ、それくらい」

「じゃあ」

「そしたらきつと、その時があたしの運の尽きつてことで」

茜はまるで他人事みたいに言う。その一瞬。彼女から感情がすつかり抜けおちたみたいで、そんな風に見えた。 気のせいかな？

「……ちなみにうちには取ってお金なんてないからね。どっかのバカがいらんとところに金を使ったせいでうちは毎月カツカツなの」

「いらんところって、風俗とか？」

「殺すよ」

「冗談です」

茜は笑う。そして唐突に言った。

「ここ、いいとこだよね」

「あ？」

「緑がいっぱいで、空気はおいしくて、ここに来る途中の川なんて水がすごく澄んでて透明だった。隣町同士のはずなのに、柏木じやどれも全然ない風景」

わたしは茜が寝ぼけてるのかと思った。急になんとなく様子が変わったからだ。茜はそのどこかさびしそうな瞳を、普段のように隠すこともなく、さびしそうなそのまま言葉を発していた。あるいはそれは、部屋が暗いままだからそうわたしが錯覚しているだけなのかもしれないが。

「この家も素敵。トトロの家みたい。タイガーちゃんもクロコちゃんもかわいい。それで……」

「それで？」

「勝虎さんは優しい。不満なことはおばさんくらいかな」

「殺そうか？」

「あはは」

笑いながら、茜はごろんと布団に寝転がった。そして天井を見上げたまま、ささやくように言った。

「ねえ、おばさん。おばさんなんで勝虎さんの前だと怒らないの？」

「え」

わたしはなぜかドキリとした。別にそのことに自覚がないわけではない。今までわたしの周りの人間がそれに気付かなかったということも多分ない。だけど、こうして面と向かって理由を問われたのは初めてだった。それでわたしはなんと応えるべきかわからなくなる。

「ど、どうでもいいでしょそんなこと。あんたには関係ないでしょうが」

「本性が知られたら勝虎さんに嫌われちゃうかもしれないと思うてるから？」

ドキリ。

「別に……そういうわけじゃ……」

「いつかはばれちゃうよ、そんなの。結婚するんでしょ？ 一生隠し続けることなんてできるわけないじゃん。ばれる日は必ずくる。」

その時おばさんはどうするの？」

ドキリ。

「別に……」

「勝虎さんのこと、好きなんだよね」

ドキリ。

「……」

「だったらちゃんと本当のこと言わなきゃ駄目だよ」

「は？ 何を偉そうに……」

「多分ね、勝虎さんなら本当のことを話してもおばさんのこと嫌い

にならないでくれると思うんだ」

「だからお前は何を偉そうに言ってるんだっつーの」

「……うん、ごめん」

意外と素直に謝って、茜はわたしに背を向けるように寝返りを打った。

わたしは内心ドキドキしながら、その様子を見ている。そのうちもしかして本当に茜はもう寝ているのではないかと疑う。寝ぼけていて、明日にはもうこの会話を綺麗さっぱり忘れていないのではないかと。

そう思っただけなら黙っていたら唐突に、

「私、勝虎さんのこと好き」

と、そんなんでもないことを茜が言いやがる。

わたしは今度は自分の耳を疑った。そうしていたら茜がまた寝返りをうつて今度はわたしの方を向く。そしてその瞳はしっかりと私を見上げていた。

「これ、本当だよ。冗談じゃない。一目惚れ」

ふざけんな！

って叫びたいけど必死にこらえる。隣の部屋では勝虎が寝ているのだ。

「大丈夫。安心して。好きといつても、だからそれでおばさんから勝虎さんを盗ったりしない。盗ろうとする努力もしない。私はそういう下衆な女になりたくない」

「……ちよつと、お前何言ってるんだよ」

「ただ一緒にいたいだけ。それで私は満足。それ以上は何も求めない。一目惚れなんてそんなもんでしょ？」

「だから何言ってるんだよ！」

とつとつわたしは、小さくだが叫び声を上げていた。はつとして思わず背後を振り返る。寝室からなんの音もしない。勝虎が起きた様子はない。それでわたしはひとまずほっとした。

しかし茜の寝ぼけたような言葉はまだ終わっていなかった。

「ねえ、おばさん。わたしもうしばらくここにいていいかなあ」
「はあ？」

わたしは混乱する。茜が何を言っているのか、簡単な単語の羅列のはずなのに理解が追いつかない。

「何馬鹿なこと言ってるんだよ。うちに帰れって」

「帰りたくない」

「あのね」

「帰りたくないの」

言いながら茜は布団を頭まで被る。それでわたしは直感する。

少女はなんか知らないけど泣いているのだ、きつと。

「ここ、わたしにとって天国みたい。ご飯が食べれて、夜は布団で眠れて、周りは自然いっぱい、家は素敵。ゴミゴミした雑踏ももちろんない。何より好きだと思える人がそばにいる」

「だから、家族がいるんでしょうが。親のところに帰れって」

「世の中には子供を心配しない親もいるんだよ」

またこの台詞。

するとわたしは黙るしかなくなる。わたしはまだこの言葉に返すべき答えを見つけていない。

「なんでもするから。言うこときくから。掃除も洗濯も、料理もなんでも手伝う。だからお願い。……お願いします」

ムカついてくる。なんとという身勝手さだろう。なんとというわがままだろう。思いつきり殴りつけてやりたくなくなって拳を握りこむ。

しかしその拳を振りおろす場所が見つからない。

かつて最強だったはずの拳は、奈津美の時といい今といいなんの役にも立たずただわたしの腕の先で所在なさに震えているだけだった。

弱いなあ、わたし。

「……いいよ」

「ほんとに？」

ぱっと茜が布団から顔を出して驚いたようにこちらを見上げた。

わたしの予想に反してその瞳は涙に濡れているということではなかった。もつともそれは、もともと涙など流れていなかったのか、それとも既に止まったあとなのかの判別はつかなかったが。

「ただし、勝虎がいいって言ったらね」

「……うん。わかった。ありがとう。……おやすみなさい」

「……おやすみ」

わたしは応える。茜は目を閉じる。

わたしは馬鹿だ。あのアホのバカツトラのことだ。百パーセント茜の滞在にはOKサインを出すだろう。わたしには聞く前からそんな結果が見えている。

それでもそんなことを言ったというのは、わたし自身の意見として茜の頼みに「いいよ」と応えたも同然だった。

考える。わたしはいつからこんなに甘い人間になったのだろうか。

昔は殴る理由も、殴った後のことも何も考えなかった。ただただムカついた時にムカついた相手を殴っていただけだった。

今ではそれができない。

いや待て。それって本当に甘くなったってことなのだろうか？

もしかしたら弱くなったということではないか。あるいは逆に成長したのだとも考えられる。または単純に体力が落ちた？ 老化現象？ わかんない。誰か教えて。

6

柴崎茜が先陣岬町に馴染むのは、意外なことに、びっくりするほど早かった。相も変わらずわたしのことはおばさん呼ばわりするし、勝虎に対してはゴマをすりまくるけれど、それ以外は非常に大人しくわたしの言うことをなんでも聞いた。買い物で荷物が多くなる時は素直に荷物を持つのを手伝ってくれたし、家事全般、わたしが指示を出さなくても自発的にすることを見つけては率先して動いた。タイガーとクロコがなつくのも早かった。特に、似た者同士故か（

?) 気難しくて怒りっぱくて、わたしにあまりなついていないクロコが、なぜか茜に無防備にお腹を見せてゴロゴロするほどの服従っぷりを見せているのには正直驚かされた(と言うかなんかムカついた)。

更には近所の間でも茜の評判はすこぶる良いのだった。ザ・八方美人の茜は道ですれ違う人とは笑顔で元気に挨拶し、暇を持て余すジジババ共に話しかけられれば、嫌な顔一つせず、「含蓄のある話」という名前の「老人の過去の栄光を誇張して語る懐古主義的な中身の無い自慢話」を黙って聞いてやっていた。そんなわけで茜は、一週間もすると、もう近所の、田中さんや隈本さん、林さんらしいさんばあさん達のアイドルになっていた。さらに評判がいいのはジジババ相手だけにはとどまらなかった。近所の、特にわたしのよく知る人物らにも、茜は澄まし顔で着々と取り入っていった。例えばねこ大王こと樹林信二。樹林は茜と顔を合わせて一時間もせず、あつと言う間に少女に骨抜きにされた。と言っても別にエロい意味ではなくて、茜は誰に対しても素直で 素直を演じていたので樹林の猫の気持ちかわかるとかいふ戯言を疑うような顔一つせずごいねー、とかニコニコ言っていたからだ。誰にでも想像できるように、今までそんな与太話をまったく疑う素振りすら見せずに聞いてくれた人というのはいなかったのだらう。それで嬉しくなっちゃった樹林が、茜ちゃんはなんていい子なんだろうと言いだすのにそう時間はかからなかったというわけだ。

あとあのバカ親子、もちろん天狗と千恵のことだが、この二人は茜をはじめつから百パーセントほがらかに茜を迎え入れた。でもまあこの二人はバカだからしょうがない。ちなみにこれも想像できる範囲だろうが、天狗を初めて見た時の茜の反応はなかなかの見ものだった。明らかに引いているオーラを全身から発していたけれども、そこはある意味わたし以上の猫被り小娘、天狗の「わし、天狗です」というアホトークに、ツッコミ一つ入れずニコニコすることでその場を乗り切っていた。

まあ天狗みたいなのが、どこの次元に行こうが痛い人扱いされるのは言わずもがなであるからそれはさておき、最後、千恵はと言うと、結果的にわたしの周りで最も茜になつた人物となつていた。あのアホ娘は「本当のお姉ちゃんができたみたいー」と周囲に頭悪そうにふかしながら、茜の周りをウザい感じでちよるちよると跳ねまわった。わたしにとって意外だったのは、茜の方がそんな千恵のことを、割と、これは本心からまんざらでもなさそうに扱っていたことだ。茜は誘われれば千恵のくだらない遊びに楽しそうに付き合つてやつていたし、天狗がちょっと山に行くから（何しに行くんだよ）千恵の面倒を見てやつてほしいと頼まれれば、二つ返事で快諾した。そんな感じで茜はよく千恵と遊んでいたから、千恵の友達柏木小学校の子供達にも茜の存在はあつという間に知れ渡つた。それでその子供達が親に「いいお姉さん」として茜のことを話すので、ますます先陣岬町において、茜の評判は上がつていく一方となるのであつた。

二週間も経つたころには、茜の名前はもはやわたしと勝虎以上に町中に知られるようになっていた。むしろわたし達が「茜ちゃん」とこのご夫婦さん「呼ばわりされるようになっていた　て言うかそれってやばくない？　町での地位を乗っ取られるくさいかも？　「だははは。そりやまるでぬらりひょんみたいな話ですわなー」「ぬらりひょん？」

ある日の午後、唐突に家の中の古い箆笥を粗大ゴミとして運び出したいから手伝つてほしいと天狗に呼ばれてわたしは手伝つてやることにする。一応、わたし女ですしもつと力のありそうな男の人とかに頼めばいいじゃないですか、とも言ってみるが、この辺じいっさんばあさんばかりですから、事実として鱧子さんが一番力持ちなんですわー、と笑つて返される。そう言われると、実際それは本ただし、断る理由も見つからなかつたので頷くしかない。つーかそれにしたつてわたしに頼むかなー、とも思ひはするのだが。

面倒だったのでさっさと要件を済ませると、（わたし一人で運ん

だ。その方が早いから）お礼にお茶の一杯でもご馳走しますわ、と天狗が言うのでわたしはお言葉に甘えることにする。他の人なら多少下心があるのではないかと警戒したりもするのだが、この天狗に限ってはそういうことは天地がひっくり返ってもない気がしたからである。

天狗の家は純和風の一軒家だった。わたしはその畳にちやぶ台が置いてあるいかにもな客間に通されて、そこで差し出されたお茶と煎餅を頂く。ちなみに天狗は家の中でもお面と背中の羽は外そうとしなかった。煎餅を戴きながら雑談していると、そっぴや千恵はどうしたんですか、今茜ちゃんに学校まで迎えに行ってもらってます、という話になり、その流れでわたしは茜について、そんなつもりはなかったのに、天狗に今までの一連の事の流れを話していたのだった。なんとなくだが、この天狗にはそういうことを相談してもいいかなと思わせる空気がある。伊達に町内会長は張ってないといったところだろうか。

そしたら、天狗の口から出てきたのが「ぬらりひよん」という言葉だった。

「『ぬらりひよん』ってなんでしたっけ？」

「『ぬらりひよん』っちゅーのはあれですわ。妖怪です。わしとおんなじですな」

「あー、あれですかー。ハゲのじいさんみたいなの。昔『ゲゲゲの鬼太郎』で見たって」

「ほうです。それですわな」

そう言いながら天狗はちやぶ台に置いた自分の湯飲みに手を伸ばす。

……って飲むのか！？ お茶飲むのか！？ お面を取って！？

わたしは天狗の湯飲みを持つ右手とお面をつけた顔を交互に見やる。つ、ついに文字通り天狗の化けの皮がはがれる時がきたのか！？

「一般には人様の家に勝手に上がりこんで、さもその家の家人のように堂々と振る舞い茶でも啜ってる言います。あんまり堂々として

るもんやからか知らんけえ、その家のもんまでぬらりひょんを家の主人や思つてしまふと言われとりますな。どうです？ 茜ちゃんはこの町の状況に似とる思いませんか？」

「え、ええ。はあ」

駄目だ。天狗が何か言つてるけどまるで耳に入らない。天狗がお面を外すのかどうか気がになりすぎる。

「あー、でもどうなんでしょうなあ。実はですな、そういうぬらりひよんのイメージっちゅーのは結構最近になって創作されたもんやー、言われとるんですわ。知つとりましたか？」

「へ、へえ」

そんなことどうでもいい。早くお茶を飲め。

そう思っている、ゆっくりと天狗の左手がお面へと伸びた。

ついに取るのか！？

「昔つからある古典の妖怪絵巻には、『ぬらりひょん』という名前とその姿を描いた絵しかないそうなんですわ。説明文がなんもないとか。じゃけん本当のところどんな妖怪なのかは『ぬらりひょん』いう名前と姿から想像するしかないってこつてすわな、これが」

しゃべりながらゆっくりと天狗が左手でお面の鼻をつかみ、そして

「人の家上がりこむいうのはですな佐藤有文という作家先生が『いちばんくわしい日本妖怪図鑑』という本の中でそう書いたのは最初の記述やと言われとるそうなんですわな」

お面を情報にずらし 口元だけ見せてフツーのお茶をすすつた。

何その中途半端？

歯がゆい！ 超歯がゆい！ なんだよそれ！ あんたはいつたい正体を隠したいのかばれてもいいのかどっちなんだよ！ はつきりしろよ！ ぐあーつつこみてえ！

「まあわしはぬらりひょんがそんな妖怪やないって初めから知つてりましたけどな」

「へ？ え、何がですか？」

「だから、ぬらりひよんが本当は人の家にわがもの顔で上がりこんでくるー、みたいな妖怪やないってことをですわ」

また普通に天狗はお茶をすする。て言うかよく見ると天狗の露わになった口まわりはしつかりと綺麗に髭が剃られている。

「ってことは毎朝髭剃ってるってことか？ この家で？ お面をはずして？ うーん。」

「なぜかってわし自身が妖怪だからですわ。わしはぬらりひよんのそないな姿拝んだことないですからのー。だはははは」

ああ。

なんかまためちやくちやくだらしないことを天狗が言ってる気がする。つーかお前ぬらりひよんそのものに会ったことないだろ。

もういいや。わたしがバカだった。天狗の口元とかは見なかったことにしよう。には付き合ってられない。

「それはさておきですね、天狗さん」

「あ、ほうですな。細かいことは抜きですな。ほいじゃこれを機に茜ちゃんを『ぬらりひよんガール』とでも名付けるっちゅーことで」

「殴っていいですか？」

「おふざけはここまでにして真面目に話しましょうかの」

急にきりつと居住まいを正して正座する天狗。

うんうん。誠意を持って拳を振り上げるとちゃんと想いは伝わるもんだね。

わたしは気持ちを仕切りなおすつもりでお茶を一口いただく。そしてぼやいた。

「結局何が問題かって言ったら、茜の真意が全然見えないってことなんですよねー」

「ほう。そう言いますと？」

「だから、勝虎のことを好きだなんてぬかしてみたり、無駄にこの町の人と仲良くしてみせたり、まったくいったい何を企んでるのか

……」

「そのまんまの意味なんやないですかね」

「は？ どういうことですか？」

「そやから真意なんちゆうもんはないということですよ。茜ちゃんは本当に勝虎君のことが好きで、町の人とは仲良くしたいから仲良くしてる。そういうことですよ」

「えー、あの性悪小娘に限ってそんなことありますかねー？」

「まあ、わたしにはそう見えるということですよ」

「でも例えそうだとしてもそんなのずっとは続けられないじゃないですか。いつかは茜だってちゃんと親元に帰らなきゃいけないわけですよ」

「そやから茜ちゃんは帰りとうないんですよ。ほら、本人に口からもそう言つとるとさつき話しとったやないですか」

「まあそうですね……それにしたってやっぱりずっとここにいられないってことは変わらないじゃないですか。親がいる以上は「ほうですよ」

「だったらどこかで茜にはうちを出て親の所に帰ってもらわなきゃいけない。だったらそれはなるべく早い方がいいと思うんです」

「うん。その通りですよ」

「でも……」

「でも？」

わたしは自分の右の拳を見る。この前茜を殴れなかった拳を。

「わたしは知らないんですよ。茜の事情を」

「ほう」

「茜は親の所に帰りたくないって言いますが、わたしはその理由を知らないんですよ。単なる親子喧嘩とかなのか、それとももっと込み入った事情があるのか。……例えば虐待とか、そういうのみたいな」

『世の中には子供を心配しない親もいるんだよ』

茜の発したこの言葉がわたしの頭から離れてくれない。

「結局これって茜の問題なんですよ。わたしは偶然関わっただけの部外者なんです。だからどこまで踏み込んでいいのかがわかんない」

いんです。下手にわたしが介入したら事態をもっと悪化させるかもしれない。そうならなくて、問題があつてその問題をわたしが解決させたとしても、本来ならそれは茜自身が自分で解決をさせなきゃいけないことだったりしたら、長い目で見たら、やっぱりそれは事態を悪化させたのと変わらないんじゃないかってそんな気がするんです。だったらその場合、あえて見て見ぬふりをするというのも一つの手なのかなとも考えるんですけど、なんだかそれはそれで無責任な気がして……」

「ふうむ。でもあれやないですか。鱈子さん、ねこ大王の時はずかずか問題に踏みこんどつたやないですか」

「あれは、なんとというか、わたしにとつての主体の問題が『ポケ林がうちにいること』にあつたからですよ。そりゃああいつが近所の人に迷惑をかけてたつてというのが天狗さん達にしてみれば一番の問題だったかもしれないですけど、わたしにとつては正直そんなのどうでも良かったんです。わたしにとつて重要なのは彼にうちからどいてもらうことだったんですもん。だからあれはわたしの問題だったんですよ。それで思い切つてなんでも言えたんです。けど今回は違つて、茜がうちに居座ること自体は別に大した問題じゃないんですよ。別に困つてないですし、まあム力つきはしますけど、実際家事の手伝いとかしてもらつて助かつてはいますし。そういう意味で今回の一番の問題は『茜が自分の家に帰ること』であり、それはやっぱり茜の問題なんですよね」

「ははあ。なるほど」

「で、そうなる自分かどこまでその問題に関わつていいのかがわからなくて」

「ふうむ」

天狗は一つ唸ると、自分のあらわになつた顎をさすつて少し考え込むようにした。そうして一分もしないうちに、お茶をすすつて言った。

「これから言うんはあくまでわしの私見ですけどえ、そのつもりでち

よいと聞いてください」

「はあ」

「わしはですな、他人の問題だろうがなんだろうが、その方が良く思うんならずか踏み込んでええと思うんですわ」

「はあ、でもそれって一歩間違えただのお節介じゃないですか」

「お節介。ええやないですか。世の中お節介であるくらいがちょうどええと思います、わしなんかの古い妖怪は。そりゃね、人様のこととは人様のこと、関係ないんだから首いつっこむな、言うのは正論や思いますけえ、でもそれでその人様が明らかに間違ってる方向へ行こうとしてたら、そら黙って見とるっちゅうのはいささか不人情やと思うんです。そやからね、その人をほんとに心配や思っつて、そいで自分がそれを助けられるいう信念があるんなら、お節介結構口出し手出しして、例え憎まれ役になろうとも動くべきやと思うんですわ」

「でもそんなの見ようによつてはすごい無責任じゃありません？
所詮他人のことなんだから好き勝手言ってるみたいに取られかねないというか」

「ほうです！ それなんですわ。さすが鰐子さん、ええとこ気付きますなあ」

びしりと指をこちらに突き付けて天狗が息まく。

「他人のことでもなんでも良い思うんなら口を出すべき。そうしますとな、俄然問題になつてくるんは責任の所在になつてくるんですわ。しかしですな、そんな問題は難しいようでは実は単純なんです。責任は全部、お節介した人間が被るっちゅうのがその解答なんですわ」

「全部？ 全部って全部ですか？」

「ほうです、全部です。そもそも何か行動するいうんはその行動によつて起る出来事の責任までしっかり引き受けるいうことです。

こないなことは確か鰐子さんもねこ大王の時言つとりましたな」

「そう……ですね」

そうだったっけ？

「これはね、同じことが他人の行動に干渉する時も当てはまると思うんです。自分のことやろうが人様のことやろうがそこは変わらないのですな。しかしですな、それが他人の場合はそこで生じた責任を見なかったことにしてまるまる相手に押しつけてしまうこともできるんですこれが。そやから人の問題に干渉するっちゅうのは覚悟がいることなんですよ。自分がしたことには必ず責任がついてくるいうことをしっかり認識する覚悟、そしてそれを丸投げできる故に、そうせずちゃんと引き受ける覚悟の二つの覚悟です。極端な話をすれば、その覚悟さえあるんなら、他人のどんな問題にでも、いくらでも首を突っ込んで構わんとわしなんかは思うわけです。例えばそれがどんな結果を生むとしてもです。一般的なお節介いのが社会で、あまり好まれんのは、たいていそういう人にはこの二つの覚悟のうちどちらか、あるいは両方が欠けるとるからやないでしょうか」

「覚悟……ですか」

そうか。

唐突に気付いた。わたしが奈津美や茜を殴れなかった本当のわけを。拳が役に立たなくなっただと感じた理由を。

なんでも拳で解決できると思っていた頃、あの時には、その問題に対してではなかったけれども、殴ることそれ自体にわたしは覚悟を持っていた。すなわち、殺す気で殴っているのだから、いつか殴った相手に報復されて殺されても構わないと。そういう覚悟があったのだ。あの時のわたしには何も護るものがなかった。仲間は大事故だったけれども、わたしはそれが族という血と暴力にまみれた世界にある以上いつ何かの拍子で簡単に壊れてしまうことを知っていて、その事実を覚悟していた。だから、命に代えても護るという対象ではなかった。またわたし自身、あの時代は未来に希望も何もなくて、大切にしたい過去もなく、現在を惰性で生き続けているだけだった。だからそういう無茶な覚悟も簡単に持つことができた。

けれど今は違う。

わたしには護りたいものがある。

わたしは勝虎が好きだ。

勝虎と暮らす現在の生活が毎日楽しい。

勝虎との思い出のつまった過去が大切だ。

勝虎と共に歩む未来には希望がたくさん詰まっている。

そして何より、わたしはそんな今のわたし自身が好きだった。

わたしは今ももう殺されてもいいとは思っていない。なぜなら、

死ぬということは、大事なそれらが無残に壊れてしまうことだから。

そんなのは嫌だ。

だからわたしは殺すつもりで人を殴れなくなっただ。

わたしの拳自身が使えなくなっただけではなかった。ただそれを持っただけで、わたしの方に拳を振るうにたる覚悟がなくなっただけだった。

ではどうする？ 問題の解決に拳は使えない。

簡単だ。覚悟を持て。人を殴る覚悟ではない。茜の問題に挑む覚悟だ。

やれ。やってみせろ。相田鰐子。

「あんま肩肘張る必要もないと思いますわ」

わたしの心を読んだかのように天狗が言った。

「失敗を恐れてはあかんです。いうても適当でいいわけじゃありませんけども。例え失敗しても、それは自らの経験値になりますからね。人にお節焼くつちゆうのはですな、人助けの精神であると同時に、おのれの覚悟と責任感を鍛えるトレーニングなんですわ。今の人は昔に比べて他人への関心が薄い言うやないですか。その最大の問題は、人間関係が希薄になることやないんです。と言うかね、別にわたしは人間関係自体は別に希薄にはなっと思っただけなんですわ。ただあり様が変わってるだけじゃけえ、今も昔も一人で人は生きてけんことは同じなんです。せやから一番の問題は、他人に必要な以上に干渉しない言うのが、つまりそうした責任感を養う機会がなくなってしまうということにあると思うんですわ。つまりあんまり他人

に無関心やと、人間関係以前に、その人の人格そのもの欠陥が出来てしまうんじゃないかと、わしなんかはひどく心配してまうわけです。ま、これもお節介ですけえ。だははは」

天狗は笑う。

この天狗はいつたい何者なんだろう？ ただのボケ老人かと思えば、今回のように深そうに見えなくもないことを言ったりもする。

これまでこのじいさんは果たしてどんな人生を送って来たのだろう。

「鰐子さんはええ人ですな」

すつと天狗がお面を下に引き下げる。いつもの状態に戻る。それで唐突にそんなおべっかを使う。

「褒めても何も出ませんよ」

「いやいや本心です。そうでしょう？ つい最近まで見ず知らずだった女の子のために一肌脱いでやるうと思えるんです。当たり前のことやもしれませんが、今じゃそういう当たり前のことが出来る人はあんまおりません。せやから鰐子さんはええ人ですよ。わしが保証します」

「買いかぶりですよ。ただ面倒が嫌いなだけです」

わたしは言った。

って言うかあれ？ わたし今茜のために行動してやるうってこと口にしたっけ？

7

週末に茜が千恵とその友達を連れて、最近柏木にオープンしたばかりの大型ショッピングモールに行くという。それで自分だけじゃ千恵達全員の面倒を見られないし、また千恵もわたし達に来てほしと言っているというので、わたしと勝虎は、茜と千恵と、その友達の亜由美ちゃん、理沙ちゃん、有希ちゃんを連れて日曜日にショッピングモールへと出かけることになった。ちなみに千恵と前者二人が小学五年生で、最後の有希ちゃんだけが四年生である。

モールは流石にオープン直後ということや、日曜日であること、そして何より地域で史上最大規模のショッピングエリアであるということから、想像通り大変に込み合っていた。ちよっと目を離すと（千恵が）すぐにどこかに行ってしまうそうので、引率する身としてはなかなかハードな一日になりそうだった。

午前中はファッションのエリアを中心に回った。最近の小学生とというのはませた、と言うか贅沢なもので、子供用の安いキッズウェアみたいなものでは満足できないのか、亜由美ちゃんも理沙ちゃんも、有希ちゃんさえも大人顔負けのするような値段やデザインの服を見て周り、やれあれがかわいいこれがかわいい、最近のはこれが流行ってるうんぬん、今はこのブランドがきてる、これモデルのちゃんが着てただのでいっぱしに盛り上がっていた。客観的に見て千恵が一番ファッションの話題には疎そうだった。ただ彼女の場合、服そのものには対して興味がないくせに、なぜか服飾品や、アクセサリー、雑貨類には、妙に興味を寄せていた。なんだかアホ娘の意外な一面を見た気がする。意外と言えば、今日いるメンバーの中で、最も年齢的にも性格的にもお洒落に気を使いそうな茜が、ほとんど買い物に参加しないことは結構意外だった。それで本人にそこをつっこむと、お金がないから、としごく納得いく答えが返ってきた。そういえばこいつ、今はうちの居候だったんだ。

千恵の希望で入った雑貨店の中で、茜が何か棚の上にあるものを熱心に見ているのに気付く。それで覗いてみると、茜が見ているのは木製の手のひらサイズの置物で、二つの背の高い人形と、それに挟まれる形の小さな人形がいるという、まるで子供が両親に手をつながれて歩いている姿を表したような品だった。子供の人形は、少し足が地面から離れており、振り子のように上下に揺らすことが出来る仕組みになっていた。

茜はそれを手にとって、真ん中の子供を指でつんつんとはじきながら、楽しそうに、同時にどこかさびしそうな顔をしていた。

「あんだ、そんなの欲しいの？」

「え？」

茜が振り返る。

「別にそういうわけじゃないけど……」

わたしは値段が書いてあるシールを見てみる。そこには¥850と記されていた。

「買ってあげるよ、それ」

「え、別にいいよ、こんなの。それにおばさんに借り作りたくないし」

「バーカ。もうとつくにあんたはわたしにたくさん借り作ってるでしょうが。何日泊めてやつてると思ってるのよ。今更八百五十円くらい貸しになんてならないわよ」

わたしは人形を茜の手から取り上げる。茜は「あ」と小さくつぶやいたが、それ以上は無理にわたしの申し出を断ろうとはしなかった。

会計を済ませて人形を渡してやると、案外素直に茜はありがとうと言った。

適当な所で食事を取って、午後になると千恵達はゲームセンターへとはしゃぎながら向かった。それで普通のお店よりははぐれる心配がないだろうと思い、わたしと勝虎は千恵達の面倒を茜に任せてモール内にあつたスターボックスでちょっと腰を落ち着けることにする。若いもののエネルギーには二十歳超えたわたし達じゃもうついていけない、というのは冗談で、本当のところは勝虎が少しわたしと二人で話したいことがあると言ってきたからだった。そう言う勝虎の顔が、バカのくせに嫌に真剣なものだったので、わたしは素直に従うことにした。

そうしてコーヒークップを手に席につくと、何を血迷ったのか、勝虎が至極真面目な顔をしてこんなことをぬかしたのだった。

「あのさ……茜ちゃんと養子縁組を組もうと思っただけど、どう思うっ？」

「……は？」

頭打った？

そう思わず出かかった言葉をすんでのところで必死に飲み込む。

「何それ？ どういうこと？」

「え、つまり茜ちゃんを義理の娘として迎え入れようという話で…

…」

「いやごめん、そうじゃなくてさ。なんで養子縁組なんかやってこと
なんだけど」

「あ、そうか。そうだね、うん」

「って言うか、そんなの出来んの？ わたし二十一で、勝虎が二十

三、茜ちゃんが十六歳だよ。年が近すぎるでしょ」

「それはちよつと調べてみたけど一応大丈夫っぽい。ただ茜ちゃんが
未成年だから、家庭裁判所の許可が下りないと駄目らしいけど」

「へえ。まあそれはさておき、どうして急にそんなこと思ったの？

養子縁組なんて言ったら結構大変なことだよ。思いつきで出来る
ようなことじゃないと言うか……」

勝虎が珍しく深刻な顔をした。

「うん……。実はさ、俺、この前茜ちゃんのお母さんに会ってきた
んだ」

「え、本当に？ いつどうやって？」

「やられた。まさか勝虎なんかに先を越されるとは。」

「ちよつと前からタウンワークとかで柴崎って名字の家を探して、
仕事帰りに当たってみたりしてさ。それで今週の木曜日に、ようや
く当たりに引いたんだ」

「それで、どうなったの？」

「うん……」

勝虎の様子は浮かないものだった。それだけで茜の母親との会見
があまり望ましいようなものでもなかったことが容易に知れた。そ
れでも、今後の自分の行動の指針にする意味で、わたしは勝虎の話
に耳を傾ける。勝虎がどうして養子縁組なんてアホを言い出したか
を知る意味もある。

「茜ちゃんのお母さんは柴崎都子さんっていう名前だった。それで二階建ての古い木造アパートで、一人で　もしかしたら男の人と二人で　住んでるみたいだった」

道を尋ねた人を目印として指定された、「シザーハンザー」に注意」と書かれた立て看板のある路地を曲がると、そこに目当ての建物はあった。

勝虎はその木造アパート「白樺荘」玄関口の郵便受けをチェックして、そこに柴崎という名字があるのを確認した。部屋は二一号室で、二階にあるらしかった。

吹きさらしの階段を上がり、一番手前の部屋番号を確認する。そこには「25」と部屋番坊が記された扉があった。目当ての二一号室はどうやら廊下の最奥のようだ。

そこに向かいながら、果たして茜の母親はどんな人物なのだろうと勝虎は考えた。

先日、一応電話で簡単な話はしていた。と言うのも、勝虎が茜の母親を探すのに取った方法は、タウンワークに乗っている柴崎姓の人間に、片っぱしから電話をかけて、直接確認を取るといふなんともアナログなものだったからである。

しかしその時の会話から、茜の母親、柴崎都子の性格を推察するのは難しそうだった。なぜなら、勝虎が電話で話をした時、彼女はひどく酔っていた風だったからだ。その時の都子は、呂律もよく回っていないような有様で、一応勝虎と会話のやり取りそのものはしていたものの、その意味に至ってははまるで考えてないように思われた。それ故に、これからの時間に、アポを取ったことすら彼女はひよっとすると覚えていないのではないかと、勝虎は結構真剣にその辺り心配をしていた。ちなみに、勝虎が都子に電話をしたのは、会社の昼休みである昼の十二時台の話である。

勝虎は二一号室の前に立った。表に表札は出ていないようだった。腕時計を見ると、時刻は午後六時五十分。七時に訪ねる約束をして

いたはずだったから、時間的にはちょうどよい頃合いだった。無論、都子が約束を覚えていればの話だが。

見た限りではチャイムの類が見当たらなかった。扉を直接ノックする。しかし返事はない。それでもう二、三度扉を叩いてみるが、やはり部屋の奥からはなんの反応もなかった。冊子窓から覗くと、部屋の中は明かりもついていなかった。これはやはり約束自体を忘れられていて、どこかに出かけてしまっているのかなと思い、踵を返しかけた時だ。

前触れもなくガチャリと扉が開けられた。そして、ドアの隙間から、絵に描いたようにだらしない、ネグリジェ一枚を身にまとった女が顔を覗かせていた。

「……誰？」

いかにも眠たそうに、瞼を上下させながら、女が言った。

「あの、柴崎都子さんですか？」

「……そうだけど。誰？」

どうやら本人であるらしかった。そう言われてみれば茜によく似ていないなと思う。いや違う。判断できないというべきか。都子は様子からして目覚めの直後であるらしく、どうもまだ表情が乏しく弛緩したままで、加えてノーメイクで、いやそれも違う。化粧をしていないのではない。化粧を落とさずに寝て、今に至るといふ感じだった。現在の時間を考えて、昨晚徹夜で酒でも飲んで、そのまま昼間をずっと寝ていたといったところだろうか。

ともかくその時の都子はあまりに身なりがひどい状況だったので、勝虎には彼女が茜と似ているかどうか、まったくわからなかった。ただ一つ言えるのは、十六歳の娘がいるようにもはとも、良くも悪くも、見えないということくらいだった。

「あの、僕は先日お伺いさせていただく約束をしていた小西と言う者なんですけど」

勝虎は言った。

「はあ。ふーん。……そうなの？」

「え、はい」

「ふーん。ああ、ごめんねー。私、お酒入ってる時とかのことみーんな忘れちゃうからさー。まあ、とりあえず上がってよ。お茶でも出すからさ」

まだ酒が抜けきっていないのか、危なっかしくふらふらとしながら都子は勝虎を招きいれようとする。勝虎はそれを慌てて止めた。

「え、いや、結構です。ここで大丈夫です」

「いいの？ ふーん」

都子は言う。なんだかこの女性はなんでも他人事であるかのように話すなど、勝虎はそんな印象を持った。

「それで？ 用事はなあに？ あー、お金借りてたんだっけ？」

「え、違います」

「違うの？ あ、そっか。あれは竹中君か。て言うかあれ？ 私あなたと会ったことあったっけ？」

「いや、会ったことはないですけど」

「ないの？ じゃあ何？ なんで私のこと知ってるの？ なんの用？」

「実は茜ちゃんのことです少しお話があつて」

茜の名前を出した瞬間だった。明らかに都子の様子が変わった。

今の今まで寝ぼけ眼だったのが、急にしゃっきりとした様子になり、そして 露骨に嫌なものを見るような目つきに変わった。

「何あんた？ 家裁調査官？」

「え、いえ。違います。つて言うかカサイチヨウサカンってなんですか？」

「違うの？ なあんだ。じゃあなんなの？ あいつがどうかしたの？」

都子は勝虎の後の質問は無視して言った。

あいつ。都子が自分の娘をそう表現したことに、勝虎は雲行きが怪しくなるのを感じた。

「あの、実は今、茜ちゃんをうちの方で預かっていました……」

「へえ」

と頷くと、都子は勝虎の顔をぐっと覗きこんだ。そうして、何か意味ありげに笑った。

しかしそれで何かを言うという風でもなかったなので、勝虎は話を続けた。

「三週間くらい前からです。本人に聞くと、その三日前にお母さんと喧嘩してしまったとかで、それで帰りづらくなったとかで」

「三日前？ あいつ、そんなこと言ったの？」

「え、はい」

「あははははは」

「え、何かおかしいですか？」

「えー、なんでもなーい。それで？」

「それで、それからずっととうちにいるわけですけど、いつまでもこのままでいるわけにはいかないじゃないですか。あ、違います。茜ちゃんがいると迷惑という意味じゃないです。どこかでちゃんとお母さんの元にお帰ししなければという意味で」

「いいわよ。別に帰ってこなくて」

「え？」

「それと、『お母さん』ってやめてくれない？ なんかおばさんって言われてる気がするじゃない。私まだ三十二よ。都子ちゃんって呼んで。あははは」

三十二歳？ では茜を十六歳の時に産んだ計算になる。

「え、でも、茜ちゃんはあなたの娘ですよね？」

「まあ、法律で言えばね」

「法律で言えば？ じゃあ実の母親ではないんですか？」

「ううん。実の母親よ」

「え、どういうことですか？」

「そのまんまの意味。私と茜は血の繋がった親子よ。それが？」

「え、ちよっと待ってください。どういうことですか？ それならなおさらちゃんと茜ちゃん帰らないと」

「あんだ、よくお人好しつて言われるでしょ？」

「え、まあ……」

「だと思った。茜があんと会った時三日前に親と喧嘩したって言ったんでしょ？ そんなの大嘘よ。あいつはもう一年以上この家に帰ってないわよ。もちろんその間私は一度もあいつの顔を見てない」

「え……」

「ちなみに家出の理由も喧嘩じゃない。なんか知らないうちに自発的にあいつはうちからいなくなってたのよ。……って、あー、そうだ！ あいつうち出てく時私の財布から十万抜いてったのよ。あんだ、帰ったらそれだけちゃんとして返してくるように言つといてくれない？ 親子のよしみで利子はつけないどいてあげるからさつてそれじゃ、じゃあね。私夕方から仕事なの。寝直させて」

「ちよ、ちよつと待つてください！」

そつぽを向いてドアを閉じようとしたのを勝虎は慌ててそれを制止した。

「何？ まだなんかあるの？」

「どうということですか？」

「どうということも何も、今話したので全部よ。あいつは私の下で暮らすのを自分でやめて、勝手に出てったの。だからその後どこで何してようが私の知ったこつちゃない。そうでしょ？ お互い合意の上の自立よ。義務教育の期間は終わってたし、だったらもう私が育てる必要ないじゃない」

「茜ちゃんはまだ十六歳ですよ！」

「十六歳なら結婚だって出来るじゃない。一人前よ。あー、じゃああなたが結婚してあげれば？ どうせ毎晩ヤツてるんしょ？」

「俺には婚約者がいます！ 彼女を泊めたのはそんなやましい気持ちからじゃない！」

「や、やーね。冗談よ。そんな怒鳴らなくなつていいじゃない……」

はつとして勝虎は気持ちを落ちつけようとした。考えてもいないことを言われて、思わず頭に血が上っていた。我を失うなど久しぶ

りだった。深呼吸して、なんとか仕切り直す。

「すいません……。ついカッとなって」

「ああ、まあ、別にいいけど……」

「とにかく、茜ちゃんはまだ未成年で、あなたは母親なんだ。彼女はあなたの所で育つべきなんだ」

「本人が望んでないとしても？」

「え……」

「だから、さつきも言ったでしょ？ あいつがうちから出てったのはあいつ自身の意思なのよ。今の境遇は、茜自身が自分で選んだものなの。だったら私がそれを無理に呼びもどすこともないでしょう？」

「だけど、彼女はまだ子供です。子供には親が必要だ」

「それ、いったい誰が決めたのよ？」

「誰がつて……」

「そんなのね、世間一般が想像した、家族とはこうあるべきだー、こういふのだと周りからみて幸せだー、みたいな幻想よ。綺麗事。

別に親なんていなくても子供は育つ。食って寝てれば嫌でもね。要するに必要なのは保護者ってことでしょ？ それも本当の意味で必要なのは自分自身で物事を考えることすらできないガキの時分だけよ。あの子はもう十六よ？ 十六にもなればもう自分で一通りのことは考えられる。考えて、決められる。いいことや悪いこと。あと生き方とかね。実際あの子は自分で考えられたから、だからわたしのところを出てってから一年間ものたれ死なずにいけたわけでしょ。わかる？ 子供に取って親なんてのは『あつた方がいいかもしれないもの』だけど『必要なもの』じゃないの」

「でも」

「実際私は親なんて必要なかった」

勝虎は言葉につまった。

ここにきて、都子は既に酒は完全に抜けているように見えた。あるいは抜けていないからそんな話をするのかもしれないが。

「私の両親は本当最低でね。あ、今お前が言うなって思ったでしょ？ まあわからないでもないけど、少なくとも私は私の両親ほどひどくはないわよ。うちの両親はマジでゴミみたいな奴らだった。二人揃ってね。父親は絵に描いたようなヤクザ者。毎日仕事もせずにパチンコ行って、帰れば酒飲んで暴れてね。ほら見て、おでこのこ。小さい時にあの男にビール瓶で殴られた傷。三十年近く経つてもまだ完全に消えない。子供の時の私は、いつも体中生傷が絶えなかった。母親も最低だった。何が最低って、そんな屑男のために生活のすべてを賣いでいたこと。あの女の眼中には私なんてまるでいなかった。あの女の口癖を覚えてあげようか？ 『お前さえいなければ』よ。笑えるでしょ。だけどやっぱり屑は屑。時間が流れて、段々おばさんになっていく母親をあの屑はあっさり捨てた。そしてらどうなったと思う？ 私に暴力を振るってくるのがあの男から母親にバトンタッチしただけよ。あげく、私が中学に上がってからだった。あの女が何したと思う？ 売春の斡旋よ。あいつ、自分の実の娘のわたしを商品にしやがったのよ。“素敵な母親”だと思わない？」

勝虎は何も言えなかった。勝虎は模範的すぎるとも言えるたくましい父親と優しい母親の下で育った。だから何も言えなかった。

「茜を妊娠したのはそんな母親にやらされた“仕事”の中だった。……だからあの子の父親は私にもわからないのよ」

うつむいて、小声で都子は言った。

「私は……私は誰が親とも知れないあの子が憎らしくもあつたけど、同時にもう出来てしまった命として、……愛おしくもあつた。だから、自分は自分の屑みたいな両親のようにはならない。この子をまともな母親として育てよう……十六年前は本気で思ってたんだけどね。……私には無理だった。私の中にはしつかりとあの屑二人の血が流れてる。私は今じゃ茜を可愛く思えないのよ。あの子と一緒にいる時よりも、今も付き合ってる彼がいるんだけど、その人と一緒にいる時の方がずっと楽しい。あの子の幸せよりも、自分の幸せの

ことを考えてしまう。……私は茜を愛せない。薄情だと思つかもしれないけど、これが私の本心なのよ」

都子が顔を上げた。泣いているようにも見えた。

「今、茜は楽しそうにやってる？」

「……ええ、まあ」

「そう。良かった。だったらやっぱりあの子は私と一緒に暮らさない方が幸せなのよ。さっきの撤回。やっぱりお金、返さなくていいわ。……それじゃあね」

扉が閉まるうとする。

その一瞬で、勝虎は 考えた。茜のこと。都子のこと。考えて、そして行動していた。

「待ってください！」

再び勝虎は扉を抑えていた。

「何よ？ まだなんかあるの？」

「それでもあなたは母親なんだ！ 茜ちゃんと共に暮らすべきだ！」

「あのねえ、何度言ったらわかるの」

「違う！ あなたは充分母親としての資格がある！ そうでしょう？ だって今あなたは茜ちゃんの幸せを願ったじゃないですか！

だったらもうそれで充分だ！ その気持ちがあれば大丈夫だ！ やり直せるはずです！ 茜ちゃんはまだ十六歳なんだ！」

ぐっと一瞬都子が言葉につまった。だが、それで簡単に風向きが変わるものでもなかった。

「あんたにいったい何がわかんのだよ！ その気持ちがあれば大丈夫？ やり直せる？ 無責任なこと言ってるんじゃない！ 私が今まで何度そう思ったと思ってるのよ！ 何度自分の母親としての能力のなさに絶望して、何度茜の寝顔に謝って、何度その度に私は明日から変わるうと誓ったと思ってるのよ！ それでも駄目だった！ 何度繰り返しても駄目だった！ 私は変われなかった！ そんな時に茜が去っていった、その時の気持ちがあんたにわかる？ 私にとつてそれは最後通告だった！ 娘自身に、お前はもう母親失格だと言

われたも同然なのよ！ そんな私がどうやってのこの茜の前に姿を晒せるっていうのよ！ 例えあんたの言うとおりにして、また一緒に暮らしたって、結局は同じことの繰り返しになるだけじゃない！ それは私にとっても、茜にとっても不幸なだけじゃない！」

「違う！」

「違うない！ あんた何様よ！ わかったようなこと言って、現実なんてまるで見ないで、綺麗事だけで自分の身の周りを固めて！

結局はあんたは自分が気分いい結果に持つていこうとしてるだけだろうが！ 茜や私じゃない！ 全部自分のためだ！ そういうのをなんて言うか教えてやるうか？ 自己満足っつーんだよ！」

「それでもあなたは母親なんだ！」

「帰って！」

「まだ話は終わってない！」

「帰って！」

「あなたが今怒っているのは茜ちゃんのことを愛しているからだ！ 違うんですか！」

「帰って！」

最後はほとんど泣き声のようだった。そして一瞬の間をついて、都子は勝虎を突き飛ばした。勝虎が後方によるけて倒れ、その隙に都子は扉を閉める。がちやりと鍵を閉める音が響く。

「柴崎さん！」

勝虎は急いで起き上がりとびらをどんと叩いた。しかしもう都子が顔を覗かせることはなかった。

勝虎は混乱していた。怒りと悲しみで頭の中がごっちゃになっていた。これほど感情的になるのは彼にとって久しぶりのことだった。「わかりました！」

勝虎はドア越しに、都子に向かって叫んだ。

「そこまで言うのならもうあなたにはこれ以上期待しない！ 茜ちゃん俺が責任を持って育てます！ もうここには来ない！」

そして勝虎は踵を返し、都子の部屋の扉を後にした。

背後から、都子のすすり泣きが聞こえたような気がした。

『世の中には子供を心配しない親もいるんだよ』

また茜のあの言葉がわたしの頭をよぎる。

奈津美、都子、都子の母親。誰が正しくて、誰が間違っているのだろう。誰が親として真つ当で、誰が親としてそうでないのだろう。普通に考えれば、やはり最も正しくて、そして親の姿として真つ当なのは奈津美なのだと思う。でもそれは本当の意味で正しいということなんだろうか。綺麗事として、客観的に最も見栄えの良い姿として世間が推奨しているだけなんじゃないだろうか。

真実はもつと複雑なのかもしれない。でもそれはやっぱり見ようによっては単純なのかもしれない。子供に無償の愛を捧げる奈津美も、理想と現実のジレンマに悩む都子も、愛情の欠片さえもない都子の母親も、みなすべからく一つの“母親”としての形なのかもしれない。ならばそこに倫理的な善悪はあっても、本質的な優劣というものはないのかもしれない。

わたしは考える。わたしはどうすべきだろう。

どうするのが最も茜を幸せにするのだろうか。

どうするのが最も都子のためになるのだろうか。

どうするのが最も勝虎を納得させるのだろうか。

わたしはどうしたいのだろうか。

勝虎の提案に考えさせてとだけ答えてわたし達はスターバックスを出る。その後のことは正直あまり記憶に残っていないかった。わたしはぼんやりと千恵達のことを目で追いながら、頭の中はずっと自身のこれから取るべき行動について思索していた。

考えに考えて、わたしの今まで人生の思索した量と同じくらい考えたんじゃないかという頃、ようやくわたしは一つの結論に達する。

陽はもう傾いて、これから皆で帰りのバスに乗ろうという段の時だった。

「あ」

わたしは声を上げた。

「ごめん勝虎。わたしちょっと財布落としたかも。午前中に雑貨屋で買い物した時だと思う」

「え？」

とわたしの発言に勝虎が不思議そうな顔をする。さすがのバカもこの嘘には気付いたらしい。と言うか気付くような嘘をわざと言ったのだが。スターバックスでの会計は、勝虎が小銭を持っていなかったの、わたしが立て替えたのだ。午前中に財布を落としたわけがない。

「わたしサービスカウンター見てくる。ねえ、茜ちゃんも一緒に来てくれない？」

「へ？」

まさか自分にふられるとは思ってなかったのだろう、茜が頓狂な声を上げた。

そしてその一言で勝虎はわたしの意図を察したようだった。どうせ例によって肝心の中身は的外れなんだろうが、そこはどうでもいい。わたしが茜と二人きりで話したいのだという、そこが伝われば充分だった。

「わかった。じゃあ俺はみんなを連れて先に帰ってるよ」

「へ、え？ ちょっとなんで？」

理解不能の茜ちゃん。

「うん、そうして」

「財布見つからなかったら呼んでな。そしたら俺、車で迎えに来るから」

「うん」

これは「何かあったら応援に来る」という副音声だろう。まあ勝虎なんていたところでなんの役にも立たないから呼ぶことはないけど。でもそう言ってくれる気持ちかわたしは嬉しい。

「ねえ、なんで私必要なの。いらなくない」

そう言う茜の肩をぐっと引きわたしは耳打ちする。

「いいから黙って従え」

裏に何かあるのを気付いたのか、茜はそれで黙る。

わたし達は小学生の女の子四人を引きつれてバスに乗る勝虎を見送る。傍から見たら勝虎はどう見えるんだろう、勘違いしたおばちゃんとかに通報されないかなとかどうでもいいことを考える。

そしてわたしは夕陽の下、他に誰もいないバス亭で茜と二人きりになる。

「で」

嘆息して、茜が言った。

「どういうこと？　なんか話でもあるの？」

「そこに座りな」

わたしは無視して、ベンチを指さして言う。

茜は不満げながらも、わたしの真剣な様子を受けてか、素直に従った。

わたしも茜の横に座る。

「わたしが訊きたいのは一つだけ」

「……何よ」

「前あんたわたしに勝虎が好きだって言ったわよね。覚えてる？」

「……うん」

「あれ、本当？　本心？」

「訊きたかったのってそんなこと？」

茜は小さく鼻で笑った。

「だったらそんなの今更言うまでのことでもないよ」

「なんで？」

「は？」

「なんで勝虎のこと好きなのよ？」

「なんでって……」

「あいつの何がいいの？　顔は普通だし、頭はバカ、お金も全然ないし、ユーモアのセンスとかもあんまり。すごい特技もないし、教養もないし、これといった趣味もない。そんなのいったいどこが

「いいの？」

「変なの。じゃあおばさんは勝虎さんのこと嫌いななの？」

「訊いてるのはわたし。答えな。あいつのいったいどこが好きなの？」

「多分……」

「多分？」

「おばさんと同じ理由だよ」

「……あ、そう」

それはわたしが一番期待していた答えで、そして一番恐れていた答えでもあつて。

「私ね、初めて勝虎さんに会った日、ほっぺ思いつきり叩かれたんだ。ばちーんって」

左の頬を、茜はどこか哀しげにさすった。

「あの時下衆な男共に絡まれて、それを勝虎さんが助けてくれた。そこまでは話したよね。その後さ、私いかにもお人好しな勝虎さんを見て、こいつはカモだつて思ったんだ。それでこの前話した方法で引っかけようとした。そしたらさ、ばちーんって。すぐに勝虎さんハツとしたみたいになつて、うわごめんーって謝つてきて、私何すんだよつて内心キレかかったけど、勝虎さんのその時の目を見たら、なんだか急に怒りとかみんな冷めちゃったんだ。その時勝虎さんがどんな顔してたか、おばさんわかる」

「……泣きそうな顔してたでしょ、あいつ」

「ピンポン」

茜は言った。

「さすがにモノホンの恋人だね。そう。私なんでこの人哀しそうなんだろうって、可笑しくなつてきて、笑っちゃって、でもなんか私も泣きたくなつてきちゃつて……私、考えてみたら人が私のために泣いてくれるだなんて、そんなの初めてだった」

茜は笑った。わたしもその気持ちはわかった。

「それでしばらく一緒に暮らさせてもらつて、はっきりました。おば

さん、あの人は太陽みたいな人だね」

「……バーカ」

「あの人とどんな人でも明るく照らしてくれる。一緒にいるとどんな人でも輝ける。でも何より輝いてるのはあの人自身。世の中みんな、あの人みたいならいいのにね」

「あはは。そんなウザい世界やだ」

「……うん。そうかも。でも勝虎さん一人くらいなら、いいよね。」

「ねえおばさん。前にもいったけど、私は勝虎さんをおばさんから取ってやるうとかそんなことは考えてないよ。て言うか無理。だからさ、お願いだからもう少し居させて。ちゃんと、その内立ち直れると思ったらその時は出てくから、お願いします」

「わたしが茜を追い出したくてこんなことを訊いているのだとしても勘違いしたのか、殊勝な様子で茜はわたしに頭を下げてくる。けれどももちろんわたしはそんなつもり今の話をしているわけではないのをお願いしますもクソもない。」

「どうでもいいよ、そんなの」

「え？」

「わたしは立ち上がる。」

「わたしは、一応あなたの意思を再確認したかっただけ。別にあなたがどれだけうちにいようがそんなのどうでもいい。て言うかもしかしたら、あなたこのままずっとうちにいられるかもよ。良かったね」

「どういう意味？」

「茜が訝しげに眉をひそめるが、わたしはそれを無視する。」

「あなた次のバスで帰りな。わたしはちょっとこれから行くところから」

「え、どこ行くの」

「無視無視。」

「勝虎に訊かれたら、偶然あの後昔の友達に会ったから、そのまま友達のうちに泊まるでも言うておいて」

「ちょっと待ってって。だからどこ行くのって？」

無視無視。

「多分帰りは明日になるから。今日はわたしの夕飯はいらない」

「何それ？ どういうことよ？ 無視しないでよ！ 勝虎さん誘惑

しちゃうよ！」

無視無視。

「あ、あとあなたは明日うちになね。わたしが帰った時いなかったら殺すから」

「はあ？ ちょっと、ねえちょっと!？」

無視無視。

(続く)

第三話 ぬらりひょんガール（後編）（前書き）

前回までのあらすじ！

長い死闘の末ついに悪の大魔王ダイマ・オーンを倒した我らが正義のジャステイスレンジャー！ だが闘いはまだ終わっていないかった！ ダイマ・オーンは最後の力を振り絞って悪の大魔神ダイマ・ジーンを復活させたのである！ 対してジャステイスレンジャーは地球の正義の力を集めて正義巨大ロボット、メガ・ジャステイスを発進させた！ ここに地球の命運を賭けた正義と悪の最後の決戦が始まったのだった！ がんばれ！ 負けるな！ ぼくらのジャステイスレンジャー！

以上のあらすじはもちろんすべて大嘘である！

第三話 ぬらりひょんガール（後編）

8

翌日、わたしが自宅に帰ってくると、茜は庭でタイガー、クロコと戯れていた。それでわたしを見ると、開口一番、

「何それ？」

とあんぐりと口を開けて言った。

「ほれ」

わたしは茜の問いを無視すると、ひょいと彼女に青いヘルメットを放り投げた。

茜はそれを反射的に受け取るが、表情はまだポカンとしたままで、自分が何を要求されているのか理解が追いついていないようだった。タイガーはふぎゃーとビビリ声を上げながらさっさと家の中に逃げ込み、クロコは爪を立てて生意気なことにこちらに威嚇をしてくている。

彼女達（？）が驚くのも無理はないかもしれない。

わたしはその時、黒い革ジャンに革パンツを着て、眼鏡は外してコンタクトという、普段とはまったく異なる出で立ちで、ハーレーに跨っていたからだ。

わたしは自分の後ろを手で示して言った。

「行くよ。さっさと乗りな」

「ちょ、ちよつと待って!？」

茜が混乱したように叫ぶ。

「行くっていったいどこへ!？　って言うか、それ以前におばさん乗れんの、バイク!？」

「乗れるわよ。見りゃわかんでしょうが」

「免許は!？」

「ないけど」

「駄目じゃん!？」

「問題なし。万が一の時のためにちゃんと偽造免許があるから」

「偽造免許!？」

「そ。知り合いに偽造書類作るの副業にしてる奴がいてね。そいつに昔作ってもらったのよ」

「ぎ、偽造書類……?」

「そう。その時は一応わたしは足を洗ってたから、半分は遊びだったんだけど。実家にあつたのを持ってきたんだ」

「昨日どっか行つたのは……?」

「ん? それはこれを友達から借りるため」

わたしはぼんとバイクのお尻を叩く。

「おば……鰐子さんっていつたい……何者?」

さつと顔を青ざめさせて茜が言う。

「ははは。「偽造書類」とか怪しげな単語とか出したからかな。わたしをヤクザもんかなんかと思ってる? まあ片足突っ込んでたような時期があるのはほんとだけど。」

でも今はそんなことどうでもいい。わたしがヤクザだろうが神父様だろうが、これからすることは変わらない。

「いいからさつさと乗れつつってんだろ。なんなら力づくでもこっちは構わねーんだからさ」

「わ、わかつたよ」

茜が不安げにヘルメットを被って、そしてわたしの後ろに跨る。

「つかまってな」

わたしが言うのと、茜は素直にわたしの胸にしがみ付いた。その腕は少しだけ震えていた。

黒いフルフェイスのヘルメットを被る。エンジンをふかし、わたしは鋼鉄の馬を発進させた。家の前の急な坂を飛び下りるようにしてバイクは下っていく。ほんの少しハンドル操作を誤れば、一瞬で死に至るといふ恐怖が、わたしの肝を冷やす。しかしそれは同時に

快感でもある。

バイクは猛スピードで先陣岬町のあぜ道を通り切っていく。途中、大口を開けた千恵のアホ面とすれ違う。

あつと言つ間にわたし達は久禮山の峠道へと突入する。

「ねえ！」

茜が大声で話しかけてきた。そうしなければ聞こえないのだ。

「あん？」

「私殺されちゃうの？」

「はあ？」

「なんで？ おばさんのこと怒らせたから？」

最初、茜は冗談を言っているのかと思つた。が、すぐにそうでないことを直感する。わたしの胸に回した茜の腕が今も小刻みに震え続けているのは、バイクのスピードに対する恐怖だけでは多分ないけれども内容はよくわからなかった。わたし怒つてたっけ？ なんの話だろう。

「怒つてなんかねーよ！」

「怒つてたじゃん！」

「怒つてた？」

「怒つてたじゃん！ 昨日！ 別れる時！ 話しかけても無視して

！ 今だつてなんかいつもと様子違うし！」

ああ、あれかと納得する。昨日は別に怒っていたわけじゃない。

あれは茜の言葉で、自分の取るべき行動に最終的な判断を下して、その行動の　これから取るうとする行動のリスクの高さに気が重くなつていただけだ。そして今様子が違うというのは、徐々にバイクに乗つたことにより、気分が変に高ぶっているせいだろう。昨日も今も、わたしは全然怒つてなんかいない。

「怒つてねーよ！」

わたしはもう一度言う。

しかし茜は信じられなかったようだった。

「私が勝虎さんのこと好きだつて言つたから？ 私がいつもおばさ

んに生意気な口聞くから？ 私が図々しくずっとおばさん家に居座
ってるから？ 私死ぬの？ 東京湾とかに沈められちゃうの？」

「お前バカか！ Vシネマじゃねーんだからよ！」

「じゃあ私どうやって殺されるの？」

「アホ！」

「私死にたくない！」

「ボケ！」

「私まだ十六歳だよ！ まだまだ人生これからなのに！ もっとお
いしいもの食べたい！ もっと楽しいことしたい！ もっと素敵
な恋がしたい！ やだ！ 死にたくない！ 私まだ死にたくないよ！」

「それ以上ギヤーギヤー騒いでるとマジ殺すぞ！」

「やっぱり殺すんだ！」

「殺さねーよ！ アホ！」

「さっき殺すって言った！」

「だから黙らねーと殺すつつつてんだよ！」

「ほら！ また殺すって言った！」

「うるせえ！ 黙れ！」

「死にたくない！」

「殺さねーよ！」

「じゃあどこ行くのよー！」

「感動の親子ご対面！」

「え？」

と間の抜けた声を茜は出す。

「お母さんとどこ行くの？ 殺すんじゃないよ？」

「だからそう言ってるだろうがボケ！」

「何しに？」

「肩でも揉んでやれ！」

「やだ！」

「肩を揉むのが？」

「違う！ 帰りたくない！ ううん！ 行きたくない！ あんな場

所私の家じゃない！ あんなの私の母親じゃない！ あそこに私の居場所なんてない！ やだ！ やめて！ 帰して！ 勝虎さんの所に帰して！」

「嫌だね！ 勝虎はわたしのもんだ！ テメーはアル中ババアと人生の底辺這いずりまわってる！」

「やだ！ やだ！ やだー！ あんな家に帰るくらいならそれこそ死んだ方がマシだ！ 止めろよ！ 降ろせよ！」

茜が半分ヒステリーになりながらわたしのわき腹をドンドンと小突いてくる。全然痛くはないけどお前バカだろ、と思う。時速百キロ以上出てんのに。もしそれでわたしがずこけたら二人揃ってお陀仏だ。

「と言うのは嘘で！」

「え？」

「安心しろよ！ お前をただ母親のところに放り投げるだけにはしねーから！」

「じゃあどうすんの？ まさかお母さんの方を殺すの？」

「ああ！ それもいいな！」

「よくないよ！ やめてよ！」

「何お前？ 母親嫌いなんじゃないの？」

「そうだけど！ それとこれとは別だよ！ やめてよ！」

「大丈夫だって！ 冗談だから！ 殺したりしねーから！」

「ほんとに？」

「ほんと！」

「じゃあどうするの？」

「お節介！」

「何それ？」

「黙って見てろ！」

そう。わたしはこれから一世一代のお節介を焼きに行く。明日からの茜の人生の責任をすべて負うくらいの覚悟を持って、わたしは柴崎都子、茜親子の關係に決着をつけに向かう。

『あんま肩肘張る必要もないと思いますわ』

天狗はそう言い、それも一理あると思うけど、わたしは思いつき肩肘を張っていく。ちょっとしたお節介ならそれでもいいのかもしれない。けれど、今回はそれでは駄目なのだ。そんなぬるい覚悟では足りないのだ。一人の いや、二人の人間の人生を左右するようなお節介に臨むには、こちらもまた人生を賭けるくらいの覚悟を持たなければならぬのだ。

もし もしこのわたしのお節介の末、茜が本当に人生の底辺を這いずりまわすような人生を送る結果になるのだとしたら、その時はわたしも一緒にその横を這いずりまわろうと思う。一生茜に恨まれながら、一生許されないことを知りながら、それでも茜への贖罪のためにわたしの残りの人生を使うのだ。

それがわたしの覚悟。

だから勝虎、最悪わたしはもうあなたとは一緒に暮らせなくなるかもしれません。もしそうになったら、わたしよりずっと優しく可愛くて、素敵な女性を探してください。そしてあなただけでもどうか幸せになってください。かしこ。

9

勝虎の話にも出てきた「シザーハンザーに注意」と書かれた看板を過ぎると「白樺荘」へとバイクは到着する。

時計を見ると、時刻は午後一時を少し回ったところだった。ここまでは予定通り。この時間なら、都子は家にいるはずだった。柴崎都子は、市内のスナックに夕方から深夜にかけて勤務している。客によっては明け方まで付き合うことも少なくない。そんな仕事だから、生活は完全に夜型になっていて、この時間はたいていまだ寝ているはずのことだった。

わたしはそういう情報を、昨日数時間をかけて、昔の人脈をフルに使って調べ上げた。正直、その中にはあんまり借りを作りたくな

いような連中も多かったが、わたしはこの件に関して全力で挑むと自分自身に誓いを立てたのだ。だから手段は選ばない。

「降りな」

まず自分がバイクから降りて、次に茜を促す。茜はうつむきながらも黙って従った。その様子はわざと古巣を見まいとしているようだった。

「行くよ。ついてきな」

わたしは言い、スタスタと建物二階に向かって歩き出す。一応ちらちらと後方を気にする。茜は意外と言えば意外だが、観念したのか、はたまた腹をくくったのか、文句の一つも言わず、静かにわたしの後についてきていた。

二一号室の前に来る。

ここだ。

さあ鱧子。もう後には引けないぞ。進むしかないぞ。本当にこれでいいのか？ 他にもっと良い手段はあるんじゃないか？ もっとよく考えるべきじゃないのか？ 大丈夫か？ 後悔しないか？ もし最悪の結末を迎えて、しなきゃ良かったって泣いたって、誰も助けてはくれないんだぞ。いいのか？ 本当に？ これぞ？

いいんだよ！ やれ！ 鱧子！ やつてみせる！

自分で決めたんだ！ 他の誰でもない、わたし自身で！

だったら最後までやり通してみせる！

わたしはぐるりと思い切りよく体をひねりながら回転させる。

妙に時間がゆっくりと感じる。一瞬だけ、茜の姿が視界に入る。

彼女の頭は、まだわたしの行動の意味を理解するまでに至ってない。でも茜が気付く時にはもう遅い。

わたしは体の回転の遠心力を、そのまま振り上げた足の先に集め、鉄製のドアに思いつきり後ろ回し蹴りをかます！

ゴンッ

というとんでもない炸裂音が辺りに響く。

扉は中心で大きく歪んで室内へと吹っ飛んでいった。

土煙　は出ないけれど、代わりにわたしの視界には、部屋の奥の方で何が起きたのかちんぷんかんぷんな様子で一組の男女が固まっっている姿が映った。

いた。女の方が柴崎都子だろう。男の方が愛人さん？　内縁の夫？　ま、なんでもよろし。関係ない。

わたしはずかずかと室内に土足で踏み込んでいく。

「ちょ、ちよつと!？」

最初に叫んだのは茜だった。(多分)慌てた様子でわたしの後をついてきているのだろう。ここがさつきあれほど来るのを嫌がった家であることも忘れて。

縮こまって驚いていた都子が、「茜……？」と小さくつぶやく。

最後に動いたのが愛人のヤクザ風の若い男だった。

「なんだてめえ！」

と凄みながら立ちあがってくるけど　　ははは、甘いぞ兄ちゃん、腰が引ける。

「邪魔」

わたしは向かってきた男の頭を左手で掴み、そのまま壁に激突させる。ガツンという手応えと共に男が悲鳴を上げる間もなく気絶。わたしはそのちよつと血とか噴出してる男の頭を後方にポイする。ばたーん。

「ひっ」

と、その時息を飲むような悲鳴を上げたのは都子、茜のどちらだろう。どちらともとれるよく似た声に、わたしは二人が親子であることを少なからず実感する。

「な、なんなのあんた……？」

これは都子だった。

わたしは笑顔で答える。

「どうもこんにちわー。宅急便です。お宅のクソガキをこ自宅ま

で郵送致しましたー」

わたしは後ろに手を伸ばすと、そこにいる茜の肩口を掴む。そしてそのまま都子に向けて放り投げた。

「痛っ！」

「茜！」

倒れこむ茜に、まるでいっばしの親みたいに都子が駆け寄る。そしてこれもまたいっばしの親みたいに、茜をまるで護るみたいに都子がわたしと茜との間に割って入った。

「な、なんなのよあんた！？ 警察呼ぶわよ！」

都子がヒステリックに叫んだ。

その姿がわたしの中でいつかの奈津美と重なる。

無性に泣きたくなる。腹立たしくなる。けどそんな自分の感情を微塵も見せないようにして、わたしは都子にガンを飛ばす。

「呼べるもんなら呼んでみるよババア。テメーが一〇番を押す前にわたしはテメーの指を全部へし折ってやる。テメーが警察に状況話す前にわたしはテメーの喉を叩き潰す。それでもいいなら好きなだけチャレンジすりゃいいさ」

「おばさん！」

そう叫んだのは茜の方。ヒステリック親子。わたしは悲しさで胸がいっぱいになりながらもイライラが積もっていく。

「なんなのこれ！？ わけわかんないよ！ 何考えてんの！？ 何がしたいの！？ わかんない！ わかんないよ！」

「うるせえよメスガキ。テメーは黙ってる。それ以上その胸糞悪いキンキン声上げるならまずテメーの喉から潰してやる」

「やめて！」

都子が叫ぶ。

わたしはまたムカつく。

すべてが予想通りに事が運ぶことに。

「ババア。まだ自己紹介がまだだったな。わたしは相田鰐子。不肖ながら今、テメーガキを預かってる身ですよ。先日はうちのバカな

ダーリンがお世話になりましたってな」

「あんだ、あいつの……」

「そういうこった。さあ前置きはこれで充分だろう。ババア。テメーはさ、今自分が置かれてる状況がまるで把握出来てねえだろ？」

「ついでにわたしがいつたい何しにきてるかもな。簡単だよ。ただわたしはテメーと腹割って話したいだけだよ。隠し事も嘘もなく本音で語り合いたいだけだ。後ろで伸びてるゴミはいたら話がややかしくなると思ったから寝んねしてもらったけどさ。安心しな。だからテメーにもそこのメスガキにもわたしは手を上げるつもりはない。まあ、あくまでテメーらが大人しくしてればの話だけどな」

「腹を割って……？」

「そうだ。簡単だろ。で、わたしがお前に確かめたいのは一つだけだ」

わたしはかがみ込み、都子の顔を覗く。そして言った。

「あんだ、自分の娘を愛してるか？」

すぐには返事は返ってこなかった。

その予期しなかったであろう質問に、都子は混乱したままの頭で必死に考えているようだった。あるいはその時間は本当はほんの少しだけだったのかもしれない。わたしの、これ以上この展開が進んでほしくないという後ろ向きな願望が、そう感じさせていただけかもしれない。

それでも時は進む。

都子の口が動き出す。

わたしは、彼女の発する台詞が、わたしの想定する最悪のものでないことを心の底から願う。

都子は 言った。

「茜は 私の、私の娘だもの……だから……そんなの、決まってるじゃない……。私だって、これでも、茜のことは……愛してる」「お母さん……」

茜の瞳が潤む。それは、きつと茜がずっとずっと待ち望んでいた

言葉。

だけど

私にとつては決して言つてほしくなかつた言葉だつた。

「ふざけんな！」

「おばさん……？」

わたしの一喝に、柴崎親子がびくりと身を震わせる。

怒りが湧いた。悲しみが破裂しそうだった。それで、わたしも震えていた。

「ふざけんなよババア！ どうしてだよ！ どうしてそんなこと言ふんだよ！ どうしてそんなこと言えるんだよ！」

許されるなら、わたしは都子のことを思いつきりぶん殴つてやりたかつた。それぐらい、やるせない気持ちになつていた。無茶苦茶に喚き立てて、いまやヒステリーを起こしているのはわたしの方だつた。他人事とは言え、あるいは他人事だからこそ、もう無責任に投げ出してしまいたかつた。

けれどそれはしない。わたしはそういう覚悟で臨んだのだから。「なんでよ！？ どういうこと！？ 私わかつたと思つたのに！ おばさんの考え！ おばさんはお母さんに私への愛情があるつてことを証明しようとしたんじゃないの！？ それでこんな無茶したんじゃないの！？ だつたらもう充分だよ！ 私わかつたから！ お母さんもわたしのことちゃんと想つてくれてるつてわかつたから！ だからもうやめて！」

「うるせえ！ テメーは黙つてる！ わたしはババアに訊いてんだよ！ おいババア！ 答えろ！ どうしてテメーは娘を愛してるだなんて言えるんだよ！」

「何を……なんで、あんたに、他人のあんたに何がわかるのよ！」
「お前は今まで娘をほつたらかしてたんだらうが！」

今度は都子はすぐに何も言い返せなかつた。

わたしは胸が張り裂けそうになる。そう。それがすべてなのだ。柴崎都子は柴崎茜を親として育てることを放棄した。それが事実。

愛する愛さない。言葉なんて結局それだけじゃどこまでも虚構にすぎない。意味なんてない。すべては行動することではか実体にならない。行動しなければ、口先だけの想いでは、何も変えることができないのだ。

「愛してるなんてどの口が言うんだよ！ 愛してる？ じゃあなんでお前は茜をちゃんと育てなかった！？ なんで茜が去った時、その後を追わなかった！？ なんで一年以上もその『愛した』娘をほっといて男といちゃついていた！？ それともなんかそこには理由があんのか！？ 実はそこに深いわけがあつて、そうすることが実は茜を愛することになつてたりするのか！？ どうなんだよ！」

「それは……でも！ 嘘じゃない！ 私の気持ちは嘘じゃない！ 今こうして茜の姿を見て、茜の手を取つて、そしたら気付いたのよ！ やっぱり私は茜のことが大切だつて！ その気持ちに嘘はない！」

「ああそうさ！ 嘘なんてないんだらうよ！ でもな！ 足りないんだよ！ お前の『愛してる』は、全然足りない『愛してる』なんだよ！ 今気付いた？ ふざけんなよ！ そんなもんは違うんだよ！ そりゃ気付くだらうさ！ なぜかつてそれは今が非日常で、あの種の異常な状態だからだ！ そりゃ普通の時よりそういう感情に気付きやすいだらうよ！ でもな、それは違うんだよ！ よく人は追い詰められた時に、本当の感情とか大切なもの気付く、本性が出るつていうけど、それは逆なんだよ！ 極限状態つてのは錯覚を起こすんだ！ そうだろ？ 今のテーマの姿をしてみるよ！ 錯乱して正常な判断もできないような状態の時に、どうして大切なものだけ正常な判断ができるつつうんだよ！ どこに本性があるんだよ！ そんなもんはな、みんな、吊り橋効果みたいなもんだよ！ 人の本性が出るのは追い詰められた時や、いざという時じゃない！ なんでもない普通の時なんだ！ 普段の行動にこそ、その人間の本当の人格が現れるんだ！ いざという時だのなんだの言うのは、結局普段できないことに対する言い訳でしかないんだよ！ 人間の

本性は日々の生活の中にこそ表れるもんなんだ！ テメーはどうなんだ！ ああ？ 今じゃない！ 普段から、なんでもない日常からお前は茜を大切にできたか？ 思えたか？ 愛してるって胸張って言えたのか！？ どうなんだ！ どうなんだよ！」

「言える！！」

「っざっけんな！！ だったら茜はうちになんて来てないだろうが！ 路上で売春まがいのことなんてしてないだろうが！ 今こんなことになってないだろうが！ 普通に高校に行って、部活して、友達と恋の話題とかで駄弁ったりして、うちに帰ったらお前が夕飯作って待っていて、笑ったり文句たれたりしながら飯食って、勉強しろって叱られたりして、たまに価値観の違いとかで大ゲンカして、好きな人ができたとか相談してみたりして、そういう……そういう“今”があつていいじゃないか！ なんでそうなってないんだよ？ なんでだよ？ あんたが本当に茜を愛していたなら、こうしてわたしとあんたは会うことはなかったはずじゃないかよ？ そうだろう？」

落ち着け。そう思うけど、無理だった。

都子も、茜も泣いていたから、一緒に泣いてしまいたかった。

嫌だ。情けない。我慢しろ。こんなバカ親子なんかのためわたしの涙を流してやるのはもつたいない。

「でも……わたしは……わたしはただ……」

「やめて」

茜が言った。

「お願い。……もうやめて。お母さんもおばさんももうやめて。……

……やだよ。私もうやだ。……もう充分だから……だから……」

「茜」

わたしは言う。

「お前の今の気持ち当ててやるうか。お前今このババアのおことが愛おしくて大切でたまらないんだろ？」

「……うん」

「でもな。それだって錯覚なんだよ。わたしがうつかりお涙頂戴な感じにしちまったから、泣いている人間はとかく弱く見えるから、守ってやらなきゃいけない気がしてくるから、だからそう錯覚してるだけなんだよ。その気持ちは今この瞬間だけのものにすぎないんだ」

「……わかんないよ」

「今はな。けどそのうちわかる。今のお前らにあるのは一時的な激情みたいなもんだから。そいつが冷めたら、本心に戻ったら、例え今どれだけ互いに強い絆があると思っても、それが本物でなければ、それは簡単に切れる。……それでもって、お前らがそうなるであろうことは、これまでのお前らの人生が証明してる。人間ってのはさ、急に変わることは出来ないんだよ。そんなに単純じゃないんだ。たった一つの出来事が、ただそれだけが一人の人間の人格をまるまる変えるなんてことは、それがたとえどんなことでもそんなことはないんだよ。そう思える時は、実はたいいそれ以前の積み重ねがあるんだ。それはきっかけにはなるかもしれない。けどどこまで行ってもそれはきっかけでしかない。人間は日々の積み重ねの中で、少しづつしか変わっていけない生き物なんだ。お前らが今回のこれをきっかけにして親子としてやり直したとしても、根っこ所で変わってなきゃ、結局はまた同じことの繰り返しになるだけなんだよ」

「じゃあ、どうすればいいのよ……私達は……」

都子が言う。泣き伏しながら。

「わたしに聞くな。お前らが決める。話し合え」

「話し……合う……?」

「そうだ。お前らに足りないのはそれだったんだ。助言ならいくらでもしてやる。だけど最後の決定自体はお前らが、自分達で決めなきゃいけない。だってそうだろ。これはお前らの問題なんだ。仮にわたしが今ここで、一方的にお前らがどうすべきかを決めたとして、それでお前らは納得出来るのか? 文句一つなくそれに従うのか?

そんな簡単なものじゃない。そんなんじゃ一生胸の内にしこりとして残るのがオチだ。加えてそれは、何か都合が悪いことが起きた時の言い訳にもなっちまう。これはあいつが決めたことなんだ、だからあいつのせいだ、私が悪いんじゃない。だから、最後の結論に至る、そこまでは誰の力を借りてもいい。わたしでも、ババアの知り合いでも、茜の知り合いでも、家庭裁判所でもなんでも。でも最後だけはお前らで決めなきゃいけない。話し合って、存分に、納得いくまで、一時間でも一日でも一週間でも一カ月でも一年でもいい、お前らの人生を決める決断なんだ、考えなしにだけはならないように、死ぬほど話し合って、そして決める。それで持ったその決断に誇りを持って。決して後悔するな。たとえどんな結果になったとしてお前ら二人がどこかで顔を合わせる時が来たら、その時は笑って話せるように」

返事はなかった。

ただ都子と茜のすすり泣く声だけがしばらく室内に響いた。

都子と茜を徹底的に話し合わせることに。

これが、今回わたしが考えに考え抜いた末にたどり着いた手段だった。

シンプルだけど、これしかないと思った。この親子の抱えていた問題とは、この『二人で話し合う』というプロセスがすっぱり抜け落ちてしまっていたことであつたんだと思う。二人共、自分の気持ちを相手に伝えられないままに、話す機会だけを失ってしまった。そのせいで、お互いこう思っているに違いない、という宙ぶらりんな関係になって、そこに落ち着いてしまっていた。

「……いろいろひどいことも言ったけどさ。茜が都子さんを想う気持ちも、都子さんが茜を想う気持ちも本物ではあるんだと思う。だけれどね、あなた達二人のは、それぞれどちらも中途半端なのよ。追い詰められれば、強くその想いを意識出来るけど、そうならなければ、日常ではそれが出来ない。それは親子の愛としては正直不十分なんだと思う。そう、中途半端。結局今回のこと、何がいけないか

って何もかもが中途半端だったのがいけなかったのよ、きつと。本当に愛していると胸を張って言うんなら、喧嘩しても、たまに憎らしく思ったりしても、それでも意地でも一緒に暮らすべきだったのよ。逆に愛せないというんなら、綺麗さっぱり籍も外して、茜をどこかの養子に入れるなりなんなりして、きっぱり縁を切りながら、なおかつ互いがちゃんと普通に生活できる状態にすべきだった。あなた達はどちらもしなかった。すべてが中途半端なままなんとなく親子であり親子でない関係をだらだら続けていた。どっちにも未練を残して、どっちつかずになっていた。あなた達に必要なのはケジメなのよ。どうするにしても、今の中途半端にケジメをつけて、新しい生活を始めるべき。だから、話しな。心行くまで。もうこれ以外の結論はないというところまで。徹底的に」

わたしは言った。

「……はい」

都子が応えた。

疲れた。

どつと十年分くらいは疲れた気がする。

だけど、これで終わりじゃない。二人が出した結論の責任を、わたしは生涯を持って取らなければならない。

そう決めたから。

お節介って疲れるなあ。もうやだ。もうやんない。二度と他人の面倒なんて見るもんか。

帰ろう。そう思いわたしはいまだすすりなく二人に背を向ける。

あとは親子二人で話すべきだ。助言はすると言ったけど、実際助言なんて必要ないと思う。茜はあれで賢い子だ。都子はなんだかんだ言って悪い人じゃない。

あの二人なら、きつと正しい。少なくとも正しいと思える答えを導き出せるだろう。そう信じて、わたしは立ち去ることにする。

ふと廊下でのびてるあんちゃんが目に入る。おっと。こいつが起きたらまたややこしいことになるな。邪魔だから持っていこう。わ

たしは男の髪の毛をつかんでずると引つ張りながら、外へと向かう。

ああそうだ。言い忘れていたことがあった。これもちゃんと忘れずに言っておかなければならない。

「茜」

茜がゆっくりと顔を上げた。

わたしはその泣きっ面に笑顔で言った。

「もしさ、話し合いの結果お母さんと離れて暮らすことにして、いくあてがなかったら遠慮せずうちにおいでね。勝虎が待ってるからさ。わたしは歓迎してやんないけどね」

「うん……ありがとう」

茜は笑った。

あ、あと都子にも言うことがある。

「あと都子さん」

都子が顔を上げる。その時の動きが茜にそっくりなので、わたしは思わず笑いそうになる。

「このぶっ壊しちゃった扉、弁償しますんで。一段落ついたらうちに請求書送ってくれちゃってください。宛先は、先陣岬町須加谷四八三、小西勝虎宛で」

10

突然奈津美から電話がかかってくる。電話の内容は、一言で言うて日々の幸せのおすそ分け。わかりやすく言えば子供ののろけ話。わたしはそこで奈津美から息子がこの前初めて歩いたのだという話を延々聞かされる。ハイハイから物を掴んで立ちあがるまでの描写を一時間、掴んだ手の話すまでの描写を一時間、最初の一步を踏み出すまでを一時間、しっかり歩いた過程を一時間、「ロード・オブ・ザ・リング」の上映時間をはるかに上回る計四時間を費やした、大スペクタクル叙事詩としてわたしは、奈津美の子供の歩いた話を聞

かされる。よく晴れた青空はいつの間にか色鮮やかな夕焼けへと変わっていた。

ふと思いついてわたしは奈津美に訊いてみる。

「ねえ、奈津美。子供、可愛い？」

「え、何言ってるのよ鱈子。可愛いに決まってるでしょ。鱈子も早く子供は作った方がいいよ。人生観変わるよ、マジで。優太が産まれる前はね、正直わたし世の中にいてもいなくてもいい人間だよな、って思ったりもしたんだけど、今は違うの。子供が生まれたらね、この子、わたしがいなきゃ生きていけないんだな、って思ってる、そしたらわたし世の中に必要じゃん、この子育てるっていう役割があるじゃんって思えるようになった。うん、そう。

わたしなんかみたいなのも世の中必要なんだよね。で、きっとこの子も必要。この子が大きくなって、そうしたらまたこの子が自分の子供を育てていく。命って、まあそんな感じで連鎖なわけだからさ、その一部分であるわたし達はみんな必要な人間なんだよね、多分さ」

「へえ、そう」

正直後半カットでいい。奈津美の人生観なんて知らん。

『可愛いに決まってるでしょ』

わたしが聞きたかったのはそれだけ。で、それが聞けたから充分。

「奈津美」

「何？」

「立派な母親になってね」

「え、何言ってるの？ 鱈子もね」

「わたしはもうちよい先」

世の中に「母親」という人種の人間はいない。そういうカテゴリがあるだけだ。母は強しとよく言うけれど、それは幻想で、母親という存在すべてが強いわけではない。強い人の蓋を開けてみたらそれがたまたま母親だったというだけだ。弱い母親だっている。結局は個人に還元される。強い人間は強く弱い人間は弱い。優しい者もいればひどい奴もいる。

子供を愛す母親もいれば愛さない母親もいる。

そういう人達を、「母親なのに」という理由で責めることはできない。

悲しいかな、それが現実だ。

でもそんな厳しい現実の中で幻想の方をこそ現実にしようと奮闘するような人はたくさんいる。そして喜ばしいことは、世の中の大半の母親は、そういう努力をしている母親であろうということだ。悲しいことは、中には幻想を幻想と見切りをつけて、楽な現実に甘える母親が確かに少なからずいるということだ。

わたしは出来るならば、当然前者でありたい。けれど、今はちょっといろいろ考えすぎて、完璧に自分は前者になれるという自信がないから、子供を作るのはちょっと控えようと思う。

庭にある古ぼけたブランコ。いつかあのブランコで自分の子供と一緒に遊ぶことが、今のわたしのささやかな夢だ。

柴崎都子襲撃(?)から一週間弱が経っていた。勝虎には、あの日、茜は自分の意思で母親と今後について相談に行ったと嘘を伝えておいた。勝虎は心配そうにしながらも、あっさりわたしの嘘を信じた。バカで良かった。

茜からの連絡は一切なかった。まさか本当に一週間近くもぶつ通しで話し続けているわけではないと思うから、そろそろなんらかのアクションを起こしてもいいはずだとは思うのだが。わたしは微妙に茜のことが心配になってくる。自分から連絡を取ってみようかとも思うのだが、あの場をかつこつけて去った手前、それもなんだか気まずい。しかし何気につっこう気になって、妄想が膨らむのもまた事実だった。まさかあの後話がこじれ、取っ組み合いの大喧嘩にでもなったあげく、どっちかが包丁を持ち出して、グサーみたいな展開になってないだろうかとか本気で心配する。もしそうなら、いたら、どちらが怪我したにせよそれもまたわたしの責任だ。わたしも切腹の準備くらいはしておかなければならないかもしれない。白装束も買わなくては。

とか真剣に頭を悩ませていたら、ある曇り空の昼下がりに、唐突に柴崎茜がわたしの家を訪ねてきた。

「茜……」

玄関。扉を開けた所に、笑顔で立つ茜の姿を見ながら、わたしは思わず涙腺が緩みそうになる。年かになや？

「おばさん、おひさー」

茜は至って元気そうだった。この前おいおい涙を流していた時とはまるで別人のようだ。それだけで察することが出来た。話し合いはうまくいったのだ。互いがしっかりと納得する形で。

「あんたねー、連絡の一つくらい入れなさいよ！」

「あはは。ごめーん。でも、せつかくだからちゃんと会って話したくって。勝虎さんはいないの？」

「バーカ。会社勤めのサラリーマンが平日昼間にいるわけないですよ」

「あ、そっか。残念」

「まあいいや。上がってく？」

「え、いいよ。すぐ行くから」

「すぐ行くって……なんかの用事の途中なの」

見ると、茜は左手にコンビニのビニール袋を提げていた。買い物途中か何かだろうか。いやしかしと思う。こんな田舎の町が買い物を通り道になることなどあるだろうか？

「で、どうなったの？」

「何が？」

「とぼけんなって」

「あはは、ごめん。うん」

茜は少しはにかむように笑い、言った。

「私ね、お母さんと離れて暮らすことにした」

「そう」

ほんの少しだけ、さびしそうな影が茜の表情に射すのをわたしは見逃さなかった。

「おばさんの言ったこと、多分だいたい正しかったんだと思う。私とお母さんは、確かに親子の愛情がなかったわけじゃないけど、でもそれは一般的な、普通の家庭の親子の持つものは少し違ったんじゃないかな、なんて。私達は、普通の親子のように暮らすことはできない。それで互いに幸せになることはできない。悲しいけど、それがわたしとお母さんの二人で話し合っただけの結論」

「そう……」

「それで私、お母さんの親戚の家で暮らすことにしたんだ。今は毎日楽しいよ。周りはみんないい人だし、通信制の高校にも通わせてもらうことになったし」

「そう。良かったわね」

わたしは安心する。さびしさの影よりも、ずっと多くを占める茜の笑顔に。

「でもねおばさん、聞いて」

「何？」

「わたし、今はお母さんのこと好きだよ。そりゃ母親として失格なのかもしれないけど、一人の年上の友人として、人生の先輩としてわたしはお母さんのことが好き」

「そっか」

茜に吊られてわたしも笑った。

どうやら茜は彼女にとって最高の結末にたどり着いたようだった。いや、違うか。手繰り寄せたのだ、茜は。自分の力で、この結末を。わたしは何もしていない。ただちよつとのきっかけを与えただけだ。そういう過程も含めて、すべては最も望ましい結果を得たようだった。わたしは心の底から安堵する。

おめでとう、茜。

「茜」

「何？」

「これ、持っていきな。あんたのだよ」

わたしはいつ茜が来てもいいようにと、玄関に置いてあった小さ

な置物を手に取り彼女に向かって放り投げる。茜を受け取ると、ふと忘れていたものを見つけたかのような顔をして、つぶやいた。
「これ……」

それは、皆で柏木のショッピングモールに行った時に買った、小さな三つの人形の置物だった。

「……ありがとう、おば……鰐子さん」

「無理すんなって」

「あはは。はい、おばさん。それじゃあ、私、もう行きます」

「ああ、いつでも気が向いたら遊びにきな」

「うん、そうする。じゃあまた今度」

こうして、

柴崎茜　ぬらりひょんガールはその日、わたしの前から退場していった。

かと思ったら、

「あ」

「え、何？」

「そうだそうだ。わたしからもおばさんにも渡すものがあったんだ。って言うか今日はそのために来たんだ。はい、これ」

と言って茜はわたしの前に手に持っていたビニール袋を差し出した。

「何これ？」

わたしは袋の中身を取り出し確認する。するとそれは、

「回覧板？」

だった。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる？　???

「え、ちよっと待って。どういふこと？」

それは確かにこの町内の回覧板だった。順番的にこれが回ってくるのは……えーと……。

「あ、そうか。肝心なこと言っていなかったね。私が今お世話になっ

ぬらひよんガール 完

第四話 シザーハンザー（前編）（前書き）

前回までのあらすじ！

謎の怪しい館「怪死異館」に集められたいたい十人くらいの招待客！ そしてお決まりの様に殺人の予告が為されお決まりのよう
に一番意地悪そうな男が殺されお決まりの様に現場は密室でお決ま
りの様に全員にアリバイがなかった！

そこに颯爽と現れた名探偵！ 彼は招待客全員を見回すと言った！
「坊主が上手に屏風にぼじゅ……！」

もちろん以上のあらすじは嘘っぱちだから良い子は歯を磨いて早
く寝ような！

第四話 シザーハンザー（前編）

1

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

俺は深夜の柏木市を徘徊する。

ぐるぐると廻る。

廻る。廻る。

何かを探している。

何を探している？

何かは“何か”だ。

切れるものだ。

斬れるものだ。

キレるものだ。

俺は切断したいのだ。

切り刻みみたいのだ。

ぶつ切りにしたいのだ。

千切りにしたいのだ。

ざっくりやってしまいたいのだ。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

カール・マルクスは唯物論を唱えた。

つまり奴はこう考えていたわけだ。

世の中のすべての本質は物理的現象の中にこそその意味を持つ。

時代時代の思想、精神、観念、そう言ったものはすべてそれに付随する副次的なものでしかない、そう考えた。

俺はそれに、結局目に見えないものなどに意義などないのだという風に、歪んだ解釈を加える。

俺はそれで、自らの存在にアイデンティティーを植え付けようとする。

そうだ。そうだ。そうだ。

すべては物が先行するのだ。意味などそれを見た者の、持つ者の後付けなのだ。

世界に神の意思などなく、人間は起こったことに関して、後から神の意思を想像したに過ぎない。

“運命”とは、つまるところ確率なのだ。

すべてが偶然の産物。

俺が俺であること。

あいつがあいつであること。

それ自体にはなんの含みもない。

だから俺達は、俺達自身でその含みを考えるしかない。

俺は、俺自身の持つ含みについて考える。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

俺は誰だ？

どうして俺なんだ？

なぜあいつではいけなかった？
なんでこんなことになった？

誰のせいなんだ？

俺はどうすればいい？

どう生きればいい？

俺はなんだ？

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

意味などない。答えなどない。

どこにも。

だから俺はでっちあげる。

自分に都合の良いように、自分についての含みをでっちあげる。

自分の存在を、行動を正当化する。

悪いことだとわかっている。

でもする。

そうでもしなきゃ、俺は今自分が生きているという、その意味を
でっちあげることができないから。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

さあ、今夜は誰を殺そう。

何を切断しよう。

恨んでくれて構わない。

呪ってくれても構わない。

ただ、大人しく殺されてくれればそれで良い。
狂ってる？
どうだろう。

ただ言えるのは、俺はあんたら別に何も変わらないってことだけだ。

あんたらがそうであるように、俺も他人より、自分の方がちょっとだけかわいいだけさ。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

ジヨギン

.....

2

わたしは警察が嫌いだ。

と、言うのも別に公権力に対する反旗だとか、官憲の不条理な暴力に対する反対だとか、そういうご立派な大義名分があるわけじゃなくて、単純に、わたしの場合いつ逮捕されても不思議じゃない人生を送ってきていたからである。そして自慢じゃないが、もし今警察に捕まれば最低三年くらいはシャバに出てこられない自信（？）があった。

だからわたしは、今でも警察官と道ですれ違う時は、無意識にこうと目を合わせないようにしてしまうし、サイレンの音を聞くと、自然に体がいつでも逃亡できる態勢を取ってしまう。っていったい

何自慢だよ、みたいな感じだけど、とにかく何が言いたいかと言うと、要するに最初に戻って警察が嫌いだという話だ。

でもってなんで突然そんな話をするかと言うと、ある日我が家に突然刑事が訪ねてきたからである。

午後三時ごろ、部屋の掃除を終えて一段落しているところに呼び鈴がなり、わたしはぼけーっとしたまま玄関に出た。するとそこにスーツ姿の見知らぬ男性と、若い女性が立っていた。はてどなた様でしたっけと思い、尋ねると、おじさんの方が懐から警察手帳を取り出し、N県警の岩瀬です、と名乗ったのだった。

「警察の方……ですか？」

「はい、そうです」

「何かあったんですか？」

「まあ、聞き込みです。ご協力お願いします」

岩瀬は警察手帳をしまつて言う。

「そちらの方も刑事さん……なんですか？」

と、訊きながらわたしは目で岩瀬の後ろの女性を示した。

女はまたずいぶんと若かった。少なくともわたしより年下ということはある得ないけれども、それでもまだ二十代半ば程にしか見えない。高く見積もっても三十歳にも達していないだろう。

多分、まだ新人なのかなと思う。女は露骨に挙動不審だなんてことは流石にないけれども、どこか今の自分のいる場所が居心地悪くて、落ち着かないといった空気を全身から漂わせていた。

「あ、は、はい。紫野と言います」

はっとしたように顔を上げ、女刑事は名乗った。で、ついでにペこりとお辞儀をする。

なんだかわたしはそれで余計に紫野が刑事に見えなくなってくる。日本の治安は大丈夫なんだろうとか、柄にもないことを考えてしまふ。

紫野の言葉を遮るように、と言うか無視するようにして岩瀬が言った。

そしてそれを聞いてわたしは思わずぎよつと身構えてしまう。岩瀬の口から飛び出た言葉は、のほほんとして平和ボケしていたわたしの頭ではまったく想像もしてみなかつたものだったからだ。

「柏木市で起きている連続殺人、及び殺人未遂事件についてです」

「え……？」

ちよつと待て。なんだつて？ 連続殺人？ 柏木で？

「ご存じないですか？」

わたしの驚いた様子を見て岩瀬が言う。

「ええ、そんな、いつの話なんですか？」

「最新の事件は一昨日の夜に起きていますよ。被害者の名前は金城敦子。二十七歳、女性。市内の小さな食品会社の事務員をやっていました。それが帰宅途中何者かに襲われ、殺害されています。暴行の形跡はなく、所持品も持ち去られていない、純粋な殺害目的の犯行です。同様の事件がここ一年間で他に二件、未遂を含めれば五件発生しています。この辺りでは稀に見る大事件として、結構住民の間では噂になっているようなんですが、本当にご存じないんですか？」

「ええ、まあ……」

「ふうん。まったく聞いたこともない？」

「ええ」

「ふうん」

刑事は唸る。あれ？ なんかわたし疑われてるっぽい？

「あの、でも刑事さん。わたし、実は二カ月前にここに引っ越してきましたばかりなので、それでもしれませんが」

「ああそうですか。以前はどこに？」

「千葉ですけど」

「お一人で引っ越してきたんですか？ 言っちゃなんですが、こんな辺ぴな場所に」

「婚約者とです」

「婚約者？ はあ、結婚するんですか？ あなた」

「ええ、頃合いをみてのつもりですけど……」

「そりやおめでとうございます。それですね、気を悪くされないんでほしいんですがね、一応あなたの話の裏を取るために、お名前と、以前の住所、あなたと、そのあなたの婚約者のもの、教えてもらえないですか」

「いいですよ。わたしが相田鰐子、婚約者は」

「漢字はどう書きます？」

「木偏に目の相に、田んぼの田。名前は普通に鰐の子と書いて鰐子です」

わたしはいつもそうであるように、ちょっと気が引けながら自分の名前を説明する。

「ふうん、へえ。鰐子さん。珍しいお名前ですね」

「よく言われます」

あつ、なんかムカつく。

「それで婚約者の名前は小西勝虎。小さい西に、勝利の勝、後は動物の虎です」

そのままわたしは大学時代住んでいたアパートの住所を伝え、勝虎の住んでいたアパートに関しては番地までは思いだせないと思直に伝える。岩瀬の背後で紫野が必死の表情でそれをメモしていた。

「それで、一応これ見てみてください」

岩瀬が続け、懐から一枚の紙を取り出す。

それは似顔絵だった。ニット帽を被った、目つきの悪い、と言うか暗い感じの二十歳前後に見える男の顔が、紙には描かれていた。

「目撃者の証言から描き起こした似顔絵です。この男に見覚えはありませんか」

「ない……ですね」

わたしは正直に伝える。

似顔絵の青年は、目につくような特徴こそ持っていなかったが、その暗く、濁った眼光は、一度見れば忘れがたい印象を相手に与えるものだった。似顔絵故の誇張と言ってしまえばそれまでかもしれない

ないが、その表情は、まるで世の中のすべてを恨むかのような、そんな負の感情を宿しているように見える。しかしわたしにはそんな瞳を最近目にした覚えはない。

「ふうん、そうですか。失礼ですが、お相手の、勝虎さんの写真か何かあれば、見せてもらってよいですか？」

「はあ？　なんでですか？　勝虎は関係ねえだ　ないじゃないですか」

「一応ですよ。一応」

思わず舌打ちが漏れ　そうになるのをわたしはすんでのところでこらえる。元々の警察に対する拒絶反応も相まって、刑事の失礼な言葉に、自覚できるくらいにつっけんどんな態度が出てしまう。いやわたしだって、ここで事を荒立ててもなんの得もないことぐらいはわかっているのだが。

「そこにありますよ、写真」

わたしは玄関にいつも置いてある写真立ての写真を指し示して言う。ちょうど一年くらい前、二人で某黒ねずみが主役なテーマパークに行った時に撮ったものだ。そこには、ニコニコと笑顔を浮かべるわたしとアホ面でピースサインを作る勝虎の姿が映っている。

「ふむ。ちよつと拝見。……仲が良さそうですね」

「良いですから」

「羨ましいことです」

「羨ましがってください」

なんか知らないけど無意識かつ微妙に喧嘩を売っているわたし。

けどそこは案外岩瀬が大人なようで（失礼？）特に不快な素振りも見せず苦笑するに留まってくれる。

「わかりました。写真はお返しします。それとですな、最近何か変わったことがあったとか、似顔絵と似てなくてもいいです、不審な人物を見たとか、そういうのがあったら、思いつく限りなんでも教えてください。いったいどんなことが事件に関係あるかわかりませんから。実際今までもね、全然関係なさそうなことが、実は事件の

すごく重要な鍵だったりすることってあるんですよ」

「はあ、変わったことや不審な人ですか。別に……」

言いかけた瞬間、わたしの頭にある一人の超不審人物の姿が浮かんだ。

そう、天狗の姿が。

……不審人物だ。間違いなく奴は不審だ。まあ事件には関係ないだろうけど、怪しいことこの上ない。もしこの後警察が天狗の所にも聞き込みに行つて、そこであのボケ老人が、「わし、天狗ですね」なんていつもの調子でぬかせば、即刻署で詳しくお話をお聞かせ願いますか的な展開になつてもおかしくない。

「どうかしましたか？」

「あ、いやー、別に。ところでその、隣の家の聞き込みつてもう行きましたか？」

「行きましたけど？ それが何か？」

「え、……えーと、何もなかったんですか？」

「何も、と言いますと？」

「いや、その、誰か、と言うか何か出てきたと言うか……」

「そりゃ出てきましたよ、女の子がね」

「ああ、茜が」

「そう、茜さん。なんでも通信制の高校の授業を受講しているとか。彼女が何か？」

「あ、いえ。なんでもありません。あはは」

天狗の奴、逃げたな。

「まあとにかく、何か思いだしたり目撃するようないことがあれば署の方に連絡を。こちらが電話番号になりますんで」

「はい」

「それと問題の殺人犯、まだ先陣岬町では被害は出ていませんが、だからと言って安心していいものでもありません。くれぐれも日ごとから気をつけるようにしてください。特に夜中の一人歩きはなるべく避けるように。これまでの六件の犯行の内、四件が若い女性が

被害者であり、六件すべてが陽が落ちてから起こっていますんで

「はい、気をつけます。ありがとうございます」

わたしは愛想よく言う。

刑事はそれで帰ろうと、半分背を向きかけたが、そこでふと思い出したように向き直ると、そうそうと前置きして口を開いた。

「言い忘れていましたが、犯人の特徴として、犯行に大きなハサミを使っているということが挙げられます」

「ハサミ？」

「証言によると、刃渡りがメートル近くあるとかで……」

「はあ？ そんな大きなハサミなんてあるんですか」

「いやね、我々も流石にメートルはないと考えています。人はパニックに陥ると錯覚を起こしますから。なにせ被害者の中には右手がハサミになってたなんて証言をする人もいます。うん、まあ錯覚に間違いはないでしょう。けれども、犯行にかなり大型のハサミが使われたことも事実です。それは鑑識の見立てとも一致していますから。おそらく特注品でしょうな。その線からも捜査を進めてはいるんですが」

「大きなハサミ……って、あ、もしかしてそれってあれですか？

シザーハンザーとか言う……」

その名前が出た瞬間、ぴくりと岩瀬は眉を不快そうに歪め、

「まあ、そういうふざけた名前で呼ぶ輩もいるようですがね」

とだけ言った。

やっぱりそうだったかとわたしは納得する。引越し初日の樹林の一言からこつち、ずっとわたしの途中で意味不明だった「シザーハンザー」という言葉の意味がこれでやっとわかった。が、謎のままのこともまだある。

「『ハンザー』ってなんですか？」

「は？」

「いや、明らかに間違ってるじゃないですかそれ、英語として」

「知りません」

岩瀬が明らかに気分悪そうに言う。当たり前か。わたしが岩瀬の立場だったら同じようにムカつきもするだろう。

「とにかく、夜の一人歩きは控えるように。わかりましたね」

「ええ、はい」

もう一度念を押すと、わたしの疑問をほったらかしにしたまま、刑事達は我が家の敷地外へと去って行った。その際、紫野はまた刑事らしくなくぺこぺここと頭を下げた。

シザーハンザー、か。

まったくふざけた名前だが、まさか連続殺人犯の通称だとは考えてもみななかった。思い返してみれば、ここに引越してきたからわたしはそんなヘンテコな通称を持つ連中とばかり関わってきたように思う。天狗に、ねこ大王こと樹林信二、そしてぬらりひよんガールこと柴崎茜。変人 近所迷惑 家出少女ときて、お次がまさか殺人鬼とは。レベルアップしすぎ。

けどまあ今回はさすがにわたしには関係ないかなと思う。事件が起きているのは、ここ先陣岬町ではなく隣の柏木市だと言うし、わたし自身探偵よろしくするようなキャラでもない。確かにわたしは数年前まで血と暴力にまみれまくっていたが、それはなんと言うか、殺すこと自体が目的ではないという意味で、いわゆる一般的な殺人事件とは性質に違う。「血と暴力」であろう。今こうして刑事達の話聞いても、わたしにはシザーハンザーとやらの一件が、ことは違う、どこか別の世界の出来事のようにしか感じられなかった。関係者の方々に悪いが、所詮は「テレビの中の事件」のようなものといったところだろうか。

まあ、もし自分の知り合いが事件に関わりでもすれば、その印象は変わるのだろうが。

しかし間抜けなわたしには、それがいったいどういうことを意味するのか、そんな簡単なことすら、その時にはまだ、まるで理解することができていなかったのだ。

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

俺は深夜の先陣岬町を徘徊する。
ぐるぐると廻る。

廻る。廻る。

むしゃくしゃしている。

俺は腹が立っている。

怒りを感じている。

いったい何に？

何かは“何か”だ。

俺の中でぐつぐつと感情の湯が煮えたぎっている。

けれどもそれがどんな味なのかは火をくべる俺にもわからない。

最近そんな日々がずっと続いている。

満たされない欲望？

良心の呵責？

アハハハ。

笑える。

笑える。笑える。

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

人間に行動を起こさせる精神の動機は大きく二つに分類することができる。

すなわち、欲望と恐怖だ。

俺に対峙した時、人は例外なくその内の後者、恐怖を原動力にした行動を取る。

逃げる奴。

助けを呼ぼうとする奴。

抵抗する奴。

彼らは恐怖している。

俺にじゃない。

死に対してだ。

人は死が怖いのだ。

それは本能であり、同時に理性でもある。

そういう意味で、俺が今まで殺した三人も、殺し損ねた他の三人も、皆どこまでも普通の人間だった。

奴らはある日、俺という当たり前でない存在に直面し、当たり前
の行動を取って、当たり前前に死んだ。

それだけだ。

それだけだ。

それだけなんだ。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

俺はなんで怒っている？

何が気に入らない？

わからない？

嘘つけ。

本当はわかってる。

「かわいいそう」

はじめての殺し。

俺が一線を越えた日。

考えに考え抜いて、俺が俺の生き方を決めて、実行に移した日。

殺す直前、女はそう言った。

俺を憐れんだ。

俺が何年も考え続けて、苦しんで苦しんで導いた答えを、女はたつたの五文字で、一秒にも満たない時間で完全に、完璧に、完膚なきまでに否定したのだ。

思わずカツとなっていた。

気がついた時には女の首がごろりとアスファルトの上に転がっていた。

後悔した。

もちろん、殺したことをじゃない。

殺す前に、女ももっとちゃんと話すべきだったと後悔した。

弁解したかった。

俺はかわいいそうなどではないのだと。

そついう悲劇の主人公じみた考えは捨てることにしたのだと。

俺は俺に与えられた宿命を全うすると決めたのだと。

覚悟を背負ってあんたの前までやってきたのだと。

それを「かわいいそう」などと言うありふれた、くだらない凡百の言葉で切り捨ててくれるな。

俺は納得して、俺の生き方を生きることにしたのだから。

けれどももうそう弁明をする相手はいない。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

わからない。

俺は俺がわからない。

今俺がしていることは、本当に初めに定めた目的に沿った行いのだろうか。

それともただの憂さ晴らし？

けれどもそんなことどちらでも同じであることも俺はわかっているのだけれども。

なぜならすべては物が先行するのだから。

すべては事象が先にあつて、付随する意味などいくらでも後からでつち上げられるのだから。

俺が殺した人間はもう生きかえないのだから。

俺が殺した事実はなくならないのだから。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

わかつてる。

きっと本当はもう全部わかっている。

それでも信じる。

他に道はないのだと。

だから俺はこれからも殺す。

殺し続ける。

誰かが俺を殺してくれるまで。

チヨキーン

チヨキーン
チヨキーン

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

よう、お嬢さん。

夜中の一人歩きは危ないぜ。

ん？ これ？

そう、ハサミだよ。

俺の右手はハサミなんだ。

おいおい、逃げるなよ。つれないな。

ああ違う。逃げていいのか。

そしたら俺は殺す。

それですべてオーケーってことで。

俺は俺の中に一ミリ平方メートルぐらい残った良心で胸を痛めながら女の子を追跡する。

別に俺は特別若い女の子を選んで犯行を行っているわけではない。ただ道で最初にピンときた相手を選んでいただけだ。

だから死ぬことになるのに若い女の子が多いということも、すべて、“運命”という名の単なる偶然だ。

俺は　俺が、少女を憐れんでやることにする。

かわいそうに。年頃なんだから、もっと街の方をほつつき歩けばよかったものを。わざわざこんな田舎を出歩くなんて。

いや、それともこの辺りに住んでいる？

まあ、どっちでもいいか。

俺は殺す。

少女は死ぬ。

それだけだ。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

4

重大な事態というものは、たいていの場合唐突に、なんの前触れもなく訪れるものだ。もし神様なんて奴がいて、人の運命を司っているのならば、そいつはきつと生粋のサディストなのだろう。突然の悲劇や喜劇に、悲しんだり喜んだり怒ったり狂ったりして狼狽する人間を見て、暇をつぶしているに違いない。ワイングラスを片手に、ふんぞり返って髭をすごいているのだ。まあ、知らんけど。

とにかくそんなわけだから、わたしの耳にその報が届いたのもまた突然だった。

金曜日の夜も更けた頃合い、残業で帰りが遅くなっている勝虎を、ラップをかけた夕飯を前に、パジャマにカーディガンを羽織った格好でテーブルに突っ伏しているというドラマのワンシーンみたなシチュエーションでいるところに、不意に電話がかかってきた。

それでこれもドラマみたいにあら勝虎からかしらん、なんて考えながらわたしがほいほいと受話器を取ると、電話の向こうから、アホ丸出しの千恵の泣き声が飛び込んできたのだった。

何事かと思う。でもその時点ではまだどうせ大したことではないのだろうと鷹をくくっていた。何せ千恵という少女は本当にもうしよっちゅう泣いているのだ（同時にその倍は笑っているのだけれど）

。痛いことや嫌なことがあればすぐピーピー泣く。再来年にはもう中学生なんだから少しはレディとして背伸びくらいしたら？って感じなのだが、まあそれはさておき、オオカミ少年ではないけれど、あまりにもいつものことすぎて、千恵の泣き声を聞いたくらいじゃすぐに危機感を持つことなどはできなかった。

しかし少し話す内、わたしは何か、微妙な違和感のようなものを感じ始める。千恵の様子に、泣き方に、どこか普段のそれとは異なる雰囲気を感じ取る。けれどもその正体はと思って千恵の話に真剣に耳を傾けても、あまりにその内容が支離滅裂なものだから、聞けば聞くほどわたしは余計に混乱してきてしまう。

で、困っていると、突然に千恵の泣き声が遠くなってくる。それで代わりに電話口到天狗が出てきたのだった。

「いやすんまへんな、鰐子さん。こないな夜中に急に騒がしゅうしてしまいましたな」

「はあ、まあ構いませんけど。千恵に何かあつたんですか？」

「いやいや、千恵ちゃんは何にもないですわ。ただちいつと混乱しちよるけえ、誰か安心できる人と話したかつたんやと思います」

「『は』？ それに混乱って……」

はつとする。今天狗と一緒に暮らしているのは千恵だけではないのだ。

「茜に何かあつたんですか？」

「いや、まあ大したことやないですから」

「でも千恵があんなに取り乱して……」

「ああ、まあ千恵ちゃんはまだ子供ですけえな、不安なんですわ。せやけど大事にはなつとりませんです、お医者さんも命に別状はない言うてましたから」

「医者？ 命？ 茜の奴、怪我したんですか？」

「まあ、ちよつとですわ」

「事故とかですか？」

「え、いや事故じゃあないんですけえ」

「事故じゃないって、事件なんですか……？」

「んー、まあそうなるのかもしれないんですが……。とにかく茜ちゃんは無事ですから、鱈子さんもほんに心配せんでも」

「どうにも煮え切らない天狗の様子に、わたしはふと思い付き、

「もしかしてシザーハンザーとかいう通り魔ですか？」

と、半ば冗談のような気持ちで言った。だが

「……まあ、そうですな」

ふっと急に現実感が薄れていく気がした。知っているけれど、決して自分と関わることはないと思っていた世界と、自分の今立つ場所が突然に繋がったのだ。

いや違う。後悔する。わたしの認識が甘かった。事件は今すぐにも歩いていけるような隣町、柏木市で起こっていたことなのだ。外国でも、テレビの中でも、ましてや異世界だとかですらない。すぐ目の前の出来事だった。いつでもリンクし得たのだ。わたしはそういう意識を持って、先日刑事に話を聞いてから、シザーハンザーとやらの一件に向き合うべきだったのだ。心の準備、物理的な準備、両方しておくべきだった。

「……今、病院ですか？」

「は？ ええ、そうです。柏木総合病院ですけえ、それが」

「すぐに行きます！」

「え？ いやいやいや氣い使わんとも大丈夫ですわ。茜ちゃんは

」

ガチャン！

と受話器を叩きつけるように置く。天狗が何か言いかけていた気もするが、既にわたしの気持ちはそれどころではなくなっていた。

茜。柴崎茜。

生意気でへらず口ばかりで人のことナメくさってる本当にムカつく小娘。つい先日、やっと自分の歩く道を自分で決めることのできたまだ子供の、一人の女の子。ムカつくけれど同時になんだんかんだでわたしはあの子のことが多分好きなのだ。それは勝虎や天狗や千

恵に対する想いと一緒だ。人間つてのは不思議なもので、好きと嫌いという反対の向きの感情が、案外同時に存在するものだ。

わたしは服を着替えるのももどかしく、パジャマのままダツシユで家を飛び出す。そのまま真っ直ぐ樹林の家に入り込むと、ああこんばんは、どうしたんですか相田さん、ずいぶんあわててなんて呑気な面構えをしている樹林を素早く「説得」して車のキーをうば

借り受け、彼の車に乗り込み柏木総合病院を目指す（うちの車は勝虎が通勤に使ってるのだ）。

病院までの、三十分超の時間がどこまでももどかしい。茜にどうか無事でいてほしいと願う。同時にハンドルをきりながらわたしは周囲のすれ違う人間にも注意をする。

シザーハンザー。舐めた名前で舐めたことしやがって。見かけたらブチ殺してやる。

キャノンボールなドライブを経て、車は柏木総合病院に到着する。柏木総合病院は、隣接する市町村も含めたうちで最大規模の、そして唯一救急病棟を構えている病院である。夜も更けたこの時間は、既に正面玄関が閉まっているので、わたしは二十四時間開いている裏口へと直行する。ガラスの扉を思い切りよく開くと、中の受付にぎよつとした顔の若い看護師の姿があった。

わたしは彼女が慌てて何か、紋切り型の文句だろうが、言おうと口を開きかけた瞬間に先制で声を荒げる。

「柴崎茜の病室は！？」

返答までには若干の間があった。多分、いきなりの出来事に頭の中をいろいろと整理していたのだろう。そしてその末に彼女が導いた返答は、取ってきたような愛想笑いややはり紋切り型の一言だった。

「今は面会時間ではありませんので、申し訳ないですが時間をあらためてお越しください」

「茜はわたしの妹なんです！」

もちろん嘘だけだ。

「ご家族の方、ですか？」

ちよつとだけ看護師の様子が変わる。よし、いい感じだ。

「そうです!」

「すいませんですが、お名前は？」

「相田鰐子です!」

「はあ、あれ、名字が違うようですけど」

「生き別れなんです!」

「生き別れ、ですか？」

また看護師の様子が変わって今度は疑いの眼差し。やべっ、生き別れはなかったか。

「ちよつと確認してみますんでお待ちください」

なんて看護師が疲れた愛想笑い(夜勤で眠いんだろう)を浮かべながら電話機にゆつくりと手を伸ばすものの、わたしは待つてられるかという気分で、最終手段に出る。

わたしは看護師の後方を指さし、そして言った。

「あっ、あれなんですか？」

「え？」

くるりと彼女が振り返ったところに、

「とっつ」

ズビシッ

「はっつ……」

手刀を首筋に一閃。がっくりとうなだれる看護師さん。

わたしはすばやく受付の中に入ると、気絶した看護師を椅子ごとどかして据え置ききのパソコンをいじる。と、果たしてそこに病室の患者の振り分けの表が入っていた。今夜運び込まれたばかりの茜の病室はそこには記されてはいなかったが、それでもおおよその見当はついた。なぜなら、表によると現在一、二階の病室はすべて他の患者で埋まっているらしかつたからだ。つまり、茜がいるのは三階ということになる。

必要な情報を仕入れたわたしはすぐさま受付を飛び出し三階へ向

かつて階段を駆け上がる。そして二階を抜けて、三階との間の踊り場にまで来た時だった。

「うわああああああああああああああんっ！」

千恵の泣き声だ！

千恵が泣いている。大声で、泣き叫んでいる。嫌な想像が頭を駆け巡る。天狗は大丈夫だと言っていたが、もしや容体が悪化したのか、それとももつと最悪なことなのか。

声の方向へとわたしは駆ける。廊下の突き当たりの病室へと。

茜。どうかお願い！

「茜！」

勢いよく扉を開いたわたしの目の飛び込んだのは

「うわああああああああんっ！ 茜ちゃんのバカア！ あたしのメロン食べたア！ バカー！ バカー！」

「えつとー、ごめん、千恵ちゃん。千恵ちゃん寝てると思ったから食べちゃえて。って言うかこのメロンって私に買ってきてくれたんじゃないの？」

メロン食われて泣き叫んでいる千恵のアホ面と、ベッドから半身を起してものすごい元気そうにしている茜の姿だった。

……。

「あ、おばさんじゃん。どうしたの？ こんな夜中に。しかもパジヤマのまんま」

……。

「鰐子ねーちゃーん！ 聞いてよー！ 茜ちゃんがあたしのメロン食べちゃったんだよお！」

……。

ちらとベッドの横の小卓に視線を落とす。そこには確かに食べかけのメロンが一切れ置いてあった。

……。

わたしはそれをゆっくりと手に取り、

「がぶがぶがぶむしゃむしゃー！」

「ああああああ、鱈子姉ちゃんまであたしのメロンンンン!？」
涙目の千恵を横目に、皮だけになったメロンをゴミ箱に捨てると、
わたしはその場で踵を返した。

「じゃ、わたし帰るから」

「まー、まー、待ちなよおばさん。メロン食いにきたんかいあなたは」

わたしは半眼のまま再び病室の中へと振り返る。そこにはやはりどこまでも元気そうな茜の姿があつて、わたしは安心する半面ひどく空しい気持ちに襲われるのだった。

「おばさんあれでしょ？ 一応私のこと心配してきてくれたわけでしょう？ だったらさー、ほら、もっとなんかあるでしょうが。無事で良かったねとか大丈夫、とかさ、そういうの」

「じゃあ言うわ。あんたなんで生きてんの？」

「何その死んでた方が良かったみたいない草？」

「いや、その、なんていうかさー」

わたしは頭を掻きながら大きくため息をつき、そしてなんとか言葉紡ぎ出そうとする。

「わたしはあんたがシザーハンザーとかいう変態通り魔に襲われたつて聞いたから、ちよつとだけ心配してあげたのに。何？ その話は間違いだったの？」

「ううん、間違いじゃないよ。私シザーハンザーに襲われた」

あつけらかんと言う茜。

「五体満足に見えるんだけど」

「そんなことないよ、ほら」

茜は青い患者用の寝巻の上着をまくってみせる。すると胸周りに包帯がくるくると巻いてあつた。

「刺されたの？」

「え、まさか。刺されたりなんかしたら今頃こんなに元気にしてられないよ。ちよこつと切り傷ができただけ」

「……あそつ」

「あ、おばさん軽く見てるでしょー。私おばさんと違って堅気なんだからね、お腹に切り傷なんてできたの初めて。すごいびっくりしたし恐かったんだよ。死んじゃうーって思ったし」
「ふーん」

わたしは拍子抜けしてどっと疲れてしまっ。いやね、茜が無事なのは良かったって思うんだけど、なんか無駄にエネルギーを使ってしまった感じた。

「……まあ、なんにしろ大事じゃなくて良かったわ。千恵」
「メロン〜」

「あんたねえ、ちょっと大げさすぎんよ。あんたのせいで変な勘違いしちゃったじゃない」

「メロン〜」

「とにかく」

「メロン〜」

「これからは」

「メロン〜」

「……」

「メ〜ロン〜」

「わかったわかった。今度買ってあげるから。とりあえず黙れ」

「ホントに!？」

泣き顔から一転、顔をぱつと明るくさせる千恵。

まったくアホにも程がある。

まあ、それはさておき。

「それにしても茜、あんたよくそんなかすり傷一つですんだわね。一応そのシザーハンザーとかいうのはモノホンの人殺しなんでしょ?」

「うん。わたしももう駄目だと思ったよ、実際。でも偶然通りかかったその刑事さんに助けってもらったの」

「その刑事?」

「ど、どうも」

「うわっ！？ びつくりした！？ いつからいたんですか！？」

ぎょつとして振り返った部屋の隅。そこにいたのは昼間わたしの所に聞き込みに来た、二人の刑事の一人の、紫野と名乗ったあの気弱そうな若い女刑事の姿だった。紫野は昼間と同じスーツ姿で、小さく縮こまって、スーパーのビニール袋二つと共にちよこんと床に座り込んでいるのだった。

「ええと、その、最初からいました」

「あーもう、寿命が一気に縮まりましたよ。まだ心臓がバクバクいってます。なんでそんな影薄いんですか？ なんなんですかもう。先祖代々黒子の一族だったりするんですか？」

「す、すいません……」

「いや、おばさん。それ失礼極まりないよ。私の命の恩人なんだから」

「ああ、そっか。それもそうか。すいません、なんか」

「い、いえ。そんなことないです、はい。その、私が影薄いのが悪いんですから」

ペコペコと不必要な程に紫野は頭を下げてくる。

そのあまりに情けない姿に（わたしのせいかもしれないんだけど）昼間も思ったことだが、よくこんな人が刑事になれたなあと頭をひねってしまふ。と言うかそれ以前にこんな人がどうやって殺人鬼を追っ払ったかが謎だ。

「茜、本当にこの人に助けてもらったの？」

「そうだよ」

「どうやって？」

「んー？ 私がシザーハンザーにわき腹ちよつと斬られて、それでびびっちゃって、転んでもう動けないところに、紫野さんが駆け寄ってきて、こつ、鉄砲構えて動くなー、警察だーって。そしたらあいつ、ダッシュで逃げて、私は助かったの。だよね、紫野さん？」

「え、う、うん。そう」

「あー、なるほど。拳銃ですか。まあ、警察ですからね」

納得してわたしはポンと手を打ったが、そこで当の紫野が、
「えっと、その、ちよつと違うんです」
と言ってきた。

「違う？　何がですか？」

「ええとですね、拳銃を常に携帯しているのは警官だけで、刑事は
普段は持ってないんです」

「え、じゃああの時構えたのはなんだったんですか？」

「えっと、これです」

紫野は俯くと、ごそごそと横のビニール袋をあさる。そしてそこ
から取り出したのは、

『バナナ？』

わたしと茜の声が重なった。

「はい、バナナです。とつさにこれを銃みたいに構えて、叫んで、
暗かったから相手も勘違いしてくれたみたいで、本当に助かりまし
た。私も恐かったので……あ、でも、何より柴崎さんが助かってよ
かったです」

「はあ、あー、なるほど。そういうことか。バナナを暗がり拳銃
代わりにね、はいはいなるほどねー。」

そんなバナナ。

わたしはいろんな意味で急に情けなくなってきたのでその場で倒れ込
みそうになる。なんかもうアホすぎて嫌だ。

「……私、なんか急に背筋が寒くなってきた。超ウルトララッキー
だったわけじゃん。一歩間違えばっつーかもう一ミリでも踏み外せ
ば確実に死んでたじゃん」

「はい、ほんともうすいません。バナナですいません」

「いや、別にバナナは悪くないですけど」

わたしは気持ちを入れ直して紫野に向き直る。なんかもういろいろと疑問だらけだった。

「って言うか、紫野さん、でしたよね」

「あ、はい。そうです」

「そもそもなんで先陣岬町をバナナなんて持って歩いてたんですか？ むしろ拳銃を持って歩いているより謎なんですけど」

「ええと、いえ、別にバナナだけを持ち歩いてたわけじゃないです。お買い物のお帰りがだったので」

「ああ、それでビニール袋持つてるわけですか。……ん？ じゃあなんで買い物帰りに先陣岬町を歩いてたんですか？」

「それは」

「睦月ちゃんは先陣岬町に住んでるんだよ」

唐突に千恵の甲高い声が会話に割り込んでくる。

「……睦月ちゃん？」

「って誰だ？」

「ね、睦月ちゃん」

「にっこりと満面の笑顔で千恵が笑いかけたのは他ならぬ紫野だった。」

わたしと茜はぼかんとした顔で二人を見ている。

「で、紫野がうんと千恵に笑いかけ、続けて「あ」とつぶやきわたし達に言った。」

「あ、すいません。私、フルネームを紫野睦月と言っています。名乗り遅れました。すいません」

「……あ、じゃあ『睦月ちゃん』ってあなたのことなんですか」

「はい、そうです」

「ああ、なるほど……」

え？

「町内の人だったんですか！？」

「ええと、そうです」

「でも会ったことないですよ？」

「ええ、はい。会うのは今日が初めてです。えっとでも私の方は相田さんや柴崎さんのことは人づてに聞いて知ってはいました。でき

ればご挨拶には思ってたんですけど……すみません、私、時間に不規則な仕事なので……。あの、その、こんなタイミグでなんですか、今後ともよろしく願います」

紫野は申し訳なさそうにわたしと茜に向かつてペコペコと頭を下げた。ヘンテコな刑事が現れたと思っただらそいつも先陣岬町出身とは。本当にもあの町にはまともな人間はいないのだろうか。

「あなたがここにいるってことは……あの、もう一人の刑事っばい人も今この病院のどこかにいるんですか？」

「刑事っばい……。あ、ええと、岩瀬さんのことですか？」

「そうそう。その人です」

「いえ、今はいないです」

「そうなんですか？ でもほら、茜に事情聴取とかしないんですか？」

「あ、それは明日日を改めて来るそうです。今日はもう時間も遅いですし、柴崎さんのショックもまだ抜け切れていないだろうからって」

「ふーん」

一見すると茜はショックなんて特に受けていないように見える。でもそれはもしかしたら千恵やわたしの前で強がっているだけなのかもしれない。

「じゃ、なんであなたがまだここに？」

「ええと、岩瀬さんの指示で、どうせならそのまま付き添ってやれと……」

「ああそうですか。……いるいないと言えば、天狗はどこに行ったのさ？ 電話で話したからここにいると思っただけだよ」

「じっちゃんはもう帰っちゃったよ」

千恵が応える。

「そーなの？ 何気に薄情な」

「違う違う。私が帰ってもらおうよう頼んだんだよ」

「茜が？ なんで？」

「なんでつてそりゃ、お医者さんとかに混じってあの人がいるとそれだけで場がやややかしくなるじゃん」

「……なるほど、納得」

「じつちゃんしょげてたよー。アハハハハ」

千恵が笑い、つられてわたしも茜も、紫野までもくすくすと笑う。なんだかドタバタしたけど、とりあえず茜が無事とわかってわたしはどこか気持ちがつつと楽になった。そして千恵が笑うのを見て、なんとなく安心が胸に広がっていく。

先陣岬千恵という少女の笑顔には人をそういう気持ちにさせる力がある。

さてでは何事もなくて良かったためたしとなるかというところはいかない。あるいは普通の人ならこれで満足なのかもしれないが、このわたし、相田鱈子はそれじゃ収まらない。くそつたれのキ　イ殺人鬼。シザーハンザーだかなんだか知らないが、わたしの視界の中に入ったクス野郎を法の裁きを受けさせるだけで許してやる程わたしはできた人間じゃない。

正直に言っただけは理想主義者じゃないから、世の中のすべての犯罪を無くせるなんて考えたことないし、無くしたいと願ったこととすらない。残念だが、世界には人殺しで興奮するような変態野郎がどこかにいて、今も誰かを殺してハアハア言っているのだろう。誤解を生むかもしれないが、変な言い方をすれば、わたしはそれを仕方ないことだと思っし、やりたきゃ勝手にやってくれて構わないと思っっている。

ただしそれは、わたしの目と手の届かない範囲でという意味でだ。目に入らない所で起こる行いに関して、責任を持つということとはできない。また目に入ったとしても、それを止める力のないのならば、止めなかつたとしても、罪悪感生まれようとも、これもまた責任にはならない。

だが幸いにか残念にか、わたしは力に事欠いていないのだ。だつたら止めねばなるまい。まったく最近役立たずのわたしの拳。こん

な時にしか使い道はないのだから、今使わずしていつ使うというのか。

「茜」

わたしは言う。

「ん？ 何？」

「そのシザーハンザーとかいう奴、どんな奴だったの？ あんた見たんでしょ？」

それまで笑顔を見せていた茜の顔が少し曇った。そしてさっと目を伏せる。

「知ってどうするの？」

「さあ、どうしてやるうか」

「やめた方がいいよ」

茜は言った。小さな声だった。わたしが今まで見たことのないような少女の表情。それが「怯え」だと言うことに気づくのに、わたしは少し時間がかかる。

「任せなよ。あんたをひどい目に合わせたクソ野郎は、きっちりわたしがの“お礼”をしといてやるよ」

「そうじゃなくって」

「あん？ 何が？」

「そうじゃなくって、そういうのじゃなくって、私はおばさんのこと心配してるの。お願いだからやめて」

「大丈夫だよ。わたしはあんたに心配される程ヤワじゃない」

「やめて」

茜はなおも言う。

「状況が状況だから正直に言うけど、私だっておばさんのことけっこう好きなんだよ。おばさんに何かあってほしくない。だからやめて」

「だーから」

「おばさんは見てないからわかんないんだよ」

「見てない？」

「あれは人間じゃない」

「あ？」

一瞬茜の言葉の意味がわからなかった。あいかわらず少女は怯えていた。

「そりゃあれだよ。あんただってわたしの全盛期っつーかなんっつか、見てないから心配すんだよ。あんたのお母さんのところ乗り込んだ時なんて、わたし全然本気じゃないかね。ボブ・サップみたいまでっつかい黒人をぶっ飛ばした時もあるし」

「違うんだっておばさん。そうじゃないの。比喻とかじゃない。あれは言葉通りの意味で人間じゃなかった」

「はあ？」

「あいつ、右手がおつきなハサミだったんだよ」

「……は？」

「なにせ被害者の中には右手がハサミになってたなんて証言をする人もいるくらいです」

岩瀬の一言が脳内にフラッシュバックする。

いやでもまさか。そんなわけない。人間の手がハサミになっているなど、そんなことあるわけない。それこそ天狗だとかの妖怪じゃあるまいし。

「紫野さんも見たんですか？」

顔だけ振り返って、わたしは紫野に訊く。

「え、その、私は暗がりだったのでよくは……。で、でも確かに犯人は右手に大きなハサミを持っていました。あれは本当に刃渡り一米ートル近いかもしれないです……その、はい」

「……紫野さん、それ、犯人は片手で右手だけで持ってたんですか？」

「え……はい。そうでしたけど、それが何か……」

「そんな……ありえないじゃないですか、そんなの」

「え？」

「ハサミの構造を考えてくださいよ。ハサミっていうのは二枚の刃がクロスして重なっている構造なわけですから、刃を横に開く時は開いた分と同じだけ、とつての部分を開かなきゃならないんです」

「ええと、つまり、どういうことですか？」

「だから、そんな刃渡り一メートルもあるようなハサミを、片手で開くなんて不可能じゃないですか。少し実際にそういうものがあると思って考えてみてくださいよ」

「ええと、……あ……」

わたしの説明に納得したのか、紫野がはつとしたように声をあげる。そのまま引きつったような、泣き出しそうな苦笑いを浮かべて言った。

「ええと、つまり、それってどういうことでしょうか。あの、でも、本当に大きなハサミだったんです。だから、その、まさか、本当に手から刃が生えてたとかってことだったり……」

「わかりません」

わたしは言ったが、

「だからそうなんだって」

茜が沈んだ声で言葉を重ねてきた。

「だから、あれは人間じゃないんだって。怪物、化け物だよ。お願い、おばさん。やっつけようだなんて思わないで。せっかく手に入れた今の毎日。わたしのせいで壊れてほしくないから……」

わたしはすぐに何も応えられない。

本当に久々に、もしかしたら初めて、わたしはこれから自分が取るべき行動に関して当てすらかなくなっていた。

さしものわたしも、人外の怪物と喧嘩したなんてことは、流石に今まで一度もないのだ。

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

殺したかった。
殺せなかった。
殺されかけた。
殺されなかった。

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

本当に？
本当にそうか？

確かにあのタイミングで刑事に割り込まれるとは予想外だった。
けれど本当にあのまま殺すことはできなかったのだろうか。
刑事は女だった。

何より、拳銃を持つ手が小刻みに震えていた。

あの女刑事に、人間を撃ち殺せる気概などない。

その気になれば殺せたのだ。あの少女も、女刑事も、まとめて
ではなぜそうしなかった。

なぜ殺さなかった？
なぜ殺せなかった？

チヨキーン

チヨキーン
チヨキーン

本当は俺も恐れているのだろうか。

人を殺すことを、三人の人間を殺してもなお、いまだに恐れているのだろうか。

そうなのかもしれない。

俺は刑事が現れた瞬間、どこか安心していたのかもしれない。

これでこの場を殺人を犯さずに逃げる口実ができたと、内心で歓喜の声を上げていたのかもしれない。

わかってる。

わかってる。

わかってる。

わかってる。

わかってる。

『わかってる』。俺は何度この言葉を胸中で反芻したことだろう。

もはや俺にはもう、自分が何を『わかってる』のかすらわからない。

それでも俺は続けるしかない。

他の道が見当もつかない今にやめるということは、俺が殺した三人への、弁解の言葉すら失うということだから。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

俺なんか死んでしまえ。なるべく大きな苦しみの中で、より多くの絶望を抱えて。

世界で誰よりもそう強く願っているのは、俺が殺した被害者でもなく、その遺族でもなく、他ならぬ俺自身だ。

6

シザーハンザーに茜が襲われた一件を経て、このいまだかつてない町の危機に、先陣岬町を支配する闇の重鎮達がついにその重い腰を上げることとなった。

なんちゃって。

要するになんのこっちゃんかと言うと、先陣岬町町内会の次の集まりの議題が、シザーハンザーに、町としてどういう対策を取っていくかという問題を扱うことになったということだ。

日曜日の昼下がり、久禮山のふもとにある富周枳神社の拝殿内に町内会のメンバーが集まっていた。これに勝虎が出席すると言いだし、それについていく形で、わたしも神社を訪れる。わたしと勝虎が先陣岬町に越してきてから、もう二カ月もなるわけで、集まっていたおっさん、ジジイ共には天狗や樹林、それにコンビニの金井さんなど、わたしの知っている人間の姿も多かった。

だがもちろん知らない人間もいる。その筆頭が、会合の上座に腰を降ろしているＴシャツにジーパンというラフな服装に、いい年こいて髪を茶髪に染めあげた四十代くらいのおっさんだった。町内会と聞いて、わたしははてつきり（一応）町内会長である天狗が議事進行を取り行うものだと思っていた。けれども実際に話し合いを仕切っているのはその男なのだった。しかも、周りの人間の反応を見るに、男は他の爺さん共に比べればまだ若輩であるように、ずいぶんと信頼を得ているように見えた。

いったい何者なのだろうと思いつき、近くにいた金井にこっそり聞くと、ああ彼は東条君だよ、相田さんまだ会ったことなかったかい、

と応えられた。東条？ どこかで聞いたことあるようなようなとわたしが唸っている、東条猛君、この富周枳神社の神主さんだよ、と金井が続けた。それでわたしはあつ、と小さく声を上げて思いつく。天狗と初めて会った日、捨て子だった千恵を天狗と一緒に見つけた男として、わたしはその名前を天狗の口から聞いていたのだ。考えてみれば、神社にいてその場を仕切っているのが神主だと言うのは至極当然のことなのだが、そのあまりに俗物じみた（失礼）格好から、わたしは男が神主だと発想できなかったわけだ。

とにかく、千恵の命の恩人という目で見ると、さつきまで勘違いかつこつけおやじにしか見えなかった東条が、急に頼りになる人間に見えてくるから不思議だ。人を見た目で判断するのはやめよう、うん。

わたしは一応勝虎の付き添いという形なのであまり積極的に発言はしない。勝虎もそばにいたので、出しゃばらずあくまで話し合いを見守るだけにする。貞淑な妻ごっこというわけで、旦那についてきた金井のおばちゃん、それに東条の娘だとかという葵さんと一緒にお茶なんかを入れたりする。

ちなみに全然関係ないけど、この葵さんというのがまた超ウルトラ美人な女性だった。背中まで届く長い絹のような黒髪、憂いを秘めた、それでいて優しい瞳、整った鼻のつくり、穏やかな微笑を絶やさぬ淡いさくら色の唇、動作の一つ一つまで行きわたる優雅で、そして清楚な物腰。まさに完璧すぎる大和撫子オプ大和撫子。女のわたしでも思わず見とれてしまう程の美しさ。いったいこの女性のどこにあの勘違いカツコつけおやじの遺伝子が反映されているのかは、この物語最大の謎としか言いようがない。

「こないな所にまでそんな事件起きるなんて、ずいぶんとまあ物騒な世の中になったもんじやのう」

隅元さんが言った。

「まったくじゃ。昔は平和だったわい。家に鍵をかける必要なんてなかったし、子供達に知らない人についてっちゃいかんと教えるこ

ともなかった。土地のもんは皆一人残らず信用できたもんじゃ」
林さんが言った。

「あれじゃろうな、やっぱり。人と人とのつながりが薄くなった、テレビで言うとりますからな、そういうのなんじゃろうな」

田中さんが言った。

「そうじゃなあ。本当に世の中物騒になったもんじゃ。まったく千神祭りも近いのにおう」

誰かがそう応えた。

以下エンドレスループ。

駄目だこのジジイ達。昔は良かった 今はこちらが駄目 昔は良かった 今……、をひたすら繰り返すだけで話がちつとも前に進まない。どうして、昔は良かった 今はこちらが駄目 では良くするためにこうしよう、と話を発展させることができないのだろうか。駄目駄目言ってる駄目なじいさん共の駄目な会話にわたしはいいかげんイライラがつのつてきて爆発しそうになるのを必死でこらえる。それも一応大半の町の人には、わたしは愛想のよい若奥様キャラで通している故に仕方がない。

誰か代わりにつつこんでくれないかなと思って周りを見渡してみると、一人わたしと同じようにイラついてるように見える人を発見する。他ならぬ神主の東条だった。

「結局よ」

それでとうとう東条が声をあげる。すると、ぴたりとじいさん達の会話が止み、彼らの視線が神主へと向けられるのだった。

「俺らにできることなんてなんもねえんじゃないか？ 相手は既に三人も殺してる人殺しなんだ。この町には基本的にじい様ばあ様とガキしかいねえんだ。捕まえようなんて冗談にもならん。戸締りをしっかりして、夜中は出歩かない。俺らがすることと言ったらせいぜいそれぐらいしかねえだろ」

「そうじゃなあ、それが賢明じゃろうな」

「触らぬ神に祟りなし、じゃな」

東条が意見し、他の者がみなうんうんと首を縦にふってそう応える。

東条の言うことは正論だった。犯人を捕まえるとか犯行を予防するとか、そういう積極的な対応は警察に任せればよい。民間人であるわたし達がわざわざ危険を冒すことはない。まったくその通りだけれども、同時にだけど、とも思う。

ちらと勝虎に視線を向けると、彼はうつむいて、何か言いたそうに考え込んでいた。多分、勝虎もわたしと同じことを考えているのだ。しかし、それは立場上わたしや勝虎が気軽に口にできる意見ではない。それ故に、勝虎は黙るしかないのだろう。

と、そんな時だった。

「あー、おほん、皆さんちよいといいですかの？」
手を上げて、発言したのは天狗だった。その場にいた全員が天狗に注目をする。

「なんだよじいさん。なんかあるのか？」

「いやね、わし、ちよいと思ったわけですね。東条が言うことまったくその通りやわしも思う。じゃけえ皆のもんはほんにそれでええんですかいの？」

「そりゃどういう意味よ？」

「己の身だけ己で守ってればええんですかいなーということですね。ええですか？ 確かに家に鍵かけて閉じこもっとけば、自分の身は守れますわな。じゃけんそれじゃ守れるのは自分だけです。そりゃつまり、自分が安全を確保しているどこかで、自分以外の誰かが危険な目におうてる、いうことやないやろうかつちゆうこつてすわ。いーやもしかしたら家に閉じこもつとるのも絶対安全やないかもしれないんですか。犯人が家の鍵ぐらいなら簡単に開けられるとしたら？ それで家の中に押し込まれたらもうどうにもならんでしょう。なんせ他のもんもまた、家の中なら安全や思つて、閉じこもつちよるわけじゃけえ、助けを呼ぶ声はだーれにも届かん。それこそ皆が言つとる人と人とのつながりがなくなつたということやない

じやろうか？ 皆さんそれでええんですかいの？」

「しかしのう、天狗さん。そしたらわしら、いったいどうすればええんじや？」

「そりやこれですわ」

天狗は両手を何かを持っているような形にして、それを顔の前で打ち合わせるジェスチャーをする。

「火の用心ー、言いましたな。まあ用心するんは火やないんですが、だははは。皆で町の中をばとろーるするんですね。いや何も捕まえたるう言っんやないです。ただの牽制ですわ。それでもただ家の中でぶるぶる震えて閉じこもつちよるよりは、ずっとマシや思いませんか？」

天狗の提案に、その場にいる誰もがあまり乗り気でない反応を見せた。それはそうだろう。誰だつてわざわざ自分から飛んで火に入る夏の虫になりたいとは思わない。

けれど、少なくともわたしは内心天狗に喝采を送っていた。そして、勝虎もだ。表情を見ればわかる。

そうだ。わたしは今天狗が言ったこととまったく同じこと言いたかったのだ。本当に大切なものを護りたければ、時には逃げたり隠れたりするだけじゃなく立ち向かわなければならぬ。わたしは茜を傷つけたシザーハンザーを許さない。自分の身を守りたいだけならば家に閉じこもるのが賢明なのかもしれない。だけどわたしはそうじゃないのだ。一刻も早く、シザーハンザーの凶行を終わらせたいのだ。そのためには、危険を承知の上で行動をおこさなければならぬ。そのための。けれども最初に東条が言ったように、この町の人間は老人と子供がほとんどだった。わたしや勝虎のような若い人間など、数えるほどしかない。その数えるほどしかないわたし達が、自警行為を行いますようになどと、わざわざ弱い立場の老人や子供を危険に引きこむような提案などできるべくもなかった。そこに老人側にいる天狗がその提案をしてくれた。わたしや勝虎が言いなかつたことを汲み取つてなのか、それとも天狗自身の意見なのか

まではわからないが、彼が代弁してくれたのだ。わたしは初めて、このアホ天狗が偉大な人　いや妖怪？　どっちでもいいけどに見えてきた。

「ただだよ、じいさん。それ、いったい誰がやるんだ？　この町の人間はそろいもそろってジジババだけなんだぜ」

「俺がやります」

もちろん真つ先に手をあげたのは勝虎だった。その目は強い決意と使命感に満ち溢れている。

まったくバカなバカツトラ。暑苦しいったらありやしない。確かに若いけど、特別体力ある方じゃないだろうに。そんな夜ふかしして神経すり減らしたら、次の日の仕事にも影響出るだろうに。それでも誰かのために行動せずにはいられない。

それが小西勝虎という男だ。

呆れるほどバカで、たまにどうしようもない程ムカつく、けど大好きで誇らしい、わたしの未来の旦那だ。

「君は確か……小西君つつたか？　やりたいっつーんなら俺はとめねえけどよ。いいのか？　君はまだ町に来て日も浅いし、わざわざ危険を冒す必要なんてねえだろ？　この天狗に気を使うことなんてねえんだぜ」

「そついうのじゃないんです」

勝虎は言った。

「付き合いが長いとか短いとか、危険だとか安全だとか、そういうのじゃないんです。俺がそれをする事によつて、誰かを助けられるかもしれない。行動する理由として、俺はそれだけ充分なんです。お願いします。迷惑はかけません。俺にやらせてください」

場がしんと静まる。勝虎の発言に皆が感心したり呆れたり感動したりはなじろんだりしているのだろう。勝虎の言葉はいかにも偽善者のそれっぽい。でも少なくとも、わたしだけはこのバカが偽善者ではないことを知っている。

東条が言う。

「けどなあ、いくらなんでも一人に任せるわけにや」

「アホ言っちゃいかんわ東条。わしが言いだしっぺじゃけえもちろんわしもやるわい」

「じいさんも？」

「でも天狗さん」

「あー、心配せんでもええですよ、勝虎君、わし、こう見えて妖怪ですけえ、並みの人よりよっぽど体力あるつもりですわ、だははは」

「天狗さん……」

一瞬勝虎は迷うような表情を見せたが、天狗の言葉にいつものおちゃらけた雰囲気がないのを嗅ぎ取ると、力強く言った。

「わかりました。一緒に頑張りましょう！」

「おう、その心意気ですわ！」

ははは。なんかちよつとだけ天狗が頼りになる奴に見えてきたぞ。

「なんかもう、夜の見回りをすることは決まりなんだ……。わかっただよ。志願者を他にも募ろうじゃないか。おい、誰か他に我こそはって奴はいねえのか？」

が、すぐに手を上げるものはいなかった。皆が他の人の様子を見渡している。かがうように周りを見渡している。

仕方ないと言えば仕方ない。彼らを責められはしないだろう。ここにいる人はゆうに還暦を越えているような人がほとんどなのだ。誰も進んで殺人鬼に出くわすかもしれないようなことなどしたくないだろうし、気持ちがあっても、体がついていかないという人もいるだろう。

仕方ない。ここはわたしの出番か。そう思い手を上げようとした時だった。

「はい」

すっと一本の白く細い手が上げられた。

超ウルトラ美人こと、東条葵さんだった。

わたしの横に座っていた彼女が凜とした居住まいで、その手を上げていた。

「わたしがやります」

「あ、葵!？」

慌てた様子で東条が立ちあがりかける。

驚いたのは彼だけではないだろう。その場にいた全員が目を疑ったはずだ。

「馬鹿! お前何言ってやがる! 駄目に決まってるだろうそんなの!」

「どうしてですか?」

「どうしてってそりやお前……あれだよ! ほら、あれ!」

「誤解を生むかもしれないことをあえて言えば、わたしは他の皆さんよりずっと若くて体力もあります。それに、町を守りたいと考えています。だから、わたしにも協力させてください。それに、町の人々を護ることが町の千の神と共にあるわたし達東条家の使命のはずです。違いますか、お父さん?」

ぐっと言葉につまんだ後、半ばやけくそ気味に東条が声を荒げた。
「わーったよ! それなら俺が参加する! だから葵、お前はここに残れ! それでいいだろ! いいな! とにかくお前は絶対に駄目だ!」

「お父さん」

「それ以上は何も言うな! 俺が! やる! わかったな!」

「……はい」

落胆と満足が入り混じったような声で葵さんが言う。

もしかしたらはじめから父親にはつばをかけるつもりで、名乗り出したのかもしれない。だったらなかなかの策士だ。どっちにしろかっこいい人だと思う。美しさとかっこよさを兼ね備えているなんて、東条葵さんという女性はなんとすごい人だろう。

惚れたわ。

「畜生め……なんで俺がこんなこと。とにかくだ、これでメンバーは俺と天狗と小西君の三人なわけだが……おい、ねこ。お前も参加しろ」

「へ？」

突然話を振られて、これまで我関せずといった様子で頭に猫を乗せたままのほんとお茶をすすっていた樹林が間抜けにも程がある声を出す。理解が追いついていないのか、しばらくぼけっとしていたが、ふいに脳内に言葉が届いたのか慌てて悲鳴のような声をあげた。

「え、ええええええっ！？ な、なんでぼくが！？」

「そりやそつだろ！ 八十越えてる天狗が体を張ろうつつって、しかも俺もやるんだから、当然俺とタメのめえも参加に決まってるんだらうが！」

「い、いやいやぼくなんてきつといても役に立たないから遠慮しくよ。あ、あははは」

「もしもの時の盾くらいにはなるだらうが！」

「ひどっ！？ ひどいよ東条！？」

ぎゃーぎゃー騒いでる二人のおっさんの様子にわたしはまたちよつと気になって金井に訊いてみる。困った時の金井頼り。

すると、

「ん？ 東条君と樹林さん？ 私もよくは知らないけどなんでも中高の頃の同級生だったらしいよ」

なるほど。二人の学生時代の力関係が目に見えるようだ。

とにかくそんなこんなで樹林も参加することが決定して、涙目のねこ大王をしり目に東条は話を続行する。

「これで四人か。とりあえずは……こんなところかな。あとはみんな、まあ悪いが無理だらう」

「すまんなあ、東条さん」

「あと十年若けりやなあ」

なんてじいさん達が言ってるどころへ、

「いや、あと一人はいるでしょう」

勇ましく金井のおばちゃんの声あげたのだった。

「おいおいおばちゃん、心意気は買っけどな、一応レディのおばち

やんを矢面に立たせちゃ俺らの面子がなくなっちゃうよ」

「あらもう一応なんて失礼ね。でも違う違う。私はそんな危ないことしないって。ほら、お父さん、男を見せてきな！　まだまだ若いもんには負けないってよく言うてるでしょう！」

んでバチーンとおばちゃんは目の前に座っていた金井の背中を叩く。いきなり無理を押しつけられた格好となった金井は痛た、と背中をさすりながら苦笑していた。

「おいおいいいのかよ、おっさん」

「ははは、家内が口を開いた時から嫌な予感でしたんだけどね。まあ、ここでごねてもしょうがないから一肌脱ごうかな。何、大丈夫。これでも学生時代は柔道でならしたもんだよ」

割と素直に男らしく金井も首を縦にふり、おおっと集会場が小さく沸き立った。わたしも結構感心する。金井だけに対してではない。参加者みんなに対してだ。みんな嫌だ嫌だと言っている（約一名を除いて）なったら腹をくくってか案外やる気を見せている（約一名を除いて）。それは彼らが勇氣ある人間だと言うよりは、皆がなんだかんだでこの先陣岬町が好きで、なんだかんだでいい奴らなのだということなのだろう。わたしは、そういう無償で人のために働こうと考えることができる（約一名を除いた）おっさん達の姿勢をかつこいいなと思う。人のかっこよさは見た目がすべてじゃない。

まあでも、じゃあ付き合えと言われたら断固拒否するけどね。

よしと掛け声をかけると、東条が集会をまとめようと参加者達をぐるりと一瞥した。

「とりあえずはシザーハンザー対策としては、小西君、天狗、ねこ、金井のおっさん、そして俺の五人で夜間の見回りを行うということを決まりだな。ほんじゃ、善は急げっつーことで、異論がなければ今夜からでも見回り行おうと思うが……どうだ？」

「わしはもちろん構わんよ」

「俺もです」

「私も大丈夫です」

「ぼくは反対なんだけど」

「よし、全会一致だな！　じゃあ見回りのメンバーはとりあえず今夜の九時にうちに集まってくれ。それまでに巡回のコース取りとかは俺が考えておくからよ。それじゃ、今日はこれでかいさ」

「いけません！」

バンっという扉が開かれる音と共に、突如甲高い声が集会場へと響きわたった。

その場にいた全員の視線が扉を開いた格好のまま肩をいからせる若い女へと向けられていた。

一瞬誰だとわたしは頭をひねるが、すぐにその正体に気付く。今まで会った時と異なり、今日は私服姿であったから、ぱっと見では判断できなかったのだ。

「皆さん認識が甘すぎます！　シザーハンザーはすでに三人の人を殺害している凶悪な殺人犯なんですよ！　夜回りなんてして、もしばったり会ってしまったら大変です！　民間人を危険な目になんてあわせられません！　これは私達　えっと、その、今日は警察手量を持ってないですけど、警察の仕事です！　町のみなさんの安全はこ、この私が！　紫野睦月巡査がお守りいたします！」

そう、闖入者の正体は誰であろうあのへっぽこ女刑事、紫野睦月その人であった。町に住んでいるとは言っていたものの、どうしてこの場に居合わせたのかはわからないが、スーツ姿でないことから察するに、今日は非番なのだろうと思われた。

一瞬場が静まりかえる。が、

「そんじや解散。夜九時からだかな、夜周り組は遅れんなよ」

東条は平然とガン無視するのだった。

「なっ、ちよ、ちよっと無視しないでください！」

「あー、睦月、お前なあ。無理すんなよ」

「無理なんてしてません！」

「誰もお前に守ってもらえるなんて思っていないから」

「ひ、ひどい!？」

「てゆーかむしろ危険が増す気さえするから」

「そんなあ!？」

「つーかなんでお前ここにいるんだよ？」

「え、いえ、その、神社ですからお参りに……。そしたら皆さんの声が聞こえたので……」

「お参りねえ。いったい何をお願いしようってんだ？」

「そ、それは早くシザーハンザーが捕まるようにと。あ、あれ？　なんで東条さんずつこけてなんているんですか？」

「お前……。神頼みなんざしとして何が私が守るだアホ」

「はうう。いえ、でも、その、藁にもすがりたい思いというか、その……」

「藁にもすがりたいほど困窮してる奴に守ってもらいたいと思う奴なんていねえよ。無理すんな。言つたら、おめーに警察なんて向いてねえんだよ。素直にばーさんの後でもついで染物屋やっつけよ」

「ううううう」

「お父さん、そんな言い方しなくても……」

今にもマジ泣きしそうな紫野に、葵さんが助け舟を出す。しかし確かに東条の物言いはきついが、こればかりはわたしも神主の意見に賛成だった。悪いが、まだ付き合いのほとんどないわたしでも紫野が刑事に向いていないことは判断できる。それに、実際彼女に身を守ってもらえるとは思えない。かわいそうだが、それは事実だ。

「紫野さん」

そこで勝虎が声を上げた。勝虎は紫野に会うのは初めてだが、存在自体はわたしが話しているので知っている。

「はじめまして。俺は小西勝虎と言います」

「ううう、はい。……はじめまして」

「夜廻りの件、俺達を信頼して任せてみてはくれませんか？」

「……でも」

「紫野さん、俺は例えあなたが刑事でも、女性を危険な目には会わせたくないんです」

「そ、そ、そんなのあれです！ 差別発言です！ 男尊女卑です！ わ、私だって、女の私だってやる時はやるんです！」

「確かに、そうかもしれないですね」

あつさりと勝虎は苦笑して認めた。

「確かに今の世の中、男女平等が掲げられて、男だか、女だからこうでなきゃならないっていう考え方は差別になるのかもしれませんが、本人が望むなら、女性が力仕事をしたり危険な仕事をしてもいいし、逆に男が育児や家事に奮闘したって変じゃない。俺もそれはわかっています。だからね、これは俺個人の考え方で、一種の自己満足なんです。男は、少なくとも俺は力なく、けれど誠実な人のために闘わなきゃいけないと思ってる。それが使命だということにしてるんです。思いつきで言われたらそれまでですけど……あなたが皆を守りたいと言うように、俺もみんなを守りたいんです。どうか俺にかっこつけさせてください。町のみんなを、そしてあなたも守らせてください」

二カツと勝虎は笑って言う。

そんな婚約者の姿にわたしはまったくバカだなあと苦笑する。でもそれでいい。勝虎がバカじゃなくなったら、バカツトラでなくなってしまうのではないか。

勝虎の松岡修三ばりの熱血弁にほだされたのか、紫野は、目線を逸らすように俯くと、なぜか頬を赤らめながら「で、でも、その、む、無理だけはしちゃ駄目です」とついに東条達の夜廻りを認めた。それでやっとこさ一段落がついて、東条の解散の合図と共にその場はお開きとなる。

紫野も正義感にあふれるいい奴だとは思っただが、東条の言う通りやはりその正義を実行する能力が足りない。気合だけでは世の中やっていけないのだ。しっかり努力も怠らず、それに見合う能力を身につけていかなければ。とりあえず今回は勝虎の説得で うん

？ そついえばなんで紫野は勝虎に説得されて赤面してたんだ？
ちよい待て。なんか変なフラグ立った？ おいおい早とちりすんな
よへっばこ刑事。あのバカは誰にでも無駄に優しいだけだかな。
勘違いすんじゃないぞ。

7

東条が解散を告げて、皆がぞろぞろと部屋から出ていく中、何やらまた情けなさがぶり返してでもきたのか、紫野がしゃがみ込んでぐずり始める。で、案の定勝虎がそれを心配して慰めるようとするもんだから、わたしはここは任せてと半ば強引に勝虎を追い出すことにする。勝虎が変に優しくして、これ以上紫野が勘違いでもしたらたまったもんじゃない。

そして部屋には結局、真ん中でうずくまってめそめそと泣いている紫野と、それをよしよしと慰めている葵さん、そしてそれをイライラと眺めているわたしだけが残る格好となった。

「うううう……皆さんひどいですよ。いつまでたっても私を子供扱いして。私だって……私だってもう一人前の大人なんです。警察官なんです。町の皆さんを守るのがわたしの仕事なのに……どうしてみんな私を馬鹿にするんですかあ。ふえええ」

馬鹿だからじゃない？

「皆さん馬鹿になんてしてないですよ。ただ睦月さんが皆さんのことを大事に思うように、皆さんも睦月さんのことを大事に、心配に思ってるだけですよ」

「みんなに心配されることなんてありません！ わ、わたしはちゃんと一人前なんです！ 公務員試験だって受かってるんですよ！」
それが信じられん。

「ええ、わかってます。わたしはあまり勉強は得意ではないので、尊敬していますよ、睦月さん」

「ほ、本当ですかあ？」

お世辞でしょう。お世辞。

「もちろんです。わたしだけじゃありません。おばあ様もあなたのことを誇らしく思っているはずです。だからもつと自分に自信を持つてください」

「うつつ、おばあちゃん……。で、でもおばあちゃん本当は怒ってるかも。わたしが後を継がないせいで、江戸時代から七代続いてきた染物屋、たたまなくちゃんならないわけだから」

え？ そんな伝統ある店なんだ。じゃあ怒ってるんじゃない？

「そんなことないですよ。……ここだけの話ですよ、睦月さん。実はあなたが公務員試験に受かった時、おばあ様はこの神社にいらしたんです」

「おばあちゃんが？」

「ええ、それでああなたの合格を涙ながらに神様に感謝していらしたんですよ」

「そ、そうなんですか？ うつつ、お、おばあちゃん……ふえええええん。おばあちゃんありがとうううううう。ふあああああ

あ おぶしっ!？」

あ、やべ。

無意識のうちに紫野の頭を蹴り飛ばしてた。いや、別に意味はないんだけど。なんとなく、むかついて。

「な、なななな何するんですか!？ いきなり人の頭を!？ 暴行罪の現行犯で逮捕しますよ!」

意外に丈夫なようですぐに復活して抗議してくる紫野。

「え、いや、ごめんなさい」

「ごめんなさいじゃないですよー!」

「そうですよ! 理由もなく暴力をふるうなんて最低ですよ!」

ちよつと目を丸くしていた葵さんも、はっ、としたようにわたしに言う。

ああ、なんか葵さんに言われると心が痛むかも。

「はい、本当に申し訳ないです。すいません。もうしません」

深々と葵さんに頭を下げるわたしに、

「ちよつと！ それ！ その頭さげるの私じゃないんですか!？」
横からぎゃーぎゃーと紫野が喚き立てる。

うるさいなあ。

「……あのですねえ、紫野さん」

わたしは深くため息をつくとき、耳くそほじりながら（あらはしたくない）ゆつくりと紫野に向き直った。

「あんたいつたい何がしたいんですか？」

「は？ え？ わたしは……」

「町の治安を守りたいんですか？ ビービー泣いて同情をもらいたいんですか？ シザーハンザーを捕まえたいんですか？ 口先だけ立派なことを語って時間を無駄に使いたいんですか？ 一人の社会人として男と同じように仕事をこなしたいんですか？ かわいい女の子としてちやほやされていたいんですか？ どれですか？ 教えてくださいよ」

「そ、そんなの決まってるじゃないですか!」

「決まってる？ 何がです？ わたしにはわかんないです。ちゃんと言葉にして言ってください」

「わ、私は……私は、ちゃんと、一人の刑事として、立派に働きたいんです!」

「じゃあなんであなたは今ここで何もせず泣いてるんですか？」

びくりと小さく身を震わせて、紫野がまた目に大粒の涙をためていく。泣き出すのをこらえるように、下唇を強く噛む。

「相田さん、何もそんな言い方しなくても」

「葵さんは黙っててください」

ぴしゃりとわたしは言い放つ。紫野の次の言葉を待つ。

やがて女刑事は小さく口を開く。

「わ、わ、私のことなんて何も知らないくせに……」

「知りませんね。あんたが根性無しだつてことぐらいしか」

「私のことなんて何も知らないくせに!」

予想もしていなかった紫野の剣幕に思わずわたしはぎよっとして、言葉を詰まらせた。頭の中に浮かんでいた口にするつもりだった言葉まで一瞬で吹き飛んでしまう。

あれ？ わたし気押されてる？ 泣いてばっかの情けない紫野に説教をかましてやるつもりだったのに。紫野なんてもし荒れてる頃に会ったとしたら真っ先にパシリにしてやるだろうへタレだと思ってたのに。

そんな情けないへタレの一喝に、わたしはちよっとたじろいでいる。

なんでだろう？

見ると紫野は相変わらず大粒の涙をボロボロ流しながらぐずぐずと泣いている。わからない。この女のどこにわたしがビビらされる要因があるのか、こうして冷静になってみてもまったく見当がつかない。

でも、と考える。

わかることもある。彼女の中の何がそれだけの迫力を出させたのか、それはわからないが、彼女の中にそういう想いがあること、それはわかる。

だったら不要な説教はいらないか。わたしは思う。

必要なのはっぱをかけることなのだ。

「じゃあ、やってやりましょうよ」

わたしは苦笑して言う。

「……や、やる？ って何をですか……？」

元からわたしはそのつもりだったのだ。

シザーハンザーは人間じゃない。茜はそう言った。もちろんその言葉を鵜呑みにするわけではない。けれど確かなのは、シザーハンザーというクソがまともじゃない、相当危険な奴らしいということだ。だったらそんな危険人物を、勝虎達みたいなへタレ共にどうにかできるなんて、わたしは端から思っていない。

「わたし達でシザーハンザーを捕まえてやりましょうよ」

「え。え？ ……え？」

もちろん紫野なんかがついてきても何の役にも立たない っ
て言うか足手まとい以外の何物にもならないだろう。それでも、それ
がわかっていてもわたしがここであえて彼女を危険に引きこもうと
いうのは何も意地悪や思い付きなんかじゃない。

紫野が、他ならぬ彼女自身が変わりたがっているからだ。そうい
う想いを持っているからだ。それを先の叫びから、わたしは感じ取
ったからなのだ。

「で、でも民間人を危険にさらすわけには……」

「もう、今更それですか？ そうじゃないでしょう。民間人だとか
警察官だとか、そういうのは結局みんなポーズなんですよ。ポーズ
つてのは要するに周りに見せるための記号に過ぎないんです。問題
なのは本人の意思なんですよ」

「本人の……意思」

「そうですね。意思なんです。それがあれば誰だって闘えるんですよ。
紫野さん、あなたにはその意思があるんでしょう？」

「そ、それはもちろんあります！」

「だったら行動するんです。どれだけ意思を持っていたとしても、
行動が伴わなければそれでは誰も、自分自身もわかってくれないん
です。わかれないんです。守りたいんでしょう、町を？ わたしだ
ってそうです。いやちょっと違うかな。わたしは町を守りたいとい
うか、町に住む、わたしの大事な人達を守りたいわけで。……まあ、
一緒かもしれないですけど、とにかくわたしは、そう思うから行動
するんです」

「で、でも、東条さん達は？」

「勝虎達？ 役に立たないでしょう。正直。勝虎を立てるためにわ
たしは何も言わなかったですけど」

「でも、だったら私だって役になんか……」

「だから、自分でそんなこと言ってるようじゃ駄目なんですって。
役に立たないと思うなら、役に立てるように努力するんですよ」

「はい……。えっと、でも、それじゃ相田さんが危険な目に会うんじゃない……」

「わたしですか？ 大丈夫です」

わたしは床に置いたままの湯飲みの一つを手に取った。そしてそれを紫野達の目の前に掲げ、そして力を入れて握りこむ。

するとバリンという音をたてて湯飲みは砕け散った。紫野と葵さんが、当然ながら目を丸くしてそれを見る。

「わたし、勝虎達五人が束になるより強いですから。それも勝虎を立てるために黙ってましたけど」

わたしは紫野に向き直り、力を込めて言った。

「やりましょう。紫野さん。わたし達二人で、シザーハンザーの野郎を捕まえてやりましょう！」

わたしが詰め寄ると、紫野は自らを奮い立たせるようにぐつと下唇を噛んだ。そして大きく鼻をすすると、涙をぬぐい、力強く声を上げた。

「はい！」

わたしは頷く。これでいい。例えこれでシザーハンザーを捕まえられなくとも、この経験はきつと紫野に何らかの良い影響を与えてくれるに違いない。

同時にわたしは心に誓う。わたしが引きこんだのだ。だから、もし本当にシザーハンザーに遭遇したら、その時は命に代えてもこのへっぽこ刑事の身をわたしが守るのだと。

「あの、相田さん」

と、そこでわたし達のやりとりを見ていた葵さんがおずおずと口を開いた。

「ああ、大丈夫ですよ葵さん。いくらなんでもこのノリで葵さんまで無理に仲間に入れようなんて考えてませんから」

「いえ、そうじゃなくて……」

「わたし達ですか？ 安心してください。こう見えて、わたしは本当に強いんですよ」

「いえ、もちろんお二人には無事でいてほしいとは思っていますが、そうじゃなくて……」

「え、はい。なんですか？」

「その湯飲み、瀬戸焼なんですが……」

「え……」

8

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

父は言った。

「心配するな」と。

父は言った。

「目ざわりな奴だ」と。

母は言った。

「あなたは特別なのよ」と。

母は言った。

「産まれてこなければ良かった」と。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

テレビの中の誰かが言った。

「シザーハンザーは決して野放しにしてはならない異常な犯罪者です」と。

テレビの中の誰かが言った。

「いったいこのような犯行を引き起こした犯人の心の闇はなんなのか」と。

ネットの海の誰かが書いた。

「シザーハンザー死んでよしwww」と。

ネットの海の誰かが書いた。

「マジ神。もつと殺せ」と。

澄野ゆかりは言った。

「かわいそう」と。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

俺は

俺は心配しているのだろうか？

俺は目ざわりなのだろうか？

俺は特別なのだろうか？

俺は産まれてこない方が良かったのだろうか？

俺は異常なのだろうか？

俺は心の闇とやらを抱え込んでいるのだろうか？

俺は死んだ方がいいのだろうか？

俺は神なのだろうか？

俺はかわいそうなのだろうか？

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

誰もその答えを俺に教えてくれない。

あるいは人から答えをもらおうなんてのは都合の良い話なのかもしれない。

それぐらいはわかつている。だから自分で考える。

そして考えて、答えをでっちあげた。

その結果が、今の俺だ。

でもそれが正しいかどうかは俺にはわからない。

俺には、俺の考えの“答え合わせ”をしてくれる人なんていないから。

俺はきつと誰かに言ってもらいたいのだ。

何をというわけでもない。

同意でも、非難でもいい。

とにかく何か、言葉を投げかけてほしいのだ。

俺は“人間”になりたいのだ。

誰かとつながって、この世界に生きていきたいのだ。

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

チヨキ…………ン…………

ふざけるな。

違う。違う違う違う違う！

違うんだ！

そうじゃないんだ！ これじゃあまるで同情を求めているようではないか。お前は悪くないと誰かに言ってもらいたがっているみた

いじゃないか。

でも違うんだ。そうじゃないんだ。
違うんだ。

俺は、俺はただ　ただ

俺は

普通に生きてたかっただけなんだ。

ただ、それだけなんだ。

それだけだったんだ。

(続く)

第五話 シザーハンザー（中編）（前書き）

前回までのあらすじ！

凍える雪の中、マツチを売り歩く一人の少女。しかし道行く人は誰も彼女を気に止めません。そんな時、少女を不憫に思ったのか一人の紳士が声を掛けました。

「マツチを売ってもらおうかな」

「は、はい。ありがとうございます！」「いくらかな」

「はい。一本、二億ごせ」

「やっぱり止めとくよ。さよなら」

「ああ、そんな！」

そして降りしきる雪の中、少女は嘆きの声を上げるのです。

「ああ、どうして誰もマツチを買ってくれないの！」「おしまい。」

嘘です。それでは始まり始まり！。

第五話 シザーハンザー（中編）

9

日が落ちても下がらない気温。ムシムシとした、全身にべたりとまとわりつくような湿気。あと一歩で不快だと叫びたくなるような、そういうギリギリの線に立つ、しかし昼間を思えば心地よさを感じる夜。

毎年この感覚を忘れて、毎年この時期になるとそれを思い出す。もうすぐ夏だなあ、とわたしは一人でそんなことを考えている。

わたしは縁側に座り、珍しく大人しくして膝上で丸くなっているタイガーを撫でながら、ぼんやりと都会で見るより星の多い夜空を見上げていた。

いや違うか。別に星の数は“多く”はないのだ。数自体は地球上のどこから見たって変わらない。見え方は、結局見る側の環境によって変わるだけだ。同じものでも、立ち位置をちよつと変えてみるだけで、大きくその世界は違って見えたりする。同じことは人生にもまた言えるわけで。これはちよつとした豊かな毎日を送るコツだったりもするのである。

とかなんとか言ってみたり。

勝虎はつい先ほど、昼間の集会で決まった夜廻りのために富周枳神社へと出発していた。わたしはそれを無茶しないでね、なんて言うお決まりの台詞で送り出す。そして残されたわたしは、こうして縁側で今日のパートナーがやってくるのを待っている。

九時半頃に紫野はこちらに来说っていたので、時間はまだ二十分ほどある。わたしはその時間を、昼間のうちに調べたシザーハンザーに関する情報を整理することに使う。

今の時代は便利になったもので、インターネットでちよちよいと

調べれば、過去の事件の報道を検索することが簡単にできるし、信頼性という意味ではまるであてにならないが、掲示板の類をあされば大小様々な、噂と真実の入り混じったような情報を見ることができる。それらを頼りに、シザーハンザー事件を、順を追って整理する。

発端はおよそ一年前。七月十一日のことだった。すでに夜も更けた午後十時十三分。N県警の元に一本の一一〇番通報が為された。電話の主はひどく混乱した様子の男性で、彼は今日の前に死体があるからすぐに来てほしいと言う。電話対応した警察官が、落ち着くようにと男性をなだめ、場所を柏木であることを聞き出し、すぐに向かうと告げると共に、男性にはそれが本当に人間の死体であるか、冷静になって確認するようにと、指示する。もし生きているようならば、すぐに一一九番通報をし、できる範囲で応急処置を施すようにとも。しかし男性は警察官の言葉をすぐさま否定した。

死体に決まっている、首が切れているんだ、と。付近の派出所警官が現場に到着すると、男性の言葉が真実であることが確かめられた。人気のない公園の中、遺体は胴体と頭部は、すっぽりと切り離され、無造作にアスファルトの上に転がっていた。被害者の名前は澄野ゆかり。柏木市役所の福祉課に勤務する、当時二十五歳の女性だった。

犯行が路上で行われたことや、被害者の金品に手をつけられていないこと、加えて暴行の形跡がないことや首を切断されるという異常性から、当初捜査陣はこの事件を猟奇的な通り魔殺人と見て捜査を開始する。その際怨恨の線も視野にいれて、澄野ゆかりの交友関係を洗いもしたが、彼女の評判はどこに聞いても、真面目で誠実で、誰にでも優しく、とても人の恨みなんて買うような人物ではなかったというものだった。最初は刑事達は、それらの証言を死者に対するお決まりのお世辞程度にしか思っていないが、実際の聞き込みの中で彼女を悪く言う者に一人として巡り合わず、また金銭面や異性間でのトラブルすらも上がらなかったため、捜査陣はすぐに

犯行の動機から怨恨の二文字を消さざるを得なくなった。

事件は確かに話題性にとみ、直後は全国的にも取り立たされたが、この時点ではまだ、どこにでもある、時折発生する一個の異常事件でしかなかった。「シザーハンザー」という名称もちろん存在せず、犯人もまた一人の殺人犯でしかなかったのである。

それからおよそ二カ月後の、九月九日のことである。午後十一時頃、匂林駅前派出所勤務の熊谷拓也巡査が、派出所内にて業務を行っているとき、どこからか若い女性の悲鳴を聞きとり、即座に声の聞こえてきた方向へと駆け付けた。

すると彼は付近の公園で、血塗れで横たわる若い女性を発見した。熊谷は即座に女性を助け起こすと、まだ息があるのを確認しその場で一一九番通報をする。そして救急車が到着するまでの間、応急処置を施そうと、女性の外傷を確認すると、熊谷はその異常な状態に息を飲むことになった。被害者女性は、左手首から先が、鋭利な刃物のようなもので、ぱっさりと切り取られていたのである。切断された手首は、被害者女性から一メートル程離れた地点に、無造作に放置されていた。彼女　県内の大学に通っていた、草壁京子は、発見が早かったことが幸いし、なんとか一命は取り留めたものの、事件後も強いPTSDに悩まされ、現在も週に一度、精神科への通院を行っている。

鋭利な刃物による人体の切断、及び若い女性が被害者であるという共通点から、警察はこの事件を当初より先の通り魔首切り殺人との関与を考慮し、そしてそれは鑑識からの、凶器として使われたおそらく大型のハサミのような　刃物は同一のものであるという報告から、捜査当局は今回の事件を七月の事件から続く連続殺人未遂であるとして、捜査を行う方針を固めた。

一方、日々の娯楽に欠ける田舎町で起こったこのセンサーショナ的な事件は、地方テレビはもちろん、全国区でも大々的に報じられた。ただこの時点でもまだ、犯人に与えられた俗物的名称は「連続切断魔」というものであり、「シザーハンザー」という造語は、ま

だどこでも使われていなかった。

「連続切断魔」による第三の犯行が行われたのは、前回から間が開いた、四力月後の一月二日だった。今度の被害者の名前は西城幸徳、前二つの事件から、狙いは若い女性であると考えていた捜査陣の予測を裏切るもので、彼は三十七歳の中年男性であった。犯行が公になったのは一月八日で、後の証言による犯行日時とおよそ一週間の開きがある。それは、被害者である西城が、被害にあっていたことを周囲に隠していた故である。隠していた、と言っても結論を言えばそれは西城に、通報をするにあたって何かしらやましい事態があったというわけではない。警察、及び救急への通報は、彼が開いている空手道場の生徒によって為されたものであった。

二〇〇二年の稽古初めとなる一月八日、生徒達が妙に覇気がなく、またなぜか左手を隠すようにふるまう師範の姿に疑問を感じ追及すると、ようやくって西城は人差し指の付け根から小指側の手首の根元まで、切り落とされた左手を見せたのだった。

事件の概要はこうである。一月二日、正月休みに久々に顔を会わせた友人達との酒盛りの帰りに、ふとまだ今年は初詣をしていなかったことを思い立った西城は、通りがけの神社へといい気分で踏み入って行った。そこで彼は、「連続切断魔」と鉢合わせをする格好となったという。彼は言った。

すぐにわかりましたよ。そいつがまともじゃないって。そして、少しして　実際には一瞬だったんでしょけど　数ヶ月前にこの辺を騒がした「連続切断魔」じゃないかって思いました。なんでかって？　刑事さん達も見ればわかりますよ。奴の右手はハサミだったんだ。こう、大きな、刃渡りが一メートルぐらいあるようなね。一瞬私はたじろぎましたけど、すぐに体が臨戦態勢に入りました。こう見えてもね、うちの流派は　流石に今の子には教えませんが

元々実戦空手をうたつてまして、若い頃は道場破りとか、海外武者修行とかやったもんです、私はね。だから、めつきり実戦なんてしなくなつた今でも腕にはそれなりに自身があるんです。少なく

とも、刃物を持った素人程度は恐くないくらいに。でもね、あれは違いますよ。何を、というか、なんて言うか、まずあのハサミの切れ味が異常だったし、いやそんなことは関係ないんですね。とにかく、もう違った。笑われるかもしれませんが、つまり、要するに、人間と闘ってる気がしなかったと言いますか……。

後に警察から、なぜすぐに通報しなかったのかと責められた西城は、武道家としてのせめてもの誇りからと応えた。

彼のこうした証言は、瞬く間にネットなどのアンダーグラウンドで広まっていった。もちろん、そこには警察の情報漏えいなどがあつたわけではない。警察に証言したことで開き直ったのか、西城が自らの体験を周囲に吹聴して回ったためである。

その結果、彼の「大きなハサミ」発言からか、同じくネット上にして、「連続切断魔」に新たな名称が与えられる。

それこそがシザーハンザーというふざけた名前だった。

出どころや言いだした者はわからない。ただいつの間にかそれはネット上で既成の言葉となり、そしてワイドショーの報道などでもちらほらと使われ出し始めるようになる。

「連続切断魔」改めシザーハンザーによる四つ目の犯行が発生したのは、再び約四カ月後となる四月三十日だった。被害者の名前は武田皓一。二十三歳のフリーターだった。武田はその日、自宅に友人三人を招いて麻雀を打っていた。勝負が熱を帯びてきた深夜〇時頃、手持ちの煙草を切らした武田は友人達にすぐ戻ると言い置いて、席を立つ。しかし煙草の自販機は、寮のすぐ近くの駄菓子屋前にあるというのに、一五分近く経っても一向に戻る気配のない武田に、友人達がしびれを切らし、様子を見に行こうとアパートを出ると、アパートの正面で、遺体となって事切れている武田の姿を発見したのだった。武田の体は、右肩から左腰にかけて、袈裟切りのような形で二つに切断されていた。武田の死により、これで完全にシザーハンザーの狙いが若い女性に限ったものではないことが証明された。それにより、事件はいよいよ無差別殺人の様相を示してくる。

第五の事件は、これまでよりも大幅に間隔が短くなり、前回からわずか三週間後となる五月二十一日に発生した。今回のそれは、怪我人こそ出ず、犯行そのものは未遂に終わったものの、ある意味これまででもっともセンセーショナルな一件となった。事件は、他でもない、あるワイドショー番組のシザーハンザー事件特集コーナーの収録中に起きたのであった。

概要はこうだ。午後六時、第四の事件が発生したアパートのある住宅街にて、ロケ隊が番組で使用する場面を撮影していた。その時だった。彼らは突如、辺りに響きわたる女性の悲鳴を聞き、慌てて現場へと急行する。突き当りを曲がった路地でロケ隊が見た者は、腰が抜けたようにして座りこむ女性と、彼女を見下ろす一人の男の姿だった。そして想像の通り、その男こそがシザーハンザーだった。少なくとも、ロケ隊はそう判断した。

なぜか？

明白である。

男の右手がハサミだったからだ。

男は　シザーハンザーは、さらに悲鳴を聞いて顔を覗かせてきた周囲の家の住人の存在に気付くと、素早く背を向けその場から逃げ去っていった。今回の一件は、第三者の目撃証言が一切なかった過去の五件と異なり、襲われた被害者高村美津紀を除いても、ロケ隊、さらには付近の住人など、そうせい十二名の目撃者を出したことになり、捜査陣は彼らの証言から犯人の特定が為されるのではないかと大いに期待した。しかし、結果を言えばその期待は淡いものに過ぎなかったことになる。目撃者のすべてが、正確な犯人の人相風体を思い出すことが出来なかったのだ。証言は、皆が皆同じように、右手が巨大なハサミだった、という、常識の信奉者たる警察官達の頭を悩ますものでしかなかった。なんとか苦労の末に、警察が聞き出した情報は、ニット帽をかぶっていた、おそらくまだ若い、という個人の特定に至るには程遠いような二点ぐらいだった。人は、何かを無意識に記憶する時、対象の最も特徴的な部分にばかり注意

が向いてしまうものである。

そして第六の事件、これはわたしも直接刑事から聞いた事件で、発生は六月十日、被害者が食品会社事務員金城敦子、二十七歳の一件である。さらにその翌日十一日、これまでで最短の間隔でシザーハンザーは行動を起こし、茜が襲われた事件となる。

ここまでの事件から推察できることを挙げてみるとこうなる。まず第一に、犯行は怨恨などの特定の人物を狙った動機によるものではなく、無差別な犯行であろうということが挙げられる。なぜなら被害者達に共通点がないからである。

市役所職員の澄野ゆかり。

大学生の草壁京子。

空手道場師範西城幸徳

フリーターである武田皓一。

主婦、高村美津紀

会社事務員の金城敦子

そして通信高校生の柴崎茜。

被害者はそれぞれ年齢も性別もバラバラで、もちろん一切の面識もない。強いて言うなら柏木市に住むということぐらいだが、それも茜が被害にあったことでもはや共通点ではなくなってしまった。ついでに言えば何かしらのミッシングリンク的な繋がりも、現時点では何も見つかっていない。そうなるともうこれは無差別に犯行の対象を選んだものであるという判断になるのは当然だった。警察の捜査は、物証を元に、そこから犯人像を特定していく形になるだろう。とは言え言うまでもなく警察ではないわたしはその方面から犯人像を掴むことはできない。それでわたしは、犯人の動機についてもう少し考えてみる。

まず前提として無差別殺人であると考えてみた場合、動機と呼べるものはいったい何があるだろうか。金銭 ではない、なぜなら既に述べた通り、これまでの犯行で、被害者の所持品に手がつけられたことは一度もないというからだ。すると動機としてわたしが思

いつくのはあと二つぐらいしかない。

すなわち、快樂殺人や愉快犯のような輩か、そうでなければ殺すことそれ自体が目的となつてゐる犯行であるという場合である。

前者に関しては特に説明は必要ないだろう。要するに、人を殺すことで興奮してハアハア言つてる変態野郎だということだ。問題は後者の場合である。一見すると、それは快樂殺人と同義のように聞こえてしまふが、この二つを混同してしまつと、それは大きな誤りを引き起こしてしまいかねないので、正確に判断して見極めなければい。後者が前者と決定的に異なる点は、必ずしも犯人が殺したいから殺している、というわけではないということである。言いかえれば、犯人は殺人を起こさなければならぬ必然性を持つてゐるということだ。その必然性とは必ずしも万人に共通する価値観によるものではないかもしれない。あるいはそれは、悪魔の復活に捧げる生贄、みたいな狂人的な理由かもしれないが、それでも生理的、感情的欲求から湧く殺意ではないという意味で、快樂殺人とは異なるものはずだ。そうしてその場合、捜査する側にも一つの利点がある。すなわち、犯人は例えそれが客観的に見てどんなに理解しがたいものだとしても、何かしらのロジックに従つて犯行を重ねているということであるため、そのロジックを読み解くことができれば、一気に犯人に近づくことができるという点だ。

そしてわたしは考える。シザーハンザーは、完全にネジが外れた変態なのか、それともネジの緩んだ馬鹿なのか。

正直ここで論理的な解答を導き出すには手持ちの材料が少なすぎた。もしくは紫野を脅せ 問い詰めればもっと多くの情報を得られるのかもしれないが、冷静に考えれば、小説の中の名探偵でもあるまいし、警察が特定できない犯人をわたしが特定できるとも思えない。わたしは名探偵の孫でもなければ、頭脳は大人で体が子供でもないのだ。

しかしせつかくここまで考えたのだから、「やっぱり何もわかりません」の一言で片づけてしまふのもなんなので、わたしはわたし

なりの方法論でもう少し頭を使ってみる。

もしもわたしがシザーハンザーだったとしたらどうだろう。いったいどういう動機があればこんな猟奇的殺人を犯すのだろう。わざわざ人体を切断できるような巨大なハサミなんて特注して用意して、それで。

待てよ、とわたしは考える。そうだ、ハサミだ。目撃者の多くが証言している。犯人の右手は巨大なハサミだった、と。もちろんそんなものは目撃者達の見間違いに決まっている。人間の右手がハサミなわけがない。そんなバカなことありえない。

だけど……だけど、もし、あくまで“もし”だ。

本当に右手がハサミだったとしたら？

わたしはタイガー撫でている右手を止め、その手のひらをじっと見つめる。そこに存在しない、ハサミの手を見るように。

もしそんな体で産まれてきたら、わたしの人生はどうなる？ 何を思っただけの周りの、普通の人達を見る？ 自らの異形にいたいどんなことを思う？

なんのためにこの世に産まれてきたのか、その答えをどうやって見出す？

それならば、そうだとしたら、彼が考えに考え抜いて導き出した答えがこの事件なのだとしたら。

「相田さん！」

呼びかけにはっとして顔を上げる。するといつの間にかやってきたのか、庭に一台の軽自動車が止まっており、そこから下りてきた人影わたしの前に立っていた。

もちろん、人影は紫野だった。だったのだが。

「っ……」

わたしはその恰好を見て目を白黒させることになる。

紫野睦月は、頭にハチマキを巻いてそこに二本の懐中電灯を挿し、手には猟銃（多分モデルガン）を持って、腰には日本刀ならぬ金属バットを提げて、膝を笑わせながらも、決意に満ちた目で宣言した

のだった。

「準備は万端です！ い、行きましよう！」

「津山三十人殺しかよ!？」

10

「あの、一つ聞いてもいいですか？」

「何をです？」

紫野と一緒に夜廻りを開始してから二十分程経った頃、実際にシザーハンザーに遭遇した場合を恐れているのだらう、金属バットを握りしめたままずっとビクビクして無言だった紫野が、唐突に切り出してきた。ちなみに都井睦雄スタイルは既にやめさせている。

「えっと、相田さんはどうしてそんなにシザーハンザーを捕まえようとするのに積極的なんですか？」

「はあ……。どうして、と言われても……」

で、紫野の口から出てきたなんだ今更というような質問にわたしはちょっと首をひねる。なんとなくだが、その辺の理由は既に自分の中では完結していて、今更あえて説明するまでもないようなことである気がしたからだ。

「柴崎さん……が襲われたからですか？」

「うーん、まあ、そうと言われればそうなんですけど」

「じゃあ、その、つまり相田さんにとって、柴崎さんはそれだけ大事な人ってことですか？」

「え、うーん……。そうなのかな。いや、でも、ちょっと違う気がする。別にわたしはあいつのことなんて特に好きでもなんでもなし」

「はあ……」

きょとんとした表情で紫野は首を傾げる。わたしの言葉の真意がよくわからないのだらう。何せ当のわたしでさえ、この感覚がいまいち理解できていないのだ。

「でも、その、大事に思うから行動しようってなるわけですよ。仇を討ってやるうって」

「あー、いや、そう言われると違うんですよ、それ。茜のためとか、そういうのじゃないんですよ」

「どういことですか？」

「えーと、なんていうか、茜の一件って、要するにきっかけみたいなものなんですよ。わたしにそれを気付けさせる。わたしが守りたいのは茜じゃなくて、いやもちろん茜も大事なんですけど、正確にはその、茜自身というより、『茜もいるこの今、この日常』なんですよ」

「柴崎さんもいる……この日常……？」

「そう、『も』です。わたしがいて、勝虎がいて、天狗がいて千恵がいて、樹林がいて茜がいて、隅元さんや林さんや田中さんもいて、そういうわたしの日常の輪があって、その中に新しく東条さんや葵さん、それに紫野さんも加わったりして、その中の、それぞれのすき嫌いはあるわけですよ。好きな奴も嫌いな奴もいて、楽しい時もあればム力つく時もあるわけです。でも、総じて言えばわたしはそんな連中に囲まれた今の毎日に、それなりに満足してるんです。良いこと悪いこと含めた全部が、今のわたしの日常で、わたしはそれを大事に思ってるっていうか。だからそれらを守っていきたくいんですよ。特定の誰かってわけじゃなくて。誰かや、何かが一つ欠けると、それが壊れちゃうじゃないですか。わたしはそれが嫌だから、だからそれを壊そうとするシザーハンザーをなんとかしたいと、そう思うんです。えーと、まあ、そういうことなんです、わかりますかね？ わたしの言ってる意味」

「……わかります。なんとなく。でも……」

紫野が俯いて口ごもる。夜の帳の中で、その表情はわからない。だが直感的に、ああまたこいつは泣いてるんだろうなとわたしは考える。けれどその時は、なぜかいつものように情けない奴だとは思わなかった。

「でも……でも……じゃあ……それで、もう壊れちゃった場合にはどうすればいいんですか？」

それは、その紫野の一言が、あまりに真摯なものだったからかもしれない。

「わ、私はどうすればいいんでしょうか？ 今の相田さんの話を聞いて思いました。わ、私もそうです。今の自分の毎日が好きです。……す、好きでした。だから、そんな日常を守りたくて警察官を志しました。で、でも、気づいちゃいました。も、もう遅いんです。例え今犯人を捕まえても、壊れちゃった日常は帰ってこないんです。じゃ、じゃあ、だったら、私はどうすればいいんですか？ 私はなんのために今こんな恐い思いをしてるんですか？ 私は……私は、これから、いったいどういう気持ちで刑事を続けていけばいいのか、なんのために刑事をやっているのか？ わ、私は、これから何を目標に刑事を続けていけばいいんでしょうか……。わかんない。わかんないですよ……」

言葉はそのまま嗚咽に変わった。

なんだか一人で盛り上がっちゃってわたくしはついていけない。何が紫野の涙腺に触れたのかもちんぷんかんぷん。だけど、とりあえず紫野の涙が嘘ではないことだけはわたしにもわかる。

だからわたしは、事情はさっぱりだけど、紫野の本気に本気で応えてやることにする。

「何かに迷った時は、シンプルに考えればいいんですよ」

「シンプルに……？」

「ええ、紫野さんはどうして警察官になったんですか？」

「そ、それは、人の役に立ちたくて……」

「じゃ、人の役に立ちましょうよ。今シザーハンザーを捕まえれば、誰かの日常を壊されることを止められます。だから捕まえる。ね、シンプルでしょう？」

紫野は一瞬、ぼかんとしていた様子だったが、

「……はい」

盛大に鼻をすすると、歯を食いしばるようにしてそう言った。

わたしは彼女を元気づけるように笑う。

紫野は確かに能力は低いかもしれない。てゆうか無能かもしれない（ひどいか？） けど大丈夫だろう。彼女にはやる気がある。やる気があるということは、これからいくらでも能力を身につけられるということだ。それは必ず成果が出るという保証にはならないが、少なくとも傍から見るとして応援してやるのに十分な理由になる。

チヨキーン

「ほんじゃまあ、気を取り直して見廻りを続けましょうか」

「はい。がんばります。……が、がんばりますから！」

「え、いやそんな気負いすぎずに。肩の力を抜かないと、いざと言
う時動けないですよ」

「そ、そうですか？ じゃ、じゃあ力を抜きます！ すごく抜きます！ タコぐらいに！」

「……いや、その、まあいいんですけどね、別に」
チヨキーン

「はあ……それにしても、相田さんってすごいですよね……」

「へ？ すごい？ 何がですか？」

「あの、失礼ですけどお幾つですか？」

「わたし？ 二十一ですけど」

「うつつ。私より三つも年下……」

「はあ。だからそれが何か？」

「えっと、だって私よりも年下なのに、私よりずっとしつかりしてて、いろいろ考えてて、それに比べて私はもう本当にこんなんで……」

「……」
「ああもう。いいですか、紫野さん？ そんなこと言ってちゃ駄目なんですよ。年齢なんて関係ないんです。極端な話をすれば百年生きてようが馬鹿は馬鹿だし、五歳児だって賢い子は賢いんです。長く生きてるってのは、その分能力を身につけるための時間があつたってだけなんですよ。だからその時間を無駄に使ってきた奴はどれ

だけ年取ってようが馬鹿のまんまなわけです。年長者を敬えつてのは、その年長者が年と共に能力を身につけてるってのが前提なわけですよ。世の中にはその辺勘違いして年食ってるだけで自分は偉いんだって思いこんでるアホなジジババ共がけっこういますからね。いいですか、そういうアホ共の話を真面目に聞いてちゃ駄目ですよ。年齢なんて評価の基準になりませんから。そういう歪んだ考えに振り回されて一喜一憂する暇があるなら、日々精進を重ねて自分の能力を高める努力をするべきですよ。能力を身につければ、年齢だけのアホの中身のない言葉に惑わされることもなくなりますからね」

チヨキーン

「はあ。そうですか？ いやでもやっぱり相田さんはすごいです。私、そういうこと考えたことないですもん」

「だからー、そうやって簡単に自分を卑下しない。自分の価値を自分で低くするってのは逃げ道を作るってことですからね。何か出来なかった時に、『こんな自分ならできなくてもしかたない』って感じで。まあいつも自信满满々でいるとは言いませんけど、もうちょっと自分自身を信用してあげましょうよ」

「うわあ、またそんな立派な言葉……。いったいどうしたらそんなにすらすらすごい考え方が浮かぶんですか？ なんかもう、尊敬してきました……」

「いやいやいや！ やめてくださいよ、そういうの。わたしはただ思ったことテキストに言ってるだけですから」

「普通テキストにそんなすごいことなんて言えませんよ」

「いやだからそれは、こういう説教みたいなのは、昔からよく舎弟じゃなかった、後輩とかからいろいろ相談されることも多かったからってだけで……」

「ああ、やっぱり！ 昔から人に頼りにされてたってことですかあ。あ、わかりました！ きつとあれですね！ 学生時代に生徒会長とかやってたってことですね。それで後輩からいろいろ相談されたりと」

「違いますって。そんなんじゃないですから、わたし。って言うかむしろ生徒会長なんてのとは真逆な存在で……」

「真逆……相撲部部长、とかですか？」

「どう逆に考えたんですかそれ!？」

チヨキーン

チヨキーン

「はあ、なんにしる相田さんはすごいと私は思います。憧れます。私も相田さんみたいになりたいです」

「はははは……わたしみたいになったら警察クビでしょうけどね(ボソリ)」

「え、今何か言いました？」

「いえいえ何も。まあそれはさておき、結構歩きましたから、その角曲がった所の小学校の校庭を見て回ったら引き返して今日はもう終わりにしましょう」

「え、はい。そうですね。……あの、相田さん、話しは変わりますが、一っいいいですか？」

チヨキーン

チヨキーン

チヨキーン

「はい？ なんですか？」

「あの、さっきから実はちょっと気になってるんですけど……」

「何がですか？」

「その……音が聞こえませんか？」

「ええと、まるでハサミを閉じたり開いたりする時の音みたいな……」

……

「え、なんですかそれ？ それってつまりシザーハンザーが近くにいるかもしれないってことで」

軽く言いながら、角を曲がって懐中電灯の明かりを小学校の正門へと向けた瞬間だった。

チヨキーン
チヨキーン
チヨキーン

懐中電灯の光の輪の中に一人の男が映り込む。

暗い青色のニット帽に、同じく青色の、夏場にも関わらずコートを着込んだ男。

その目は泥が溜まった水底のように淀み、そしてだらりと垂らした右手の先は

地面に触れるか触れないかというような程の刃の長さを持つ、ハサミで

「こんばんは」

男が小さくそう口にしたような 気がした。

瞬間、ほとんど本能的に、わたしは紫野の肩を掴むと彼女を抱えたまま、転がるように前方に低く身を投げ出す。

頭上のわずか数センチ上を、開いた二つの白銀の刃が閃いていく！

顔のすぐそばで、金属がこすれ合うハサミが閉じられる音が鳴った。その直後、わたしと紫野は、小学校の校庭の、砂の地面の上に転がる。

素早く立ちあがり、一瞬前とは体制が入れ違う形でわたしは男間違いない、シザーハンザーと対峙する。

本当だった。目撃者達の見間違いじゃなかった。あの右手はハサミだ！

間違いない。その理由も、もしかしたら何かトリックがあるかどうかもわからない。だが、今ここで、効果としてあの右手がハサミなのは確かに事実なのだ。

「紫野さん、逃げて！」

こめかみを一筋の汗が伝う。かつて経験したことのない状況に、

わたしの緊張も高まる。正直得体のしれないこの相手に、紫野を庇いながらうまく立ち回れる自身はなかった。それでとっさに叫んだのだが、

「あ、ああああこここここれっ!?!」

紫野はしどろもどろな声を上げて一向に動き出そうとしない。

「早く! 何をやって」

意識は相手に向けながらも、ちらと紫野の様子をうかがった時だった。

わたしの目に、金属バットの中ほどから先が、綺麗に斬れてなくなっているのが飛び込んだのだ。

はっとしてわたしは再びシザーハンザーに意識を集中する。すると、その足元に、固めた拳くらいの太さの短い棒が、無造作に転がっていることに気付く。

切断されたバットの先だった。

んな馬鹿な……。

そう思ったわたしに浮かんだ表情は、引きつった笑みだった。人はどうしようもないような衝撃に直面した時、笑うしかなくなるのだ。

「紫野さん、逃げて」

「で、でででも……」

「逃げる!」

「ひ、ひいいいいいい!?!」

だつと駆けだすようにして、紫野が校庭を横切り裏門の方へと逃げだしていく。これでいい。今ここで紫野に立ち向かえというのは、勇気ではなく単なる無謀だ。

残ったわたしは冷や汗を垂らしながらも、シザーハンザーと対峙する。自らを落ち着かせるように小さく呼吸をする。

「優しいな」

紫野を逃がしたことを言ったのだらう、对象的に落ち着いた、いや沈んだような口調でシザーハンザーが言った。その感情が死んだ

ような声音にわたしは久しく感じたことのなかった背筋が凍る間隔を味わう。

ヤバイ。

何かが、そう警報を告げる。

なんだこれは？ 嘘みたいだ。夢みたいだ。まるで現実感がない。そんな、そんな手がハサミだなんてそんな馬鹿なことが……馬鹿なことが、あるわけない。あるわけ。

「そして」

ゆらりとシザーハンザーが動き出す。

来る！ そう直感的に感じたわたしは後ろに飛びすさぶ。

「勇敢だ」

言葉と同時に、わたしの鼻先でハサミがシャキンと閉じられる。また間一髪。危なかった。

思う間もなくわたしは後方に全速力で駆けだした。とにかくあのハサミをなんとかしなければならぬ。あれを封じなければ近づぐこともままならない。

そう考えたわたしの目にジャングルジムが飛び込んだ。ダツシユでその裏に回り込み、一息つく。これで少しは時間を稼げるだろう、そう思ったのだ。周りをぐるぐる回れば、容易には追いつかれないし、壁ではないので常に相手を視界に入れることもできる。そしてジャングルジムは小学生用であるため、大人のシザーハンザーが中をくぐることもできない。

だがシザーハンザーはジャングルジムまで追いつくと、おもむろにハサミをその鉄骨にあてがった。そしてそのまま

「……嘘」

わたしは思わずつぶやいていた。シザーハンザーはハサミをジョキジョキと閉じていくと、まるで蕎麦でも斬っていくかのように、なんの抵抗もなく鉄骨は斬れて、ガラガラと音を立てながら地面に落ちていった。

一分もしないうちに、そこにはかつてジャングルジムだった鉄棒

がコロコロと転がっているだけの場となった。

信じられない思いでわたしは佇む。が、敵はそんなわたしの都合には付き合ってくれない。

シザーハンザーは、ハサミを閉じたまま、ぐっと右腕を引くと、槍を突き出すがごとく、真っ直ぐ伸ばしてくる。

間一髪、無意識の反応でわたしはそれを交わしていた。

だが口からは、

「ひっ……」

およそ自分が発したとは思えないような情けない声が漏れていた。シザーハンザーが、機敏な動きで、突きと切断を織り交ぜながら、攻撃してくる。

わたしはそれを毎回紙一重でかわしながら、後ろへ後ろへと下がり続けていた。

駄目だ。避けているだけでは駄目だ。それではいつか食らってしまふ。そうなったらお終いだ。反撃しなくては。

そんな考えが浮かぶ。だが駄目だった。出来なかった。

もし飛び込んだ瞬間、あの刃がわたしの腕を捉えたら、足を、胴を、首を捉えたら、そしたら……。

ドンっ！ と次の瞬間、背中が何かにぶつかった。

しまった！ もう後がない！ 反射的にわたしは背後を振り返る。それは木だった。大きな、幹の太さが人間四、五人分はありそうな樹齡が何百年もありそうな大木だった。そしてなんと皮肉なことに、その木には太いしめ縄が巻かれているのだった。すぐ傍にはこじんまりとした社もある。おそらく学校にとっての御神木なのだろうが、やはり今のわたしにとっては皮肉以外の何物でもなかった。とっさに無駄とわかっていても、神に助けを乞うた。

だが無論、シザーハンザーは止まらない。

大きく振りかぶり、ハサミを広げ、神木ごとわたしを一刀両断にかかる。

頭をうずめるようにして、斜め横へと身を投げ出す。今度も刹那

の差で刃を交わした。

が、その後ろでは、神木が、あの大きな幹が、豆腐みたいにあっさり切断されて、ドスンという大きな音を立てて校庭に転がっていた。枝に停まって羽を休めていた鳥達が騒ぎ立てるように夜空へ舞っていった。

それはまるで、わたしの身代わりにシザーハンザーの凶刃を身に受けてくれたかのようにだった。

シザーハンザーが振り返る。

感情も感傷もない瞳で、わたしを見つめる。

息が切れる。

逃げなくては。そう思い立ちあがろうとする。

だが膝に力が入らず、体が金縛りにあったように動かず、うまく立ち上がれなかった。

なんでだと混乱した頭で考える。そして気付く。

震えていた。全身がガタガタと震えていた。

駄目だ。

これは駄目だ。

茜が正しかった。わたしが間違っていた。

こいつは人間じゃない。

化け物だ。

ちよつとばつかし喧嘩が強いとか、そういうのでどうにかなるような相手じゃなかった。こんなの勝てるわけがない。

殺される。

化け物が迫ってくる。

逃げ出そうにも立ちあがれないわたしは、はいはいするみたいに情けなくその場から逃げ出そうとする。

「あ、あああ、あああああああ」

なんだか情けない声があるなと思った。でもそれは自分の声だった。

今にも泣きだしそうだった。

怖い。死ぬのが怖い。死にたくない。嫌だ。死にたくない。怖い。殺される。殺される殺される殺される！

殺されるっ！

誰か、誰か助けて！ 誰か、誰か、誰でもいい、誰か、

勝虎！

ピタリと、瞬間、首筋に冷たいものが当てられた。

ハサミだった。化け物のハサミだ。その冷たさが、またそいつが生きていることを感じさせず、わたしの恐怖を増幅させた。

「さよなら」

化け物の刃がゆっくりと開いていく。

もう駄目だと思った。

わたしは死ぬらしい。

最後に浮かんだのは、他でもない、わたしの大嫌いで、大好きな

その瞬間だった。

ドン、と何か黒い影が化け物にぶつかった。

そのまま二つの影は、もつれるようにして地面に転がり、そこでもみ合う形となる。

わけがわからず呆けていると、「相田さん！」と、知った声が背中からかけられた。

振り向くと、慌てた顔で駆けてくる紫野の姿があった。その横にはなぜか天狗もついてきている。

「鰐子さん、無事ですかいな!？」

「天狗……さん、どうしてここに……?」

「偶然そこで睦月ちゃんと会ったんじゃない！ それより怪我はないんかい?」

「わたしは……別に……」

見ると後ろの方から息を切らせて東条に樹林、それに金井もやつ

てくる。夜廻りのメンバーだ。

あははは。一番年寄りの天狗が一番速いのかよ。みんなたるんでるなあ。……あれ？

勝虎は？ 勝虎も一緒のはずじゃ

恐怖が、背中を駆け上った。それは、自分が殺されかけた時よりもはるかに大きな恐怖で

恐る恐るわたしは振り返る。

すると影二つのもみ合いは既に終わっていて、ちょうど内の一人が立ちあがるところだった。

立ちあがったのはシザーハンザーだ。

じゃあ、その足元でうずくまって動かないもう一つの影は？

あれは……

全身から血の気が引いていく。

どこかから、何かが壊れる音がした。

「勝虎！」

狂ったように、叫んでいた。

そのすぐ脇にシザーハンザーがいることも忘れて勝虎に駆け寄り、すがりつく。

勝虎はわき腹あたりを真っ赤に染めて呻いていた。状態はわからない。だけど、軽傷でないことだけは確かだった。

わたしは勝虎を抱き上げる。血で汚れるのも何もかも気にせずその体を強く抱きしめる。

目からぼろぼろと涙が溢れ出していた。

嫌だ。死ぬ。死んでしまう。勝虎が死んでしまう！ わたしのせいで勝虎が死んじゃう！

「勝虎！ 勝虎！ 勝虎あ

！」

「こぼっ

と小さく声を勝虎があげる。いや、それは声ではなかったかもし

れない。

口から血だまりを吐き出したただけだったかもしれない。

「勝虎!?!」

すると、うつすらと、勝虎が目を開けた。何が可笑しいのか、口元は満足そうに笑っていた。

「……ははは。良かった。鱈子、怪我なさそうで……」

「良くない! 良くないよ! わたしが怪我してなくても勝虎が」

「俺は……大丈夫……」

「大丈夫じゃない!」

「はは……いいじゃん……たまには、かっこ……つけさせて、くれても……」

「バカ! ふざけんな! かっこなんて、つけなくてもいいから! だから」

瞬間、ぎゅっと、勝虎の腕がわたしの肩を抱いた。力の抜けていく腕で、力強く。

「……とにかく……良かった……」
そして、

すると、軟体動物みたいに力のなくなった腕がわたしの肩からずり落ちた。その目は再び閉じられ、動かなくなり

「……勝……虎……?」

「絶対逃がさんで!」

「おい、取り囲め! びびるな! 数はこっちが上だ!」

「ひいいいっ!?!」

「くそ、よくも勝虎君を!」

シザーハンザーの顔に、驚愕の色が浮かぶ。
「死ねっ！」

ガツン

という、そんな衝撃が拳を走る。骨と骨がぶつかりあう音だ。

シザーハンザーは、漫画みたいに、冗談にみたいに宙を舞って数メートル先へと跳んでいった。

だがこれは漫画じゃないのだ。現実なのだ。

勝虎がこいつに刺されたのは、間違いなく現実なのだ。

わたしは間髪いれず、シザーハンザーに駆け寄っていく。

「くっ」

初めて焦った様子を見せながら、シザーハンザーはハサミを閉じたまま突き出した。

わたしは止まらぬまま、わずかに横に身を逸らしてそれをかわす。そしてそのハサミを左手で握りしめた。

このハサミが勝虎を刺したのだ。このハサミが！

右手でもハサミを掴む。ちょうど左手でハサミの先の方を、右手で根元側を掴む形となる。

「なっ」

わたしの手に力がハサミから力が伝わってくる。ハサミを開こうとしているのだろう。

だが逆にわたしは力を込める。

そしてさらに力を込めて、弓なりに、少しずつハサミをしならせていく。

「なっ……………く……………お」

全身全霊の力を込めて、すべての元凶を叩き折るために。

「う……………あ……………うあああああああああああああああああああああ
あああああっ！」

叫びと共にわたしはすべてを振り絞った。

乾いた音が、パキンと辺りに響きわたった。

根元からハサミは真つ二つに折れていた。

「　　があああああああああああああああつ!?!?」

シザーハンザーの悲鳴が闇夜に響きわたる。

ハサミのなくなった手首の先から鮮血が飛びすさぶ。

それはつまり、ハサミの内にも血管が通っていて、間違いなくこのハサミが男の体の一部であることを示していた。

でももはや、そんなことはどうでも良かった。

のたうち回り、まき散らされた血が、わたしを朱に染めていく。

左手に持っていたハサミの刃をわたしは無造作に捨てる。

カラン、と無機質な音がした。

これでこいつはもうシザーハンザーじゃない。

ただの人だ。

「やった……!」

そう言ったのは東条だったか天狗だったか、あるいは紫野だったか。

だがどうでもいい。関係ない。

右腕を抱えてうずくまる、ただの人。

その上にわたしは馬乗りになり、左手で胸倉をつかみ上げ、右手を振り上げる。

「お、おい」

誰かが制止しようとする。

だが知らない。

ただの人の目には恐怖が浮かんでいた。

死の恐怖だ。

それが無性に、わたしを腹立たせた。

そして、

「死ね」

殴る。

また音が響く。

男の頭がゴムまりのように弾む。
ずきりと手が痛む。

なんだろうと拳を見る。

人差し指の辺りに何か白いものが刺さっていた。

ああ。

歯だ。歯が折れて刺さったんだ。
でも関係ない。

「死ね」

殴る。

「死ね」

殴る。

「死ね」

殴る。

「死ね！」

殴る。

「死ね！」

殴る。

「死ね！」

殴る。

「死ね！！」

殴る。

「死ね！！」

殴る。

「死ね！！」

殴る。

「死ね！！」

殴る。

「死ね！！」

殴る！

「死ね！！」

「やめてっ!」

ぴしゃりと冷や水を打ちつけられたかのように、はっとして我に帰る。

息が上がっていた。動悸が止まらず。胸の中では今にも吐きそうになるような不快感が渦巻く。

声のした方へと振り向く。

そこにいた少女の姿に、なんでだろう、わたしは愕然とした気持ちにさせられる。言葉につまる。

「……ち……え……?」

先陣岬千恵は泣いていた。

いつの間に、どうしてやってきたのか、ぼろぼろと大粒の涙を流し、大げさなくらいにしゃくりあげながら十歳の少女は泣いていた。それはいつも見ている泣き顔のはずなのに、その時はなぜか胸が

ひどく傷んで、それで。

「や、やめでよ……鰐子姉ちゃん……、もうやめて……。そ、その人、死んじゃうよ……」

「死……ぬ……？」

誰が？　なんで？　死ぬ？　死ぬってそれは……

なぜか、わたしの頭は千恵の簡単な言葉の意味も受け付けない。

まるで、何か見たくないものから目を逸らすみたいに。

わたしは収まらぬ動悸の中、混乱する頭で視線を馬乗りになった相手へと向ける。

わたしが今まで殴っていた男。

男？　本当に？　わからない。

それはもう男か女か、人間かどうかもわたしにはわからなかった。顔面は、そのすべてが余すところなく流血に染まり、顔中がはれ上がり、潰れ、よく見なければ目、鼻、口などの顔のパーツがどこにあるのかすらもわからない程だった。

生きているのか、死んだのか。

それすらもわからない。

ただ、もう動かない。動く気配もない。

これはなんだ。

わたしがやったのか？

やった？　何を？

わたしは何をした……？

「やめてよお……」

もう一度、千恵が泣き声をあげる。

振り返りながら、わたしも泣きそうになっていた。許されるなら、大声で泣き出したかった。

「ち……ちが……違うの……、千恵、こ、これは……わたしは……」
顔が歪む。寒い。震えが止まらない。

「こ……こいつが……！　こいつが勝虎を……！　だ、だから、わたしは、わ、わたし、は」

「あたしは！」

びくりと身を引きつらす。

「あたしは……あたしは鱈子姉ちゃんに人殺しになんてなっ
てほしくないよお！」

音がした。ガラガラと。どこから。

大切な何かが、壊れていく音。

わたしはもう一度、かつてシザーハンザーと呼ばれていたそれ
を見る。

どろりとした血は暗い赤色で、その赤に染め上げられた、もはや
原形をとどめていない顔はどこまでも醜く。

違う。本当に醜いのは、他にもない

わたしはおぼつかない足取りで立ちあがる。今にも戻しそうにな
るのを必死に堪えながら、探す。

勝虎。

そうだ、勝虎は……。
いた。

仰向けに横たわり、瞼を閉じて眠っていた。

その傍らには、なぜか上半身が下着姿になった紫野が付き添っ
ていた。

ぼんやりと、なんでだろうと思ったがすぐに理由に気付く。紫野
が着ていたTシャツが、勝虎のわき腹の傷口に巻かれているのだ。

「あ……あの……」

紫野が怯えた目つきで何か言おうとする。

だがわたしはそんな彼女の言葉は耳に入らなかった。
ただ茫然とした思いで立ちすくんでいた。

ワタシハナニヲシテイルンダロウ？

一番大切な人が死にかけて、苦しんでいる時に。
助けようともせずに、

付き添いすらもせずに、

わたしは何を……。

目眩がした。

全身から力が抜けて、その場に倒れ込むようにして地面に両手を
つく。

わたしは吐いた。

こみ上げる不快感と胃液を抑えることが出来ずに、無様に嗚咽を
漏らしながら、

泣くように吐いた。

遠くから、救急車のサイレンが聞こえた。

11

『人はシンダらどうなるの？』

小さい頃、そんな人並みの疑問を抱いたわたしは父にそう尋ねて
みた。

わたしは、父ならその質問に明快な答えを与えてくれると思って
いた。父は物知りだった。何かを問えば、いつも納得いく答えを返
してくれた。

だけど、その時だけは違った。

『さあ、お父さんにはわからないね』

父は言った。

『どうして？』

『ぼくは死んだことがないからね』

『シンダことがないとわからないの？』

『うん、そうだね。鯨子はなんでそんなことを聞くのかな？』

『うん……あのね、美季ちゃんと言ったの。美季ちゃんのお父さ
んはシンジャッタんだって、それでね、お母さんにね、お父さんは
どこに行ったのって聞いたらね、お父さんはお星さまになったんだ
よ、そうして美季ちゃんのことをずっと見ていてくれてるんだよ』

て言われたんだって』

『ははあ、なるほどねえ。お星さまねえ、うんうん』

『ねえ、それって本当?』

『そうだな、結論から言えばそれは嘘だ』

『え、そうなの?』

わたしは驚いた。

『そう、嘘だ。星の誕生は小惑星同士の衝突による結合、巨大化によるものだ。人の生死との因果関係は成立しない』

わたしは当然父の言葉の意味はわからない。

『じゃあ、お化けになるのかな?』

『それはわからない』

『わからないの?』

『うん。幽霊という現象は、現在においてはまだ何を原因に発生し、いかなる過程を経てどういう結果収束するのか、それらがまだ解明されていないからね。もしかしたら、人間の霊魂とでも言うべき、現代の観測機器では測れないなんらかのエネルギーによって発生しているのかもしれないし、何かしらの自然現象かもしれない、または脳科学の研究の果てに答えが見つかるかもしれないし、はたまたそれらが複合的に組み合わさった現象なのかもしれない。まあ、ただ……』

『うん』

『個人的な願望を言えば、お父さんは幽霊なんてものは人間の生き死には関係ないものであってほしいと思うよ』

『どうして?』

『それが死ぬってことだからさ』

『……?』

『死とはつまり、もう会えなくなるってことだ。何も語れなくなるということだ。何も思えなくなるということだ。何も聞けなくなるということだ。何も出来なくなるということだ。世界に二度と干渉することなく、干渉されるだけの存在になるということだ。主体的

な視点を失うということなんだ。それは恐ろしいことだ。自分にとっても周りにとってもね。だから人は生きようとする。死を避けようとする。生という限りある時間の中で、少しでも己が世界にいた証を作りたくて、世界に干渉し続ける。世界中の人々がそうやってそうすることによって今の世界は成り立っているんだ。だからね、もし死後の世界があつて、死んだ後もなお、世界に干渉し続けられるのだとしたら、生きている内に努力する必要性のようなものになくなってしまっじゃないか。生きているというそれ自体が持つ価値を、否定されているみたいじゃないか。いいかい鱈子、多分今の父さんの話は欠片も意味がわからなかつたろうから、一つだけ、これだけは覚えておくようにするんだ。死者はもはや何も語らないからこそ死者なんだ。だからぼくらは命を大切に出来るんだよ』

死者はもはや何も語らないからこそ死者。

父はそう言った。

わたしは今の今までその言葉の意味をまともに考えたことがなかった。だがこの瞬間、わたしは初めて父の言葉について真剣に考えている。その上で、その恐ろしさに震えている。

柏木総合病院の手術室前、のっぺりと白い壁に囲まれた廊下で、「手術中」と書かれた赤いランプの明かりの下、わたしは祈るように両手を重ね合わせて震えていた。

わたしは怯えていた。自分が死ぬよりも恐ろしい恐怖の前に、ただ身を震わせることしかできなかった。

歯をガチガチと鳴らせ、現実から目を背けるように瞼をきつく閉じた。必死に何度も、何度も、何度も、喉から出かかった言葉を呑み込んだ。何かを口にすれば、それは勝虎を傷つけたあいつへの、そしてこの世界への呪詛になってしまっただったから。あるいは、そこから言葉の代わりに、自分の理性のたがが漏れてなくなってしまうような気がしたから。

時間の感覚がなかった。いったい勝虎が手術室の無機質な扉の前に消えてからどれほどの時間が過ぎたのか。そして次第に、他の、

ありとあらゆる感覚が溶けて消えていくような心地がした。

ここはどこなのか。自分は誰なのか。いったい何をしているのか。なぜここにいるのか。何を感じているのか。思考が痺れて、少しずつその活動を停止していくような心地。そして今のわたしにとってはその不快ではなかった。むしろ、そうすることでどこか落ち着いていくような気さえした。

そして唐突に理解する。

ああ、これが心が壊れていくということか。
でも、悪くない。

これで救われるのだとしたら、心なんて壊してしまおう。

これ以上苦しまないですむなら、このまま

「あ、あの、相田さん……」

ふと声が聞こえた。知っている声だ。確か、なんとかかと言う刑事の……

「相田さん、聞こえてますか？」

「睦月ちゃん、今はまだそっとしておいた方が……」

睦月……。そうだ。この声は確か紫野睦月の声だ。

「相田さん！」

「……」
わたしはゆつくりと伏せていた顔を上げる。紫野の甲高い声にうっとおしさを覚えながら。

「聞いてください。大事な話です」

「……」

「もうすぐ岩瀬さん達がこちらに到着します。大まかな事情は私で説明しました」

「ああ、じゃあこれでやっと事件解決なわけかあ」

この声は、多分樹林のものだ……。

「はい。でもその前に私には一つしなきゃいけないことがあります。

……大事なことです」

「……」

「大事なこと？」

「はい。……相田鱒子さん、あなたを傷害と殺人未遂の容疑で緊急逮捕します」

「……え？」

わたしは意味がわからずぽつりと声を上げた。本当に意味がわからなかった。何を言われているのか、理解できなかった。

「たい……ほ……？ わたしを……？ なんて……」

「こ、言葉通りです……。傷害と、殺人未遂の容疑で……」

「そんな……あ、あいつ、あいつは……？」

「も、もちろんシザーハンザーも逮捕します。だけど、か、彼の場合はまず治療が先決ですから……。あの人も、い、今は危険な状態で……」

「な……なんで……？ そんな、おか、おかしいじゃん……」

……なんで……治療なんて、あいつは……あいつは何人もこ、殺して……、なのに、なんで？ わたしが……？ なんでわたしが……。

わたしは何も悪いことなんかしてない……のに……何も……」

「……相田さんは、わ、悪いことをしました……。人を一人殺しかけたんです……。だから……」

「あんな奴死んで当然じゃない！」

瞬間、

頬に熱い感覚が走った。

平手打ちをされたのだということに気付くまでに、一瞬の間があった。

「なんであなたがそんなことを決めるんですか……！」

怒鳴りつけられていた。

紫野に。頭ごなしに。

気付いた時には頭にカツと血が上っていた。

患者用の寝巻に着替えていた紫野の胸倉を掴むと、そのまま壁に彼女を叩きつけていた。

「何すんだてめえ！」

だがこの時の紫野は引かなかった。胸倉を掴まれながらも、キツとした目つきでわたしを睨んでいた。

「わかんないんですか!? そんなこともわかんないんですか!」
おろおろと、睨みあうわたしと紫野の間で樹林が右往左往していた。

「わかるかよ! なんでわたしがてめえにぶん殴られなきゃいけないんだよ! なんでわたしが悪者扱いされんだよ! 悪いのは全部あいつじゃねえか!」

「でもあなたは彼を殺しかけた! いいえ、今にも本当に死ぬかもしれない! わかつてるんですか!? 彼の容体は実際勝虎さんより悪いんですよ!」

「当然の報いだ!」

「だからなんであなたが当然だなんて言うんですか!」

「てめえは!」

ガンと再び壁に紫野を打ち付ける。けれど紫野の目は死なない。揺るがない。

「てめえはどっちの味方なんだよ! あの屑野郎を庇うのか!」

「私は法と秩序の味方です! 私は警察官なんです!」

「てめえ」

「だから! だからわたしは秩序を乱す者は見逃すわけにはいかないんです! 目をつぶるわけにはいかないんです! 例えそれが、親しい友人だったとしても! 私は警察官として、あなたが犯した罪を放つておくわけにはいかないんです!」

紫野はまた泣きだしていた。その涙のわけは、わたしは知らないが。しかし涙に濡れた瞳で、一步も引かずわたしを見据えていた。

その意味不明の迫力に、わたしの方が先に折れる。正確には、諦めた。

腕の力を抜き、掴んでいた手を話す。

「もついい……。結局、お前にはわからないんだ。わたしが今あいつをどれだけ憎く思っているか」

「私だつて憎い！」

予想していなかった言葉に、わたしは紫野を見つめ直す。紫野は涙を流しながら、なお何かを堪えるように、歯を食いしばっていた。「相田さんこそ何もわかつてない！ 自分ばかり悲劇のヒロインぶつて、他にも同じ思いを抱えている人の気持ちも無視して、自分の好きなようにやつて、それを正当化して！ あなたにわかりませんか？ もう抵抗のできないあいつを見て、どれだけ私が憎くて殺してやりたいと思ったか、そしてそれをどんな気持ちで堪えたか！ 好きなだけ殴つたあなたにはわかんないでんしょう！ わたしだって許されるなら今この場であいつを殺しにいきたい！ でもわたしはそれをしません！ わたしは警察官だから！ それに何より、ゆかりさんなら絶対そんなことは望まないだろうから！」

「ゆかり……さん……って」

不意に出てきた名前にわたしは戸惑う。

知らない名前だ。

いや、

知っている。

わたしは「ゆかりさん」とは誰か知っている。

「……澄野……ゆかり……のこと？」

去年七月に殺されたシザーハンザーによる第一の被害者。市役所の福祉課に勤務する、当時二十五歳の女性。

それが確か……澄野ゆかりという名前だった。

「……そうです」

紫野が顔を伏せるようにして小さく頷いた。そうしてとつとつと語り出す。

「ゆかりさんはわたしの中学の頃に剣道部で出会った先輩で……学校を卒業してからもずっと交流があつてお世話になってました。わたしずっとゆかりさんみたいになりたいと思ってた。優しくて、しっかりしてて、頭もよくて、とっても綺麗で……最高の先輩で、一番の親友だった……。警察官を目指したのだからゆかりさんの影

響だったんです。本当は、警察官に最初になりたかったんですけど、はゆかりさんだった。でもゆかりさんは身長が足りなくてなれなかったんです。それでわたしがゆかりさんの気持ちを引き継いで警察を目指しますって言ったなら、『うん、いいね。睦月ちゃんならきつと立派な警察官になれるよ。でも無理しないで、本当にやりたいことがあったらそつちを目指してね』って言うてくれて……。わ、わたし、ゆかりさんに『立派な警察官になれるよ』って言うてもらえたのが何より嬉しくて……。元々私は何やっても駄目だったから、将来の夢なんて何もなかったから。ぼんやりと、いいも悪いも考えずにおばあちゃんの染物屋を継ぐか、そうでなきゃ都会に出てOLとかやるんだろうなあぐらいしか考えてなかった。だけど、そんなわたしがゆかりさんの一言で夢を持てたんです。警察官っていうのは、元はゆかりさんの夢だったものですけど、それがいつしか本物のわたしの夢になった。だから必死に勉強して、運動もして体力つけたんです。県警から採用通知が来た時、わたしそれこそ夢かと思った。こんなわたしが夢を叶えたんだって……。ゆかりさんも自分のことみたいに喜んでくれて……。だ、だから、だからこれからどんなに苦しくてもがんばっていきこうって、そう思って……。そしたら、ゆかりさんがあんな事になって……。

私は……。私は！ ゆかりさんの墓前に誓ったんです！ 必ず犯人を逮捕するって。きちんと裁判を受けさせて、法の裁きを受けさせるって！ 本当は憎かった！ 許せなかった！ 殺せるものなら殺してやりたかった！ ううん、今だってそうしたい！ でも私はしません！ すればきつとゆかりさんは悲しむから！ もしゆかりさんなら、例えどんなに憎い相手だろうと殺したりなんてしないから！ 少なくとも、私の知るゆかりさんはそういう人だった！ だからわたしは復讐はしません！ いつまでも、この先十年後も二十年後も三十年後も、警察官として誇らしくゆかりさんに花を添えられるように、どこかに天国みたいなものがあったら、いつかそこでゆかりさんに再開した時、『立派な警察官だったね』って言うてもらえ

るように！

私は私の誇りのために決して復讐はしません！　そして私は私の誇りのために、あなたの犯した『犯罪』を見過ごすこともできないんです！　相田さんはそれでいいんですか！？　憎い奴を気の済むまで痛めつけて、それで仮に殺したとして、あなたは満足するんですか？　正しいことをしたと人に言えるんですか？　勝虎さんに言えるんですか！　自分の行いを誇れるんですか！？」

紫野の思いもいなかった告白。その剣幕にわたしはたじろぐが、しかし納得はできなかった。むしろ、ふつつつと、少し前までとは別種の怒りが湧いてくる。

「……じゃあ！　それなら！　わたしはどうすればいいのさ！　目の前に憎い相手がいるのに、それをむざむざ見過ごせて言うの？　それが『正しい』ことなの？　だったらわたしは正しくなくていい！」

「まだわからないんですか！？　だったらあなたは復讐が正しいことだと言うんですか！」

「このまま黙って何もしないよりはずっと正しいに決まってる！」

「このっ……バカ！　そんなに言うなら見てください！」

紫野は意味不明な言葉と共に、わたしの手を掴むとその手を引かずんずん歩きだした。すごい力と剣幕だった。抵抗しようとするわたしの意思を拒ませる程に、紫野の手には強い“力”がこもっていた。

そしてそのまま紫野は女子トイレに連れ込むと、わたしを洗面台の鏡の前に突き出したのだった。

「さあ見てください！　それで答えてください！」

瞬間、わたしは言葉を失った。

紫野の言葉の意味を理解し、一気に怒りが冷めていった。

代わりにわたしの胸の内を占めていったのは、大きなやるせなさと、後悔だった。

「それが正しいことをした人間の姿ですか？！」

わたしはまだ現場から直行した、そのままの格好だった。着替え
てもいなければ、シャワーも浴びていない。

そんなわたしの姿は真っ赤な血にまみれていた。
顔面いっばいに返り血が跳ね、衣服ももはや元の色がわからない
くらいに血を吸い、赤黒く染まっていた。髪もぐしゃぐしゃに乱れ、
それが血で固まりひどいことになっていた。むき出しの腕は泥と血
で汚れ、拳は殴りすぎたことによりズタズタに皮膚が避けて、歪ん
で腫れあがっている。もしかしたら、いやきつと指の骨は骨折して
いるのだろう。

なんて醜いのだろう。みじめで、情けなくて、汚らわしい。
泣きたくなかった。

紫野の言うとおりで。

これは人間の姿なんかじゃない

まるで獣だ。けだもの

そうだ。

本当の意味での怪物はシザーハンザーではない。

わたしこそが怪物だった。人の心の中にこそ本物の怪物は潜
む。

そう気付いてしまったわたしは、その場で膝をつき、小さな嗚咽
と共に静かに泣いた。

人として、涙を流した。

(続く)

第六話 シザーハンザー（後編）

12

それから翌日の正午まで、矢のように速く時間が過ぎ去っていった。その間の出来事は、まるで記憶喪失にでもなったかのように曖昧で、跳び跳びだった。警官の事情聴取も多分受けたと思うし、いろんな人から励ましの言葉ももらった気がする。だけどその内容は何も思い出せない。とにかく気がつく、知らぬ間に太陽が高い位置に上っていた。

しかしそれは、いろいろなことのショックが重なった結果ほんやりしていたわけではない。むしろその逆だった。およそ半日分、わたしはずっと思考の海の奥底にいた。今までの人生で最も濃密な十二時間だった。考えた事は今回の一件についてだけじゃない。様々な、多くのことを考えた。

子供の頃のこと。両親のこと。友達のこと。趣味のこと。不良時代のこと。その頃の仲間のこと。バイクのこと。夢のこと。将来のこと。勝虎のこと。これからのこと。その他にも、いろいろなこと。

何か目的意識を持って思考をしていたわけではない。心の赴くままに、その時々頭に浮かんだ事柄について、真剣に、真摯にその意味を考えた。そうすることで、何か大切なものが見える気がしたのだ。それが何かもわからないままに、わたしはそれを探し続けていた。中断されたのは、不意に聞こえてきた誰とも知れぬ者の一言だった。

「勝虎さんの意識が戻ったって」

無意識にわたしは目を見開いて顔を上げていた。ベンチに座るわたしの正面には、どことなく不満そうな面持ちの茜が立ち塞がっていた。

「……勝虎の？」

「そう」

なぜか素っ気なく茜は言う。

本来なら喜ぶべきことなのだろうと思った。すぐさま勝虎の元に向かうべきなのとも。しかしどうしたわけかわたしの胸に広がったのは動揺で、勝虎に会いたいとはすぐには思えなかった。恐かったのだ。果たして今のわたしが彼に会う資格があるのかどうかかわからなくて。

「行かないの？」

「……いいのかな」

「は？」

「わたしが……勝虎に会って……」

わたしの言葉の意味がわからないのか、茜が妙ちきりんな顔をすする。わたしはその表情が可笑しくて、ちよつとだけ笑いそうになる。その場を動かこうとしないわたしに、やがて茜がため息をつく。

「あのさ、おばさん。なんていうか、らしくないよ」

「……うん」

「正直私は勝虎さんよりおばさんの方が心配なくらいだよ」

「……うん」

「うーん、おばさんはやつぱさ、こう、普段からもつと凶悪な面して、気に食わないものに片っぱしから唾つけて、暴れ回って、ぶっ殺すぞこの野郎ーみたいな感じじゃないと」

「あんたねえ、人をなんだと思ってるのよ」

わたしが半眼でつぶやくと、

「あははは、そうそう。そんな感じ」

ケラケラと少女は笑う。

わたしは疲れたように息を吐く。いや、わかっているのだ。茜は茜なりにわたしを励まそうとしてくれているのだ。ただ大概この娘もひねくれ者だから、素直にその辺を言えないだけなのだ。

「行つてきなよ、おばさん」

軽い調子で茜。

「……勝虎のところ？」

「んー。それもあるけど、そんだけじゃなくてさ。もっと暴れてきなよ、っていう意味。好きなように。よく知らないけどさ、おばさんなんかを間違っちゃったって思ってる、それでへこんでるんでしょ？ いいじゃん、間違ったって。まだそれですべてが終わったわけじゃないんだつたら。やり直せるし、これから先の教訓にもなるでしょ。私だってそうだったし。……って言うか、おばさんがそう気付けてくれたんじゃない、私にさ。行ってきなよ。決着つけてきなよ。おばさんらしく、無茶苦茶な感じでさ」

わたしは

「……ばーか」

ちよつと笑って立ちあがる。

そうして茜の頭をぽんと軽く叩くと、勝虎の待つ病室へと足を向けた。

わたしらしく？ わたしらしくってなんだ？

わかんないけど、とりあえず好きなようにやってみよう。

別に変に気負うでもなく緊張するでもなく、わたしは自然に勝虎の病室の扉をノックして開ける。開けることができた。ムカつくけど、茜の言葉がいくらかわたしの気持ちを軽くしてくれていた。

陽の光に優しく照らされた昼下がりの病室。

ベッドには、紫野と天狗に付き添われる格好で、勝虎が落ち着いた様子で体を横たわらせていた。

扉の開閉音に反応して彼の首が回る。そしてわたしの姿を見ると、心底ほつとしたような顔になって、言った。

「良かった。鱈子、元気そうで」

わたしはしばらく固まって何も言えない。

何言ってるんだらう。大事だったのは勝虎の方で、わたしは別に

なんともない。それはわたしの台詞のはずだ。そう思ったが、すぐに思い出す。勝虎はわたしを助けようとして怪我したんだ。それで「良かった」なわけか。いや、でも 怪我したのは勝虎の方なのだ。だったらまず人のことより自分を心配すればいいのに。

本当に、もう……

不意に頬を涙が伝った。昨夜あれだけ泣いたのに、わたしはまた泣く。

わたしは俯く。いろいろ言いたいことはあったのに、何一つ言葉にならない。

バカ。本当にバカ。バカツトラ。

ゆっくりとベッドサイドに近づいた。そして、勝虎の手を取る。

何を口にしても、それらはすべて代わりに涙となって目から溢れていってしまうようだった。そうした中で一言だけ、振り絞るようにして、あらゆる思いを込めて、わたしは言った。

「……ごめん」

「うん」

勝虎は小さく頷いた。

ただそれだけで、わたしは心底救われた心地がした。今回のような誤ちは、二度と犯さないと強く心に誓うことができた。そしてその瞬間、先ほどまでずっと考えていたことの答えが、ぱっと霧が晴れるようにして見えた気がした。

そうだ。どこまで行ってもわたしはわたしなのだ。どれだけ過去を振り返っても、未来を変えようとしても、わたしはわたし以外の何物にもなれないのだ。それは決して後ろ向きな意味ではない。変わるのには 変わったふりをするのは逃げなのだ。自分という人格の持つ責任を放棄して、なかったことにして、新たな人生に逃げるということなのだ。変わることを全否定しているわけではない。大事なものは、己の中にある、己の核のようなものをしっかりと認識し、自覚すること。その上で変えられるところは変えつつ、自分を見失わず、世界を変えていこうという気概を持つことこそが、社会の中

に生きる人間に求められるのではないだろうか。

好き勝手にするわけでもなく、かといってなんの疑問もなく社会の枠組みの中に収まるでもなく、自分は誰で、何が出来て、何をすべきなのか、それを知って、実行した時にこそ、わたし達ははじめて一人前と呼べる存在になるのだ。

ではわたしはどうだろう。

わたしは相田鱈子だ。

そしてわたしが今すべきことは 正しいことだ。

正しいことをしよう。感情ではなく、信念に従って。正しいと思えることをしよう。

「勝虎君、お医者さんが言うには命に別状はないそうですわ」

天狗が言った。

「なんや不幸中の幸いとでも言うべきなんか、内臓からはうまく刃が逸れてたとか、そやからまあひとまずは安心ですな」

「そうですか……」

わたしは涙を拭いて言う。

「天狗さんの言うとおりだからさ、もう心配しなくていいよ」

「うん……ごめん」

「謝らなくてもいいよ。その代わりに、一つだけ約束してほしいんだ」

「約束？」

「うん」

勝虎は頷く。勝虎の表情は、まだ意識がそれほどはっきりしていないのか、どこかぼんやりとしたものだったが、目つきだけは、今までに見たことない程に真剣そのものだった。

「お願いだからさ鱈子、もう危ないことはしないでほしいんだ」

勝虎の要求は、びっくりするほど単純なものだった。

「紫野さんから聞いたよ。犯人を捕まえようとして二人で夜廻りしてたんだって？」

「それは……うん……」

わたしはしゅんと、捨てられた子犬のようになだれてしまう。

「もちろんそれは悪いことじゃないし、むしろ良いことだけども、少しは自分のことも考えてくれよ。俺、鱈子に危険な目にあってほしくないんだ。今回だって、俺が夜廻りしようって言い出したのは、もちろん町の人の安全も大事だし、本当ならこういうのに順番つけちゃいけないのかもしれないけど、やっぱり一番には鱈子にもしもの事があったらって思ったから、だから俺、危ないってわかってても夜廻りしようって思ったんだ。こういうの、自分勝手なのかもしれないけど、もしかしたら余計なお世話かもしれないけど、俺は鱈子のことを守りたいんだよ。そのためだったら命だって惜しくない。もちろん、俺は死ぬ気なんて毛頭ないけどさ、それぐらいの覚悟、俺はあるつもりなんだよ。だから鱈子、お願いだからもう本当にこんな無茶はしないでくれよ。頼むからさ」

飾りつけのないストリートな勝虎の言葉。これがもし他の人が発したものでしたら、何綺麗事をもって感じで鼻で笑うところだけど、わたしは勝虎の婚約者だから、小西勝虎という人間がどういふ奴か知っているから、だからその言葉がどこまでも嘘偽りのないものだと思っている。

わたしは申し訳ない気持ちでいっぱいになる。もちろん、今回闇雲につっぱいして、そのせいで、勝虎を危険な目にあわせてしまったことを。そして

そしてもう一つ、勝虎はこんなにわたしのことを想ってくれているのに、わたしの方はと言えば、彼にずっと本当に自分を隠し続けていることが、何より今は申し訳なかった。

本当は違うのだ。わたしは勝虎に甲斐甲斐しく守ってもらえるよ。うな、そんな女ではないのだ。もうばらそう。すべてを話そう。あるいはその結果勝虎に嫌われてしまいかもしれない。だけど、それならそれを受け入れるしかない。このまま隠し事をしたまま、後ろめたい気持ちを持ったまま結婚する方が、きつとずっと苦しいだろうから。

「……違っただよ、勝虎……」

「違う？ 何が？」

「今までわたしはずっとあなたに嘘をついてきた」

「嘘……？」

「わたしは勝虎が思っているような女の子じゃないの。わたしは本当は」

「知ってるよ」

「……え？」

固まる。「知ってるよ」？ どういうことだ？ いったい何を？

思わず周りを伺うが、天狗はいつも通りお面で表情は見えないし、紫野は話についていけなくてかぼけつとわたし達二人のやり取りを見ている。

勝虎はいつもと変わらぬ笑顔を浮かべてそこにいる。

「いや、なんていうかごめん。俺の方こそ隠してたみたいの結果になっちゃって。俺、知ってるよ、鰐子のこと。俺の前でだけいつつも猫かぶってるのも、めっちゃ喧嘩強いのも、元ヤンなのも、しかもただの不良じゃなくて、関東最大のレディース「アシタロト 狩朱墮露斗」の初代総長だったのも。実は全部知ってる。ごめん鰐子、ずっと知らないふりしてて。俺が鰐子の秘密知ってるのを鰐子が知ったら、なんか嫌われちゃうんじゃないかって思って、ずっと言いだせなくてさ」

「え……え……？」

なんだか混乱してきた。いったいなんで？ どうして？ もしかしてこれは隠せてると思ってたのはわたしだけというパターン？

誰かばらした？ 反射的に紫野と天狗を見やるが、二人とも自分じゃないという風に首をブンブン横に振っている。と言うかそうだ。天狗達だって、知っているのはわたしと勝虎の前では演技してて、昔不良だったことくらいだ。いや、紫野に至っては不良であったことすら知らないはずだ。ましてや「狩朱墮露斗」については、二人はもちろん先陣岬町の人間には誰も教えていないはずなのに。

わたしがわけがわからずポカンとしていると、とっておきの悪戯

を成功させた子供みたいな顔をして、勝虎が続けた。

「いや違う違う。誰かに聞いたわけじゃなくて、実はさ、初めから知ってたんだよね、俺」

「初めから……って?」

「最初に会った時からさ」

「……え……?」

「はは、なんで? って顔だね。答えは簡単。俺も高校時代は不良やってたから」

「え……?」

勝虎が? 不良? 目の前でにこにこしてる、この人懐っこそうな男が?

「と言つても、俺なんて本当、半分以上ファッションみたいなチンピラだったけど。悪そうにしているのがカッコよく思えたんだあの頃は。高校デビューってやつ。今考えるとバカみたいだよな。見た目だけ迫力つけて、そんでなんとなく強くなっちゃった気がしてさ。それで勢いで高三の時に喧嘩なんてしてみちゃったりして、それで肋骨折る怪我して、やっとこさ、あーこれ俺に向いてないやつて気付いて、大学行ったらすっぱり更生した。今度高校時代の俺の写真見る? 本当バカみたいだよ、カッコつけてさ。ははは」

わたしは勝虎の言葉に対する理解が追いつかず、口をパクパクさせていた。悲しみも怒りも、やるせなさも、目の前で展開される予想もしなかった告白に、まとめてどこかに飛んでいってしまったみたいだった。

「まっ、俺はそんなのだったわけだけど、そんなのでも、あの時代をちょっとはぐれ者の道を歩いた関東の人間なら、相田鱈子の名前を知らないものはいなかった。わずか一年で関東中の勢力を手にした怪物。レディースのみならず、男の不良連中や、ヤクザですらその名前を聞いたら震えあがる悪魔。熊を片手でひねり殺せるとか、実は未来から来た殺人ロボットとか、はたまたそんな人間は実在せず、某大国の行った秘密工作を行った際のカバーストーリーに登

場する架空の人間の名前だとか、いろいろ言われてたな。それで『人食い鰐』に『関東のキラークロック』。そういう異名と一緒に伝説が一人歩きしていたっけ」

「いや……いくらなんでもそれは言いすぎな気が……」
半眼でわたしはつぶやく。

「本人はわかんないだろうけど、周りではそんな風に言われてたっ
てことさ。特に外野になればなるほどね。で、そんな時にゴルフサ
ークルの新歓で鰐子に会ってさ。内心めっちゃめっちゃびっくりした。
相田鰐子ってあの相田鰐子！？ってさ。珍しい名前だから同姓同名
はあり得ないだろうし、でも目の前にいる女の子はすごくかわいら
しくて、大人しそうで、全然話に聞いてた人物とイメージが合わな
い。だからさ、怒らないでくれよ、今だから言うけどさ、俺が最
初に鰐子と親しくしようとしたのはそういう理由からなんだ。本当
にこの子が伝説の相田鰐子なのか、それを確かめたくて」

「そう……だったの……」
「でもいつの間にかそんなのどうでも良くなってた」

勝虎は言った。

「猫かぶってたっていいんだよ。人はさ、そこまで含めて一個の人
間なんだ。何かに対して演技をするのだって、それもまたその人の
人格なんだ。よく『本当の自分』とかそういうのを持ち出す人がい
るけどさ、俺は本当はそんなものないんだと思う。一人の人間の中
に本当も嘘もないんだ。全部が表で、全部が裏なんだと思う。しば
らく付き合うつうちに、俺は鰐子の嘘に気付いたし、こっそり調べた
りもして、鰐子がああ相田鰐子で間違いないことも知った。でもそ
の時にはもう、俺鰐子のが好きになってたんだ。鰐子のこと幸
せにしたいって思った。俺よりずっと強い鰐子のこと護りたいと思
った。ずっと鰐子と一緒に生きていきたいと思った。……一緒にだ。
だからさ鰐子、危ないことしないでくれよ。俺、鰐子がいなくなっ
たら嫌だよ。死んだら嫌だよ。だから頼むからさ、もう無茶はしな
いでくれよ」

勝虎の告白は、やがて懇願に代わり

「……うん、わかった」

いつしかわたしの中の心の波も収まっていた。

どこまでも穏やかな気持ちになっていた。不安も、恐怖も、怒りも、驚きも、一時的にかもしれないが、今は収まって、胸の内に小さくなってきてくれた。

「その代わり、お願い。勝虎も一つ約束して」

「うん、するよ。何？」

「勝虎も、もう危ないことはしないで」

「……」

「わたしも勝虎と同じ。勝虎のことが好き。幸せにしたい。護っていきたい。……ずっと一緒に生きていきたい。だからお願い。無茶はしないで。そうして一緒にいよう。ずっと、一緒に」

「うーん……いや、でもごめん。その約束はできない」

「……何よそれ？」

「いやだって、俺鰐子が危ない目にあってたら黙って見過ごすことなんてできないからさ。そんな時は無茶しちゃうよ。危ないってわかってても突っ走っちゃう。そんな約束しててもさ」

わたしは本当に呆れる。人には約束を迫っておいて自分はこれか。なんともまあ身勝手なことか。本当にもう いや、思うだけにするのはよそう。思ったことは言葉にしよう。

それがかけねない、本当のわたしの気持ちなら。

「……本当にもう、バカ。……バカツトラ」

「うん。……ごめん」

そうしてしばらく手を握っていると、起きぬけに話すぎて疲れてしまったのか、再び勝虎は小さな寝息を立てて眠ってしまった。あはは、まったくもう。子供かよ。

「紫野さん」

しばらくそうした後、わたしは言う。

「は、はい」

「犯人の身元とかがってわかったんですか？」

「い、いえ。それが実はさっぱりで……。所持品や来ているものは安物の既製品で、お財布の中も入っているのは、少しの現金だけ。身元を示すものは何もなくて、意識も戻ったんですけど、本人もずつとだんまりを決め込んでしまっていて……」

「そうですか」

わたしは握っていた勝虎の手をゆつくりと離す。そして椅子を回して紫野に真っ直ぐ向き直ると、彼女を見据えて言った。

「紫野さん、一つお願いがあります」

「は、はい。なんででしょう？」

「犯人に会わせてください」

「へ？」

「鰐子さん、まさか……」

「大丈夫です。天狗さん。何もしません。仕返しもしません。ただ会って話したいだけです。だって……約束しましたから、勝虎と。

危ないことはしないって。だから大丈夫です。少し、会って話をしたいだけです。お願いします」

わたしは深々と紫野に頭を下げる。

突然のことに紫野はひどく慌てた様子だった。見なくてもわかる。わたしは頭を下げたまま紫野の返答を待つ。

「でも、それは私の一存じゃ……。あの、相田さん、頭を上げてください。そ、そんな困りますから」

「お願いします」

「でも、それは、岩瀬さんに聞かなきゃ……」

「じゃあ」

わたしは顔をあげる。そしてまた紫野を見つめる。

「岩瀬さんに聞きます。彼の所まで案内してください」

紫野は戸惑うように口をつぐむ。

「お願いします。助け船を出してくれとは言いません。ただ案内してくれるだけでいいですから」

「……わ、わかりました。それじゃあ岩瀬さんの所まで行ってみましょう。で、でも正直無理だと思います。あの、相手はまだ聴取もしていない容疑者なわけで、そこに民間人を会わせるなんて、あり得ないと思います、から……」

「わかってます。大丈夫です。……ありがとうございます」
わたしはまた深々と頭を下げる。

13

階段を上ったロビーの、自販機の前のベンチに岩瀬はいた。くしやくしやくによれたままのスーツが、彼のここ最近の疲労と、いかに今回慌てて病院に飛んできたかを物語っている。何かを考え込むようなしかめっ面をして、火のついてない煙草を指先で弄んでいる。彼は階段を上ってくるわたしと紫野の姿を認めると、当然だが怪訝そうな顔を見せて言った。

「紫野か。どうした？」

「あの、その、ええと、そのー」

「お願いがあります」

まごつく紫野を無視してわたしは一步前が出る。そして真っ直ぐに岩瀬を見据えて言う。

「お願い。ふーん、なんです？」

「犯人と話をさせてください」

ぴくりと岩瀬の眉が持ち上がった。しかし反応らしい反応と云えば、それくらいだった。

「そりゃ駄目です。あの男は三つの殺人と四つの傷害事件の被害者で、調書もまだ取ってない。しかも、あんたは今回婚約者を殺されたわけ、いわば間接的な被害者ですから」

「わかってます。何もしません。お願いします」

「駄目です」

「お願いします」

「駄目だ」

「……お願いします」

岩瀬が深く大きく、ため息をついた。しかしもちろんそれですぐに、はいわかりましたという風にはならないが。

「あんたね、話っていったい何話すんですか？ 婚約者を殺しかけた男と。今日の天気についても話すんですか？」

「それもいいですね」

「憎くはないの？ 目の前に犯人いて、それで抵抗できないぐらい弱ってて、間違いを犯さない保証がどこにある？」

「大丈夫です」

「何を根拠に？」

「ないです」

「根拠ないの？ それで俺に許可出せと」

「はい」

「駄目って言ったなら。力づくでとか言うっ？」

「言いません」

「じゃどうするの？」

「頼みます」

「俺が許可するまでそこから一步も動かないとか？」

「はい」

「駄目だよ。あきらめな。いくら待ったって無理だから」

「あきらめません。いくらでも待ちます」

「ふーん。好きにいな」

それで岩瀬はまた煙草にまた目を落とす。わたしはじっとその場で直立不動で待つ。

どれぐらいそうしていたのか と言うほど長くはなかったかもしれない。唐突に、わざとらしく大きく舌打ちをすると、岩瀬はイラついた様子でベンチから腰を上げた。

「駄目だ。もう我慢できん。おい、紫野」

「え、は、はい」

「俺はちよつと外で煙草を吸ってくる」

「は、はあ……」

「その間、お前がここを見張ってる。いいか、俺が戻ってくるまで誰もここを通すなよ。誰も、もちろんあんたもだ。いいか、絶対にだ。わかったな？」

「え、えーと……はい」

紫野が頷くのを見ると、それで岩瀬は鼻息を一つ鳴らして、さつさと階下に降りていってしまう。その顔は、なんと言うか、どことなくなぜか満足げだった。

「あれは……要するに会ってOKってことでしょうか？」

「え、えーと、どうなんでしよう？」

「ウルトラわざとらしくかったですよね」

「いや、まあ、その、……そうでしたね」

「あの人、実は見かけによらず人情派キャラなんですか？　て言うかこれで何かあったらどう責任取るつもりなんですかね」

「え、何かするつもりですか？」

「いやしませんけど。でもなんと言うか、もっと粘る必要があると思ってたんで」

「あつ、もしかしてこれは岩瀬さんがついに私を認めてくれて、すべてを私に一任するというサインでは」

「それだけはないでしょう。まっ、とにかく会えるんだから行きましよう」

「……」

閃いたという顔で固まる紫野を置いて、わたしは犯人のいる病室へと向かう。

茜や勝虎のものと同じ造りの扉を開けると、やはり見慣れた病室の姿がそこにあった。

異なるのは一点。ベッドに横になっている人物だ。勝虎やわたしも着ている、患者用の寝巻を纏い、そして顔にはぐるぐると、まるでミイラ男のように包帯が巻かれている。外から見えるのは、口元のわずかな部分と、右目の周りのたった二か所だけだった。おかげで人相はまったくわからず、これもまたこの男の人物特定を遅らせるのに一役買っているのだろうと思われた。そして右手。今思い返してもにわかには信じがたいが、数時間前まで確かに彼の右手から生えていた、刃渡りがメートル近くにも及ぶハサミも、今は姿を消し、何もなくなつた右手首にも包帯が巻かれていた。

でもこの彼の有様を作つたのは他ならぬわたしだ。彼の今の姿は、自分が行つたことがいったい何なのかを、周囲に、そしてわたし自身に知らしめる刻印なのだ。

意識があるというのは事実らしく、彼はわたしと紫野が病室に入ると、右目だけをくるりと動かして、その視界の端でわたし達の姿を認めた。

「よっ」

そして、感情のまつたく見られない声でつぶやいた。

「とどめを刺しにでもきたのか？」

声はひどくくぐもっていて聞きとりづらかった。もちろんそれは、彼の口元の包帯が、言葉の自由を奪っているからに他ならない。

その様子からは何も読み取れなかった。怒りも、苦しみも、悲しみも、喜びも。

それがなぜかわたしを強く苛立たせた。沸々と怒りが再燃してくるようだった。わたしは唇を噛んで、必死に感情を抑える。勝虎との約束がなければ、本当に殺してしまうかもしれないかった。

わたしは気持ちを落ち着けるように大きく一つ深呼吸をする。そして、ベッドサイドの横の椅子を引くと、そこに腰を落ち着けた。

わたしは真つ直ぐ彼の目を　片目だけの目を見て言った。

「違う」

「違う?」

「話をしにきたの」

「ああそう」

そう応えると、急に興味を失ったとでもいう風に、彼の視線は再び天井を向いてしまった。それはまるで、「とどめを刺しにきたのか」という彼の問いに、わたしがそうだと答えるの期待していたかのようだった。

彼はそのまま黙りこみ、そのまま口を開く気配すら見せない。話とは何かとかが、そういうことには一切関心がないらしい。

仕方がないのでわたしも、そんな彼の態度を“無視”して話を進めることにする。彼の無言の拒絶に気付かないふりをして言葉を吐き出す。

「わたしは相田鱈子」

彼は何も反応しない。

「あなたの名前は?」

聞こえた素振りも見せない。

ただ中空の一点を見つめている。

「名前は? いいでしょう、それぐらい教えてくれても。別に減るもんでもないだから」

応えない。

「ねえ、名前を」

「ない」

「え?」

「名前はない」

「……ナイさん?」

「違う。俺には名前なんてないんだ」

名前がない?

「冗談かと思った。わたしをおちよくって、怒らせようとしているのか、あるいははぐらかしているのかも。けれども、わたし

はすぐにその考えを改める。彼にはこちらの腹を探るような様子はまるで見られなかったからだ。少なくともわたしにはそう思えた。実際に名前があるかどうかに関わらず、彼自身はそう本気で思っているらしい。

ふいにすつと彼が目を細める。何かに目を凝らしているのかとも思ったが、どうやら違うらしかった。笑っているのだ。自らをあげ笑うように。

「信じないか？」

「……」

「だが事実だ。少なくとも、法律上はな」

「ど、どういう意味です？」

紫野が口を挟む。

「調べてみるといい。俺には戸籍が存在しない」

「そ、そんな馬鹿な」

「だが事実だ」

もう一度同じ台詞を吐くと、彼はまた天井に視線を戻してしまう。そんな彼の態度に腹を立てたのか、紫野が声を荒げようとした。しかしわたしはそれを制し、そして言った。

「わたしは信じる」

「ほう」

「信じるけど……」

「けど？」

「じゃあわたしはあんたをなんて呼べばいい？」

若干の間。まただんまりかと思いかけた時に、答えが返ってくる。

「……カズマ」

「カズマ？」

「……お袋は、俺のことをそう呼んだ」

彼は　シザーハンザーは　カズマはそう言った。

やっと名前がわかった。それはわたしにとつても、紫野達警察にとつても収穫であったわけだが、わたしはなんだか全然別のことが

心に突き刺さった感じがしていた。

お袋。そうカズマは言ったのだ。そうだ。当たり前のことではあるが、カズマにだって両親がいるのだ。人殺しだろうと、右手がハサミだろうとそれは変わらない。

彼もまた一人の人間に過ぎないのだ。怪物でも、化け物でもなかった。そういう概念は、人類が自らを美化するために作った言い訳の概念でしかなかった。すなわち、倫理的に著しく逸れた行いをするものを、あれは自分達とは違う存在だからと言って目を背けるための。だけど本当は、どんなに酷い行いも、醜い姿も、逆に称賛される行いも美しい者も、すべて同じ人という存在なのだ。

人間を殺意を持って殺してきたのはいつだって人間だ。

わたしはそれを自覚しなきゃいけない。目の前にいるカズマも、わたしも同じ人間なのだ。故にわたし達はいつでもわかりあえるし、いつでもわかりあえないのだと。

「じゃあ……カズマ？ 話を聞いていいのかな」

わたしは言った。

カズマは相変わらず沈黙したまま反応を見せない。しかし今度の沈黙は、どこか先ほどまでと雰囲気異なっていた。変わったのだ。カズマの態度が拒絶から肯定へと。

「わたしはあなたにどうしても聞きたいことがあった。だからこうして話をしに来たの」

カズマは応えない。わたしは言う。

「わたしが聞きたいのはたった一つだけ。

……どうしてあなたは人を殺すの？」

シンプルなたった一つの問い。

わたしは別にカズマに罰を与えようとは思わない。それはきつと司法が適切な判断を下してくれると信じる。だからわたしは今ここで彼の動機だけはきちんと聞いておきたいと思ったのだ。

なぜ勝虎は刺されなければならなかったのか。なぜわたしや茜や、他の三人の人間が襲われなければならなかったのか。なぜ澄野ゆか

り達は殺されなければならなかったのか。

法廷での取り繕った言葉ででなく、カズマ自身の偽りなき本心をここで聞いたかった。例えそれが快樂殺人だという答えだとしても、わたしは彼を責めたりはしない。それが真実であれば、どれだけそれが残酷なものだったとしても、わたしは構わなかった。

予想はしていたが、すぐに返事は返ってこなかった。そのまま数分間が経ち、これはまた拒絶に態度が戻ってしまったのだらうかと思いはじめた頃、ぎよろりとカズマの右目がこちらを向いた。

そして唐突に言う。

「あんたはいい女だ。相田鰐子」

わたしは訝しく思い眉を上げる。彼の真意が読めなかったからだ。「あんたは初めて俺に俺の望むものを与えてくれた。物理的な痛みと苦しみを味あわせてくれた。死の恐怖を感じさせてくれた。生き延びる喜びを実感させてくれた。命とはどんなバランスを持ってこの世にたゆたっているのか、他人の死では決してわからない、自らがそこに立たねば理解できない、その危うい境界を俺に見せてくれた。……俺に生きている証を与えてくれた。今の、俺の傷は俺があんたという存在と接触した事実を証明するものだ。この証を持って俺はあんたと、普通の人間と同じ世界で生きているのだと初めて思えることができる。実感が持てる。これであんたが俺を殺してくれば完璧だったんだが……もうあんたにはその気はないみたいだから、強制するのはよしておこう」

わたしにはカズマがどういう論理でものを話しているのかがさっぱりわからない。でも黙って聞く。

「あんたはいい女だ。相田鰐子。本当に感謝している。……その礼に、あんたに質問に答えることにしよう。あんたがそれで満足するというなら、あんたが俺に満足を与えたように、俺もあんたに満足を与えてやる」

すっとカズマが手首から先のない右腕を掲げた。それを見せつけるように前に突き出してくる。

「なぜ殺すかと聞いたな？ 理由はこれだよ。これだけだ。これがすべてだ」

「どういう……ことです？」

聞いたのは紫野だった。刑事としての立場故か、思わぬ形での犯人の動機の告白に、紫野は興味津津という様子だった。

いや、それだけではないだろう。紫野の場合、親友とも呼べる人間がこの男に殺されているのだ。なぜ澄野ゆかりは死ななければならなかったのか。彼女もまた、その一点が知りたいに違いない。

だが当のカズマは紫野のことなど眼中にないようだった。わたしだけを見て、わたしだけに語りかけてくる。

「わからないか？」

返事のないわたしに、カズマが問いかけてくる。

……どうだろう。本音を言えば、わたしはわかったような気がした。カズマが「これだよ」と右腕を見せた時、心のどこかにああなるほどと納得する自分が確かにいた。しかしわからないのもまた事実だった。わたしの中に、彼の思考回路を理解できるわたしと、できないわたしの二人が存在するのだ。有体に言えば、それはきつと昔のわたしと今のわたしと言ったところだ。では、と考える。

その“二人”はいつたいどこ以降でわかれたのだろうか？

勝虎と会ってから？ いや違う。それも正しいが、しかし決定的ではない気がする。

ならさつきだろうか？ 勝虎との約束がわたしを変えたのか。だがそれも完全な正解ではない。人間はたった一つの出来事で人格が変わってしまう程単純なつくりではないはずだ。

じゃあいつだろうと考えていると、唐突に解答に思い至る。

そうだ。ここに越してきてからだ。

先陣岬町とそこに生きる、馬鹿で間抜けな、しかし誠実な人々が、わたしの中の何かを少しずつ変えていったのだ。何も劇的な大事件があつてというわけではない。当たり前の、日常の風景の中での。しかしそれは、日常の外側の世界にいたわたしを変えるには充分だ

った。そしてそこにわたしを導いてくれたのは、他ならぬ最愛の彼、小西勝虎だ。

以前のわたしはきつと、性質は違っても属性はカズマと同じような存在だったのだ。暴力と血が当たり前に周りに散らばり、アイデンティティを社会的な枠組みの中で見つけることが出来ず、暴力的な行動が先行して、結果として社会の“悪”に染まってしまふ。だけど今のわたしは違う。当たり前前の世界を知ることによって、時には闇雲に動き回るだけでは駄目なことを知った。時間のかかるまどろっこしいコミュニケーション手段である言葉も、行動と同じくらい大切なことを学んだ。

世界には“正しい方法”なんてものは存在しないのだ。どんなことにも、その時々々の状況を見て、臨機応変に対応していかなければいけない。

カズマの間違いは、それが何かはまだわからないが、何かを行うのにたった一つの方法しか彼が持ちあわさなかったことだ。そしてそれは、人を傷つけ、果てに殺すという最悪のものだった。

今、わたしは試されている。目の前にいるカズマは、シザーハンザーで、人殺しで、憎き勝虎の仇であり、しかし同時にわたしの過去の思考と同様のロジックを持つ、ある意味で昔のわたしと呼べる存在なのだ。ならばここで彼のロジックを打ち倒せなければ、この先わたしは勝虎達と、天狗や千恵や茜や樹林や金井夫婦や東条親子らと、一緒に生きていく資格がないのだ。

この対決は、これまでのわたしの総決算であり、試されているのはもちろん、これからの、つまり今のわたしなのだ。今のわたしのロジックをもって、かつてのわたしのロジックを打破しなければならぬ。

遅まきながらわたしはカズマにわからない、と告げる。すると彼の右腕が再びベッドに降ろされ、視線は天井を向いてしまった。一瞬、カズマがまた拒絶の意思を示したのかとも思ったが、そうではなかった。

カズマはポツポツと、言葉を選ぶようにして話し始めた。長い話
否、物語だった。傷ついた唇から、彼はゆっくりと、途切れ途
切れに言葉を紡ぎ、わたしは黙ってそれを聞いた。

それは、遠藤和真の二十一年間の半生を綴る一つの物語だった。

15

俺の物心ついてからの最初の記憶は、蛍光灯の白い明かりに照ら
された四畳半程の狭い部屋の中で、おもちゃの人形をこの右手のハ
サミで切り刻んで遊んでいたことだ。そう、それは“遊び”だった。
なんの意味も、感慨もない。嗜虐心すらなかった。ただ暇で、他に
することがなくて、右手にはなんでも切れるハサミがあつて、目の
前に切れる対象としてその人形があつたから切つていた。それだけ
だった。その時の俺は、退屈こそ持て余していたものの、疑問なん
て何も持つちやいなかった。なぜなら俺の世界は、その四畳半の狭
い部屋と、許可の下りた時だけ歩き回れる家の中がすべてだったか
らだ。俺の世界の住人は、俺と、お袋と、親父の三人しかいなかった。
た。その他の人間など、世界には存在しなかった。だから疑問の持
ちようすらも、その時の俺にはなかったんだ。

少し時計の針を戻そうか。俺が生まれたのは、瀬喃村という、先
陣岬にも負けず劣らずの小さな田舎の村だった。そこでは江戸時代
からの旧家として、遠藤家が土地の権力を一身に握っていた。俺の
親父当真是、当時の遠藤家の家長、遠藤真一郎の次男だった。世の
多くの次男坊がそうであるように、親父は遠藤家の中で、家のこと
なんてまるで考えず好き勝手やって暮らしていた。面倒くさい家の
ことは、全部親父の兄貴。つまり俺の伯父にあたる遠藤慶真が請
け負ってくれていた。真一郎は化石みたいな古いタイプの人間だっ
たらしく、家の財産はすべて長男の慶真に継がせるつもりだった。
けれど親父は別にそれで構わなかった。その時既に、地元の小学校
での教師の職についていた親父は、日々の食いぶちは自分で稼ぐこ

とが出来ていたし、必要以上の金への執着もなかった。真一郎はそんな親父を、遠藤家にあるまじき心構えだなんだと言って、あまり良くは思っていないかったが、最低限の家のしきたりとやらは親父は守っていたので、口やかましく文句を言ったりはしなかったらしい。

ある時そんな親父が結婚をするようになった。相手は同じ小学校の教師で、名前は本庄雅。俺のお袋だ。正直真一郎は親父の結婚を歓迎してはいなかった。要するに、「由緒正しい」遠藤家の人間が家柄のないこの馬の骨とも知れないような輩と結ばれるのを嫌ったということらしい。しかし結局二人の結婚を　本筋から逸れるから詳しくは飛ばすが　すったもんだあつたあげく真一郎は認めることになった。親父が長男でなかったということもあるし、これまでの経験から、ある程度以上は互いに干渉しないことが、問題を大きくややこしくしないのだということ、親父も、真一郎もそれまでの二十年以上の生活の中で学んでいたからだ。そしてお袋は遠藤家に嫁に入り、舅である真一郎に疎まれながらも、決定的な衝突はうまく避けながら、それなりに楽しく暮らしたそうだった。

そんな中、お袋が俺を妊娠した。例えば　その時の選択がすべての間違いで、はじまりだったのかもしれない。いや違うさ。「産まれてこなければ良かった」だとか、そういうことを言いたいわけじゃない。そんなことを言い出せば、そこで思考停止になるだけなんの意味もない。だから問題は……俺をどこで出産するかということにあつたんだ。俺は病院で産まれたんじゃない。俺は産婆に取り上げられた。

親父とお袋は普通に病院での出産を望んだ。しかしそれを真一郎が許さなかった。遠藤家には代々専属の産婆がいたらしく、親父も伯父にあたる慶真も、真一郎も、みんなその婆さんに取り上げられたんだそうだった。そこは昔から続く祈禱師の家系でもあつたとかで、産まれた子供をその日の内に、くだらない祈禱とやらにかけるのが習わしだったとか。だから真一郎も俺の出産に対してそれを強要した。親父はもちろん反対したが、なんでかそれに関しては真一郎が

てこでも意見を変えず、無理に反対を通せば身重のお袋に手を挙げかねないような様子だったので、仕方なく親父は真一郎に屈することになった。婆さんが親父がガキの頃からの顔なじみで、人格と産婆としての評判は知っていたから、渋々了解したというところもあったのかも知れない。

そしてお袋の出産は自宅で、その産婆の下で行われることになった。今でも思うことはある。もし俺が、普通の病院で産まれていたらどうなっていたんだろうとはな。そして俺は、世界で唯一の、非常に珍しい奇形の間人として、医者共の研究の対象となり、世間の好奇の目にさらされながら、それでも“真つ当”な人生を送っていたんだろうかって。だがどれだけ過去の「もしも」に感傷を寄せようが、それはどこまでも過去でしかない。今この瞬間は変わらない。

とにかく俺は遠藤家の中で、産婆によって取り上げられた。産まれたその時にはもう……この右手のハサミは存在した。そして俺がそんな姿で産まれたことにより、遠藤家は大混乱に陥ったらしい。それは親父とお袋にとっては、聞いたこともないような奇形の子供が産まれてしまったという意味だが、真一郎達にはそれだけでは済まなかった。単純に世間の目がとか、それだけに留まらなかった。なぜだと思う？ 憑き物信仰だよ。まったく前時代的も甚だしいが、瀬喃村ではそういう馬鹿げた信仰が当ても根強く残っていたんだ。だから、あの村の間人から見れば、俺は単なる奇形とただだけに留まらず、良からぬ怪異のついた、忌み子として捉われたんだ。

そして、そんな前時代的風習の残る村で、前時代的観念の塊みたいな真一郎が俺の存在をどう見たか。簡単に想像がつかだろう。真一郎は俺の存在そのものを、完璧に、完全に否定した。認めるわけにはいかなかった。もし俺の存在が村の連中に知れば、江戸の時代から連綿と権威を保ってきた遠藤家の箔が、一気に地に落ちると真一郎は考えたんだ。だからこそ、奴は俺を流産したということに

して、鬼籍に入れようとしたんだ。

だがそこで親父とお袋が真一郎に反対した。これまで重要な件に關しては、真一郎に意見を譲ってきた親父だったが、今回ばかりは真一郎に従うことはできなかった。例え奇形でも、異形でも、仮に憑き物だったとしても、親父とお袋にとつては自分の子供だった。だから殺すことなどできなかった。親父の、一世一代の反抗だ。しかし今回ばかりは真一郎も絶対に譲らない。あの爺さんにとつては、家の権威と誇りは、自分の命の次に、いやあるいはそれ以上に大事なものだ。たからだ。

話し合いというか喧嘩というか、そんなようなものは俺が産まれてから一昼夜は休むことなく続いたらしい。しかしどこまで行ってもお互いの主張は平行線で、互いに一ミリだつて譲ることはなかった。次第にやり取りは激化していき、終いには真一郎は俺をその場で殺しかねない様子になつたらしい。

そして、その剣幕に身の危険を感じた親父とお袋は、ついに遠藤家から逃げ出した。産まれたての俺を抱えて、わずかな現金だけを手に、暗い夜空を親父とお袋は車を走らせた。

親父とお袋の人生はそこで狂い、リセットされた。慣れ親しんだ教師職すら辞めざるを得なかつた二人は、化け物の俺を抱えて、目を避けた、貧乏生活に身を落とさなければならなかつた。ついでに言えば、遠藤家もその後は没落の一途だつたらしい。それから数年後、親父の兄貴の慶真が病気に伏せてくたばつたことで、後継ぎのいなくなつた遠藤家はそこで断絶した。その後は坂を転げ落ちるがごとしだ。祖父はボケて徘徊して野たれ死んで、残された者は詐欺師に騙されて財産を丸ごとむしり取られたんだとか。今では屋敷はすっかり廃墟なんだそうさ。

俺が狂わせた。俺の存在が、親父も、お袋も、真一郎の人生すらも狂わせた。

考えようによっては、俺には本当に何か憑いていたのかもしれない……。

さておき、俺に戸籍がないとは、要するにそういうことだ。俺は遠藤家の外の人間には死産したものとして伝えられた。真一郎の手によって、俺はなかったことにされた。親父とお袋が家を出たのも村の中では俺が死産だったことによるショックで村を出たということにされたんだと聞いた。

そうして俺と親父とお袋の新たな生活が始まった。新たな住居は4LDKの一軒家だった。親父の、これまでの蓄えをはたいて買った家だったらしい。後に聞いた価格からすれば悪い家じゃなかった。よくは知らないが、昔住んでた一家が強盗に皆殺しにされたとかいういわくつきの物件だったとか。まあ、どうでもいいか。とにかく重要なのは俺達はその所で暮らし始めたということであり、そしてその新しい生活の中でも俺は“人間”として生きることが許されなかったということだ。親父たちは俺を人目から隠した。二階の一室を俺の部屋にあてがい、窓には常に雨戸と分厚いカーテンを引き、食事や排せつ、その他親父達の許可が下りた時以外に部屋の外に出ることは許されなかった。親父とお袋は、すべては俺自身のためと言った。外の世界に出れば、きつと世間の好奇の目にさらされ、人権などは剥奪された、無残な人生を送ることになる、と。

俺はそれをひどいことだとは思わなかった。だが感謝もしなかった。親父達のしていることが、正しいか悪いか、俺にとつて良いことかどうかも考えすらしなかった。なぜなら俺には、考えるための価値観も基準も、理念も道徳も何もなかったからだ。俺の世界は俺の家の中にしかなかった。だから外がどんな世界かも、外の世界の倫理観も、何も知らなかった。俺は俺の右手がハサミであることから疑問を持たなかった。親父とお袋しか人間を知らなかったから、それが異常なであることにも気付かなかった。だってそうだろう？ 三分の一の、俺だけが手がハサミだった。それは確におかしいが、そんなことを言えば、三分の一のお袋だけが女だったんだ。それだっておかしいことになってしまう。だから俺は、自分を不幸だとは思っていなかった。だが幸せだったかと聞かれれば、そうだと言え

る自信はない。

俺は基本的に生活に不自由は感じていなかった。食事は三食うまいものが与えられていたし、おもちゃの類も、一人では遊びきれないくらいに買い与えられた。読み書きや計算など、基本的な勉強は教師だった両親が手分けして教えてくれた。そして何より、俺はただ子供だった。親父とお袋がいればそれで充分だった。思えば俺の人生で、あの時こそが最も満たされていた。

だがそれは結局欺瞞に過ぎなかった。偽りの充足。表層的な愛。仮初の平穩。そんなものだ。簡単なことで、支柱を一本抜きとるだけで、ぼろぼろに崩れ去っていく砂の城だった。ある日俺は見てしまったんだ。まったくの偶然だった。悪気はなかった。あれは六歳か七歳か、もう少し上か、十歳にはなつてない頃だ。たまたま開いていた窓の隙間から、俺は見た。同年代の子供が学校から下校する様を。

その瞬間から、俺の疑問は始まった。

あの子達は誰なのか？ 何をしているのか？ 何をしてきたのか？

何をしにいくのか？ 背負っている鞆は何か？ 人間というものは、こんなに大勢いるものだったのか？ そしてなぜだ？

なぜ彼らにはハサミがないのか？

なぜ俺はあの中にはいないのか？ 彼らは何者なのか？ そして

俺は何か？

知恵の実を禁断の果実と称するとはよく言つたものだ。そうだ。

知恵とは罪だ。知つてしまえば、もう人は己を制することができない。欺瞞の安息に、身を浸していることが堪えられなくなる。だからさらに知ろうとする。例えその先に待つのが破滅だけだとしても

その日から俺の“真実”の探求が始まった。世界の形を、俺という存在の意味を知ろうとした。俺は親父達を問い詰めた。自分の見た外の世界のことや、俺自身について。はじめ親父は俺に忘れなさいと言つた。だがそう言われて簡単に忘れられるものじゃあない。もちろんそんなことは親父もわかつていたのだと思う。それでもそ

う言ったのは、きつとなんて説明すべきか、親父達もまだ心の準備が出来ていなかったからなんだろう。いつかはきつと事情を俺に説明しなければならぬことは、親父達だって覚悟はしていた。けれどその早すぎる到来に、彼らはまだ俺を納得せしめる言葉を用意できていなかった。俺は思いつく度両親に問うた。その度に彼らは忘れなさいと言った。しかしそんなやりとりが続いた数日後、ついに両親は俺を居間に呼び出し、滔々と俺の問いに答えていった。親父達が語ったのは当たり前のことだった。普通の人間にはハサミだなど生えていないとか、学校に行つて学んで、友達をつくつて遊ぶのだとか、やがて大人になつたら何かしら職について、社会の中で自立するのだとか。こうしてわざわざ説明するのもおかしいようなことばかりだった。俺は俺がどんなに異常な存在であるかを、その時初めて知った。

その時の俺の心の中は、今考えると意外な程に平坦なものだったと記憶している。それどころか怒りも悲しみ微々たるものでしかなかった。どこか納得してさえいた。うつすらと、心のどこかでは氣付いていたんだろう。違和感があつたんだろう。手がハサミであることにも、歪んだ、閉ざされた生活にも。

そしてその瞬間、新たな問いは生まれてきた。

俺はなんなのか？ このハサミはなんのためにあるのか？ 俺は何を為すべくしてこの世界に存在しているのか。

誰もが一度は己に問うことだ。だが俺の場合はその誰とも事情が違つた。なぜなら世界中どこを探そうとも、手がハサミの人間など俺しかいるはずもないから。故に俺は、他の誰とも違つ、俺だけの存在理由を探さねばならなかった。そうすることでは、俺は俺の境遇に意味を持たせることができなかつたんだ。

俺は手始めに知識を身につけることにした。なぜなら俺はその当時、何も知らない子供に過ぎなかつたからだ。何かを思考するにあたり、そのために使う糧があまりにも少なすぎた。俺は俺に、答えを導くために必要とする知の温床を植え付けようとした。しかしそ

の方法は俺の場合限られてくる。外を出歩くことはできない。相変わらずそれは許されていなかった。外には、まだ俺の居場所は存在しなかった。その時点での俺の世界は、いまだ家の中にしかなかったわけだから。

だから俺は本を読むことにした。ジャンルも種類も問わず、気になったものはなんでも読んだ。時間には不自由しなかった。経済的な面は両親に頼った。親父達は、俺が従順なふりをしていれば、たいてい安心して俺の願いを聞ける範囲で聞いてくれた。今思うと、やり口は卑怯だったとは思うが、言い訳がましく言えば当の親父達に外出を禁じられた身としては、他に良い方法がなかったというのも事実だった。

手段としては確かに閉鎖的ではあるが、効果で言えば読書は非常に有効なものだった。書が与えてくれる知識とは、すなわちファイルターだ。世界を見るための眼だ。星状旗は一見唯の派手でけばけらしい旗だが、見る者によつては、先人達が見せた独立と革命の精神の象徴だ。古代の人間にとつて、雷は怒れる神の慟哭であったが、科学の目で見ればそれは一つの自然現象に過ぎない。

知識は知れば知る程に俺に世界のあり方を教えてくれた。思考のプロセスの組み方をわからせてくれた。徐々にだが、およそ十年弱をかけることによつて、俺の中に本題に取り組むにあたって必要な土台が出来上がっていった。本題　もちろんそれは俺自身についてだ。“なぜ俺の右手はハサミなのか？”　これが俺の問いだ。俺のすべてだ。生物学的な意味じゃない。どういう理屈で俺の右手がハサミになったのだとか、医学的な理由だとかそんなのはどうでもいい。そんなことは医者が突き止めればいいことで、俺は医者じゃない。だから、俺が言っているのは意義としての意味だ。俺の右手がハサミであることについて、自己からの、同時に社会的な他者の視点からの認識の正しいあり方だ。だがもちろん　前提として「正しい」なんてことを言い出せば、決して唯一の解答を導き出すことなんてできないことは理解している。そもそも“意味”とい

う概念が、人間ありきで生みだされたものである以上、人間の外側、つまり真の意味での普遍的な意味などはありようがないのだから。だから当然ここで言う「正しい」とは、人間の枠組みの中での話だ。俺が、右手がハサミの人間ではない俺が、人間社会の中で意味を持つには、いったいどういう認識の下に自らを押しこめばいいのか、そしてその上で俺が取るのに最も相応しい行動とは何か。それが“なぜ俺の右手はハサミなのか”という問いの意味だ。

俺は考えた。考えた答えをひねり出した。ならば次は行動に移さねばならなかった。その答えを“正当化”するために、俺は俺の認識に準じなければならなかった。

それがすべてだ。それだけが事実だ。……理解できるか？

16

「だから……殺した？」

「そうだ」

「自分の考えを証明するために？」

「少し違う。証明じゃない。正しいかどうかは問題じゃない。大事なのは、準じることだ。意味の上に生きることだ」

「狂ってる」

「だろうな」

「わかっているのに殺すの？」

「わかっているから殺すんだ」

「……少し整理させて」

「どうぞ」

「あなたは殺した人達を憎んでいたわけじゃない」

「それはもちろん」

「世の中が憎かったわけでもない」

「そうだ」

「自分の境遇を呪っているのとも違う」

「そうだ」

「あなたは……右手がハサミである自分の、世の中での為すべき役割を考えた」

「大きく間違っではないかい」

「それが殺人だった……？」

「おおざっぱに言っつてしまえばそうなる」

「やっぱり狂っつてる」

「そうだな」

「罪の意識は？」

「あるさ」

「罪を償う気は？」

「機会が巡っつてくれれば。……今がその時か」

「自分勝手だと思っつたことは？」

「これが自分勝手じゃなくてなんになる」

「開き直っつてるの？」

「違う。受け入れてる」

「そんなの自己陶醉に陥っつてるだけじゃない。ただのナルシストとどう違っつていうの？」

「そうか？ ならあなたに訊く。“なぜ俺の右手はハサミなんだ”」

「……それは……」

「あなたに答えがわかるのなら教えてくれ。このハサミは万能のハサミだ。どんなものでも切ることができ。『矛盾』の故事に出てくる矛そのものだ。何かを傷つけるためだけにあるようなものだ。何かを護るためじゃない。ただ傷つけるためだけの武器だ。そのためのものだ。そんなものが俺の手にある意味は？ さあ、なんだ？ 教えてくれ」

「……それは……でも、殺すのは間違っつてる。あなたの理屈で。あなたに關係ない人を」

「話が戻っつてるぜ。間違っつてる間違っつてないじゃない。それに、俺の理屈じゃない。人類がこれまでずっと抱え続けていた理屈だ。人

は昔からまず己の意味を問うてきた」

「でも人は殺さない」

「殺すさ。いいか、人間の歴史は戦争の歴史だ。そして戦争とはなんだ？ 太古の戦争は、極めて直接的な利害関係のみが理屈で、原因だった。しかしある程度文明が発達して以降、人間はその上に新たな意味を塗りつけた。すなわちイデオロギーの闘争だよ。人はいつだって意味を理由に人を殺し続けてきた」

「これは戦争じゃない」

「わかつてるよ。戦争はただの例えだ。俺がしてきたのは戦争じゃない。犯罪だ」

「そうよ。ただの犯罪」

「そうだ。犯罪だ。ただのだ。ただの、真実の犯罪だ」

「真実の？」

「そうだよ。純粹な、完璧な罪だ。弁解の余地なき罪だ。そしてそんな真実の犯罪の動機は、いつだって意味の上に成り立つものなんだ。こう言い換えることもできる。意味の上の犯罪こそが、本当の意味での犯罪なのだ」

「どついうこと？」

「相田鰐子。人が犯罪に走る時とはどんな時だ？」

「そんなの一言で言えない」

「言えるさ。簡単だよ。必要に迫られた時、だ。さっき俺が言った真実の犯罪以外のすべての犯罪の動機とは、還元すればそういうことだ」

「自身の欲望を満たすために罪を犯す人もいる。悲しいけど」

「それだって同じだ。そいつは欲望を満たす必要に駆られたから罪を犯すんだ。その“必要”というものが極めて個人的な論理の上に成り立つものだとしても」

「じゃああなたが言う『真実の犯罪』っていうのは？」

「不必要な犯罪だ」

「不必要？」

「そうだ。しなければ何か不都合が発生するわけではない。することを求められているわけでもない。その行動それ自体に、意義をねつ造された愚かしい行いのことだ。それこそがこの世界で真に罪と呼べ得るものだ。そしてその背景にあるのは、狂気であり信仰であり、自意識の暴走だ」

「あなたの場合はそれだと」

「そうだ」

「……わからない」

「いいやわかるさ。俺の勘だが、あんたはわかりかけてる。こう言い換えればわかるか？ それはつまり、意味のない犯罪だ」

「意味のない？ 矛盾してる。さっきあなたは意味の上の犯罪だと言った」

「そうじゃない。ここで言う『意味』とは、さっきから俺が言ってきた、原理的なそれじゃない。つまり、社会的な、実利的な話の上での『意味』だ」

「わからない」

「それをする上でのメリットがない、ということだ」

「メリット……？」

「そうだ。それでもわからなければこうも言える。一般的な感性では理解できないのだと」

「理解、できない」

「そうだ。相田鰐子。たった今、あんたが俺に抱いている感情そのものだよ」

「……」

「いいか相田鰐子。社会一般で、理解でき得る範囲の行いのことは、真の意味での“罪”ではないんだよ。憎かったら殺した。金が必要だったから盗った。許せないから罰した。身を守るために殴った。これらはすべて、褒められる行いではないが、理解できる行いだ。そして『理解できる』とは、見方を変えればひとたび同じ立場に立たされたなら、『私でもするかもしれない』という共感そのものな

んだよ。それは、そういうものは罪ではないんだ。もちろん法的な意味では犯罪だが、そうではなく、誰でもしうるかもしれないという意味で、人間という、ひいては生物としての、行動のロジックの範疇の行いなんだ。法の上の犯罪性は後付けであり、真に、人類誕生の時から定められた、許されざる行いではないんだよ」

「じゃあ……じゃああなたの言う罪って何？　なんで殺された人達は死ななければならなかったの？　なんで……？」

「理由なんてないさ」

「そんなの……！」

「だからこそ罪なんだ」

「お前は……お前は！」

「なら俺はどうすればいいと言うんだ？　俺は俺の存在にどう折り合いをつければいいんだ？　なんのために八サミを持って産まれて、なんのために社会の上から抹殺されねばならなかった？　なぜ“あいつ”ではなく俺だった？　例えばどこかにいるかもしれない、八サミが必要だった人間にではなく俺なんだ？　なあ、どうなんだ？　俺はどうすればいい？　どうするのが正しい？　普通に学校に通い仕事に生きるのか？　周りの、あらゆる人間の奇特の目に晒されながら、八サミを使うことを許されず。それだった俺の右手が八サミである意味がないじゃないか。それだけだったら、例えば極端に醜かったり、できものがあつたり、そういう境遇でいいじゃないか。なぜ八サミなんだ？　そこに意味があるはずだ。いや、意味なんてないのかもしれない。なくていい。それでも俺は、現実に手が八サミである以上、そこに意味を見出さなきゃいけないじゃないか！　それだけが、その意味だけが俺を救うんだ！　俺を認めるんだ！　そうでなきゃ……そうでなきゃ俺は、俺がなんのために産まれてきたのか、なんでずっとずっと、一人で、孤独に、暗い部屋の中で生きていかなければならなかったのか、わからないじゃないか！　俺は自分の不幸に酔いしれたいわけじゃない。だけど……そうだけ……！　その不幸のわけぐらい知ろうとしたっていいじゃないか……誰

かに認められたかったわけじゃない……幸せを願ったわけでもない……俺は……俺は、ただ、生きてかっただけなんだ……。悪人でもいい、憎まれてもいい……。恨まれて、嫌われて、理不尽に殺されたって構わない……。ただ、俺は……。一緒に、みんなと同じ世界に生きてかっただけなんだ……。あんたと同じように……。あんたが好いた誰かのように、あんたが憎んだ誰かのように……。俺はこの世界の『誰かの何か』になりたかった……。それだけだった……。それだけが、俺の願いなんだ……」

「……」

「……」

「……」

「相田鰐子」

「何？」

「理解できたか？」

「無理。できない」

「俺が憎いか？」

「憎い」

「なら殺せ」

「……」

「俺は罪を犯した。故に罰せられなければならない。だから罰せ。それですべて終わる。もう一度言うが、俺は不幸に酔っているわけじゃない。罰を与えられるのを待ってたわけでもない。もちろんそのためにも人を殺したわけでもない。初めから決めていたことだ。罪を犯すと決めた以上、最後までそれを貫き、罰せられる運命が訪れるなら、その時は素直に受け入れると。そしてそれもまた、俺にとつては目的を果たしたことになる。さあ殺せ。相田鰐子。なんなら後ろのあんたでもいい。殺せ」

「……殺さない」

「怖気づくな」

「殺さない」

「罪の意識を感じる必要もない」

「そうじゃない」

「……自分が犯罪者になるのは嫌か。わかった。もういい」

「違う」

「なら殺せ」

「……殺してやってるよ。今までのわたしだったら。あんたは狂ってる。その上身勝手に、悲劇のヒーローぶってかっこつけて、適当な理屈並べて、結局は自分を正当化してる最低最悪のクソ野郎。心底死ねばいいと思う。生きる価値なんて微塵もないクズだ。なるべく苦しんで死ねばいいと本気で思う」

「なら殺せ」

「殺さない。……約束したから」

「約束……？」

「勝虎と、約束したから。もう危ないことはしないって約束したから。勝虎と二人で平凡な毎日の中に幸せを見つけてるって約束したから。だからあんたのことは死ぬほど憎いけど、殺さない。傷つけることもしない」

「そうか……。責めはしないよ。理解もする。だからもう去れ。俺のことなんか忘れて、幸せに生きる」

「ううん。違う」

「違う？」

「わたしはあんたを忘れるわけじゃない。見捨てるのとも違う。わたしは……わたしはあんたを許す」

「……許す……？」

「許す。茜を傷つけたこと。わたしを殺そうとしたこと。勝虎を殺しかけたこと。それを、わたしは許す。もちろん殺された人達について許すかどうかはわたしに決められることじゃないけど、少なくともわたしに関わることにしては、わたしはあんたを許す」

「……許す……」

「罪は罰せられなければならない。その通りだと思う。だけど……」

けど、それだけじゃない。罪は許されることもある。人は、人を許すこともできるんだよ」

「……………」
「そして、人だけがそれをする事ができる」

「……………」
「人は……誰かを憎んだり、殺したり、殺されたり、それだけじゃない。もしかしたら、それが本性で素直なのかもしれないけど、それだけじゃないだよ。自分の感情を抑えて、正しいと思うことを、本当に物事を解決に導くことができると思えることを選ぶこともできるの。自分の中に憎しみを、願望を、もっと大きな何かのために抑えて、正しく生きることが出来る。それが人間なんだよ」

「……………」
「それはあなたにでも出来ることなんだよ、カズマ」

「俺に……？」
「そう。あなたの話を聞いて一つわかった。結局理解は出来なかったけど、あなたがずいぶん苦しんできたことはなんとなくわかった。そういう風に考えて、苦しめるってことはあなたも確かに人間だつてこと」

「……………」
「だから、それはあなたも選べるんだつてこと。正しい生き方を」

「……………」
「俺は……………」
「それはあなたの論理に反するのかもしれない。意味のないことなのかもしれない。それでも人は、その意味のないことを選ぶこともできる。右手がハサミだつていうそのことで誰かを傷つけることもできて、それこそがハサミの意味を認めることなのだとしても、そんなのわかった上で全部無視して、誰かの、何かのためにそのハサミを使うことだつてできる。それが人間というもの」

「……………」
「俺は……………」

「カズマ、あなたは化け物じゃない。だから、お願い」

「……………」

「正しく生きてください。あなたが道を誤って殺めてしまった人達への償いのためにも。苦しくても生きることが投げ出さず、これからは人として、あなたが正しいと思えることを貫いてください。いつか自分で自分を誇りに思えるような、そんな生き方を目指してみてください。お願いします」

わたしは深々と頭を下げた。

シザーハンザー：エピソード

窓から温かな陽光が降り注ぐ。

対象的に無機質な白い床と壁。機械的な静寂。

ロビーのベンチに空気の抜けたタイヤみたいに座り込み、未開封の缶コーヒーを手にして、わたしはもう小一時間もその場でぼうつとしていた。冷たかった缶はすっかりぬるくなって手のひらで気持ち悪く踊っている。きつとわたしはこのコーヒーを飲まずに捨てる行き場を失ったものは、その本懐を果たすことなくどこかへ消えていく。

人も、物も、同じように。

自問する。し続ける。自分の行動の是非を、行く末を。答えが欲しいからではなく、答えを知るのが恐いから。

「鰐子さんは偉い人ですなあ」

降り注いだ声に顔を上げる。そこにはいつもと変わらぬ、仰々しい格好をした天狗がいた。普段通りののんびりとした、間抜けな様子に、いつもなら苛立つところだが、今はなぜかそれがひどく心地よかった。

「偉い。わたしが？」

「ほうです。偉いですわ、鰐子さんは。犯人君を許したほうやないですか」

「それは、その……」

自嘲するようにわたしは笑う。

「本当にあれで良かったんでしょうか」

「もちろん」

ドカッと隣のベンチに腰をおろして天狗が断定する。

「ええですか、鰐子さん。許すつちゅうのはですな、誰にでもでき

ることやないんですわ。憎むことや泣き寝入りすることは誰にでもできます。そやけど、すべてを承知した上で、相手の罪を認めて、それでも己を諭して、許すっちゆうのはなかなか出来ることやありません。あなたは立派ですわ、鰐子さん。もっと誇らしく、胸を張ってください」

「わたしは……」
違う。

そんなんじゃない。

わたしはそんなに立派な人間なんかじゃない。ずっと、ずっと握った拳を振りおろしたくてたまらなかつた。憎くて憎くてたまらなかつた。ただ、勝虎との約束が、ずっとわたしの理性の最後の糸の一本を繋いでいた。今だって、この瞬間だってずっとわたしは後悔していたんだ。カズマを殺さなかつたことを、悔いていた。

立派なのは勝虎であつてわたしじゃない。

「わたしは……」
醜い奴だ。

最低だ。

「そんなことないよ」

不意に聞こえた、わたしの心を見透かしたかのような温かい声。顔を上げると、そこには茜に車椅子を押された、勝虎の姿があつた。

「鰐子はよくやつたよ。立派だよ、本当に」

その言葉だけで充分だつた。

涙が溢れた。

ぼろぼろととめどなく流れた。

いったいこの二十四時間の間だけでどれだけ泣いてるのだろうと少しだけ思った。そうしたら、なんだかちよつと可笑しくなつて笑いたくなつた。でもやっぱりその笑いも形にならなくて、何か感情を表現しようとする、それは全部涙になつて目から落っこちていった。

顔をくしゃくしゃにしてわたしは泣いた。泣き続けた。嬉しくてか、安心してか、悔しくてか、全部ごちゃ混ぜになってなんだかもうよくわからない。

でも、悲しくて泣いてるわけじゃない。

それだけで充分だった。

わたしはきつと、これからもなんとかやっていける。

それからしばらくして、拘留中のカズマが拘置所から脱獄したという話を人づてに聞いた。拘置所の壁を、再生したハサミで切り取ったんだとか。

警察は再犯を恐れて全力でカズマの捜索に当たっているらしいが、なんと言うか、わたしは案外その手の心配はあまりしていなかった。

あの日、頭をさげたわたしに彼は言ったのだ。

「考えておく」と。

だからきつと、今彼はどこかで正しく生きているのだと、わたしは信じている。

わたしはカズマを許した。だから、それでいい。

こうして、

遠藤和真　シザーハンザーは、わたしの前から退場していった。

どこかで彼の物語が、まだ続いてくのだとしても。

シザーハンザー　完

シザーハンザー：エピソード（後書き）

まだ終わりじゃないぞい。

あともうちょっとだけ続くぞい。

最終話 千の神々(前書き)

前回までのあらすじ。

『ドラ○もん：青ダヌキ・リターンズ』

“憎悪に燃える瞳が語る…お前は私のものだ…”

ぐうたらダメ人間野比の○太の元から、ネコ型ロボットドラ○もんが消えて十年。

二十二歳になったの○太の有様を見たドラ○もんは、己の魂の呼びかけに突き動かされるようにして、ついに二十一世紀への帰還を決意する。

だが、非実在青少年問題の混迷の中、ドラ○もんの帰還は、様々な波紋を投げかける。

はたして彼は、otakuを危険にさらす脅威なのか。それとも救世主なのか。

耐用年数を過ぎてなお、孤高なる戦いを続けるドラ○もんの姿を通して、

正義、信念、男の生き様をハードボイルドに描いた一大巨編。

く元ネタ 小学館集英社プロダクション刊『DARK KNIGHT』の帯裏、『バットマン：ダークナイト・リターンズ』のあらすじよ
り

……これ、いろいろまずいかなあ。

じゃ、最終回始まるよ。

最終話 千の神々

1

どこかで蝉の鳴き声が聞こえていた。

先陣岬千恵は、ふとそんな当たり前のことに思い至り、視線を遠くへ投げた。

そして、もう夏なんだあとどこかくすぐつたくなるような感慨に襲われる。しかしそれは考えれば当然であることにすぐに気付き、結局どうでもよくなってまた俯いて地面をと睨めっこをしてしまう。

今日は終業式で、明日から学校は夏休みに入るのだ。夏休みだから、夏なのは当たり前なのだ。

本当なら 去年までは、この同じ夕暮れのおせ道を胸のはずむような気持ちで駆けていた。長い長い休みに期待を膨らませ、何をして過ごすかで頭を一杯にして、歩いているだけでも楽しかった。

だけどなぜだろう。今年は全然楽しくない。

いいやと思う。理由はわかってる。楽しくないのは夏休みではない。問題なのは千恵の気持ちの方なのだ。三週間前に見たあの光景が忘れられなくて、引きずっていて、今でも千恵はどうしても、心の底から笑えるような気分になれないのだった。

あの日の夜、千恵に訴えかけてきたのは、本当に何も根拠のない虫の知らせのようなものだった。直感的に何かあったと、そういう感覚が、布団の中で丸くなっていた千恵に降ってきた。学校の御神木に何か起きたと、それは千恵に強く訴えかけてきた。言葉が聞こえるわけでも何かが見えるわけでもない。それは文字通りの意味で感覚としか表現しようのないものだ。痛いとか苦しいとか、嬉しいとか、言葉にすると、微妙にその本物からずれてしまうような、そんな類の不思議な感覚。

千恵はそれが錯覚でも思いすごしでもないとすぐさま確信した。なぜならば、千恵にとってその感覚は初めてではなかったからである。

昔からそうだった。ここ先陣岬町に何か起きる時、千恵はいつも今回と同じような、その出来事を知らせるかのような、不思議な感覚を覚えていた。

例えば五年前、千恵は朝目覚めるとなぜか胸が悲しい気持ちでいっぱいになった。あまりに悲しくて何をする気にもならず、意味もわからないままわんわん泣いた。

その夜、千恵は天狗と共に、町一番の人格者として知られ、千恵もとても好きだった樹林録太郎の通夜に参列していた。録太郎が亡くなった時間が、千恵が目覚めた時間とほぼ同時だったと知ったのはそれからしばらくしてだった。

また、二年前のことである。その日、千恵は下校途中に自宅前を掃除する隅元の姿を見た瞬間、急に息がつまるような、息苦しい感覚に襲われた。それで千恵は隅元に、今日は家に帰っちゃいけないうちに泊まった方がいいと思いつくままに畳みかけた。初めは隅元も子供の（しかもちよつと変わり者として評判な千恵の）言うことだったので笑ってはぐらかしたが、千恵の様子があまりに真剣で鬼気迫るものであったため、ちよつと天狗と話もあつたしまあいいかという気分で千恵の家に泊まることになった。

その晩、先陣岬町は観測史上最大となる記録的な集中豪雨に襲われて、山の一部が大きな土砂崩れを起こした。土砂崩れの範囲は、民家の密集する地域ではなかったことが幸いし、巻き込まれた家屋は出ることはなかった。ただ一軒、隅元寛二の自宅を除いて。もしその日、隅元がいつも通り自宅で夜を過ごしていたのなら、彼は間違はなく命を落とすことになっていたのである。

その他にも、細かい予感めいた感覚に、千恵はたびたび遭遇していた。そしてその場合、感覚はほぼ百パーセント、起こったこと、もしくは起こり得ることを予知するような、そんな感覚なのだった。

今回の場合、それは痛みだった。ズキズキと、腹部辺りに鋭い痛みが走った。

そして一度そう思うと、もういてもたってもいられなくなり、気がつけば千恵は、家を飛び出して先陣岬小学校へと駆けていた。

大人達がいろいろ騒いでいるのは知っていた。なんでも町に人殺しがいるとかなんとかで、天狗からもなるべく一人で外を出歩いちゃいけないと釘を刺されていた。それでも千恵は動かすにはいられなかった。何が起きたのかこの目で確認しなければ一生後悔すると

これは文字通りの意味での 予感があつた。だから千恵は走った。真つ直ぐに、全力で、息を切らしながら。少しの恐怖を胸に。そこで千恵は見てしまった。

御神木が真つ二つに切られてしまっているのを ではない。否、それも見たが「見てしまった」と千恵に思わせた光景はそれではなかった。

それは、相田鰐子の姿だった。

まだ出会ってから三カ月程の、それでも千恵が大好きで、すごくかっこよくて、綺麗で、おもしろくて、一緒にいると楽しい、姉のように慕っていた女性。そう思えた「鰐子姉ちゃん」。

そんな「鰐子姉ちゃん」が、血塗れで、鬼の形相で、奇声を発しながら、何度も何度も何度も、見知らぬ男の顔に鉄槌を振り下ろす様だった。

近くでは鰐子の婚約者の小西勝虎が、彼もまた血塗れで仰向けに倒れていた。そんな彼らを、皆千恵のよく知る大人達が、何をすることもなく石のように固まって困っていた。

瞬間千恵は、理解した。

ああ、人殺しというのは鰐子姉ちゃんのことだったのか、と。

それで鰐子は、理由は知らないが、勝虎のことを殺してしまったのだ。そしてまた、別の誰かを殺そうとしているのだ。誰もが黙って彼女の犯行を眺めているのは、要するにみんなグルだということだ。だから天狗は千恵に外を出歩いちゃいけないと言ったのだ。千

恵にばれたら困るから、みんなが一緒になってこつそり人殺しをしているなんてことを、自分に知られたら困るから。

裏切られたという気持ちは不思議な程に起こらなかった。

ただ、悲しくなった。

今まで自分が信じていた世界が、全部嘘だったと知って、どうしようもないやるせい気持ちと、痛みで胸がいつぱいになった。

泣いた。

叫びたかった。

どうするとかなんのためにかではなくて、ただ、そうしなければこのままショックで壊れてしまうような気さえしたから、だから叫んだ。

。

すべての事情は後に天狗から説明された。

全部千恵の勘違いだと知らされた。人殺しはあの時鰐子が殴っていた男の方で、鰐子は勝虎を刺された怒りで我を失っていたのだと自分達は、情けないけれど、鰐子の剣幕に気押されて、止めに入ることもできずに腰が引けてしまったのだと説明された。

千恵は天狗のその言葉を信じた。天狗が嘘をつけば、それは自分にはわかるという自信があったから。だからそれが真実なのだろうと、千恵は素直に思った。

けれど、たとえ真実がわかろうとも、あの時見た光景が消えるわけではない。

相田鰐子の鬼のような顔が、今でも千恵の脳裏に焼き付いている。千恵は恐かった。もしもあれが、あの鬼の顔が鰐子の本当の顔なのだとしたら 否、あれが人間というものの本当の顔なのだとしたら

人間というものは、怪物と同義だということになる。

あれ以来、千恵は他人が恐くて恐くてたまらない。

横で笑っている親しい人が、いつあの鬼の顔を見せないとも限ら

ないと思うと、それだけで足がすくみそうになる。

特に相田鰐子のことは、あの時から恐ろしさのあまり一度も顔を合わせていなかった。わざと避けて、会わないようにしてきた。不思議なもので、恐い恐いと思って避けて通っていると、余計に恐怖は募っていくのだった。

今も千恵の心をいつぱいにしているのは他人への恐怖だった。最近はもう、誰とも話すのも嫌だった。それでも皆に心配は掛けまいと、必死に笑顔を作っているけれど、それにももう最近では疲れてきた。本音を言えば、一人にしてほしかった。クラスメイトのみんなは、ここ最近急に元気のなくなつた自分のことを気にかけてくれるが、今はその優しさすらもわずらわしい。

千恵は、らしくないと思いつつも深くため息を吐いた。千神祭りも近いというのに、全然そんな楽しい気分になれず嫌になつてしまつた。

と、そんな時だった。

「ねえ」

ふいに、どこかから声をかけられた。

千恵は反射的に俯いていた頭を上げていた。

見ると、進行方向の少し先に、一人の見知らぬ女性の姿があった。女性は、緩くウエーブがかつた髪が印象的な、三十歳前後に見える風貌で、化粧つけのない少ない顔に優しげな笑みを浮かべてそこに立っていた。なんとなくだが、千恵は瞬間的に女性がこの辺りの人ではないと判断した。女性が身にまとう、どこか垢ぬけたような雰囲気は、どちらかと言えば都会に住む人間が持つていそうなものだったからだ。言うならばこの感じはそう、相田鰐子を初めて見た時にも感じたのと同じものだった。

とは言え、その時の精神状態から、千恵は瞬間恐怖を覚えて女性から背を向けて駆けだそうとした。が、しようとしただけで、実際にはそうしなかった。

またあの予感があったのだ。この人は大丈夫と、それは千恵に語

りかけていた。何が大丈夫なのか、その辺はまるでわからなかったのだが。

「そのあなた。ちょっといいかな？」

千恵が返事をしなかったため、無視されたと思ったのか、もう一度女性が穏やかに言った。

それで千恵は、女性に一步近づくと、こくりと小さく頷いた。

「うん、いいよ」

「ありがとう。あなたは、この辺りに住んでるの？」

「そうだよ」

「名前は？」

千恵は横に首を振った。

「知らない人には簡単に気を許しちゃいけないってじっちゃんがつてた」

「ああ、そうね。ごめんね。わたしは」

「あたしは先陣岬千恵だよ」

「え……あ、そう……千恵ちゃんかあ、へえ」

「お姉さんは？」

「わたしは川島雪乃っていうの。よろしくね、千恵ちゃん」

そう言つて雪乃は優しく微笑んだ。

千恵もうん、と頷いて彼女に応えた。

なぜだろう。変な気分だった。でも悪くない。どういうわけか、この見知らぬ女性と話していると、それだけで気持ちが悪く落ち着くような気がするのだ。さっきまであんなにギスギスしていた心が、刺が取れて自然に丸く、なだらかになっていくような、そんな気が。

「千恵ちゃんに聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「うん。何？」

「わたしはね、ちょっとこの辺で人を捜しているの。ちょうど千恵ちゃんと同じくらいの年の子で、名前は彩花っていうんだけど、知らないかな」

千恵は首を振った。自分の友達の名前を頭に並べたが、その中に

彩花という名前はない。

「うん。知らない。先陣岬町に住んでるの？」

「うん、そう。……そのはずなんだけど」

「名字は？」

雪乃は困ったように苦笑する。

「それはわからないの」

「わかんないの？」

「うん、そう」

千恵は少し変だなと思った。人を探していて、名前はわかるのに名字はわからないなんてことがあるのだろうか。

そんな千恵の疑問をしり目に雪乃は話を進める。

「そっか。千恵ちゃん、わかんないか。ごめんね。急に変なこと聞いて」

「うん。平気だよ」

「うん、ありがとう。ごめんねついでにもう一つ聞いていいかな？
確かこの辺りに、古い神社があったよね。えっと、名前は確か…

…

「富周枳神社？」

「そう、それ。その富周枳神社に行くにはどう行けばいいかな？」

「あっち」

と言つて来た方向とは逆の、北の久禮山の方角を指さす。

「神社は山の傍にあつて、道に沿って行けば長い階段があるから、そこを登れば神社だよ。山に行く道は一本しかないから、迷うこともないと思う」

「そう。ありがとう。じゃあ行つてみるね」

そして雪乃は、また優しく微笑むと、千恵の横をすり抜けて山に向かつて歩いていこうとする。

その背中に千恵は、思い立ち、そうなると黙ってはいられなくて、大きな声を上げた。

「ねえねえ！」

雪乃が振り返る。穏やかな横顔だった。どうしてだか、千恵はもつと彼女と話していたと思った。こんな気持ちは初めてだった。それで、無理やり話題を探すようにして、千恵は言った。

「お姉さんどうしてその彩花ちゃんっていう子を捜してるの？ あたしも手伝うよ！」

すると雪乃は、その質問に答える代わりに　まるでそれが答えであるかのように、寂しげに、優しく、小さく笑った。

そして言った。

「ありがとう」

雪乃は千恵に背を向けると、夕陽の下を一人でとぼとぼと歩いていった。

2

最近なんだか妙に気分が良いぞえ。

まあなんかこういう風に言つととても良いことがあった、みたい
に聞こえるけれども、実際はその逆で、引越し初日に猫共が新居
に住みついてるわ面倒臭い家出少女に関わるはめになるわ殺人鬼に
勝虎刺されてついでに自分も殺されかけるわあげくそんなこんな
のゴタゴタに気を取られてジューンブライドを達成する機会を失うわ
で、いいことなんて何一つなくて、むしろこうして思い出してみ
ると悪いことしかねーじゃねえかという感じなんだけど、なぜだかこ
うしてぶらぶら歩いていると、それっただけで鼻歌を歌いたくなるほ
ど今のわたしは機嫌が良いのだった。

いや、いいこともないことはないかもしれない。一週間前、刺さ
れた傷が完治した勝虎は無事に仕事に復帰することができたし、そ
のクソつたれ殺人鬼を殴って何気に骨折していたわたしの右の拳も、
先日医者から完治の保証を頂いた。あとクソつたれうんこ殺人鬼を
殴ったことでわたしにかかっていた傷害の容疑も、岩瀬と紫野が色
々と立ち回ってくれたらしく、結局不起訴処分となり、法廷に向

くことはなく済むことができた。って言うかそれってよく考えたら怪我する以前に戻っただけでやつぱりいいことでもなんでもないじやんという気がしないでもないけれど、細かいことは見ないことにする。オールオツケーくるりんぱ。

とにかくわたしは気分が良かった。なんと言うか、最近うまくはまってきた気がするとも言っべきか。今までごちゃごちゃしていて、ガタガタだった日常という名の歯車が、ここにきてやっと噛みあいはじめてきた気がして、それがわたしのこのヘンテコな機嫌の良さにつながっているのかもしれない。

で、そんなテンション高めなわたしにふとよぎる一つの疑問。

柏木からの買い物帰り、スーパーのビニール袋を両手に提げているわたしはあることに唐突に気付く。

なんか町の平均年齢が急にいくらか下がった気が……。

と言うか確実に知らない人が増えてるぞ。

先陣岬町というのは、過疎化が進行する方々の田舎町の例に漏れず、普段は四十代の人でも若いっくらいジジババばっかの町なのだ。だからわたしや勝虎、茜に紫野や葵さんなんてのは、この町じや実はかなーり希少な若い人間であり、みんなが集まる場所にわたしがいると結構浮いてたりするのである。

それが今は道ですれ違う人々の年齢層が妙に低い。しかも知らない、見たこともないおばさんやおっさんに、何気にわたしらと同年代に見える、茶髪のおんちゃんや女の子もいる。果ては小さな子供まで。なんか冷静になって考えればすぐにも気付くようなことに今の今まで気付かなかったのは、ひとえにわたしの頭がおめでたいことになっていたからか。いや、それもあるが、それだけじゃない。意識して観察すればわかるが、その知らない人達は、なぜか町にはつちり馴染んでいるからなのだ。

道ですれ違えば彼らはわたしに気さくに挨拶をしてくるし、元々いたわたしの知っているじいさんばあさん連中とも彼らはずいぶん自然に接している。町中の誰一人として、居心地の悪いような雰囲気

気を発していないのだ。まるでそれが元からあった光景のようにそこにあつたから、脳内がお花畑な状態だったわたしはまったく違和感なくそれらを受け入れていた。

でもよく考えるとこれはかなり異常な状況ではなからうか？ わたしの脳内に、町に人間が一人、また一人と宇宙人と入れ替わっていくという昔のSF映画が浮かんだ。

が、すぐに関係ないと思い忘れた。

まあなんにしろだからどうなるということでもないと思い、わたしは無駄に考えるのはやめる。後で天狗にでも聞けば解決することだろう。

それでわたしは自宅に向かって歩みを再開した。ところがである。先陣岬小学校の前まで来た時だった。わたしは眼前に再び現れた異変の前に思わず足を止めていた。

なんだこりゃ、と胸中でつぶやくが、すぐに思考が一つの形に繋がりが、わたしはいろいろ納得する。

校庭の中心に組み上げられていたものは、盆踊り等の際に会場の中心に立っている、いわゆる仮設の櫓の、その骨組みだった。高さは今は十メートル弱といったところで、今もなお目下組み上げ中らしかつた。おそらく完成すれば櫓はかなりの高さになるのだろう。そしてその建設を行っているのが、総勢十五人前後の、見たことない若者達だった。

「そっか、夏祭りがあるのか……」

わたしは納得してつぶやいていた。

きっと街で見かけた見知らぬ人々は祭りの見物客なのだろう。：

いや待てよ。この状況を見る限り祭りはまだ先なのにああして人が集まるものだろうか？ と言うかこの櫓を造っている人達は？

普通こつというのは町の人間がやるものではないのだろうか。

とか考えていると、

「いんや、夏祭りじゃなくて千神祭りだよ」

ふいにかけられた声にぎよっとして振り返る。

そこにいたのはまたも見知らぬ若い男だった。私と同年か少し上か、それぐらいの風貌の、彫の深い人によつてはイケメンに映るような（わたしのタイプではないけど）、そんな男である。Ｔシャツにニツカポツカ、頭にタオルを巻いてその隙間から金髪を覗かせるといふ絵に描いたようなガテン系の出で立ちをしている。手に持ったセブンイレブンの袋から察するに、おそらく買い出しにでもでかけていたのだろう。袋の中には、アクエリアスやらお茶やらの、二リットルペットボトルが、五本程つまこまれていた。

男は振り返つたわたしと目が合うと、無駄に白い歯を見せて健康そうに笑い、気持ち悪くなるくらい気さくに（褒め言葉）話しかけてきた。

「どうも。あんた見ない顔だね。千神祭りも知らないみたいだし、観光客か何か？ いや、そりやまだ早いか。誰かの連れ？ 東井や村田とかの。あれ？ それも違うか。連れなら祭りのことくらい知ってるよな」

誰や誰だつて？ つーかわたしから見たらあんたこそ見ない顔なんだけど。

「いえ、わたし一応ここに住んでるんですけど」

「ここに？ ここつて先陣岬町？」

「そうですね」

他にどこがある？

「ふーん。じゃ、それつてどういうことだ？」

呑気にそんなことをつぶやきながら男が首をひねる。もちろん本人にはそんな気はないのだろうが、その様子がなんとなくわたしの癪に触るものがあり、思わずわたしは男に喧嘩を売りそうになるが、すんでのところで我慢我慢。勝虎と約束したのだ。わたしは生まれ変わって危ないことはもうしないと決めた。もちろん喧嘩もわたしはエレガントで清楚な淑女として生きるのだ。うんうん。

……あーでもムカつくわ。

それで一発ぐらいなら殴つてもいいかなーと、わたしが拳を握り

しめた時である。聞き覚えのある声と共に、わたしのよく知る人物が、櫓建設の輪を抜けてこちらに歩いてきた。

「相田さん」

「え？ 葵さん？」

と、間抜けな声を上げながらわたしは、艶やかな黒髪をポニーテールに結び、Ｔシャツとジャージに身を包んだ東条葵さんと対面する。どうやらあの櫓造りのガテン軍団（仮）の中に葵さんも混じっていたらしい。普段彼女は女性らしいしとやかな格好をしているためか、このような動きやすいラフな出で立ちをしていると、だいぶ見た目の印象が違う。いやしかしこれはこれで、汗を流した健康的な様子が、彼女の別の魅力を引き出している。って言うかこの人は結局どんな服を着ていようが美しい。ああなんと羨ましいことかわたしも葵さんのようになりたいでやんすよ。

「ん？ この人葵の知り合い？」

気軽にそう聞いたのはわたしの後ろの男。どうやら葵さんと知り合いらしいが……つーかこの野郎、何が「葵」だ！ 呼び捨てだとしてめえ！ 図が高いわド阿呆！ 誰だか知らんがただで済むと思わないよ！

とかわたしが半ば暴走気味にいきり立っている横でお話は進む。

「うん、そうよ。こちらは相田さん。春に町に婚約者の方と引っ越してきたのよ」

あれ？ なんか葵さんもなぜか男にずいぶん親しげ。ホワイ？

「へー。え、あーそうなんだ。四月に。そりゃ俺知らないわけだ。え、でもそれってどういうこと？ なんでこんななんもない田舎に引っ越してなんてきたの？」

「もう。何もなくなっていないでしょ。自分の故郷なのに悪く言わないの」

まさか……もしかして、いやそんな……こ、この男はもしかや葵さんの……ほああああああ。

……ん？

「あー、悪い悪い。でも実際何もないじゃん。俺だって祭りがなきゃ帰ってこないと思うし。葵も東京来ればいいのに。葵ならきつと超モテるぜ」

自分の故郷？ それに、帰って？

「からかわないですよ、金井君。それにわたしは町を出るつもりはないの」

金井君？ ってそりゃつまり……。

「からかっているわけじゃないって。葵なら絶対」

「金井？」

「え？ うん。俺、金井だけど」

「ええと、つまりそれって……」

「あ、すいません、相田さん。紹介が遅れました。彼は金井弘武君。コンビニの金井夫妻の息子さんです」

「やっぱり！」

わたしは思わず納得して手を叩いていた。そして頭の中でこんがらがっていた糸が今するするほどけていき、今一本の糸になったのだった！

バババーン！ 謎はすべて解けた！

「じゃあ、急にこの辺りで見えるようになった見ない顔の人達は……」

「ええ。皆さん千神祭りのために帰郷なさった、町の方の息子さんやお孫さん達です」

胸の中のもやもやが綺麗に消えて、わたしはなるほどと首を縦に振る。どうりで増えた人間は皆若くて、皆町に馴染んでいるわけだ。元々町の人間というならそれは疑問でもなんでもない。

で、それはわかったけど、そもそも「千神祭り」ってなんなのさ？

3

「『先陣岬』という地名は、元々千の神様の岬、『千神岬』という風に書いていたのが、転じて今の字に代わったのだと言われている」

す」

校庭の隅の木陰までやってくると、わたしと葵さんはそこに引いてあったビニールシートに腰を下ろした。櫓造りに励むガテン軍団改め先陣岬青年隊（でもこれも仮）を、眺めながら、葵さんの持つてきた水筒のお茶をわたしは受け取る。

先陣岬青年隊（仮）は、よく見れば女性も葵さんだけというわけではなく、汗臭そうな野郎共に交じってちらほらと若い女の子の姿もけっこう見ることができた。さっきは気付かなかったが、輪の中には紫野も混じっている。紫野は遠目から見てもわかるほど、無駄にはりきっている様子で、他の誰よりも動き回って櫓造りに精を出していた。が、勝手にずっこけたり、蜂に追い回されたり、崩れてきた木材に下敷きにされかけたりと誰よりも空回りしていた。つまり誰よりも役に立っていなかった。

（紫野を除く）皆は、遠目からでも都会的な洗練された様子が垣間見れて、こうして彼らを眺めているとここがクソのつく田舎町であることを忘れてしまう。しかし同時に、彼らの開けっ広げな明るく言葉をやり取りする様子は、まるで大家族の団らん風景のようで、そういう意味で彼らは非常に牧歌的でもあった。

「へえ、そうなんですか。『千神岬』ねえ。でも、あれですよね。

実は最初にここ来た時から思っていましたけど、ここ盆地なのに『岬』っておかしいですよ。これってなんか理由があるんですか？」

「諸説あるみたいでそこはよくわからないんです」

少し苦笑して葵さんが言う。

「でもちよつとおもしろい説もありますよ。信ぴょう性は薄いですが。それによると、なんでもこの地名の名付け親は坂上田村麻呂なんだとか」

「へえ。え、誰ですって？」

「坂上田村麻呂です。征夷大將軍の。彼が遠征の際にこの地に迷い込み、ここに住まう神々に化かされて、周囲が海に囲まれた岬の風景を見せられたのだそうです。田村麻呂一向は、自分達を惑わした

神々を、敵視するのではなく畏敬の念を払いました。神々は田村麻呂の憤み深く誠実な姿勢に感動し、彼らを開放したと言います。都に戻った後、彼はここで遭遇した一軒を朝廷に報告し、以来この地は千の神が住まう地として、千神の名が与えられたとか」

「はあ……。なんかもつともらしいくせにわけのわからない話ですね。それっていつの話ですか？」

「言い伝えの通りなら平安時代ですね」

「ふーん。そうなんですか」

「って言うか結局坂上田村麻呂って誰？ 征夷大將軍ってなんだっけ？ もしかしてわたしってバカ？」

「ちなみにその時彼らに対峙した神々の中に自分もいたと天狗さんは言っていましたね」

「あははは。ボケちゃったんじゃないですかね、あのジジイ。って言うか百歩と言うか一億歩譲ってあれが本物の天狗だとしても、天狗は妖怪であって神様じゃないじゃないですか」

「そう気軽に口にした言葉に、」

「いえ、そうとも限りませんよ」

「へ？」

「思ってもみなかった葵さんの返事が返ってきて、わたしは思わず間抜け声を上げてしまう。」

「そんなわたしの様子がおかしかったのか、葵さんはくすりと小さく笑うと、相変わらず穏やかに言葉を連ねた。」

「そうですね。まず前提として、相田さんは『神様』というものにとこういうイメージを思い浮かべますか？」

「えーと、そりゃあ、ハゲで髭で杖持ってて偉くててなんでもできる、みたいな……」

「なんだかそれってどっちかって言うつと仙人みたいですね。まあ見た目は置いておくとして、後半、相田さんは言いました。『偉くてなんでもできる』って。相田さん、神様はなんでもできると思いませんか？ 人間より偉いと思いませんか？」

「違うんですか？ だって神様って、世界を作って、そんで管理かなんかしてるんですよ。だからなんでも出来る。『神頼み』って言葉もあるじゃないですか」

「そうですね。でもちよつと違うんですよ、相田さん。たいていの人は、今相田さんがおっしゃったような、万能の、超自然的存在として神様のことを想像しますけれど、そうした神様の概念は、極めて一神教的な、キリスト教やイスラームのイメージであり、日本古来の宗教観とは異なるものなんです。極端なことを言えば、これは父の受け売りですけど、キリスト教の神様を『神様』と言ってしまふのは、間違いにあたるんです」

「え、それって葵さん、キリスト教に喧嘩売ってるんですか？ 見かけによらず過激な……」

「あ、違います違います！ えっと、言葉が悪かったですね。わたしの知り合いにもクリスチャンの方はいらつしやいますし、他の宗教を乏しめる気はまったくないんです。わたしがここで言っているのは語彙的な問題なんです」

「はあ、つまりどういうことですか？」

「『God』を『神』と訳すべきではないということです。『God』の正しい日本語訳は、そもそも『God』という概念のない日本の宗教観においては、正確に正しいと呼べる言葉はないのかもしれないませんが、多くの和約された聖書に記されている通り『主』という言葉に訳するのが適切だとわたしは思います。逆に日本語の『神』を英訳する時は『God』というのは適切ではなく、例えばそれは『Spirit』などと訳されるべき概念なわけです」

「はあ、へえ、……なるほど」

駄目だ。眠くなってきた。難しい話は勘弁。葵さんじゃなかったらはったおしてるところです。

「相田さんは『アニミズム』という概念をご存知ですか？」

「え。アニミズム？ いや、さあ。なんか二次元的な印象を受けますけど……」

ってゆーか、それさつきと話繋がってるのか？

「『アニミズム』、ですね。ごく簡単に言えば自然崇拜のような考え方です。万物に靈魂が宿るとされ、それらの靈的な存在を信仰の対象とする。日本古来の神道とは、本来こうしたアニミズム思想に類する宗教体系なんです」

「えっと、ごめんなさい。よくわからないんですけど、つまり日本の神様ってのはキリスト教とかの神様とどう違うんですか？」

「そうですね。ではまず基本的な話からしたいと思います。世界に存在する宗教には、大きくわけて一神教と多神教という二つの括りにわけることができます。世界三大宗教で言えば、キリスト教とイスラームが一神教、仏教が多神教になります。一神教の神様とはつまり、先ほど相田さんが想像なされた、ステレオタイプのな、万能の神様を信仰の対象とし、世界のすべての事象はその神の意思に沿っているという考え方を持つ宗教のことです。その性格が最も顕著なのはイスラームですね。イスラームでは、信仰の対象は唯一アッラーしかありません。キリスト教において、預言者であるイエス・キリストが、同時に神と同一視される場合もあるのに対し、イスラームにおいては、預言者ムハンマドは、あくまで預言者に過ぎず、信仰の対象になることはありません。同じように、キリスト教では、前提として主への信仰が為されている上で、同時に天使信仰や聖人信仰が為されている場合がありますが、イスラームにおいてはそれもありません。イスラームでは、アッラーのみが唯一絶対の存在なのであり、その意味で非常にわかりやすい原理的な一神教だと言えます。また逆に、キリスト教は、今お話したように、まず第一に創造主としての神への信仰が前提としてありますが、主以外が信仰対象となっているという意味で、極めて多神教的な性格を有している一神教だと言えます」

むにゃむにゃ……ぐー。

「ではその多神教とはなんなのか、簡単に説明しますと、一神教では、世のすべての事象を司るのが神であるのに対し、それぞれの事

象にそれぞれを司る神がいて、世界は彼らの行いの上に成り立っているのだと、そういう体系を持つ宗教が多神教なわけです。ここで既に、一神教と多神教とでは、『神』という言葉に意味的な差異があるのがわかります。一神教の神は唯一絶対、これは裏を返せば神の行いはすべて正しく、神の意に反する行いはすべて正しくないとことになりやすいですね。こうした理屈から、一神教にはほぼ例外なく善悪二元論的な倫理感がついてまわってきます。しかし多神教はそうではありません。多神教の神々は、あくまで各事象についての支配者であり、善悪としての倫理観を教義的に持っているわけではないからです。つまり、多神教においては、『良い神様』もいれば『悪い神様』もいるわけです。しかしこれは一神教においてはあり得ません。一神教では、神様は正しいものであることが前提であり、正しくないものは悪魔というレッテルを貼られることさえも少なくないからです。実際キリスト教には、元は他の有名な宗教や、土着の小さな宗教の神だったものが、キリスト教文化に取り込まれて悪魔にされてしまったものが多々あります。逆に多神教ではそういうことはあまりなく、他の宗教が輸入されてきた時、それを新たな神として迎え入れたり、自分達の既存の神と同一視することが多いわけです。仏教を想像してみてください。日本と中国とインド、それぞれで仏教は信仰されていますが、その雰囲気は知識のない人が見てもわかるくらい、例えばお寺の形一つとっても大きく違いますよね。これは各地に伝播する上で、その地の文化や宗教を吸収して変化していった、仏教の多神教的性格をよく表す現象です。

ここまでをまとめますと、一神教とは、万能で完璧な一つの神を頂点に、他の、人間社会を含めたすべてがその支配下にあるという考え方の宗教で、多神教とは、神々の世界が人間の世界の上位に位置するのは同じですが、一つの、特定の神がすべてを収めるのではなく、あくまで人間よりも高位の存在として神の姿を、そしてその世界を想像し、人間達は、それぞれ自分達にとって利益のある神に、主に信仰を寄せるといふ形態の宗教が多神教なわけです。ここまで

はおわかりになりましたか」

「へ？ えー、あー、もちろんです」

今日の夕飯何にしようかな。あ、そういえば賞味期限が今日までの卵が冷蔵庫にあったな！。

「ではそれを踏まえた上で、アニミズム思想に類する日本の神道についてお話したいと思います。最初にお話したように、神道は、唯一絶対の神を持たないという意味で多神教に属するわけですが、神道の場合、多神教の代表格と言える仏教や、ギリシア神話の世界とは、また一風変わった世界観を持っています。具体的に言えば、神道における神とは、それはそのまま『神』という日本語の持つ本来の意味としてでもありますが、要するに霊的存在の延長線上にある存在なんです。乱暴に言ってしまうえば、神道の神様って言うのは、つまりお化けなんですわ」

「お化け？ お化けってあれですか？ 足のない三角布の、ひゅーどろどろみたいな」

「はい。そのお化けです」

葵さんは笑顔で両手を前に持ってきてお化けの手の形をしてみせる。

ヤバい。かわいい。惚れるわ。

「あれが神様？」

「質的には同じ存在だということです。神道における神様ってというのは、お化けや幽霊、それに妖怪などと同質の、そしてより高尚な存在を指す言葉なんです。両者の境界はあいまいです。ですから、元々悪霊だったものが、時勢や場所によって神様へと昇華したり、またその逆に悪霊に転じたりすることもあります。あるいは人間を死後にその霊を神として信仰する場合もあります。これはキリスト教などの聖人信仰とは似て非なるものです。聖人信仰においては、聖人はあくまで聖人であり神ではありません。キリスト教では、神は主以外にありえないからです。

こうした神道の考え方を説明するのに、わかりやすく有名な具体

例は菅原道真公ですね。ご存知ですか？ 菅原道真」

「確か…… 学問の神様でしたっけ？ 九州の、太宰府天満宮だかなんだか。今年受験だからって、弟が拝みに行ってましたよ。まあ、時間の無駄だと思いますけどね。あいつ馬鹿だし」

ちなみにわたしは神頼みなんて暇なことするくらいならその間少しでも勉強に時間を使う派。

「はい、そうです。道真公は元々宮中でも有数の力を持つ貴族でした。ところが彼は九〇一年、政治的ないざこざの末に、九州の太宰府の左遷されてしまっんですね。結局彼はその二年後、九〇三年にその地で亡くなり、葬られます。けれど、それからしばらくして、京では要人の相次ぐ死や天変地異が頻発しました。それで人々は、それらを道真公の祟りだと考えたんです。つまり、この時点で道真公は悪霊だったわけです。その後朝廷は、悪霊の道真公を沈めるために、太宰府天満宮を建設し、天変地異を引き起こした彼の霊を、元からあった天神信仰と結びつけ、天神様として敬いました。その結果、時代の返還と共に、道真公の神としての信仰はすっかり定着し、今では生前彼が優れた学者にして歌人だったことから、学問の神として信仰されることとなったんです。おもしろいと思いませんか？ 元々一貴族に過ぎなかった人が、死後に悪霊となり、最後には神として信仰を集める。神道の特色を顕著に示した一例です」

「へえ、なるほど…… じゃあ天狗が神様かもしれないってというのは？」

「天狗というのは妖怪ですよ。妖怪とは、人が理解できない不可思議な現象に遭遇した時、そこにこういう存在がきつといるのだからという風に、理由付けのために想像したものなんです。つまり妖怪というものは、人智の及ばぬ世界の陰に、その身を置く霊的な生き物なんです」

「ふうむ。じゃあ要するに天狗も場合によっては信仰の対象になるってことですか？」

「そういうことですね」

「でもあの天狗のジジイは人間ですよ、どー見ても」

「えーと……わたしからはノーコメントでお願いします」

言いずらそうに目を逸らす葵さん。アホにはアホって言っちゃえばいいのに。

「まあそれはさておき、つまり千神祭りっていうのは、この町の、霊的存在？　みたいな神様のお祭りってことなんですか？」

とりあえずむつかしいお話は終わったみたいなので、わたしは元々の話題に戻って葵さんに質問する。

葵さんはこくりと頷いて応えた。

「そういうことになります。開催されるのは例年八月第一週の日曜日、ですから今年は四日です。正午に、富周枳神社の神主、つまり父ですね、によって行われる神事から始まり、そのまま町中を神輿が一周します。夕方くらいからは、ここを中心に夜店が立ち並んで、ずいぶん賑やかになりますよ。観光、という程じゃないですけど、ここ一帯では一番規模の大きいお祭りなんで、柏木市や、他の隣接する町からも、たくさん人が訪れるんです」

「へえ。楽しそうですね。お祭りか……。しばらく行ってないな。日曜日なら勝虎も休みだし、わたしも参加しようかな」

「ぜひしてください。と言うか、この町に住んでお祭りに参加しないなんて損ですよ。きつと来てくださいね」

「ええ、葵さんも。って、ああそうか。葵さんは当然参加するんですね。なんせ神社の人ですから」

「はい。でも、わたしなんて大したことはしなくてよ。大変なのは父だけです。富周枳神社の神主は、祭りの一週間前から、久禮山の奥にある本殿にこもり、神事に備えて身を清め、霊気を蓄えなければならぬんです。そして当日には、山から降りてきて、そのまま休むことなく神事を執り行っんです」

「うわ、なんか面倒くさそう。あれ？　ってことはもうあのおっさ東条さんはいないんですか？」

「ええ、昨日から久禮山の方に。実際父は毎年大変そう、わたし、

いつもこの時期になると申し訳なく思ってしまった。わたしなんて当日に巫女として父の手伝いをするだけですから」

「いやでもそれは仕方ないですよ。だって葵さんが代わってあげられることでもないんでしょう？ だったら　ん？ さっきなんて言いました？」

「え？」

「いやその、さっきです」

「父は毎年大変そうです」

「ええと、すみません。そっちじゃなくて。なんですって？ 巫女

？ 葵さんが？」

「え？　そうですけど、それが何か……？」

……葵さんの……巫女さん姿……？」

不思議そうな顔をしている葵さんから思わずわたしは顔を背ける。

ヤバい。

葵さんの巫女さん姿を想像したら鼻血が出そうだ。

ヤバーよ、超ヤバーよ。葵さんの巫女さんとか反則だよ最強の取り合わせだよ。焼き餃子にビールを超えたねこりゃ。ああもう葵さん好き。

結婚して。

「どうしたんですか？　相田さん。どこか具合でも悪いんですか？

あつ、暑いから熱中症とかですか？」

「え、いやいやいやなんでもないです大丈夫です」

あわててかぶりを振るわたし。葵さんに無駄に心配はかけられない。そんなことしたらわたしの心が痛んでしまう。まったく毎度思うことではあるが、あのなんちゃってカツコつけ親父からどうやってたら葵さんのような女神様が産まれるのだろうか。

ふとそんなタイミングで校庭に響きわたるぎゃーっというけたたましい悲鳴。何かと思つて見やると、いつの間にもやら集まっていた小学生集団から、紫野が水鉄砲の集中砲火を浴びさせられていた。なんだ紫野か。じゃあいいや。

水鉄砲を持っているのは主に男子の集団で、他に女子の集団がいて、彼女達は何やら金井Jr達と親しげにおしゃべりをしていた。本当にこの町の住人は皆無駄に仲が良い。

と、わたしは少女達の集団によく知る顔を見つける。千恵だ。そういうえば、千恵とはカズマの一件以来まともに顔を合わせていない。それでわたしは何か用があるわけでもないけど、なんとはなしに「千恵ー」と少女に呼び掛けてこいこいと手招きをした。

ところがである。その瞬間確かに千恵はこちらを振り返りわたしと目が合った。にも拘わらず千恵は、まるでわたしに気付かなかつたようにわざとらしく目を逸らすと、周りの友人に呼び掛けてそそくさとその場を退散したのだった。

こいこいポーズ（なんだそりゃ）のまま固まるわたし。ひくひくと額に青筋が浮かぶのがわかる。

「あんの野郎……、このわたしを無視しやがったな。ただで済むと思っちなよ……」

「最近、千恵ちゃん、元気ないですよね」

カチンときてるわたしの横で葵さんがそんなことを心配そうにつぶやく。わたしはその言葉にちよつと驚いて思わず怒りが引っ込んでしまった。

「そうでしたか？　と言うか、そうなんですか？」

「ええ。ここー、二週間ぐらいずっとどこか元気がなくて、怯えたような目をしていて。でも千恵ちゃん、周りの人と話す時はいつもと同じように笑顔を見せてみせるんです。それがなんだか痛々しくって。理由はわからないんですけど。気付きませんでしたか？」

「いや、まあ。最近あいつと顔を合わせていなかったもんで、言いかけて、」

わたしはハツとした。

そうだ。わたしは最近千恵と会っていない。でもわたしと千恵の家は、立地的には隣に位置していて、一步外に出歩けばこれまではたいてい顔を合わせていたのだ。そして最近も、千恵と同居する天

狗や茜とは普通に会っていた。しかし千恵には会わなかった。学校は夏休みで、普通に考えればこれまで以上に会ってもおかしくないのに。ではなぜ会わなかったのか。簡単だ。避けられていたのだ。わたしは。千恵に。今と同じように。ならばなぜ避けられてきたのか。これも簡単だ。

わたしは最近千恵に会っていない。じゃあ最後に会ったのは？

わたしがカズマを殺しかけた。あの瞬間だ。

千恵が恐れているのは、わたしなのだ。

「どうしました？」

問いかける葵さんに、

「いえ、なんでもありません。忘れてください」

わたしは嘘をつく。

わたしはアホだ。前回のカズマの一件、すっかり問題は解決して引きずるものは何もないと勝手に思い込んでいた。わたしはカズマを許したし、それは勝虎も同様だ。紫野は今のあの様子を見る限り大丈夫そうだし、茜はああ見えて案外タフだから割と何事もなかったようにやっている。

でもそれだけじゃなかった。あの事件で傷ついたのは、わたし達や、殺された人達だけじゃない。

千恵だっただけじゃなかった。あの事件の被害者の一人だった。なんだかんだでまだ十歳の少女にとって、自分の知り合いが人を、それも極めてむごたらしい方法で殺そうとしているのを目撃してしまって、それで何も思わないわけがない。

千恵はあの日確かに傷を負った。そして負わせたのは、カズマじゃなくて、言うまでもなくわたしなのだ。

4

今日は早く帰れそうって勝虎から電話がかかってきて、マジで、じゃあ夕飯作って待ってるから早く帰ってきてね、と口では言いつ

つ、内心やつべーまだ何もしてねえ米すら研いでねえと焦ってちやちやつと支度を始めた夕暮れ時。この絶妙なタイミングの悪さで突然玄関のチャイムが鳴り、わたしは慌てて鍋の火を止めて玄関へと駆けていく。

扉を開けると、そこには見覚えのない女性の姿があった。ウエーブがかつた髪の毛の三十歳くらいの物静かそうな女性である。

「えーと、どちら様ですか」

別に彼女に対して悪意はないが、なにぶん夕飯の支度を急いでいるわたしは早口に見知らぬ来訪者に問いかけた。

「お忙しいところ、急な訪問失礼します」

姿勢正しいお辞儀と共に女性が言う。

「わたしは新董ヶ丘にあります光石探偵社の、川島雪乃と言います」

「探偵さん、ですか？」

「はい」

頷いて、探偵であるらしい川島雪乃は、懐の名刺入れから一枚の名刺を取り出し、わたしに差し出した。受け取り見ると、名刺はいつかにどっかの馬鹿がわたししてきたものとは違ったちゃんとしたもので、そこには確かに『光石探偵社 川島雪乃』の名前と共に先方の電話番号や住所、ホームページのURLが記してあった。

「何かあったんですか？」

わたしは少し胸に不安な気持ち湧いてきて、真剣な面持ちで雪乃に訊く。

突然の、訪問者の姿に、以前シザーハンザー事件の時にうちを訪れた岩瀬達の姿がダブった。わたしにとってのカズマの一件はあの時から始まった。探偵という、また非日常的な職種の人間の来訪がまた何かきな臭い事態の始まりになるのではないかとわたしは疑ったのだ。

すると雪乃は、なぜか困ったように首を横に振り応えた。

「いえ、何かあったというのとは少し違うんですが……実はわたし、この辺りで人を捜しているんです」

「人を？ それってお仕事としてですか？」

「ええ、まあ」

雪乃は曖昧に頷く。

「彩花、という名前の、十歳くらいの女の子です。多分先陣岬町か、そうでなければ柏木市か、この辺りに住んでいるとは思うのですが、心当たりはないでしょうか？」

「彩花……ですか？ いえ、全然ないですね。その子に何かあったんですか？」

「それは……その、すみません。守秘義務と言いますか、聞かないでください」

「ああ、そうですね。わかりました。その彩花ちゃんとかいう子の特徴とかはわからないんですか？ 身長とか、髪型とか、顔立ちとか」

「すみません。わからないんです」

雪乃は首を横に振る。

「じゃあ写真とかも？」

「ありません」

「じゃあ名字は？」

「……わかりません」

雪乃は叱られた子供のように目を逸らせて、俯いてしまう。

わたしはその雪乃の態度に、彼女が何か隠しているかと推測する。守秘義務があるから詳しい事情は話せない。ここまでではわかる。しかしその他のこと、多分この辺りに住んでいるとか名字も容姿もわからないとか、対象者の写真の一枚もないとか、雪乃の持っている情報は、プロが依頼を受けて行っているであろう仕事としてはあまりにお粗末すぎた。とすれば考えられる可能性は二つだ。一つはこれが仕事としての人探しではなく、彼女のプライベートの事情によるものだという可能性。そしてもう一つ。探偵というのもすべて含めて嘘であるという可能性だ。

な、わけだが、わたしはこの二つの可能性に関して、無根拠

に前者を支持する気持ちになっていた。それは、また何か厄介事に巻き込まれるのはごめんだという願望もあるかもしれないが、しかしそれ以上に、目の前にいる少し疲れたような、誠実そうな女性が、何か良からぬことを企む悪人には見えなかったからである。

「あの、それではもう一つお訪ねしてもよろしいでしょうか？」

「はい。なんです？」

「この辺りのことに詳しい方、どなたかご存じないでしょうか。町に起きたことを、なんでも把握しているような、そういう方」

また妙な質問だなとは思ったが、わたしは素直に考える。すると最初に天狗のお面がわたしの脳裏に浮かんだが、ソッコー却下。見ず知らずの人に「天狗が」なんて言ったら白い目で見られること、確かだし説明がめんどうくさい。

で、わたしは二番目に浮かんだ人のことを伝える。

「この辺りに詳しい人って言うと、神社の神主の東条さんですかね」

「ああ、それって富周枳神社の」

「え、はい。そうです」

「そちらにはもうお伺いしたんですが、なんでも今はその東条さんという神主さんが神事の関係で不在だそうです」

「あ、そっか」

わたしは葵さんから聞いた話を思い出して頷く。

「他に誰か御存じないですか？」

そうになると、他にはもう残念だが天狗しかいないだろう。

「えーと……それじゃですね。うちの隣一軒家に、爺さんが女の子二人と住んでいます」

「女の子と？ はあ」

「頭のおかしな爺さんです」

「え？」

雪乃が怪訝な表情で眉を上げる。

「それって認知症でいらっしやるとかそういう」

「いや、そういうのじゃないです。ただの馬鹿です」

「はあ」

「わけのわからん格好してわけのわからんこととかだいぶ言つてしようが、温かい目で見守ってやるのがうまく付き合うコツです」

「はあ」

「で、そんな爺さんですが、町についてはかなり詳しいらしくて、町内会長も務めてるとか。そんなわけですからその爺さんに話を聞いてみてはいかがでしょう？」

「はあ。わかりました。それでその方のお名前というのは……？」
「知りません」

「……え？」

雪乃が思いつきり不審そうに疑問の声を上げる。でもまあ、当然だろう。わたしが逆の立場だったらおそらくぶん殴ってる。

「だから、頭のおかしな爺さんなんですって。まあ危険はないんでその辺は安心して大丈夫ですよ」

「ええと、とりあえず、隣に住んでいらっしやるんですね」

「はい」

「……わかりました。お話を聞いてみます。ありがとうございますました」

雪乃は深々と一礼すると、こちらに背を向けてわたしの家の前の坂道を下っていった。なんとなくだが、彼女の後ろ姿には不思議な哀愁が漂っているように見えた。同じような雰囲気を持つ背中に、わたしは今まで何度か出会ったことがある。あれは、それまでの人生でいるんな何かを諦めてきた者の背中だ。何かを守るために他の何かを捨ててきた、そういう過去が見えてくる。ような気がする。そういう後ろ姿である。

そんな夕陽の似合う背格好ぼんやり黄昏ていると、ひよっこりと今雪乃が降りた坂道から一台の車が登ってきて、わたしはゲツと言葉を詰まらせる。しまった。ぼーっとしているうちに勝虎が帰ってきてしまった。

「ただいま」

車から降りて来ると、いつもと変わらぬ屈託のない表情で勝虎が言った。

「え、えーと、おかえり」

「ねえ、今の人誰？」

「え？」

「その坂上った時に、女の人とすれ違っただけで、鱈子の知り合い？」

ああ雪乃のことかと納得すると、わたしは勝虎と家に上がりながらざつと事情を説明する。

話を聞き終えた勝虎は、背広を脱いで居間のソファに腰掛けると、よつてきたクロコを膝に抱いて、ふーんと唸って言った。

「彩花ちゃんかあ。俺も知らないな。本当にこの辺りに住んでるのかな？」

「さあ。それがわかれば苦労はしないだろうけどね」

わたしは急いで夕飯の支度に戻りながら適当に応える。勝虎はただ何も用意されていない食卓を見ても文句の一つも言わない。こういう時は嫌味を言えとは言わないけど、完全にスルーされるのも、必要以上に気を使われてるみたいでなんか嫌だ。

「何か力になれること、ないかなあ」

ほら出た。絶対言うと思ったよ。このお人好しは三度の飯、しかもわたしの手料理より人助けが好きなのだ。もう嫌になっちゃう。まあそれがなければ勝虎じゃないのかもしれないが。

「駄目だよ勝虎。そういうのはさ、助けられる当てがあつてこそ言うべきことだよ。当てもないのに言うんじゃそれはただの無責任」

「ああ、うん。そうだよな。うん。その通りだ。でもな、うーん」

わたしは相変わらずの未来の亭主に、深くため息をつく。言いたいこと山ほどあるが、今はとりあえずここまでにして夕飯作りに集中する。

カズマとの一件以来、わたしと勝虎の関係はこんな風に少し変わ

った。以前のわたしは、勝虎の馬鹿発言に、表面上はニコニコしたまま内心で罵詈雑言を浴びせていた。しかし今ではある程度はわたしも思ったことを素直に口に出しているようにしている。後は加減の問題だ。それらはひとえにあの一件以来、二人の間に嘘がなくなつたからなのだろう。わたしも勝虎に自分の秘密を打ち明けたし、勝虎もわたしに話してくれた。秘密なんてものはたいいそんなもので、一度言ってしまうえば、黙っていたころはあれほど知られたくないと思っていたことも、なんだかどうでもよくなってしまうものだ。結果、今では事件以前よりもずっと勝虎と一緒にいるのが楽しい、楽しい。そういう意味で、あの事件では傷ついた事柄も多かったが、得た者も確かにあったのかもしれない。

「ところでさ、話は少し変わるけど、あの川島さんっていう探偵さん、誰かに似てるように思わなかった？」

「え？」

そんなこと思いもしなかった。

「誰かって誰？」

「いや、それがわかんないんだけどさ、誰か、俺も鰐子も知ってる人に似てるように思ったんだよなあ。うーん、誰だろう……」

そう言つて、勝虎は一人で考え込んでしまう。

しかしわたしには全然思い当たる節がない。ためしに頭の中に雪乃の顔を浮かべてみて、その横にわたしに知り合い達の姿を並べてみるが、やはり最初に思った通り、彼女に似ている人間など一人もいなかった。

だから多分、似ている云々というのは勝虎の勘違いだろう。勝虎が雪乃を見たのは車ですれ違った一瞬だけだし、何より勝虎はバカなのだ。バカとは、時折こっちの予想の斜め上に行くような、そういうことを言ったりする生き物なのだ。

雪乃から渡された名刺に載っていたURLにジャンプすると、果たしてそこにはちゃんと『光石探偵社』のサイトが存在した。

光石探偵社は、新董ヶ丘に事務所を構える、今年で創業四年目となる比較的新興の探偵事務所であるらしい。所長（探偵社なのに『所長』っておかしいよね）の名前は光石和海という、一九五九年産まれ、の四十二歳の女性である。T大学の法学部にストレートで入学、卒業すると、これまたストレートで司法試験を突破。絵に描いたようなエリートインテリコースを一度も挫折することなく駆けあがると、当時は非常に珍しい、女性の裁判官として、主に家庭裁判所での案件を中心に取り扱っていくことになる。ところが彼女は三十三歳の時、突然に裁判官の職を辞任、何を思ったのか、和海は苦労の末に手に入れた立場も名誉も捨てて、探偵という、お世辞にも裁判官に比べれば社会的地位の高いとは言えない職を志すようになる。

その後和海は五年間、いくつかの探偵事務所や興信所を渡り歩いた末に、三十八歳の時に、新董ヶ丘に自らの事務所を構え、今に至る。光石探偵社の一つの売りは職員が、事務員まで含めてすべて女性のみで構成されていることらしい。そうした環境から、探偵事務所というものにイメージの湧きづらいつという女性や、男性には話しくいという悩みを持った人などに、気軽に相談に来てもらいたいと、そういうことが事務所の概要部分には書いあつた。他にももちろん、男性の依頼も引き受けます。私達は女性の社会的地位向上と自立を目指しうんたらかんたら等々。

以上、光石探偵社のホームページよりの情報である。正直わたしは、自分も女だけど、社会における女性の立場だとか、そういうのに深く関心がないので、社の方針だとか光石和海からの言葉だとか、その辺は適当にすつ飛ばして読んでいく。

わたしはぱつとディスプレイ上の矢印を動かして、職員紹介の欄をクリックする。するとそこには確かに川島雪乃の名前があつた。掲載されている写真も、わたしが先日見た雪乃の姿と変わりない。

お目当ての情報を確認したわたしは、インターネットを閉じると、

そのまま返す手で電話の受話器を持ち上げ、光石探偵社の電話番号をプッシュする。すると二回目のコールで先方に電話は繋がりに、若い女の子の（おそらくアルバイトの事務員か何かだろう）声で、はい、こちら光石探偵社です、という澁刺とした言葉が飛び込んできた。それでわたしはそちらに川島雪乃という探偵さんはいらっしゃいますか、と訊く。若い事務員は、はい、川島はうちの者ですが、と応える。ここまでは既に知っていることである。だから問題はここからだ。川島雪乃さんに用があるんですが、とわたしがテキストなことを言うと、女の子は申し訳ありませんが川島は現在出払っております、と応える。それでわたしが何かの依頼の捜査中ですか、と訊くと、少しの間を開けた後、いえ、と案外あっさりとな女の子は返事をした。

川島は現在休暇を取っております、仕事に復帰するのは来週の頭からになります。女の子はそう説明した。こちらから川島にご連絡差し上げるように伝えますか、という向こうの配慮を、わたしは丁寧に断ると、これ以上詮索されない内にとさっさと電話を切った。これではつきりした。雪乃は誰かの依頼で、仕事として『彩花』なる少女を捜しているわけではない。彼女は自らのプライベートの理由で『彩花』という少女を捜しているのだ。無論、先の事務員の女の子が嘘をついたというのも可能性としてはある。突然の不審な電話に、守秘義務を守るために嘘をついたのだと。しかしそれなら初めからそういえば良いのである。守秘義務があるから詳しくは話せないと正直に伝えればよい。わざわざ休暇中などと言う、考えようによっては隙だらけの嘘をこしらえるよりも、その方が後々に面倒になりにくいだろう。

では雪乃の真の目的はと訊かれると、皆目見当がつかないのだが、現実問題として考えて、それこそ探偵でもあるまいしそこまで突き止めようという気は端からわたしにはなかった。雪乃が怪しい人物でないかどうかを確かめるといって、当面の目標は達しているし、勝虎にも言ったが、どうにかできる当てもないのに無責任に人の問題

に首をつっこむ気もない。だからわたしはそこで雪乃に関する追及を止める。もし彼女の問題が、わたしにとっても重要なことであるならば、それはわたしが無理して追わなくても、きつと向こうの方から勝手に飛び込んでくるろう。

そうこうしてる内に、地球はくるくると何週か回転し、日付は八月三日、いよいよ千神祭りを明日に控えた土曜日となる。

その頃にはもう、初めひどく珍しく思えた先陣岬若返り現象（笑）も見慣れた光景となり、町中には、祭りを目前にした人々の、高揚感のようなものが漂うようになっていた。どうやらこの町の人間にとって、千神祭りというのはよほど大きなイベントであるらしい。わたしはちよつとだけ彼らが羨ましくなる。わたしが子供時代を過ごした街には、千神祭りのような郷土的なお祭りはなかった。

そんな日の夜、ハーゲンダッツは何味が一番うまいかで勝虎と議論になったわたしは、自らの抹茶説を証明するため金井夫婦のセブナイレブンへと足を伸ばす。心なし人通りの少ない気がする夜道を抜けて、コンビニの自動ドアをくぐると、無駄に威勢の良い「いらっしやいませ」の掛け声と共に、金井夫婦ではなく高校生くらいのキツネ目のバイト店員がわたしを出迎えた。彼は最初に会った時に金井が言っていた、二人のアルバイトのうちの一人であり、主に夕方から夜間にかけて、店に出ていることが多い。ちなみにもう一人のアルバイトというのは、片言な日本語を話す二十代後半くらいのお姉ちゃんである。彼女、そして目の前のキツネ目の店員もだが、彼らの詳しい素性や、どこに住んでいるかなどは、わたしは知らない。てゆうか興味ない。

「あ、どうもこんばんはー。相田さんじゃないですか」

キツネ目は普段見る時と同じように、ニコニコと屈託のない笑顔を浮かべながら気易く話しかけてくる。わたしはそれに素っ気なくこんばんはと返事する。基本的にわたしは馴れ馴れしい奴は嫌いなのです。

「今日はあんた一人？ 金井さん達は？」

わたしはなんとはなしに気になって訊く。たいていの場合、お店には夫婦のどちらかが出ているからだ。深夜の時間帯がどうかは知らないが、今はまだ午後八時で、大の大人が寝入ってしまうにはまだ早いだろう。

「金井さん達ですか？ 今日もう休んじやってますよ。明日が干神祭りだからですね」

「何それ？」

「あれ？ 相田さん知らないですか？ あ、そうか。相田さん春に引越してきたんですもんねー。じゃあ知らないですよね。あはは。あのですね、明日は干神祭りじゃないっすか。例年ね、祭りの前日の日は、みーんな夕方くらいには寝る準備して、お店は閉めちゃって、日が落ちたら寝ちゃうんです。翌日の祭りに向けて靈気を養うとかなんとかだね。そーいうわけで、町の人は今日はこの時間にはたいていもう布団の中です。まあぼくはこの町の出身じゃないんで関係ないんですけど、って言うか、だからこそぼく今日シフト入れられたんです。ひどいですよねー。ぼくだって明日、ちゃんと予定あるんですけどね。あ、でも予定って遊びなんですけど。あはは」

「ふーん。ん？ じゃあわたしが今も起きてるのってまじいの？」

「え、そんなことはないですよ。別にそれしきたりとかそういうのじゃないみたいですから。誰が始めたってわけでもないけど、なんとなーくそうするのが当たり前ーみたいにいるの間になっちゃたみたいですから。要は、小学生の遠足の前日と同じですよ。みんな明日はめいっぱい楽しみみたいですね。ほら、この町の人みんな明るくないですか。だからお祭りとか好きなんですよ。きつと」

「ふーん。なんか軽いのね。でもこのお祭りって、葵さんからちょっと聞いたけど、そもそもは神事なんかじゃないの？ そんな軽くていいの？」

「え、いいんじゃないですか？ お祭りなんてそんなもんですよ。て言うかですね、干神祭りって、実はけっこう最近から始まったも

のらしいですよ。元は午前中の神事だけだったんですけど。だけど、どうせならいい機会だし、夏だし、その後夏祭りもやっちゃおうって無理やりやり始めたらしいです。十数年前くらいから、東条さんが言いだしっぺで」

「へえ。じゃあ全然伝統のお祭りとかじゃないんだ」

「あははは。ぶつちやけそうみたいです。あ、でも神事の方かかなーり昔かららしいですよ、ちゃんと。でもぼくはなんだかんで後半のお祭りの方が好きかなー。楽しいですよ、お祭り。明日には町の外からの出店を出しに来る人なんかたくさん来て、もちろん参加する人も周辺からいっぱい。去年は地元ですけど、テレビの人達も来ましたしー。一大イベントですよ、もう」

「ふうん」

「だからね、みんなこの時期になると、町の出身の人は帰ってくるわけです。楽しいですから。この町にはなんにもありません。デパートも映画館もないし、コンビニだってここだけ。そりゃもう不便です。吉幾三の歌みたい。だからみんな出てっちゃう。オラこんな村嫌だーってね。でもね、お祭りは楽しいんです。だからみんなここを忘れない。不便だけど、楽しい思い出があるからみんな帰ってくるんです。結局場所の価値ってそういうことで決まるんじゃないでしょうか。どれだけの人がそこを好きでいてくれるっていう。歴史的なーとか、環境的なーとか、そういうの、全部後付けなんですよ、多分。みんなが大事にしたいと思うから、それで充分じゃないですか。でも偉い人達は、それじゃなんか軽いなー、もつと凄そうなお雰囲気欲しいなー、って思うから、なんかそれらしい理由をでっちあげるんです。まあ、そんなことはさておきですね、何が言いたいかって言うと、要するにここはいい場所だと思うってことです。そう思いませんか？」

「あんたさ」

「え？ なんです？」

「よく人にウザいとかキモいとか言われなない？」

「ガーン！」

大げさに両手を上げてリアクションを取るキツネ目。
ウザい。

「な、なんでですかあ!？」

「いやだつて訊いてもないことまで勝手にべらべら喋り出すんだもん。聞かされる方からすればいい迷惑だし」

「ガガーン！」

再び無駄にでかいリアクション。

キモい。

そのままウザくてキモい感じにわかりやすくなだれるキツネ目に小さく苦笑すると、別にフォロワーする気もないので、わたしは本来の目的のハーゲンダッツを棚に取りに向かう。

でも、まあ、と思う。キツネ目はウザくてキモいが、言っていたことは、全肯定ではないけど素直に共感できた。場所の価値を決めるのはどれだけの人がそこを大事に思えるか。確かにそうだ。そもそも文化的な意味での「価値」なんてものは、人間ありきの価値でしかない。例えば犬や猫にしてみれば、ピラミッドはただの石造りの山であり、ナイル川はただの大きな水場でしかない。偉い歴史家の先生とかは、何を単純なことを、これだから教養のない人間はとお怒りになるかもしれないが、もしも明日、わたし達人類が絶滅でもしようものなら、その無教養の価値の方こそが真実の価値となるのだ。

結局わたし達人間は、自らの主観というフィルター越しでしか世界を見ることはできない。だとしたら世界の価値とは、結局個人という単位の中に還元されていく。そして、そういう意味で、先陣岬町の価値は、この町に関わる人々にとって、きつと一番ではないだろうが、捨て去ることもできない、それぐらいの大切なものなのだ。そんな大切なものがあるというのは、当たり前前のように、多分とても喜ばしいことなのだ。

わたしはこの町をそんな風に思えることが出来るだろうか。

うん。多分だけどできる気がする。まだこの町に住み始めてから四カ月。それでもその短い時間の中で、わたしは多くの出会いと、いくつかの問題を経験した。

その中で、わたしはめいっぱい怒って、笑って、泣いて、また笑った。それは全部、良いことも悪いことも含めて今のわたしの人生の一部となっている。思い出となっている。それはすなわち、わたしもこの町のことを好きになりはじめてるということだ。何もなくて、多くのものがある町の中に、少しずつわたしは自分の居場所を作っていく。

わたしは落ち込んだままのキツネ目を適当におちよく 励ましながらハーゲンダッツの会計を済ます。

さて、とりあえずは明日のお祭りをわたしも楽しもう、そう思っ
てコンビニの自動ドアをくぐろうとした時だった。

わたしが扉の前に立つよりもわずかに早くドアが開き、そこに立
っていたのは

「あ」

二つの声が重なる。

店に入ってきたのは 先陣岬千恵だった。

「千恵」

わたしが声をかけようと口を開きかけたその矢先、
くるり

と背を向けてダッシュで千恵は走り去っていく。

カッチーン。

なんか頭にきたぞ。あの小娘……このわたしが、相田鱈子様がテ
メーのことを気遣って優しく声をかけてやろうと思ったら一も二も
なく逃げ出すとは いい度胸じゃねえか。

「これお願い！」

わたしは手早くハーゲンダッツが三つ（バナナ、抹茶、ストロベ

「え、う、うん。何」

「ごめんね」

わたしは手を放すと、真っ直ぐに少女を見つめて言った。

「え……えっと、な、何が……？」

「いろいろと」

「いろいろ……？」

「うん。……もう大丈夫だからさ」

「……」

千恵は黙る。わたしの言っていることが理解できないわけではな
いだろう。千恵はこう見えて、賢い子供だ。少なくとも大人の嘘を
見抜き、自分の考えを持つくらいには。

「千恵。聞いて」

「……うん」

「あんたが恐がってるわたしの姿」

「うん」

「あれも、間違いなくわたしの姿なんだ」

「……え？」

千恵の顔がまた泣きだしそうに歪む。

わたしは出来る限り優しく言う。

「醜いわたしも確かにわたしの一部。わたしの持つ顔の一つ。うう
ん、人間の持つ顔の一つ。千恵、わたしはね、あの時負けてしまっ
たの」

「……負けた？ ハサミの人に？」

「ううん。違う。わたしはわたしに負けた」

「鰐子姉ちゃんが鰐子姉ちゃんに？」

「そう。いい、千恵。人間ってというのはバカだから、時々いろんな
抱えてるものを全部ほっぽり出して、もっと大切な何かのことも忘
れて、感情のままに動きなくなっちゃうもんなの。そうすると、結
局すごく楽だから。でもそれはしちゃ駄目。もちろんそれでいい結
果を生むこともあるけど、それじゃただの獣と一緒に。わたし達は人

間だから。人間はバカだけど、選ぶこともできるものなの。自分の行動を、いくつかの選択肢のうちからね。けれど時折、その選択肢の存在に気付かずに、バカみたいに暴れちゃうことがある。それは人間であることを捨てた状態。それこそが怪物。千恵、覚えておいて。人間は自分に負けた時、怪物になってしまうの」

「……じゃあ鰐子姉ちゃんは怪物だったの」

「うん。……わたしは怪物になってしまった。でも大丈夫。わたしは約束したから、勝虎と。みんなと」

「みんな？」

「そう。天狗に、茜に、紫野、樹林や東条さん、葵さん、それとあなた」

「あたし？」

「そう。わたし約束したから。わたしは人間として生きていく。もう怪物にはならない。そう心の中で誓った。……千恵、わたしはもう負けないから」

「……」

「もう二度と負けないから。わたしはずっとあなたの知ってる『鰐子姉ちゃん』でいるからさ。だから、ごめん。いろいろ許して。ね？」

わたしは千恵に笑いかける。が、相変わらず少女は俯いて、目を合わせてくれないままだった。そしてしばらくそのままで、こりや駄目かなと真剣に考え始めた頃、一歩下がって千恵が顔を上げた。

「鰐子姉ちゃん」

「何？」

「あたしの方こそごめんなさい」

「は？　なんで？」

今度はわたしが目を丸くする番だった。

「鰐子姉ちゃんはずっと鰐子姉ちゃんだったみたい。なんにも変わってなかった。それなのに、あたしが勝手に勘違いして、恐がって、みんなに心配かけちゃった。あたし恐かったんだ。鰐子姉ちゃんが

いなくなつちやつたみたいで。あたしは昔つからずつとじつちゃん
と二人暮らした。もちろんじつちゃんのことは大好きだけど、
他の友達はみんなお父さんやお母さんがいて、兄弟がいたりして、
もつとたくさん家族で暮らしてた。あたしの知り合いで二人ぼつ
ちだけなのはあたしだけだったんだ。だから、ちよつとだけみんな
が羨ましかった。そしたら春から鰐子姉ちゃんがきて、勝虎兄ちゃ
んがきて、茜ちゃんがきて、急に家族が増えたみたいであたしすこ
く嬉しかったんだ。だからあたしは、それがなくなつちやうのが恐
かった。せつかくできた『家族』がなくなつちやうのが恐くて、嫌
だった。でもあたしの勘違いだったんだね。鰐子姉ちゃんは変わつ
てなかつたのに。あたしだけ勝手に落ち込んで、なんだかバカみ
たい。鰐子姉ちゃん、本当にごめんなさい」
律義にぺこりと下げられた頭を、わたしはちよつと可笑しくなつ
て、笑いながらくしゃくしゃとなでる。

ひよつこりと、少女の顔が上げられる。

「ばーか。ガキのくせに偉そうなこと考えてんじやないよ」

「……うん」

千恵は笑った。

久しぶりに見る、少女の笑顔だった。

わたしは初めて先陣岬千恵という少女の素顔を見た気がした。

誰よりも繊細で、臆病で、少し内気で、とても優しい、それが本
来の千恵の姿なのだろう。けれど同時に少女は、同年代の女の子達
よりもずつと頭が良く、それ故にいつも自分を偽っている。いや、
偽っている、と言うと少し違うか。とにかく周りのすべての大人達
を年齢不相応に気遣い、彼らに心配をかけまいと、精一杯背伸びし
て、周りが安心して見ていられる少女であろうと努力しているのだ。
けれどその背伸びのキャパシティは、やっぱりまだ十歳の少女のそ
れで、カズマの一件ではその衝撃が限界を超えてしまったのだろう。
わたしは彼女の告白を聞いて、ますます少女に頭が上がりなく、
申し訳ない気持ちになつてしまふ。

けれどわたしはそれをもう千恵に見せない。

千恵は笑っているから。もう一度笑顔を見せたから。わたしも千恵がわたしに求めている、わたしが取るべき態度を取るのだ。

「帰ろっか」

「うん！」

千恵はいつもの満面の、アホ面の笑顔に戻って、くるりとわたしに背を向ける。

そしてわたしも心から安心して、その後に続こうとした時だった。その後ろ姿を見て、唐突に、わたしはある忘れていたことをビビッと連想した。

それはコンビニにハーゲンダッツを置いてきたこと ではない。いやそれも思い出したが、そんなことではない。

「あの川島さんっていう探偵さん、誰かに似てるように思わなかった？」

その雰囲気、落ち込んでいた時の佇まい。

「千恵、ちよいこっち向いて！」

「えっ？」

わたしは少女をまた振り向かせると、暗い夜空の下、まじまじと少女の目が点になった顔を観察する。

そうだ。間違いない。

わたしの中の少女のイメージは、無駄に元気で天真爛漫ないつも笑顔を見せているものだった。それ故に、ついさっきまで、その落ち込んだ表情を間近で見るとまで気付かなかった。

あの女探偵の、少し影のあるような様子から、少女を連想することがなかったのだ。だがその顔立ちは、見れば見るほど確かにそっくりだった。

今ならわかる。勝虎の言う通りだった。バカツトラでも、たまには正しいことに最初に気付くことがあるらしい。

川島雪乃は、先陣岬千恵に似ていたのだった。

6

千神祭りは当日の、だいたい昼前ぐらいから始まる。正確な時間が決まっていないのは、開始時間が久禮山に籠っていた東条が山から降りてくる時間に準拠するからである。そのため天候や神主の体調次第で開始時間は変わってくる。神主の帰りが遅ければ祭りが始まるのはその分送れるし、逆に早ければ早くなるということである。

神主が山から降りて来るのを確認すると、社の人間がそれを町中に知らせるために、調緒しじょうを打ちながら町内を一周する。それより一時間後が、祭事の開始時間となる。なおここしばらくは、東条以外の神社の人間が葵さんしかおらず、彼女は彼女で別の準備がある為に、この役割は天狗が肩代わりをしていた。

さて、その音を聞いた町の人間は、それを合図にぞろぞろと富周枳神社へと集まり始める。しかし社内に入り、神事に参加するのは、町の最初の開拓者であると言われる六家と呼ばれる六世帯の家長だけである。それ以外の人間や、観光に訪れた者などは、社の外から、その成り行きを眺める格好となる。

神事は東条の祝詞から始まる。その光景はお祓いの形に近く、大麻ぬさを持った東条が、出席者達の頭上を被いながら、祝詞を唱えるところといったものである。それが終わると、次に六人の出席者にそれぞれ猪口が手渡され、それに葵さんから神酒が注がれていく。彼らは順に、一口それを含み、残りを社の奥にあるしめ縄の張った依り代へと撒くようにかける。これは、この町の神達と、人間達が共に酒を飲み交わしたということを儀式化しているらしい。

その後再び東条が祝詞を唱え、最後に葵さんが皆の前に立ち、東条の吹く雅楽の音に合わせ、神楽と呼ばれる舞を披露する。ここまでは、千神祭りにおける神事の部分であり、時間にするとおおよそ一時間半弱程の時間がかかる。

今年の場合、東条が山を降りてきたのが十二時過ぎだったため、すべてが終了した頃には時計の針は既に四時近くをさし、太陽は一番高い場所を通り過ぎて、徐々にだが傾き始めるようになっていた。だからというわけではないだろうが、町の人の気持ちの切り替えも早かった。彼らはすぐさま、祭りを“楽しむ”雰囲気に移行し、それまでの厳肅さが嘘のように、急に町内は明るい笑い声に包まれていった。普段は閑散としている先陣岬町の商店街が、色鮮やかな出店に埋め尽くされ、あつと言う間に、通りは先陣岬町や、周りの市町村から集まった人々でいっぱいになった。夏の祭りの風景らしく、色とりどりの浴衣を着た、多くの子供や、もちろん大人の姿も目に付いた。そんな中で町内の大通りを、金井Jr達町の出戻り組の青年達を作った神輿や山車が練り歩いていく。それはもちろん、大きな街の、有名なお祭りと比べれば小学生の出し物のような小ぢんまりとしたものだったが、観る人達からは温かい嬌声で迎えられ、祭りに華を添えていく。

陽が落ちれば、彼らの主催の下、先陣岬小学校にて以前にわたしが見たあの櫓を使って盆踊りを行うらしい。元々神道系のお祭りでもまだお盆にも早いというのに盆踊りってどうなの？って感じではあるが、そこは肝心の東条が「いいんじゃないの、やっても。盛り上げれば」みたいなことを言ってるようなのでオールオッケー。

私はTシャツにスラックスという、まったく情緒の欠片もクソもないような格好で祭りに参加する。別に何か深い意味があるわけじゃない。単純に浴衣を持っていなかったし、買いに行くのも面倒くさかったというだけなのだが。ちなみに勝虎はと言うと、いつの間にもやらちゃっかり紺色の浴衣を用意して、子供みたいにはしゃぎまわりながら祭りをエンジョイしていた。わたしはそんなバカツトラを半分放っておきながら、ぶらぶらと屋台を見て回って歩く。

そんなこんなでもうすぐ夜になる。

太陽が一足先にお休みをして、空に淡い紺色のカーペットが引かれていく。その上を小さな輝き達が埋めていく。地上では出店のあ

ちこちで電灯が灯り、中に吊るされた提灯も、さあ出番だと言わんがごとく活動し始める。

ピーヒョロヒョロと、甲高く、でも不快でない祭り囃子が遠くから聞こえ始める。世界は暗がりになり落ち、しかしそれ故に一つ一つの輝きがよく見えるようになる。

そこを行きかう人々の影が、世界に色とりどりの彩色を施している。その色合いはどこまでも雑多で、無計画だ。皆が皆、それぞれ自由に自らの色を主張する。

赤、青、黄色、緑、ピンク、白、黒……様々な色の浴衣の人。

半被姿の人。

全然祭りとは関係ない私服姿の人。

出店の出店者。

お客さん。

家族連れ。

恋人達。

男の人。

女の人。

おじさんおばさん。

爺さん婆さん。

子供達。

笑顔で祭りを楽しんでいる人。

親とはぐれて泣く子供。

大声で客を呼び込むおっちゃん。

なんか知らないけど不満そうなあんちゃん。

ちよつとベンチに座って休憩するお姉さん。

甘い香り。

香ばしい香り。

人の熱。

夜の冷気。

この世界のすべてをひっくり返したような、穏やかな喧噪。

けれども、今はそのすべてが混ぜつかえされたような、この深海の底のような光景も、ひとたびその全体の幻想からそれを構成する個に目を移せば、それぞれが、皆別々の過去を持って、その積み重ねの一過程として今この場にいるのだという、そんな当たり前のことに気づく。

金持ちもいれば貧乏人もいる。

善人もいれば悪人もいる。

今ここですれ違ったあの二人は、もしかしたらこれまで送ってきた人生も、価値観もまったく、決定的にまで異なる人間で、この先の人生全部使って話し合ったとしてもわかり合えない二人かもしれない。

それぐらいに“違う”人々も、今ここでは、祭りの景色を構成するかけがえのないピースとして、同じ時を、同じ場所で生きている。祭りの雑多性は、すなわち世界の雑多性だ。この喧騒は、世界の持つ喧噪そのものだ。

決して独りでは作れない。

わたし達は思い思いに生きる。

だからどこかでぶつかることもあるだろう。

そうして喧嘩してしまうのかもしれない。

戦争してしまうのかもしれない。

永遠に手を取り合う日は来ないのかもしれない。

でも、それでいい。

わたし達は人間だから。

皆それぞれの自分の大切なものがあって、あるいはそれは絶対に譲れない信念であったりするかもしれないから。

世界中のすべての人が、合理的に賢く生きるのなら、きっと世界はもっと平和になるだろう。誰も争ったりはしないのだろう。

だけどそれは出来ない。

わたし達は人間だから。馬鹿だから。機械ではないのだから。

だから時には争ったって良い。

その争いに心を痛めることができるのなら。

その争いをなくそうと、努力することができるのなら。

そんなこと不可能で無駄だとわかっていても、それを可能で意味あることだと信じてできるのなら。

本当に恐ろしいのは争うことではない。「争う」ということに、誰も疑問を抱かなくなることだ。

あるいは、「争わない」ということに誰も疑問を抱かなくなることだ。

わたし達は万能ではない。だから争う。でも、それ故に哀しむこともできる。

だからわたし達は世界を変えようと努力することができる。存在しない理想郷ユートピアを追い求めることができる。本当は前になど一ミリも進んでいないのだとしても、前に進もうと足掻く。

仮に理想郷なんてものが実現するならば、その時こそが世界の終りなのだ、みんな頭の片隅ではわかっていても、人はそれを目指していく。その気持ちこそが、わたし達が自らを鼓舞するための力となる。

わたし達は万能ではない。

でも、だからこそ、人は一人では生きていけないから、人は手を取り合って、みんなと一緒に生きていけるのだ。だからこそ、わたし達は隣にいる大切な誰かと笑い合うことができるのだ。

だからこそ、この馬鹿げた世界はこんなにも美しい。

わたし達は万能の神様ではない。けれど、一人一人が皆、世界にたった一人の神様だ。良い奴も悪い奴も、馬鹿も天才も金持ちも貧乏人も、みんなひっくるめてこの世界を構成する大事な要素なのだ。そうだ。

わたし達こそが、この不完全な世界を生きる、かけがえのない千の神々だ。

エピソード 彩りあざやかなる花

出店が出ている通りをぐるっと一周して、座る場所を求めてわたしは近くの公園のベンチまで向かう。そこで鱈子、と後ろから声をかけられる。振り返ると、そこには二本の綿あめを持ったアホ面の勝虎がいた。

わたしはちよつと笑って、差し出された綿あめを受け取る。公園のベンチに、勝虎と並んで腰かけて、しばらく祭りの雑踏を眺める。するとその中に偶然千恵の姿を見つけた。千恵はピンク色の下地に、黄色い水玉模様の入った浴衣を着て、いつか一緒に買い物に出かけた、確か亜由美ちゃんと理沙ちゃんと言った、二人の友人と共に金魚すくいに興じていた。

ふと千恵が振り返り、向こうもこちらの存在に気付いたのか、大きく手を振る。わたしも微笑みながら手を振り返す。少女は再びこちらに背を向けて友達の輪の中に戻っていく。

千恵を見て、ちよつと思ひ出したので、わたしは隣の勝虎に雪乃について調べたことと、そこから導き出した意見、そして昨日気付いたことについて話す。川島雪乃は千恵に似ていたんだとわたしの考えを言うと、ああそうか、確かにそうだ、と勝虎も感心したように頷いた。

わたし達はしばし無言になって、綿あめを口に運んでいく。やがて共に割り箸だけが残った頃に、勝虎が言った。

「でもそれってどういうこと？」

「そんなの、一つしかないでしょ」

「そっか。……そうだよなあ」

勝虎は困ったように天を見上げた。

わたしは、確認するように、既にわかってはいたけど、しかし具体的に口にすることはなかったその考えをつぶやいた。

「川島雪乃は千恵の母親。彼女が捜していた『彩花』っていうのは、自分の娘で、つまり千恵のこと……」

無意識にも想像してしまう。十年前富周枳神社に幼い赤ん坊を放置していく雪乃の姿。その時彼女は何を思っていたのだろう。どんな顔をしていたのだろう。

「でも、なんでだろう?」

「何が?」

「千恵ちゃんはなんで千恵ちゃんなんだろう?」

「は?」

「えーと、だからさ、もし鱧子の言うとおりでとすると、川島さんは自分の娘が、自分の名付けた『彩花』って名前で暮らしてると思ってるわけでしょ? でも千恵ちゃんは『千恵』ちゃんなわけじゃん。なんでだろう?」

「そんなの別に悩むことじゃないじゃん。本当のところはわかんないけど、例えば川島さんは『彩花』っていう名前を書いた手紙だとかを一緒に置いてったけど、それに天狗が気付かなかったとか、その前に風で飛ばされたとか」

「ああそうか」

「だから問題は、なんで今更あの人千恵を捜しにきたかってことだと思う」

「え、それって問題かな?」

「問題よ。だってそうでしょ? わたしは許せない。だってあの人には、自分の実の娘を捨てたってことでしょ? ううん、違う。捨てたことをどうこう言う気はない。もちろん褒められたことじゃないし、良いことでもないけど、問題なのはそこじゃなくて、子供を捨てるってというのは、よっぽどの覚悟を持ってやったことなんじゃないの? ってこと。だって子供だよ。しかも、自分の。おもちゃじゃない、物でもない。そういうものだからこそ、それは考えて考えて考えた末に選んだことであつた、そうあるべきなのでしょう? それなのに、今更会いに来るってどういうこと? どの面下げて顔を

合わす気なのよ。そういうのって無責任じゃない。わたしはそれが許せない」

「ははは、鰐子っばいなー。そういう考え方」

「笑いごとじゃない」

「うん、ごめん。でもさ、なんて言うか、俺はそうは思わないんだ。いやもちろん鰐子の言うことはもっともだと思っけど、俺はそれをあんまり非難する気にはならないんだ」

「なんでよ」

「だって俺達は人間なんだ。どんな人だって、たまには筋の通らない、おかしなことをしちゃうもんさ。もし完璧な、まったく人として完璧な、強くて優しくて頭が良くて、道徳的で絶対に何があっても選択を間違えないような人がいたらさ、その人は完璧な人間で、でも同時に完璧に人間でないんだと思う。だからいいんだよ、間違っても。自分でその間違いを自覚できて、次から間違えないように気をつけることができるなら。周りの人間の役目っていうのはさ、本人が間違っていることに気付いていなかったらそれを気付かせてあげて、それで本人が今後間違えることのないように努力してるならそれをフォローしてあげることなんだと思う」

「……勝虎は甘い」

「ははは。そうなのかも」

「……それともわたしが厳しすぎるのかな？」

「かもね。でもそれでいいんじゃないかな。甘い俺と厳しい鰐子と一緒に考えれば、どんなことにもちようどバランスのいい答えが導けるんじゃない？」

「……バカツトラ」

いや、考えれば勝虎の言うとおりだ。わたしはここ先陣岬町に来たから、多くの厄介事に巻き込まれてきた。それを曲がりなりにも丸く収めることができたのは、勝虎の言うように、“二人”の考えで物事に接することが出来たからだ。

もちろん実際には勝虎と二人で相談しているいろいろ決めていたわけ

ではない。ほとんどはわたしは勝手に自分で決めて、動いていただけだ。しかしそれぞれの問題で、それぞれの結論に引き出せたのは、ひとえに勝虎がいたからなのだ。

勝虎に会ってわたしは変わった。勝虎はクソ甘いお人好しだが、そういう奴と一緒に生きて、笑って、怒って、泣いていくうちにわたしの中にも変化が起きたのだ。

昔のわたしの物事の解決法はすべて力づく。わたしが間違っているとやったことは殴って脅して黙らせて、それで終了。まるで暴力団のやり口だ。

でもここに来てからのいくつかの問題に関する対処法は違った。

わたしは殴って脅しただけじゃなかった。

わたしは諭した。

自分の倫理観だけに従うのではなくて、相手の話も聞いて、その上で自分が正しいと思うことを、その理由を相手に納得させようと説得してきた。そのやり口が本当に正しいものだったかどうか、それは今でもわからないが、結果として、わたしはまたみんなが笑うことのできる結末を引き寄せることができたと思う。

わたしがそういう行動を取れたのは、ひとえに勝虎のおかげなのだ。

勝虎と過ごした時間の中で、わたしの中に流れ込んできていた勝虎の甘さが、わたしの持つ厳しさとぶつかって、混ざり合ってそれぞれの答えを生みだしてきたのだ。

勝虎がいなければ、結末はすべて大きく変わっていたかもしれない。

「ねこ大王」も、「ぬらりひょんガール」も、「シザーハンザー」も、みんなそれぞれ自分勝手な“怪物”のままだったかもしれない。そして何より、わたし自身が、もつとも傍若無人で性質の悪い「人喰い鰐」という怪物のままだったかもしれない。

この闘いは、ずっとわたし一人で闘っているものではなかった。わたしと勝虎の二人三脚で歩んできた道だったのだ。

なんてわたしが浸っていると、

「あっ」

と、ベンチでひっくり返るぐらいのけ反っていた勝虎が突然素っ頓狂な声を上げた。

「鱧子、あれ」

言いながら勝虎が裾を引っ張ってくるので、わたしも反射的に振り返る。するとわたしも、勝虎と同じように、「あっ」と小さく声をあげることになった。

公園の裏手の雑木林の中、祭りの喧騒から離れた暗がりには、なんか妙に久しぶりに見える気のある天狗の姿だった。まあそれは珍しくもなんともないのだが、その天狗と向かい合って話していたのは、

噂をすればなんとやら、川島雪乃その人であった。

雪乃と天狗は何やら真剣な様子で言葉を交わしていたが（と言っても天狗の表情はお面に隠れてわからないのだが）、何を話しているかまでは遠目からではわからなかった。

やがて雪乃は、彼女らしく姿勢正しく天狗に一礼すると、くるりと身を翻してそのまま林の奥へと消えていった。一瞬提灯の明かりに照らされた頬には一筋の涙がたつているようにも見えた。

わたしも勝虎も、そのふいの光景に、石になってしまったかのように動けなかった。しかし雪乃の姿が視界から消えると、ようやくそこでわたしは我に帰り、気がつくくと天狗のいる場所へと猛然と駆けだしていた。

「天狗さん！」

「ん、ああ。鱧子さん、それに勝虎さんも。どないしたんですかいの？ そないに慌てて」

天狗の様子は腹立たしい程にいつもとなんら変わらない。わたしは口早に問い詰める。

「今の人は!？」

「ほ？ 今の人言いますと？」

「今話してた女の人です！」

「ああ、ああ。見てはったんですか。いやですなー、今の人は川島雪乃さん言う探偵さんやほうで」

「そんなことは知ってます」

わたしは畳みかけた。

「あの人は千恵のお母さんなんでしょう！」

その瞬間、ピタリと天狗の動きが止まった。相変わらず天狗のお面でその表情は伺えないが、少なからず老人は動揺しているように思えた。が、

「はい。なんやそのようすわな」

あっさり、天狗は認めた。老人はまったく動じていなかった。

その何もかも達観したような様子は、さしずめ仙人か、はたまた本物の天狗でもあるようである。

「何を話してらっしゃったんですか？」

横合いから勝虎が口を挟む。

「普通のことですわ」

「普通のこと？」

「ほうです。千恵ちゃんは元気にしてるか？ 病気はないか？ 友達はおるか？ いじめられたりしてないか？ 勉強はできるか？

運動はできるか？ 趣味は何か？ 何か特技はあるのか？ 毎日楽しそうにしてるか？ そないなことです」

「本当に、それだけですか？」

わたしが言う。

「ほうです」

「会いたいとか、一緒に暮らしたいとかそついうのは……」

天狗は横に首を振った。

「なーんもありやせんです」

わたしは唇を強く噛む。

なんだろう。すごく悔しいような、やるせないような気持ちになった。さっきまでとは全然違う質の怒りがメラメラと湧いてくる。

わたしは走り出してた。雪乃が消えた方向へと。勝虎もその後を追ってくるのが心配でわかる。

すぐに早足で歩く女性の姿は見えてきた。認めるとわたしは大声を上げていた。

「待って！」

雪乃の声に反応してか、反射的に振り向く。

瞳は少しだけ赤くなっていた。涙は流れていなかった。

「あなたは……」

「あなたは千恵の　彩花ちゃんの母親でしょう？」

単刀直入にわたしは叫んだ。

びくりと雪乃は一瞬身を震わせたように、そう見えた。

「……なんの話でしょうか」

雪乃はこちらに表情を見せまいと顔を背ける。その聞かれたくないことをはぐらかそうとする仕草はまさに、昨夜千恵がわたしに見せたのと同じもので、わたしはまた胸がやるせない気持ちでいっぱいになる。

「天狗さんにすべて聞きました。先陣岬千恵の……あの子の本当の名前は川島彩花。あなたの娘なんでしょう？　川島さん」

「……」

雪乃は何も答えなかった。それがすべてを物語っていた。ただ、感情を押し殺すように俯いて、歯を食いしばっていた。

「千恵に　彩花に会っていかないんですか？」

「……」

わたしは通りの方をびつと指さした。

「彩花はそこにいるんですよ！」

「……」

「目と鼻の先にいるんです！　あなたが会おうと思えばすぐにでも会えるんです！　それで、もしかしたら、会っただけじゃなくて、その……ああ、もう！」

わたしは極限までイラついてた。雪乃にはではない。自分の中の相

反する二つの考えがぶつかって、どうにも収集がつかなくて、滅茶苦茶に胸糞悪い気持ちでいっぱいになっていた。

わたしがそうしてまごついていると、やがて雪乃が意を決してようにゆっくりと顔を上げた。その瞳に涙が今にも溢れ出しそうなくらいに溜まり、唇は今にも叫び出すんじゃないかというようにわなわなと震えていた。

「……仰る意味が……わかりません。……確かに……あ、彩花というのは……わたしの、娘の名前です。……でも、けれど、彩花は……彩花は……十年前に、死んでいたようです。あ……あの女の子は、先陣岬……千恵ちゃん、わたしの、娘では……あ、ありません……」

言葉が出ない。

今の台詞を口にするのに、いったいどれだけの決意が必要だったのだろうか。どれだけの胸の痛みを伴うものだったのか。それを想像すると、わたしには帰す言葉が浮かばなくて。そんな時、ずいっとわたしの前に歩み出る人影があった。勝虎だった。

「川島さん」

勝虎は言った。

「俺の知る、先陣岬千恵という女の子は、世界で一番優しい女の子です。誰よりも人の想いを想像して、それを受け入れて、笑顔を見せてくれる、そんな素敵な女の子です。川島さん、千恵ちゃんはきっとあなたのことも笑顔で迎えてくれますよ。それは、最初は戸惑うかもしれませんが。けれど最後には、きっとあの子はあなたにも笑いかけてくれるはずです。信じてあげてください。千恵ちゃんを、そして自分自身を。幸せになれるかどうかは、あなた達自身がこれから努力して決めていくことです。そうでしょうか？」

その言葉に、雪乃は

ついに、大粒に涙をこぼし始めた。

それでも嗚咽を漏らすことはなく、決して姿勢は曲げず、凜とし

た格好で、再び深く一礼をした。

そして、頭を上げると、もう雪乃は何も言わず、またわたし達に背を向けて歩き出した。そのあまりの気高さに、わたしも勝虎も、もう彼女を引きとめようという気にはならなかった。

なんて強い人だろうとわたしは思った。

あれほど強い人を、わたしは他に知らない。

彼女の決断が良いものだったどうか、それはわたしにはわからない。だがそんなことは問題ではなかった。

正しいかどうかではないのだ。なぜならわたし達はそれぞれが正しいと思える生き方を選ぶことしかできないのだから。真に正しいかどうかなど、決して誰にもわからないのだから。

「『幸せ』つちゆうのはなんなんでしょうなあ」

気がつくと、いつの間にか天狗がわたし達のすぐ後ろにまで来ていた。

「それは人が生きていく上での、至上命題とでも言うべきもんではあるんでしょう。それがどんな形を持つとるか、それは人それぞれです。あるいは金やもしれんし、名声かもしれんし、ちょっとわかりづらうて、自らの信念を貫くことこそやという人もおるかもしれない。あるいはそれは家族言う人もおるかもしれない。せやけど、それらがみんなまとめて幸せ呼べるものであることは確かかなんですわな。せやから人は幸せを求めて生きていきます。ところがどっこい、難しいのはすべての人が幸せを手にすることはできないですわな。そりやなぜか言うたら、さつきも言ったように幸せがどんな形をしとるかには人によって違うからです。誰かにとっての幸せが、他の誰かによつては不幸せかもしらん言うことですから。

じゃけん自分が幸せになりたい言う気持ちは抑えられへんのです。せやから必要とあれば、他人を傷つけてでも幸せを掴もうとする者がある。せやけど反対に、誰かの幸せのために自ら身を引く物もある。世は無常ですわなあ。誰もが誰も願いは同じやのに、世のしくみがそれを許さんのですな。ほんまは世界中の誰もが幸せになれ

ばそれが一番なんやけん、それは無理。じゃけん自分の幸せを追求すれば他人を不幸にしかねん。他人を思いやりすぎれば自分は不幸のまんま。……わしらはいつたいどない風に生きていくのが一番まっとうなのか。それはずうっと考え続けて生きてきて、せやけど、今年八十五にな。二千年生きてもまだわかりませんですわ」

「……てゆうかこのシチュエーションで、最後、わざわざ言い直さなくてもいいですから」

「だっはっはっは。なんのことですか？ 鱧子さんはわけのわからんことを言いますなあ」

わたしは深く深くため息を一つ吐く。

本当の本当に、最後の最後までバカな連中。

「答えなんて簡単ですよ」

「ほう？」

「わたし達は弱い人間だから、万能の神様なんかじゃないから、幸せを求めて生きていくことしかできないのなら、そうしていく他ないんです。でも……」

「でも？」

「でも、もしその道のりで、不幸の中に転げ落ちそうな困っている人を見かけたら、そして自分にその人を救う力があつたなら、その時は手を差し伸べてあげましょう。わたし達は万能ではないけれど、無力でもないから、きつとそれぐらいはできるはず。それで、世界中のみんなが、そういう風に生きられるなら、そうすれば、きつと世界はすべての人が幸せになれますよ。いつの日か、きつと」

「ふむ」

天狗は唸り、

「ははは」

勝虎は笑った。

「何よ？ 何かおかしい？」

「いや、ごめん。鱧子にしては珍しく現実味にかける意見だなーっと思って」

「何よ。悪い？」

わたしはちよつと恥ずかしくなって顔を赤面させる。我ながら少しクサかった。

しかし勝虎は言った。

「うづん。悪くない」

「へ？」

「それ、いいね。俺もそう思って生きることにする。まずは何事も自分自身からってね」

「……バカ」

「鰐子さん、わしも賛成ですわ。わしも鰐子流人生ハッピー術を取り入れて生きることになりますわ」

「……アホ」

まったくどいつもこいつも。一緒にいて嫌になる。バカが移ったらどうしてくれるんだ。

とは思っけれど、あんまり気分は悪くない。むしろ可笑しくって笑い出しそうになる。あーもう困った。手遅れだ。わたしもどうやらもうバカの一員らしい。

でも、まあいいか。時にはバカになってもいいのだ。やる時ちゃんときやりさえすればね。

「おい！ 鰐子姉ちゃん！ 勝虎兄ちゃん！ 天狗のじつちやーん！」

その時通りの向こうから聞き慣れた無駄に明るい声がわたし達の耳に届いた。

振り返ると、千恵が精いっぱい背伸びしてこっちに手を振っていた。いつの間に合流したのか、その横に青い浴衣姿の茜の姿もあった。

「みんなそんなとこで何してんのー！ 一緒に屋台を回ろーよー！」
底抜けに明るい声に、わたし達は顔を見合わせ、誰ともなしに笑いだす。いやお面をつけてる天狗はどうか知らないけど、多分笑っているに違いない。

わたし達は三人で千恵達に歩みより、少女達に合流する。世界で一番優しい子の世界で一番明るい笑顔が出迎えてくれる。

先陣岬千恵。千の恵みを周囲に分け与える、彩りあざやかな花のような少女。わたしは所詮一人の人間で、できることはそう多くはない。けれどとりあえず、一つの目標として、この女の子の笑顔は守っていききたいと、そう思う。

「お疲れ、おばさん」

突然茜が、脈絡もなくそんなことをわたしの耳元でささやく。

「は？ 何が？」

「いやなんかよく知らないけどさ。どうせまためんどくさそうなことに色々関わってたんでしょ？」

わたしは茜のまるで見てきたみたいな物言いに、ちょっと驚いて目を白黒させる。こいつは今回なんの関係もないはずなのに、ずいぶんと知った口を聞くもんだ。なんと言うか、妙なところだけ勘がするどい。

「えっらそうに言ってくれるわね。何も知らないくせに」

「知らないけど、わかるよ」

「なんで？」

「そりゃそうだよ。だって“家族”でしょう？ 私達」

「……は？」

いよいよわたしは目を丸くする。何言ってるんだ。誰が家族じゃ。血迷ったかこの小娘。

そう言いかけたが、ふと思い出した。家族。そう言えば、昨日、千恵もそう言っていた。わたしと勝虎が来て、家族ができたみたいだ。そして茜もまた、以前に似たようなことを口にしていた。

「……ふざけんなバカ」

「照れない照れない」

「照れてねーよボケ！」

「照れてんじゃーん。アハハおばさんかわいいー」

「うるせー！」

「おい、何してんだよ、二人とも。早く行こうぜ」

言い合うわたし達を勝虎が呼ぶ。それでわたしは赤面しながら、茜は悪意たつぷり（？）に笑いながら前に行く三人に合流する。

家族、か。そう言われると、確かにそれっぽい。サザエさん一家の家族。わたしがサザエさんで、茜がカツオ、千恵がワカメちゃん、マスオさんが勝虎、タラちゃんは、その内産まれてくるであろう（希望）、わたしと勝虎の子供かな？。タマはクロコとタイガーだ。フネさんは、……えーと、欠番！ で、最後ナミヘイが……天狗？うははは。

ふざけんな。

もーやめやめ！ バカな空想はここまで！ これからは、なるべくトラブルとか事件とか回避して、わたしは平凡に、幸せに暮らしていくんだからな！

おしまい！

エピソード 彩りあざやかなる花（後書き）

最後まで読んでくれた方。

いるのかな？ いるよね、多分。

ありがとうございます。

いや、礼は言わねえぜ。

いや言うけど。

もっとおもしろい話を書きたいなあ。

ところで鼻毛って抜いたことありますか？

あれ、すげえ太いんですよ。

髪の毛のだいたい三倍くらいあります。

まあ、多分だけど。

まったくどんなあとがきだよ。

やれやれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8939v/>

鯨虎大戦2002 ~in先陣岬町の巻！~

2011年9月30日03時20分発行